

CA ARCserve® Backup for Windows

コマンドラインリファレンスガイド

r16



このドキュメント(組み込みヘルプシステムおよび電子的に配布される資料を含む、以下「本ドキュメント」)は、お客様への情報提供のみを目的としたもので、日本 CA 株式会社(以下「CA」)により随時、変更または撤回されることがあります。

CA の事前の書面による承諾を受けずに本ドキュメントの全部または一部を複製、譲渡、開示、変更、複本することはできません。本ドキュメントは、CA が知的財産権を有する機密情報です。ユーザは本ドキュメントを開示したり、(i) 本ドキュメントが関係する CA ソフトウェアの使用について CA とユーザとの間で別途締結される契約または (ii) CA とユーザとの間で別途締結される機密保持契約により許可された目的以外に、本ドキュメントを使用することはできません。

上記にかかわらず、本ドキュメントで言及されている CA ソフトウェア製品のライセンスを受けたユーザは、社内でユーザおよび従業員が使用する場合に限り、当該ソフトウェアに関連する本ドキュメントのコピーを適切な部数だけ作成できます。ただし CA のすべての著作権表示およびその説明を当該複製に添付することを条件とします。

本ドキュメントを印刷するまたはコピーを作成する上記の権利は、当該ソフトウェアのライセンスが完全に有効となっている期間内に限定されます。いかなる理由であれ、上記のライセンスが終了した場合には、お客様は本ドキュメントの全部または一部、それらを複製したコピーのすべてを破棄したことを、CA に文書で証明する責任を負います。

準拠法により認められる限り、CA は本ドキュメントを現状有姿のまま提供し、商品性、特定の使用目的に対する適合性、他者の権利に対して侵害のないことについて、黙示の保証も含めいかなる保証もしません。また、本ドキュメントの使用に起因して、逸失利益、投資損失、業務の中断、営業権の喪失、情報の喪失等、いかなる損害(直接損害か間接損害かを問いません)が発生しても、CA はお客様または第三者に対し責任を負いません。CA がかかる損害の発生の可能性について事前に明示に通告されていた場合も同様とします。

本ドキュメントで参照されているすべてのソフトウェア製品の使用には、該当するライセンス契約が適用され、当該ライセンス契約はこの通知の条件によっていかなる変更も行われません。

本ドキュメントの制作者は CA です。

「制限された権利」のもとでの提供:アメリカ合衆国政府が使用、複製、開示する場合は、FAR Sections 12.212、52.227-14 及び 52.227-19(c)(1)及び(2)、ならびに DFARS Section 252.227-7014(b)(3) または、これらの後継の条項に規定される該当する制限に従うものとします。

Copyright © 2011 CA. All rights reserved. 本書に記載された全ての製品名、サービス名、商号およびロゴは各社のそれぞれの商標またはサービスマークです。

CA Technologies 製品リファレンス

このマニュアルが参照している CA Technologies の製品は以下のとおりです。

- BrightStor® Enterprise Backup
- CA Antivirus
- CA ARCserve® Assured Recovery™
- CA ARCserve® Backup Agent for Advantage™ Ingres®
- CA ARCserve® Backup Agent for Novell Open Enterprise Server for Linux
- CA ARCserve® Backup Agent for Open Files on Windows
- CA ARCserve® Backup Client Agent for FreeBSD
- CA ARCserve® Backup Client Agent for Linux
- CA ARCserve® Backup Client Agent for Mainframe Linux
- CA ARCserve® Backup Client Agent for UNIX
- CA ARCserve® Backup Client Agent for Windows
- CA ARCserve® Backup Enterprise Option for AS/400
- CA ARCserve® Backup Enterprise Option for Open VMS
- CA ARCserve® Backup for Linux Enterprise Option for SAP R/3 for Oracle
- CA ARCserve® Backup for Microsoft Windows Essential Business Server
- CA ARCserve® Backup for UNIX Enterprise Option for SAP R/3 for Oracle
- CA ARCserve® Backup for Windows
- CA ARCserve® Backup for Windows Agent for IBM Informix
- CA ARCserve® Backup for Windows Agent for Lotus Domino
- CA ARCserve® Backup for Windows Agent for Microsoft Exchange Server
- CA ARCserve® Backup for Windows Agent for Microsoft SharePoint Server
- CA ARCserve® Backup for Windows Agent for Microsoft SQL Server
- CA ARCserve® Backup for Windows Agent for Oracle
- CA ARCserve® Backup for Windows Agent for Sybase
- CA ARCserve® Backup for Windows Agent for Virtual Machines

- CA ARCserve® Backup for Windows Disaster Recovery Option
- CA ARCserve® Backup for Windows Enterprise Module
- CA ARCserve® Backup for Windows Enterprise Option for IBM 3494
- CA ARCserve® Backup for Windows Enterprise Option for SAP R/3 for Oracle
- CA ARCserve® Backup for Windows Enterprise Option for StorageTek ACSLS
- CA ARCserve® Backup for Windows Image Option
- CA ARCserve® Backup for Windows Microsoft Volume Shadow Copy Service
- CA ARCserve® Backup for Windows NDMP NAS Option
- CA ARCserve® Backup for Windows Storage Area Network (SAN) Option
- CA ARCserve® Backup for Windows Tape Library Option
- CA ARCserve® Backup Patch Manager
- CA ARCserve® Backup UNIX/Linux Data Mover
- CA ARCserve® Central Host-Based VM Backup
- CA ARCserve® Central Protection Manager
- CA ARCserve® Central Reporting
- CA ARCserve® Central Virtual Standby
- CA ARCserve® D2D
- CA ARCserve® D2D On Demand
- CA ARCserve® High Availability
- CA ARCserve® Replication
- CA VM:Tape for z/VM
- CA 1® Tape Management
- Common Services™
- eTrust® Firewall
- Unicenter® Network and Systems Management
- Unicenter® Software Delivery
- Unicenter® VM:Operator®

CA への連絡先

テクニカル サポートの詳細については、弊社テクニカル サポートの Web サイト (<http://www.ca.com/jp/support/>) をご覧ください。

マニュアルの変更点

本マニュアルでは、前回のリリース以降に、以下の点を更新しています。

- CA Technologies へのブランド変更
- 製品およびドキュメント自体の利便性と理解の向上に役立つことを目的として、ユーザのフィードバック、拡張機能、修正、その他小規模な変更を反映するために更新されました。

目次

第 1 章: 概要	15
オプションおよび引数.....	16
構文の文字.....	16
ジョブ スケジューラウィザード.....	18
第 2 章: authsetup - 認証セットアップ コマンド	23
構文.....	23
使用方法.....	23
例.....	24
第 3 章: bab - CA ARCserve Backup サービス コマンド	25
構文.....	26
使用方法.....	27
例.....	31
第 4 章: ca_auth - 認証コマンド	33
構文.....	34
使用方法.....	34
その他のオプション.....	35
ユーザ引数.....	36
役割引数.....	38
同等引数.....	40
例.....	41
第 5 章: ca_backup - バックアップ マネージャ コマンド	43
構文.....	44
使用方法.....	45
その他のオプション.....	46
グローバル ジョブ オプション.....	48
バックアップ メディア オプション.....	48

検証オプション	52
[再試行]タブのオプション	53
操作オプション	55
ジョブ実行前/後の処理オプション	59
ログ オプション	61
ウイルス オプション	62
メディアのエクスポートオプション	63
詳細オプション	64
VSS オプション	66
グローバル フィルタ オプション	68
ソース引数	72
ノード オプション	75
ボリューム設定	76
データベースの操作オプション	78
Oracle データベース オプション	80
Oracle RMAN データベース オプション	82
Exchange DOC レベル データベース オプション	89
Exchange DB レベル データベース オプション	92
SQL Server データベース オプション	93
Sybase エージェント データベース オプション	96
Informix エージェント データベース オプション	98
VSS エージェント データベース オプション	99
Lotus エージェント データベース オプション	103
デスティネーション引数	104
スケジュール引数	106
ジョブ実行引数	117
ステー징 オプション	118
Disk Staging Option	119
テープ ステーキング オプション	127
リターンコード	133
例	134

第 6 章: ca_dbmgr - データベース マネージャコマンド	139
構文	139
使用方法	140
その他のオプション	141

表示オプション	142
メディア プール管理オプション	144
データベース管理オプション	145
メンテナンス オプション	146
マイグレーション ステータス オプション	148
例	149

第 7 章: ca_devmgr - デバイス マネージャ コマンド **153**

構文	154
使用方法	154
その他のコマンド	155
一般的なコマンド	156
テープドライブ コマンド	158
テープ ライブラリ コマンド	161
FSD のコマンド	167
クラウドのコマンド	181
例	186

第 8 章: ca_jobsecmgr - ジョブ セキュリティ マネージャ コマンド **187**

構文	187
使用方法	187
サーバ引数(server arguments)	188
現在のセキュリティオプション	188
新しいセキュリティオプション	189
例	189

第 9 章: ca_log - ログ コマンド **191**

構文	191
使用方法	191
その他のオプション	192
ログ名操作オプション	193
表示オプション	193
ページ オプション	196
例	197

第 10 章: ca_merge - マージ マネージャ コマンド	199
構文.....	199
使用方法.....	200
その他のオプション.....	200
ソース引数.....	201
ジョブ実行引数.....	203
マージオプション.....	204
リターンコード.....	209
例.....	209
第 11 章: ca_mmo - メディア管理マネージャ コマンド	211
構文.....	212
オプション.....	213
例.....	216
第 12 章: ca_qmgr - キュー マネージャ コマンド	217
構文.....	218
使用方法.....	219
その他のオプション.....	220
ジョブ キュー コマンド.....	221
ジョブ固有のコマンド.....	223
ジョブ スクリプト コマンド.....	226
例.....	228
第 13 章: ca_recoverdb - データベース回復コマンド	229
構文.....	231
オプション.....	231
例.....	233
第 14 章: ca_restore - リストア マネージャ コマンド	235
構文.....	236
使用方法.....	237
その他のオプション.....	237
グローバル ジョブ オプション.....	239

リストア メディア オプション	240
デスティネーション オプション	241
操作オプション	243
ジョブ実行前/後の処理オプション	244
ログ オプション	246
ウイルス オプション	247
グローバル フィルタ オプション	248
ソース引数	251
デスティネーション引数	253
データベースの操作オプション	255
Oracle データベース オプション	257
Oracle RMAN データベース オプション	259
Exchange DOC レベル データベース オプション	265
Exchange DB レベル データベース オプション	266
SQL Server データベース オプション	268
Sybase エージェント データベース オプション	273
Informix エージェント データベース オプション	274
VSS エージェント データベース オプション	275
Lotus エージェント データベース オプション	276
ジョブ実行引数	277
情報引数	278
リターンコード	280
例	281
第 15 章: ca_scan - スキャン マネージャ コマンド	283
構文	283
使用方法	283
その他のオプション	284
ソース引数	285
ジョブ実行引数	286
スキャン オプション	287
復号化パスワードリスト オプション	288
ログ オプション	288
ジョブ実行前/後の処理オプション	289
終了コード オプション	290
メディア オプション	291

各種スキャン オプション	291
ジョブ ステータス オプション	292
リターンコード	292
例	292
第 16 章: ca_vcbpopulatedb - VMware VCB ユーティリティコマンド	293
構文	294
使用方法	294
ca_vcbpopulatedb 設定ファイルの作成	298
ユーティリティリターンコード	299
例	299
第 17 章: ca_msvmpopulatedb - Hyper-V VM ユーティリティコマンド	301
構文	301
使用方法	302
ユーティリティリターンコード	303
例	303
第 18 章: cabatch - バッチ コマンド	305
ジョブの送信	306
ジョブの削除	309
ジョブの修正	310
例	311
第 19 章: careports - レポート ライタ コマンド	313
構文	313
オプション	314
例	315
第 20 章: caadvreports - 詳細レポート ジェネレータ コマンド	317
構文	317
caadvreports - レポート	318
caadvreports - オプション	322
例	325

第 21 章: pfc - プレフライト チェックリスト ユーティリティコマンド	327
構文.....	328
使用方法.....	328
プレフライト チェック.....	328
例.....	332
第 22 章: tapecomp - テープ比較ユーティリティ	333
構文.....	333
オプション.....	333
例.....	335
第 23 章: tapecopy - テープコピー ツール コマンド	337
構文.....	337
使用方法.....	337
データベース照会オプション.....	338
デスティネーション引数.....	342
ソース引数.....	348
例.....	351
第 24 章: そのほかのユーティリティコマンド	355
DumpDB ユーティリティ.....	355
IsSafe.bat ユーティリティ.....	359
Mergecat ユーティリティ.....	360
MergeOLF ユーティリティ.....	361
用語集	363
索引	365

第 1 章：概要

コマンドライン インターフェース (CLI) とは、キーボードからの入力またはスクリプトによって、テキストのコマンド行 (一連の文字) をサブミットすることでコンピュータとやりとりする方式の 1 つです。その最も簡単な形態は、コンピュータがプロンプトを表示し、ユーザがキーボードを使用してコマンドを入力し、キーボードのキー (通常は Enter キー) を押してコマンドの入力を終了すると、コンピュータがそのコマンドを実行するというものです。

CA ARCserve Backup のコマンドライン ユーティリティでは、コマンドプロンプトを使用して、CA ARCserve Backup サーバで実行できるすべての処理を直接制御できます。CA ARCserve Backup のコマンドライン ユーティリティは、さまざまな CA ARCserve Backup マネージャから実行可能なほとんどすべての処理にアクセスするもう 1 つの方法です。コマンドライン インターフェースには、他のプログラムから自動的に実行できるバッチ ファイルを作成できるという利点もあります。

このコマンドライン インターフェース機能を使用するには、サーバに完全な CA ARCserve Backup システムをインストールして、CA ARCserve Home Directory 変数を設定する必要があります。

コマンドラインを使用する代替の方法として、ジョブ スケジューラを使用すると、コマンドラインで入力できる任意のコマンドをサブミットできます。ジョブ スケジューラを使用する利点は以下のとおりです。

- ジョブがアクティビティログに記録されます。
- 繰り返しジョブをサブミットできます。

重要: コマンドライン インターフェース (CLI) を使用する際には、必ず正しい構文を使用してください。CLI オプションと同じタイトルを持つファイル名やデータベース名の使用は避けてください。CLI は、「- filesystem」または「-database」などの、CLI オプションと同じタイトルを持つ特殊なファイルまたはデータベースのバックアップをサポートしません。たとえば、「-database」というタイトルのファイルをバックアップする場合、-database は、CA ARCserve Backup 用の CLI グローバル オプションでもあるので、ジョブが失敗します。

オプションおよび引数

コマンドラインでは、オプションおよび引数を使用して特定の命令を提供することで、たとえば、プログラムの実行などの動作をコンピュータに指示します。

- 引数(コマンドライン引数とも呼ばれる)は、コマンドへの入力値として使用するためにコマンドに提供される、ファイル名または他のデータのことです。引数は、コマンドへの命令および結果の送信先を指示する情報の集まりです。
- オプションとは、コマンドの動作を変更する性質を持つ引数のことです。オプション(フラグまたはスイッチとも呼ばれる)は、コマンドの動作を、既定の方法で変更する、1文字または単語のことです。オプションの前には、ハイフンまたはマイナス記号(-)が付きます。

いくつかのコマンドライン オプションを、引数ファイルとよばれるファイルにまとめることができます。

構文の文字

コマンドラインの構文の中では、ある種の文字および形式が特定の重要性および意味を持つことがあります。本書中のコマンドラインの構文では、以下の文字形式を使用します。

角括弧 []

角括弧([])は、それで囲まれたエレメント(パラメータ、値、または情報)がオプションであることを示します。1つ以上のアイテムを選択したり、非選択にできます。コマンドラインの中に角括弧自体を入力しないでください。

例: [global options]、[source arguments]、[destination arguments]

山型括弧 < >

山型括弧(< >)は、それで囲まれたエレメント(パラメータ、値、または情報)が入力必須であることを示します。山型括弧の中のテキストを適切な情報に置き換える必要があります。コマンドラインの中に山型括弧自体を入力しないでください。

例: -f <file name>、-printer <printer name>、-repeat <months> <days> <hours> <minutes>、date access <mm/dd/yyyy>

省略記号 ...

3つのピリオド(...)の省略記号は、「～など」という意味で、先行するエレメント(パラメータ、値、または情報)がコマンドライン内で数回繰り返されることを示します。

例: `-jobid <job id1, job id2, job id3,...>, [-exitcode <exit code 1>,<exit code2>,<exit code3> ...]`

パイプ |

パイプ記号(垂直の線)は、「または」を意味し、エレメント内の選択を示します。2つの引数がパイプ記号で区切られている場合は、区切りの左側のエレメントか右側のエレメントを選択できます。コマンドを使用する際に両方のエレメントを一度に使用することはできません。角括弧の中では、選択はオプションです。山型括弧の中では、少なくとも1つを選択する必要があります。

例: `-ca_backup [-custom|-rotation|-gfsrotation], -excludeday <Sun|Mon|Tue|Wed|Thu|Fri|Sat>, -runjob <start|stop>`

斜体

斜体のテキストは、適切な値を入力する必要がある情報を示します。これは、値によって置き換えられるオプションまたはパラメータです。

例: `-sessionpassword session password, -f <file name>, -printer <printer name>`

注: UNIX および Linux プラットフォームで使用されるユーザ名、パスワード、およびファイル名を含むコマンドラインの構文は、大文字小文字を区別します。たとえば、`commandline`、`CommandLine`、および `COMMANDLINE` はすべて異なります。

ジョブ スケジューラ ウィザード

ジョブ スケジューラ ウィザードは、コマンドラインで実行可能なジョブを簡単にスケジュールおよびサブミットできる CA ARCserve Backup ユーティリティです。CA ARCserve Backup のコマンドラインでは、CA ARCserve Backup サーバで実行可能なほぼすべての操作を直接制御できます。コマンドプロンプトにジョブ スケジュール コマンドを入力する代わりに、ジョブ スケジューラ ウィザードを使用できます。

ジョブ スケジューラ ウィザードのヘルプ

- [実行するコマンド] フィールドにコマンドを入力した場合、[ヘルプ] をクリックすると、指定されたコマンドに対応するパラメータを参照できます。
- [実行するコマンド] フィールドに特定のコマンドを入力せずに [ヘルプ] をクリックした場合、コマンドライン ユーティリティの以下のリストが表示されます。このリストで各コマンドをクリックすると、対応するパラメータが参照できます。

コマンド	詳細
authsetup (P. 23)	認証セットアップ コマンド (authsetup) を使用して、プライマリ サーバ上の CA ARCserve Backup 認証データベースを初期化できます。また、このコマンドを使用して、 caroot のパスワードを設定したり、CA ARCserve Backup ドメインのすべてのプライマリ サーバおよびメンバ サーバの現在の OS ユーザや、CA ARCserve Backup システム アカウント ユーザ用に、同等の権限を作成することが可能です。
bab (P. 25)	bab コマンドは、CA ARCserve Backup サービスを制御します。 bab 管理ユーティリティを使用して、バックエンド サービスのロード/アンロード、現在のステータスおよび設定の表示、バックエンド サービスの再設定、およびサービスの実行の有無の表示が可能です。
caadvreports (P. 317)	詳細レポートジェネレータコマンド (caadvreports) は、さまざまなレポートを生成できるユーティリティです。これにより、現在のデータ保護ステータスの概要を知ることができます。
ca_auth (P. 33)	新規ユーザの作成、既存ユーザの削除、ユーザ パスワードの変更、他のユーザの同等アカウントの設定や削除を実行するために、 caroot の同等ユーザとしてログインする場合、認証コマンド (ca_auth) を使用します。
ca_backup (P. 43)	バックアップ マネージャコマンド (ca_backup) を使用して、バックアップ ジョブを CA ARCserve Backup キューにサブミットし、関連するオプション、フィルタ、GFS ローテーション、およびローテーションジョブをすべて設定できます。

コマンド	詳細
authsetup (P. 23)	認証セットアップ コマンド (authsetup) を使用して、プライマリ サーバ上の CA ARCserve Backup 認証データベースを初期化できます。また、このコマンドを使用して、 caroot のパスワードを設定したり、CA ARCserve Backup ドメインのすべてのプライマリ サーバおよびメンバ サーバの現在の OS ユーザや、CA ARCserve Backup システム アカウント ユーザ用に、同等の権限を作成することが可能です。
cabatch (P. 305)	バッチ コマンド (cabatch) を使用して、外部スクリプトファイルを使用して、ジョブをローカルまたはリモートの CA ARCserve Backup ジョブ キューにサブミットしたり、ジョブ キューからジョブを削除したり、ジョブ キューに含まれる全ジョブの実行日時を変更したりできます。
ca_dbmgr (P. 139)	データベース マネージャ コマンド (ca_dbmgr) を使用して、データベースのメンテナンスを実行できます。これには、メディア プールの設定なども含まれます。このコマンドにより、データベース情報を照会し、データベース オプションを設定することができます。
ca_devmgr (P. 153)	デバイス マネージャ コマンド (ca_devmgr) を使用して、CA ARCserve Backup でさまざまなデバイス管理コマンドを実行できます。このコマンドにより、ストレージ デバイスの制御、ドライブまたはチェンジャ内のメディアのフォーマットおよび消去が可能です。
ca_jobsecmgr (P. 187)	ジョブ セキュリティ マネージャ コマンド (ca_jobsecmgr) を使用して、ジョブ キュー内のすべてのジョブに対して、ユーザ名またはパスワードの一括変更を行うことができます。
ca_log (P. 191)	ログ コマンド (ca_log) を使用して、CA ARCserve Backup ログを表示、ページ、クリア、および管理することができます。 ca_log により、アクティビティ ログおよびジョブ ログを表示できます。
ca_merge (P. 199)	マージ マネージャ コマンド (ca_merge) を使用して、マージ ジョブを作成し、ジョブ キューにサブミットすることができます。バックアップ メディアからデータベース情報を CA ARCserve Backup データベースにマージできます。
ca_mmo (P. 211)	メディア管理 マネージャ コマンド (ca_mmo) を使用して、ボールド処理とレポートを制御およびモニタできます。
ca_msvmpopulatedb (P. 301)	ARCserve Hyper-V 環境設定ツール ユーティリティ コマンド (ca_msvmpopulatedb) は、Hyper-V システム上の仮想マシン (VM) に関する情報を CA ARCserve Backup データベースに提供するデータ収集ツールです。

コマンド	詳細
authsetup (P. 23)	<p>認証セットアップ コマンド (authsetup) を使用して、プライマリ サーバ上の CA ARCserve Backup 認証データベースを初期化できます。また、このコマンドを使用して、caroot のパスワードを設定したり、CA ARCserve Backup ドメインのすべてのプライマリ サーバおよびメンバ サーバの現在の OS ユーザや、CA ARCserve Backup システム アカウント ユーザ用に、同等の権限を作成することが可能です。</p>
ca_qmgr (P. 217)	<p>キュー マネージャ コマンド (ca_qmgr) を使用して、CA ARCserve Backup ジョブ キューにサブミットされたジョブをモニタおよび制御できます。これらのジョブ管理コマンドは、情報を取得したり、ジョブ キューの中のジョブを操作したりするのに使用します。</p>
ca_recoverdb (P. 229)	<p>データベース回復コマンド (ca_recoverdb) は、CA ARCserve Backup データベースが失われた場合に回復するための自己プロテクト機能です。</p>
CAreports (P. 313)	<p>レポートライタ コマンド (CAreports) を使用して、[CA ARCserve Backup レポートライタ ユーティリティ] ダイアログ ボックスにアクセスし、カスタマイズされた (事前定義済みおよびユーザ作成) レポートを作成できます。</p>
ca_restore (P. 235)	<p>リストア マネージャ コマンド (ca_restore) を使用して、リストア ジョブを作成して CA ARCserve Backup ジョブ キューにサブミットし、関連するすべてのオプションを設定することができます。ca_restore コマンドのオプションおよびスイッチを使用すると、グローバル オプションとグローバル フィルタの設定、リストア ジョブのソースとデスティネーションの選択、およびリストア ジョブのサブミット (即実行またはスケジュールした時間での実行) が可能です。</p>
ca_scan (P. 283)	<p>スキャン マネージャ コマンド (ca_scan) を使用して、スキャン ジョブを作成し、ジョブ キューにサブミットすることができます。</p>
ca_vcbpopulatedb (P. 293)	<p>VMware VCB ユーティリティ コマンド (ca_vcbpopulatedb) は、バックアップ環境内の VMware ベースの VM に関する情報を CA ARCserve Backup データベースに提供するデータ収集ツールです。</p>
DumpDB (P. 355)	<p>DumpDB ユーティリティは、セッション パスワードを CA ARCserve Backup データベースにインポートまたはデータベースからエクスポートするために使用します。DumpDB ユーティリティは、セッション パスワードのみをダンプし、セッションに関する他の情報はエクスポートしません。</p>
IsSafe (P. 359)	<p>IsSafe.bat ユーティリティを使用して、アクティブな CA ARCserve Backup プロセスがないか OS をチェックし、システムを安全にシャットダウンできるかどうかを判断することができます。</p>

コマンド	詳細
authsetup (P. 23)	認証セットアップ コマンド (authsetup) を使用して、プライマリ サーバ上の CA ARCserve Backup 認証データベースを初期化できます。また、このコマンドを使用して、caroot のパスワードを設定したり、CA ARCserve Backup ドメインのすべてのプライマリ サーバおよびメンバ サーバの現在の OS ユーザや、CA ARCserve Backup システム アカウント ユーザ用に、同等の権限を作成することが可能です。
mergecat (P. 360)	マージ カタログ ユーティリティ (Mergecat.exe) を使用して、ARCserve Backup¥temp ディレクトリに残っているすべての .cat ファイルに対して手動でマージを行うことができます。
mergeOLF (P. 361)	MergeOLF ユーティリティを使用して、ライセンスを 1 つの ARCserve システムから別の ARCserve システムに移動できます。
pfc (P. 327)	プレフライト チェックリスト ユーティリティ コマンド (pfc) を使用して、CA ARCserve Backup サーバおよびエージェントに対してバイタル チェックを実行し、バックアップ ジョブの失敗の原因となる可能性のある条件を検出できます。
tapecomp (P. 333)	テープ比較コマンド (tapecomp) を使用して、メディアとメディアを比較することができます。このユーティリティは、CA ARCserve Backup で生成されたメディアでのみ使用できます。また、CA ARCserve Backup のホーム ディレクトリで使用する必要があります。
tapecopy (P. 337)	テープ コピー コマンド (tapecopy) を使用して、データを 1 つのメディアから別のメディアに素早くコピーすることができます。コピー元とコピー先のメディアが同じである必要はありません。

第 2 章: authsetup - 認証セットアップ コマンド

認証セットアップ コマンド(authsetup)を使用すると、プライマリサーバの CA ARCserve Backup 認証データベースを初期化できます。また、このコマンドを使用して、caroot のパスワードを設定したり、CA ARCserve Backup ドメインのすべてのプライマリサーバおよびメンバサーバの現在の OS ユーザや、CA ARCserve Backup システムアカウント ユーザ用に、同等の権限を作成することが可能です。

構文

authsetup のコマンドラインの構文は、以下のような形式です。

```
authsetup
  -p <new password>
  -s
  -d
```

使用方法

authsetup コマンドには、CA ARCserve Backup 認証データベースをセットアップする際に実行するアクションを定義するのに使用されるオプションが含まれます。

authsetup コマンドには、以下のオプションが含まれます。

-p <password>

「caroot」のパスワードを指定します。これは必須オプションです。空のパスワードを設定するには、「authsetup -p ""」と指定します。

-s

このユーティリティのサイレントモードです。内部の処理が失敗したときに、メッセージボックスによる通知を表示したくない場合は、このオプションを使用します。

-d

authsetup を使用するたびにデバッグ ログを作成する場合は、このオプションを使用します。

例

`authsetup` コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下のコマンドは、`caroot` パスワードを新しいパスワードである「`root`」にリセットし、ログインしているユーザ用に同等の権限を再作成します。

```
authsetup -p "root"
```

- 以下のコマンドは、`caroot` パスワードを空のパスワードにリセットし、ログインしているユーザ用に同等の権限を再作成します。

```
authsetup -p ""
```

- 以下のコマンドは、`caroot` パスワードを新しいパスワードである「`root`」にリセットし、ログインしているユーザ用に同等の権限を再作成します。また、サイレントモードおよびデバッグを有効にします。

```
authsetup -p "root" -s -d
```

第 3 章: bab - CA ARCserve Backup サービス コマンド

bab コマンドは、CA ARCserve Backup サービスを制御します。**bab** 管理ユーティリティは、バックエンド サービスのロード/アンロード、現在のステータスおよび設定の表示、バックエンド サービスの再設定、およびサービスの実行の有無の表示に使用できます。

bab コマンドは、CA ARCserve Service Controller サービスへのフロントエンドとして働き、バックエンド サービスをロードするために、CA ARCserve Service Controller サービスが実行されていることを要求します。

CA ARCserve Backup バックエンド サービスのフル セットには以下の 5 つのサービスが含まれます。

- CA ARCserve Service Controller サービス
- CA ARCserve Domain Server サービス
- CA ARCserve Database Engine サービス
- CA ARCserve Tape Engine サービス
- CA ARCserve Job Engine サービス

注: CA ARCserve Backup サーバをクラスタ対応に設定すると、すべての重要な ARCserve ベース関連のサービス(エージェント関連のサービスではない)が適切なクラスタ サービス(MSCS または NEC CLUSTERPRO)によってモニタされます。ARCserve ベース関連のサービスが失敗するか、またはシャットダウンする必要がある場合は、クラスタ サービスは自動的にその再起動を行い、それに失敗するとフェールオーバをトリガします。このサービスを実行するには、ARCserve サービスを停止する必要があります。ただし、クラスタ対応の環境では、まずはクラスタ サービスを手動で停止して、サービスのモニタが続行されないようにし、自動再起動またはフェールオーバが実行されないようにする必要があります。クラスタ サービスによる HA サービス モニタリングを停止する手順については、「管理者ガイド」を参照してください。

構文

bab のコマンドラインの構文は、以下のような形式です。

```
bab [-cahost <hostname>]
    -load                               [procid |"all"]
    -unload [-force] [-quiet]           [procid |"all"]
    -show [-v]                           [procid |"all"]
    -showcfg [-v]                         [procid |"all"]
    -reconfig                             [procid |"all"]
    -status                                [procid |"all"]
    -removehost                            hostname
    -getprimary
    -getdomainservers
```

注: [-cahost <hostname>] スイッチはオプションです。このコマンドをローカルホスト上で使用する場合、このスイッチは必要ありません。ただし、リモートで実行する場合は、**hostname** を指定する必要があります。**cahost** スイッチで指定されたホストは、メンバサーバまたはプライマリサーバにすることができます。ただし、CA ARCserve Backup は常にプライマリサーバのジョブキューにジョブを追加し、その後、プライマリサーバが、ジョブが処理される際にこのスイッチに従ってジョブを適切なサーバ(プライマリ/メンバ)へ送信します。

注: 「ARCserve Manager (コンソール)」モードを使用して CA ARCserve Backup をインストールした場合、ローカルマシンから **-cahost** スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソールインストールモードは、ローカルマシンに CA ARCserve Backup のすべての機能を実際にインストールするわけではないので、このコマンドを CA ARCserve Backup を含むプライマリまたはメンバサーバにリモートでサブミットする際には **-cahost** を含めることが必須です。そうしないと、コマンドが失敗します。

使用方法

bab コマンドには、CA ARCserve Backup サービスを制御する際に実行するアクションを定義するために使用されるオプションが含まれます。

bab コマンドには、以下のオプションが含まれます。

-cahost <hostname>

処理をホストするシステムの名前を識別します。

処理をリモートシステムで実行する場合は、コマンドにこのスイッチを含める必要があります。

この処理をローカルシステムで実行する場合は、このスイッチは必要なく、コマンドに含める必要はありません。

注: **-cahost** をコマンドに含める場合、その処理をホストするシステム(ローカルまたはリモート)のホスト名も指定する必要があります。

注: 「ARCserve Manager (コンソール)」モードを使用して CA ARCserve Backup をインストールした場合、ローカル マシンから **-cahost** スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソール インストールモードは、ローカル マシンに CA ARCserve Backup のすべての機能を実際にインストールするわけではないので、このコマンドを CA ARCserve Backup を含むプライマリまたはメンバ サーバにリモートでサブミットする際には **-cahost** を含めることが必須です。そうしないと、コマンドが失敗します。

usage

bab 基本コマンドのリストを表示します。

- load

CA ARCserve Backup デーモンを開始します。

指定したサービスまたはすべてのサービスをロードします。 デフォルトでは、すべてのサービスがロードされます。

`-unload [-force] [-quiet]`

CA ARCserve Backup デーモンを停止します。

指定したサービスをアンロードします。指定しない場合、3つのサービス (cadbd サービス、camediad サービス、および caqd サービス) がアンロードされます。デフォルトでは、これらの3つのサービスがアンロードされます。

`-force`

`-force` を指定すると、ジョブが待機中であっても強制的にアンロードされます。

`-quiet`

`-quiet` オプションを指定すると、メッセージが表示されなくなります。

`-show [-v]`

CA ARCserve Backup デーモンのステータスを表示します。

指定したサービスまたはすべてのサービスの設定および現在のステータスを表示します。デフォルトでは、すべてのサービスが表示されます。

`-v`

ステータスおよび環境設定オプションの出力の冗長性を増大させます。`-v` オプションを使用すると、デーモンのステータスが詳細に表示されます。

`-v` オプションは、`-show` コマンドとともに使用すると、サービス名、バイナリのロケーション、状態、登録ステータス、および「kill」タイプを表示します。kill タイプは、特定のサービスが「インモータル」(`-force` スイッチで停止する必要あり)、または「通常」(必要に応じて停止可能)のいずれかであることを示します。

-showcfg [-v]

特定の CA ARCserve Backup サービス、またはすべての CA ARCserve Backup サービスの現在のステータスと、サービスの設定方法を表示します。

バックエンド サービスのステータスおよびそれらの "kill" タイプ (インモータルまたは通常) を表示します。

「通常」とラベルされたサービスは、必要に応じて停止できます。「インモータル」とラベルされたサービスは、停止が強制され、すべての「通常」サービスがアンロードされない限り、停止できません。

-v

ステータスおよび環境設定オプションの出力の冗長性を増大させます。
-v オプションを使用すると、デーモンのステータスが詳細に表示されます。

-v オプションは、-showcfg とともに使用すると、サービス名、バイナリのロケーション、ホスト名、RPC プログラム番号、RPC プログラムバージョン番号、プロセス ID (PID)、トランスポートプロトコル、ファミリ、状態、登録ステータス、および「kill」タイプを表示します。kill タイプは、特定のサービスが「インモータル」(-force スイッチで停止する必要あり)、または「通常」(必要に応じて停止可能)のいずれかであることを示します。

-reconfig

1 つ以上の特定の CA ARCserve Backup サービスを停止し、環境設定ファイルを再読み込みし、その新しいファイルの設定を使用してサービスを再起動します。

このコマンドを実行すると、バックエンド サービスが作成され、指定されている場合、caserved が環境設定ファイルを再読み込みし、検出した変更があればそれを有効化します。

-status

サービスのステータスを簡潔に表示します。

-removehost

CA ARCserve Backup 環境からホストを削除します。

注: <hostname> は有効なホスト名で、プライマリ サーバ内に存在する必要があります。

-getprimary

現在のドメインまたは指定したホストがあるドメインに含まれるプライマリ サーバの名前を返します。(ホストサーバとして)任意のドメインメンバの名前を指定し、プライマリサーバ名を取得できます。

デフォルトでは、**-cahost** が指定されていない場合、ローカルマシンのプライマリサーバが検索されます。**-cahost** が指定されている場合、ホスト名を持つプライマリサーバを検索します。

-getdomainservers

現在のドメインまたは指定したホストがあるドメインに含まれるすべてのサーバのリストを返します。任意のドメインメンバの名前をホストサーバとして提供できます。

デフォルトでは、**-cahost** が指定されていない場合、ローカルマシンのドメインに含まれるすべてのメンバサーバが検索されます。**-cahost** が指定されている場合、ホスト名のドメインに含まれるすべてのメンバサーバが検索されます。

例

bab コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下のコマンドは、最も簡単なサービスステータスを表示します。

```
bab -status
```

- 以下のコマンドは、ジョブ エンジンの環境設定および現在のステータスの詳細を表示します。

```
bab -show -v caqd
```

- 以下のコマンドは、テープ エンジンの現在のステータスおよび設定方法を表示します。

```
bab -showcfg comediad
```

- 以下のコマンドは、データベース エンジンを開始します。

```
bab -load cadbd
```

- 以下のコマンドは、ジョブが待機中の場合にドメインおよび認証サービスを停止します。

```
bab -unload cadiscovd -force
```

- 以下のコマンドは、現在のドメインに含まれるプライマリ サーバの名前を表示します。

```
bab -getprimary
```


第 4 章: ca_auth - 認証コマンド

新規ユーザの作成、既存ユーザの削除、ユーザ パスワードの変更、他のユーザの同等アカウントの設定や削除を実行するために、**caroot** の同等ユーザとしてログインする場合、認証コマンド (**ca_auth**) を使用します。**caroot** 以外のユーザと同等の権限でログインした場合、**ca_auth** を使用すると、自身のパスワードを変更したり、有効にしたりすることができます。

注: CA ARCserve Backup ユーザと同等の権限を持たないでログインした場合、**ca_auth** を使用するには、同等の権限を与えられる必要があります。

caroot

CA ARCserve Backup には、CA ARCserve Backup 機能をすべて制御できるルートレベルのシステム管理者 (**root** ユーザ) プロファイルが用意されています。このユーザ プロファイルは「**caroot**」と呼ばれ、CA ARCserve Backup を初めてインストールするときに設定されます。

caroot プロファイルのパスワードは、インストール時に設定するか、**ca_auth** または CA ARCserve Backup のホーム ディレクトリにある **AuthSetup.exe** を使用して後で設定または変更できます。セキュリティ上の理由から、このアカウントにはパスワードを設定することを推奨します。

注: **caroot** ユーザ プロファイルは、CA ARCserve Backup マネージャの GUI およびバックアップ関連の機能へのアクセスを制御します。オペレーティング システムへのログインに必要なセキュリティと混同しないように注意してください。

caroot と同等の権限

CA ARCserve Backup では、**caroot** と同等な権限を持つユーザを作成できます。**caroot** の同等ユーザは、すべての CA ARCserve Backup 機能の完全なアクセス権を持っており、**ca_backup** や **ca_restore** など、コマンドラインユーティリティを使用できます。ホスト上の任意の Windows ユーザに **caroot** と同じアクセス権を付与できます。**caroot** と同等の権限をユーザに与えるには、**caroot** の同等ユーザとしてログインするか、**caroot** のパスワードを知っている必要があります。

ca_backup、**ca_restore**、**ca_qmgr** などのコマンドライン ユティリティをリモートの CA ARCserve Backup サーバと組み合わせて使用すると、ユーザは CA ARCserve Backup にログインせずにそれらのコマンドを実行して、バックアップジョブやリストアジョブをサブミットしたり、モニタすることができます。

構文

ca_auth のコマンドラインの構文は、以下のような形式です。

```
ca_auth [-cahost <hostname>]
        -user [user arguments]
        -equiv [equivalence arguments]
        -role [role arguments]
        -f <file name>
        -help
        -examples
```

注: [-cahost <hostname>] スイッチはオプションです。このコマンドをローカルホスト上で使用する場合、このスイッチは必要ありません。ただし、リモートで実行する場合は、hostname を指定する必要があります。cahost スイッチで指定されたホストは、メンバサーバまたはプライマリサーバにすることができます。ただし、CA ARCserve Backup は常にプライマリサーバのジョブキューにジョブを追加し、その後、プライマリサーバが、ジョブが処理される際にこのスイッチに従ってジョブを適切なサーバ(プライマリ/メンバ)へ送信します。

注: 「ARCserve Manager (コンソール)」モードを使用して CA ARCserve Backup をインストールした場合、ローカルマシンから -cahost スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソールインストールモードは、ローカルマシンに CA ARCserve Backup のすべての機能を実際にインストールするわけではないので、このコマンドを CA ARCserve Backup を含むプライマリまたはメンバサーバにリモートでサブミットする際には -cahost を含めることが必須です。そうしないと、コマンドが失敗します。

使用方法

ca_auth コマンドを使用すると、以下のオプションおよび引数を設定できます。

- その他のオプション
- ユーザの引数
- ロール引数
- 同等引数

その他のオプション

`ca_auth` コマンドには、関連するすべてのオプションを表示したり、CA ARCserve Backup が認証プロセス中に使用する基本ポリシーおよびパラメータを定義したりするのに使用されるその他のオプションが含まれます。

`ca_auth` コマンドには、以下のその他のオプションが含まれます。

-cahost <hostname>

処理をホストするシステムの名前を識別します。

処理をリモートシステムで実行する場合は、コマンドにこのスイッチを含める必要があります。

この処理をローカルシステムで実行する場合は、このスイッチは必要なく、コマンドに含める必要はありません。

注: `-cahost` をコマンドに含める場合、その処理をホストするシステム(ローカルまたはリモート)のホスト名も指定する必要があります。

注: 「ARCserve Manager (コンソール)」モードを使用して CA ARCserve Backup をインストールした場合、ローカルマシンから `-cahost` スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソールインストールモードは、ローカルマシンに CA ARCserve Backup のすべての機能を実際にインストールするわけではないので、このコマンドを CA ARCserve Backup を含むプライマリまたはメンバサーバにリモートでサブミットする際には `-cahost` を含めることが必須です。そうしないと、コマンドが失敗します。

-usage

基本的な `ca_auth` コマンドのリストを表示します。

-help

`ca_auth` ヘルプトピックを開きます。

-examples

`ca_auth` の使用例が記載されたヘルプトピックを開きます。

ユーザ引数

CA ARCserve Backup を使用する前に、CA ARCserve Backup アカウントを取得しておく必要があります。CA ARCserve Backup には、CA ARCserve Backup 機能をすべて制御できるルートレベルのシステム管理者 (root ユーザ) プロファイルが用意されています。このユーザ プロファイルは「caroot」と呼ばれ、CA ARCserve Backup を初めてインストールするときに設定されます。

caroot ユーザは管理者権限を持ち、インストール時にプログラムによって作成されます。*caroot* プロファイルのパスワードは、インストール時に設定するか、*ca_auth* または CA ARCserve Backup のホーム ディレクトリにある *AuthSetup.exe* を使用して後で設定または変更できます。セキュリティ上の理由から、このアカウントにはパスワードを設定することを推奨します。

注: *ca_auth.exe* コマンドでは、*caroot* などの CA ARCserve Backup 固有のユーザのみをサポートし、「domain¥user」や「hostname¥Administrator」などの Windows ユーザはサポートしません。

注: *caroot* ユーザ プロファイルは、CA ARCserve Backup マネージャの GUI およびバックアップ関連の機能へのアクセスを制御します。オペレーティングシステムへのログインに必要なセキュリティと混同しないように注意してください。

ca_auth コマンドには、以下のユーザ引数が含まれます。

```
ca_auth [-cahost host] -user
    add username [passwd] [-assignrole [rolelist]]
    delete username
    chgpasswd username [passwd]
    chgrole username [rolelist]
    validate username [password]
    group username
    getall
```

add username [passwd] [-assignrole [rolelist]]

CA ARCserve Backup ユーザとして、ユーザ名と指定したパスワードを追加します。

注: ユーザ名に「¥」を含めることはできません。

-assignrole [rolelist]

ca_auth を使用して新規ユーザを追加する場合は、新規ユーザに役割を割り当て、ユーザ プロファイルを作成する必要があります。ユーザ プロファイルは、ユーザと、ユーザに割り当てたロールおよびロールに割り当てた権限を組み合わせたものです。

現在使用可能なロールの一覧を以下に示します。

- 1) Backup Operator
- 2) Restore Operator
- 3) Device Operator
- 4) Tape Operator
- 5) Security Administrator
- 6) Report Operator
- 7) Monitor Operator
- 8) ARCserve Administrator
- 9) Ownership Checking Exemption Privilege

-assignrole スイッチを含めると、以下のような入力を求められます。

このユーザにロールを割り当ててください:

役割にはそれぞれ対応する番号が割り当てられています。新規ユーザにロールを割り当てるには、-assignrole スイッチの後ろにロール番号を入力します。複数の役割を割り当てるには、カンマを挿入して、各ロールを区切ります。

例:

- Security Administrator を新規ユーザに割り当てるには、コマンドを以下のように入力します。

```
ca_auth [-cahost host] -user add username [passwd] -assignrole 5
```

- 複数のロールを新規ユーザに割り当てるには、コマンドを以下のように入力します。

```
ca_auth [-cahost host] -user add username [passwd] -assignrole 1,2,3,4,5
```

注: ユーザ プロファイルおよびロールの定義の詳細については、「*管理者ガイド*」を参照してください。

delete username

認証データベースからユーザ名を削除します。

`chgpasswd username [passwd]`

指定したユーザ名のパスワードを変更します。

`chgrole username [roledist]`

既存の CA ARCserve Backup ユーザに割り当てた役割を変更します。

`validate username [passwd]`

指定したユーザ名とパスワードの組み合わせが存在するか、有効であるか、さらに CA ARCserve Backup ドメインへのログインに使用できるかどうかを確認します。

`group username`

指定したユーザが所属するユーザグループ名を指定します。

`getall`

CA ARCserve Backup 認証サービスで確認済みのすべてのユーザのリストを表示します。

役割引数

各ユーザには、ユーザ プロファイルを作成するために少なくとも 1 つの役割を割り当てる必要があります。役割にはそれぞれ対応する権限のリストがあります。ユーザ プロファイルは、ユーザと、ユーザに割り当てたロールおよびロールに割り当てた権限を組み合わせたものです。

- 権限は CA ARCserve Backup 内の指定された操作を実行する権利です。たとえば、メディアのフォーマット、バックアップ ジョブやリストア ジョブのサブミット、ジョブ ステータスのモニタ、レポートの作成のための権限があります。
- 役割は権限の組み合わせです。
- ユーザには 1 つ以上の役割を割り当てることができます。
- 役割については、誰にも割り当てないことも、任意の数のユーザに割り当てることもできます。
- 権限については、1 つまたは複数の役割の中を含めることができます。

注: ユーザ プロファイルの詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

現在利用できる役割と、それに対応する役割の説明および役割の ID のリストを表示するには、以下のコマンドを入力する必要があります。

```
ca_auth -role getall
```

-role

役割引数を表示します。これによって、新規ユーザの追加または既存ユーザの役割の変更で利用できる役割 ID を簡単に検索できます。

getall

CA ARCserve Backup 認証サービスで確認済みのすべての役割のリストを表示します。

現在使用可能なロールの一覧を以下に示します。

- 1) Backup Operator
- 2) Restore Operator
- 3) Device Operator
- 4) Tape Operator
- 5) Security Administrator
- 6) Report Operator
- 7) Monitor Operator
- 8) ARCserve Administrator
- 9) Ownership Checking Exemption Privilege

同等引数

caroot のパスワードがわかっている場合、同等の権限管理オプションを使用すると、*caroot* と同等の権限を持つユーザを作成できます。指定されたホスト上のユーザを *caroot* と同等のユーザとして設定すると、このユーザとして認証データベース全体にアクセスでき、CA ARCserve Backup 機能のすべてに完全にアクセスできます。

CA ARCserve Backup コマンドライン ユーティリティを使用するには、ご使用のシステムアカウントに *caroot* と同等の権限を作成する必要があります。*caroot* と同等の権限は、ユーザのログイン名と CA ARCserve Backup ユーザ データベースとのマッピングを確立します。これにより、ユーザは、CA ARCserve Backup コマンドライン ユーティリティを使用できます。ホスト上の任意の Windows ユーザに *caroot* と同じアクセス権を付与できます。*caroot* と同等の権限をユーザに与えるには、*caroot* の同等ユーザとしてログインするか、*caroot* のパスワードを知っている必要があります。

ca_backup、*ca_restore*、*ca_qmgr* などのコマンドライン ユーティリティをリモートの CA ARCserve Backup サーバと組み合わせて使用すると、ユーザは CA ARCserve Backup にログインせずにそれらのコマンドを実行して、バックアップジョブやリストア ジョブをサブミットしたり、モニタすることができます。

ca_auth コマンドには、以下の同等用の引数が含まれます。

```
ca_auth [-cahost host] -equiv
    add ntuser hostName ARCserveUser [caroot_username] [caroot_password]
    getequiv [ntuser hostName]
    delete ntuser hostName [caroot_username] [caroot_password]
    whoami
```

add ntuser hostName ARCserveUser [caroot_username] [caroot_password]
caroot と同等の権限をホスト上の指定されたユーザに付与します。

getequiv [ntuser hostName]

このコマンドを実行するホスト上の指定されたユーザ用の同等の権限をすべて表示します。

delete ntuser hostName [caroot_username password]

ホスト上の UNIX ユーザの同等の権限を削除します。現在のユーザが *caroot* と同等でない場合、管理者のアカウント向けの認証情報（たとえば、*caroot* のユーザ名およびパスワード）が必要です。

whoami

ログインする際に使用した、ローカルマシン上のユーザ名を表示します。

注: 読み取り権限を持つユーザは、そのユーザが所有していないオブジェクトの読み取り権限を他のユーザに付与することはできません。

例

ca_auth コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下のコマンドは、caroot ユーザのパスワードを変更します。

```
ca_auth -user chgpasswd caroot [passwd]
```

- 以下のコマンドは、ユーザを追加します。

```
ca_auth -user add username [passwd]
```

- 以下のコマンドは、ユーザを削除します。

```
ca_auth -user delete username
```

- 以下のコマンドは、ユーザおよび関連するパスワードを検証します。

```
ca_auth -user validate username [password]
```

- 以下のコマンドは、ユーザ(管理者)およびパスワード(caroot)を追加します。

```
ca_auth -user add administrator caroot
```

注: 非エコーモードで管理者のパスワード入力を求められます。

- 以下のコマンドは、すべての CA ARCserve Backup ユーザのリストを表示できます。

```
ca_auth -user getall
```

- 以下のコマンドは、CA ARCserve Backup Domain Server である DOMAIN に対して caroot と同等の権限を持つ Windows ユーザ(管理者)を追加します。ユーザ名は caroot、パスワードは ccb です。

```
ca_auth -equiv add administrator DOMAIN caroot ccb
```

- 以下のコマンドは、現在の CA ARCserve Backup ユーザを表示します。

```
ca_auth -equiv whoami
```

ca_auth 同等の例

- 以下のコマンドは、同等アカウントを設定します。

```
ca_auth -equiv add ntuser hostName ARCserveUser [caroot username] [caroot password]
```

たとえば、マシン dev02-vir2 の管理者に同等アカウントを追加する場合：

```
ca_auth -equiv add Administrator dev02-vir2 'caroot' 'caroot password'
```

- 以下のコマンドは、ログインする際に使用したユーザの同等アカウントを表示します。

```
ca_auth -equiv getequiv
```

- 以下のコマンドは、特定のホスト マシン上のユーザの同等アカウントを表示します。

```
ca_auth -equiv getequiv [ntuser hostName]
```

- 以下のコマンドは、ユーザの同等の権限を削除します。

```
ca_auth -equiv delete ntuser hostName [caroot username] [caroot password]
```

- 以下のコマンドは、ログインする際に使用した、ローカル マシン上のユーザ名を表示します。

```
ca_auth -equiv whoami
```

- あるマシン上でコマンドライン インターフェースを使用して他のマシンを管理する場合、同等の権限を追加する必要があります。

同等の権限を追加するには、以下の手順に従います。

1. <Machine A> からコマンドライン インターフェースを開きます。
2. 以下のコマンドを入力します。

```
ca_auth -cahost <hostnameB> -equiv add <domainnameA%NT user(administrator)>  
<hostnameA> caroot caroot <passwordofcaroot>
```

第 5 章: ca_backup - バックアップ マネージャ コマンド

バックアップ マネージャ コマンド (`ca_backup`) は、バックアップ マネージャ への コマンドライン インターフェースです。バックアップ マネージャの GUI から実行可能な機能はすべてコマンドラインからも実行できます。このコマンドを使用して、バックアップ ジョブを CA ARCserve Backup キューにサブミットし、関連するオプション、フィルタリング、GFS ローテーション、およびローテーション ジョブをすべて設定します。

重要: コマンドライン インターフェース (CLI) を使用する際には、必ず正しい構文を使用してください。CLI オプションと同じタイトルを持つファイル名やデータベース名の使用は避けてください。CLI は、「- filesystem」または「- database」などの、CLI オプションと同じタイトルを持つ特殊なファイルまたはデータベースのバックアップをサポートしません。たとえば、「- database」というタイトルのファイルをバックアップする場合、-database は、CA ARCserve Backup 用の CLI グローバル オプションでもあるので、ジョブが失敗します。

構文

`ca_backup` のコマンドラインの構文は、以下のような形式です。

```
ca_backup [-cahost <hostname>]
          [global options]
          [global filters]
          -source [source arguments]
          [destination arguments]
          [schedule arguments]
          [run job arguments]
```

注: [-cahost <hostname>] スイッチはオプションです。このコマンドをローカルホスト上で使用する場合、このスイッチは必要ありません。ただし、リモートで実行する場合は、`hostname` を指定する必要があります。`cahost` スイッチで指定されたホストは、メンバサーバまたはプライマリサーバにすることができます。ただし、CA ARCserve Backup は常にプライマリサーバのジョブキューにジョブを追加し、その後、プライマリサーバが、ジョブが処理される際にこのスイッチに従ってジョブを適切なサーバ(プライマリ/メンバ)へ送信します。

注: 「ARCserve Manager (コンソール)」モードを使用して CA ARCserve Backup をインストールした場合、ローカルマシンから `-cahost` スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソールインストールモードは、ローカルマシンに CA ARCserve Backup のすべての機能を実際にインストールするわけではないので、このコマンドを CA ARCserve Backup を含むプライマリまたはメンバサーバにリモートでサブミットする際には `-cahost` を含めることが必須です。そうしないと、コマンドが失敗します。

使用方法

`ca_backup` コマンドを使用すると、以下のオプションおよび引数を設定できます。

- その他のオプション
- バックアップ オプション
- フィルタ引数
- ソース引数
- デスティネーション引数
- スケジュール引数
- ジョブ実行引数
- ディスク ステージング オプション
- リターンコード

バックアップ処理を構築するには、`ca_backup` 構文で指定した順序に従って、オプションを 1 カテゴリごとに設定する必要があります。

その他のオプション

`ca_backup` コマンドには、関連するすべてのオプションを表示したり、CA ARCserve Backup がバックアップ プロセス中に使用する基本ポリシーおよびパラメータを定義したりするのに使用されるその他のオプションが含まれます。

`ca_backup` コマンドには、以下のその他のオプションが含まれます。

```
ca_backup
  [-cahost <hostname>] -list
  [-f <file name>]
  [-clearconn]
  [-waitForJobStatus [<polling interval(secs)>]]
  [-help]
  [-examples]
  [-usage]
  [allusage]
```

`-cahost <hostname>`

処理をホストするシステムの名前を識別します。

処理をリモートシステムで実行する場合は、コマンドにこのスイッチを含める必要があります。

この処理をローカル システムで実行する場合は、このスイッチは必要なく、コマンドに含める必要はありません。

注: `[-cahost <hostname>]` スwitchはオプションです。このコマンドをローカル ホスト上で使用する場合、このスイッチは必要ありません。ただし、リモートで実行する場合は、`hostname` を指定する必要があります。`cahost` スwitchで指定されたホストは、メンバ サーバまたはプライマリ サーバにすることができます。ただし、CA ARCserve Backup は常にプライマリ サーバのジョブキューにジョブを追加し、その後、プライマリ サーバが、ジョブが処理される際にこのスイッチに従ってジョブを適切なサーバ(プライマリ/メンバ)へ送信します。

注: 「ARCserve Manager (コンソール)」モードを使用して CA ARCserve Backup をインストールした場合、ローカル マシンから `-cahost` スwitchを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソール インストールモードは、ローカル マシンに CA ARCserve Backup のすべての機能を実際にインストールするわけではないので、このコマンドを CA ARCserve Backup を含むプライマリまたはメンバ サーバにリモートでサブミットする際には `-cahost` を含めることが必須です。そうしないと、コマンドが失敗します。

-list

バックアップ ジョブで使用できるすべてのグループ名と対応するメディアのリストを表示します。

-f <file name>

コマンドのスイッチおよびパラメータを含むファイル名を指定するのに使用します。

このスイッチにより、シェルによるコマンドラインからの入力文字数制限 (1024 文字) を克服できます。また、このスイッチを使用して、ファイルにパスワードを保存することにより、これらのパスワードを隠すこともできます。

-waitForJobStatus [<polling interval (secs)>]

このオプションが指定された場合、`ca_backup` コマンドはジョブが終了するまで待機し、ジョブの結果である成功または失敗を示す[リターンコード](#) (P. 133) を受けて終了します。

<polling interval> 値は、`ca_backup` ユーティリティがキュー サービスを使用してジョブのステータスをチェックする頻度 (秒) を定義します。デフォルトのポーリング間隔は 60 秒です。

注: これは、Unicenter NSM Scheduling (旧名 TNG) で役立ちます。

-help

`ca_backup` のヘルプトピックを開きます。

-examples

ヘルプトピックと `ca_backup` の使用例を開きます。

-usage

`ca_backup` の基本コマンドのリストを表示します。

allusage

すべての `ca_backup` コマンドとそのスイッチの一覧を表示します。

グローバル ジョブ オプション

`ca_backup` グローバル オプションでは、ジョブ全体に適用されるさまざまなオプションを指定できます。

`ca_backup` コマンドは、以下のグローバル オプションを提供します。

- バックアップ メディア オプション
- 検証オプション
- [再試行]タブのオプション
- 操作オプション
- 実行前/後の処理オプション
- ログ オプション
- ウィルス オプション
- メディアのエクスポート オプション
- 詳細オプション
- VSS のオプション

バックアップ メディア オプション

`ca_backup` コマンドには、以下のグローバル バックアップ メディア オプションが含まれます。

```
ca_backup
  [-firsttapeopt <owritesameblank|owritesameblankany>]
  [-firsttapetimeout <minutes<1-9999>>]
  [-spantapeopt <owritesameblank|owritesameblankany>]
  [-spantapetimeout <minutes<1-9999>>]
  [-sessionpassword <session password>[-savepassword [-remindafter n]]]
  [-encryption <encryption key>]
  [-atagent|-atserverduringbackup|-atserverduringmigration][-savepassword
  [-remindafter n]]]
  [-compression [-atagent|-atserver]]
  [-mediablename]
```

-firsttapeopt <owritesameblank| owritesameblankany>

バックアップ ジョブで最初に使用されるメディアに対するメディア オプションを指定します。デフォルトでは、同名のメディアに上書き(メディアへ追加)を設定します。「ブランク」メディアと「任意の」メディアは異なります。「任意の」メディアは、ジョブで指定されたメディア名とは別の名前のフォーマット済みメディアを示します。

メディア選択の検索順序は、左から右です。owritesameblankany オプションが指定されている場合、CA ARCserve Backup によってジョブと同じ名前のメディアが最初に検索されます。該当するメディアが見つかり、使用可能である場合、そのメディアは同じ名前でもフォーマットされ、バックアップに使用されます。見つからない場合、CA ARCserve Backup によって使用するブランクメディアが検索されます。使用できる「ブランク」メディアがない場合、CA ARCserve Backup は「任意の」使用可能なメディアを検索し、バックアップ用にフォーマットして使用します。

注: -rotation スケジュール引数が含まれる場合、指定されたローテーションルールがこれらのオプションよりも優先されます。

-firsttapetimeout <minutes<1-9999>>

使用可能なメディアが実際にバックアップ ジョブで利用可能になるまで待機する時間を分単位で指定します。デフォルトでは、この値は 5 分です。ここで設定された時間内にメディアが使用可能にならない場合、ジョブはタイムアウトになり失敗します。

-spantapeopt <owritesameblank| owritesameblankany>

バックアップ ジョブで使用されるスパン メディアに対するメディア オプションを指定します。複数のメディアが必要なジョブに対して指定するオプションで、最初以降のメディアに対する上書きルールを指定します。ジョブが複数のメディアにわたる場合は、CA ARCserve Backup が使用するメディアを指定する必要があります。

メディア選択の検索順序は、左から右です。デフォルトでは、[上書き - 同名メディア、ブランクメディアのみ]に設定されます。テープ スパンの実行中にデフォルトが指定されている場合、CA ARCserve Backup によって同じ名前で元のテープよりも高いシーケンス番号のメディアが検索されます。該当する使用可能なテープが発見された場合、そのメディアがフォーマットされ、次のテープとして使用されます。見つからない場合、CA ARCserve Backup は使用するブランクメディアを検索します。

注: -rotation スケジュール引数が含まれる場合、指定されたローテーションルールがこれらのオプションよりも優先されます。

-spantapetimetypeout <minutes<1-9999>>

使用可能なスパン メディアが実際にバックアップ ジョブで利用可能になるまで待機する時間を分単位で指定します。デフォルトでは、この値は無制限になっています。そのため、使用可能なメディアがロードされるか、ユーザによってキャンセルされるまで、ジョブは待機してプロンプトを表示し続けます。

-sessionpassword <session password>[-savepassword [-remindafter n]]

メディアにバックアップされた各セッションにパスワードを適用します。これらのセッションのいずれかからデータをリストアするには、このパスワードの入力が必要となります。

-savepassword

バックアップ ジョブの実行時にセッション パスワードを CA ARCserve Backup データベースに保存するように指定します。このスイッチを含めなかった場合、セッション パスワードは CA ARCserve Backup データベースに保存されません。

-remindafter n

セッション パスワードを保存する日数を指定します。指定した日数が経過すると、パスワードの変更を促すリマインダ メッセージがアクティビティ ログに記録されます。指定できる範囲は 0 ~ 9999 日です。

注: セッション パスワードの CA ARCserve Backup データベースへのインポートおよびエクスポートの詳細については、[「DumpDB ユーティリティ」](#) (P. 355)を参照してください。

-encryption <encryption key>
[-atagent|-atserverduringbackup|-atserverduringmigration] [-savepassword
[-remindafter n]]

バックアップ前にファイルを暗号化します。暗号化されたファイルをリストアするには、暗号化パスワードを入力する必要があります。

この引数を使用してバックアップされたセッションをリストアするには、**ca_restore -tapesessionpw** 引数を使用してリストア ジョブを実行する必要があります。

注: デデュプリケーション デバイスの場合は、[-atagent|-atserverduringbackup|-atserverduringmigration] スイッチを含めることはできません。

- **-atagent** を選択すると、エージェント側で暗号化が行われます。デフォルトでは、このオプションが選択されています。
- **-atserverduringbackup** を選択すると、バックアップ プロセス中にサーバ側で暗号化が行われます。
- **-atserverduringmigration** を選択すると、マイグレーション中にサーバ側で暗号化が行われます。

-savepassword

バックアップ ジョブの実行時に暗号化パスワードを CA ARCserve Backup データベースに保存するように指定します。デフォルトでは、この機能はオンになっています。

-remindafter n

暗号化パスワードを保存する日数を指定します。指定した日数が経過すると、パスワードの変更を促すリマインダ メッセージがアクティビティログに記録されます。指定できる範囲は 0 ~ 9999 日です。

注: セッション パスワードの CA ARCserve Backup データベースへのインポートおよびエクスポートの詳細については、「[DumpDB ユーティリティ](#)」(P. 355)を参照してください。

-compression [-atagent|-atserver]

バックアップの前にファイルを圧縮します。

注: デデュプリケーション デバイスの場合は、[-atagent|-atserver] スイッチを含めることはできません。

- **-atagent** を選択すると、エージェント側で圧縮が行われます。デフォルトでは、このオプションが選択されています。
- **-atserver** を選択すると、サーバ側で圧縮が行われます。

-mediabyname

CA ARCserve Backup では、メディアの ID またはシーケンス番号に関係なく、指定した名前を持つメディアに書き込みます。このオプションは、特定のメディアで上書きジョブを繰り返し実行し、そのジョブについて毎回同じメディアが使用されるようにする場合に役立ちます。

- このオプションを含めると、指定した名前を持つメディアが、メディアのその他の識別情報に関係なく、CA ARCserve Backup によって検索されて使用されます。
- このオプションを含めないと、2 回目のバックアップ ジョブを実行したときに、一部の識別情報が変更されているために、CA ARCserve Backup が以前のテープを使用できない場合があります。

注: テープ ライブラリで 2 つ以上のメディアの名前が同じ場合、CA ARCserve Backup では、指定した名前と一致するデバイスグループの最初のメディアを使用します。したがって、1 回の上書きの場合は、このオプションを使用しないでください。

検証オプション

ca_backup コマンドには、以下のその他のグローバル オプションが含まれます。

ca_backup [-scan | -compare]

-scan

バックアップ メディアをスキャンして各ファイルのヘッダをチェックし、バックアップの整合性を検証します。ヘッダが読み取り可能な場合、データは信頼できるものとみなされます。

-compare

バックアップ メディアからデータブロックを読み出し、その内容をソースマシン上のソースファイルと 1 バイトずつ比較して、バックアップの整合性を検証します。

注: [メディアとディスクの比較]オプションは、データベース エージェントやアプリケーション エージェントではサポートされていません。

[再試行]タブのオプション

`ca_backup` コマンドには、以下のファイルの再試行/共有のグローバル オプションが含まれます。

```
ca_backup
  [-retry <off|now[later]||later[now]>]
  [-retrycount <count<1-9999>>]
  [-retryinterval <seconds<1-9999>>]
  [-accessmethod <denynoneifdenywritefails | lockifdenywritefails | denywrite |
  denynone>]
```

`-retry <off|now[later]||later[now]>`

最初のバックアップに失敗したオープン ファイルのバックアップを再試行する場合に指定します。

`-retrycount <count<1-9999>>`

再試行回数を指定します。

`-retryinterval <seconds<1-9999>>`

再試行の間隔を秒単位で指定します。

`-accessmethod <denynoneifdenywritefails | lockifdenywritefails | denywrite | denynone>`

これらは、ファイル共有オプションです。

`denynoneifdenywritefails`

CA ARCserve Backup は、ファイルを「書き込み禁止」モードにしようとしています。ファイルがすでに開かれているため、これが不可能な場合は、ファイルは非禁止モードになります。これはデフォルトの設定です。

`lockifdenywritefails`

CA ARCserve Backup は、ファイルを「書き込み禁止」モードにしようとしています。ファイルがすでに開かれていてこれが不可能な場合は、ファイルは完全にロックされ、ユーザが開くまたは書き込むことができなくなります。このオプションを使用すると、ファイルの最新バージョンが確実にバックアップされます。

`denywrite`

CA ARCserve Backup がファイルをオープンしている間に、他のプロセスがそのファイルに書き込めないようにします。CA ARCserve Backup より前にほかのプロセスによってファイルがオープンされている場合、CA ARCserve Backup はファイルをバックアップしません(ただし、いずれかのオープンファイルの再試行オプションを選択している場合を除く)。

`denynone`

最初にファイルを開いたのが CA ARCserve Backup であっても別のプロセスであっても、別のプロセスからファイルの読み取りや書き込みをすることができます。バックアップされているファイルが最新版ではなくても、このオプションにより、確実にファイルが更新されます。

操作オプション

ca_backup コマンドには、以下のグローバル操作オプションが含まれます。

ca_backup

- [-backupasdb]
- [-backupcatalog]
- [-backupjobqueue]
- [-noestimation]
- [-createcrc]
- [-deletefiles]
- [-preserveaccesstime]
- [-eject|-noeject]
- [-partialdbupdate|-nodbupdate]
- [-disableResetArchiveBitForDedupe]

-backupasdb

CA ARCserve Backup データベースをバックアップ データの最後に追加します。

-backupcatalog

カタログ ファイルをバックアップ データの最後に追加します。

-backupjobqueue

ジョブ スクリプトをバックアップ データの最後に追加します。

-noestimation

ファイル サイズの推定を無効にします。デフォルトでは、ファイルをメディアにバックアップする前に、CA ARCserve Backup によりジョブ完了に要する時間の予測が行われます。この機能を省略して、CA ARCserve Backup がバックアップをすぐに開始できるようにする場合は、このオプションを選択します。

-createcrc

CRC 値を計算してバックアップ メディアに保存します。CA ARCserve Backup で CRC 値を自動的に計算し、バックアップ ジョブの実行中にその値をバックアップ メディアに保存する場合は、このオプションを選択します。CRC 値は、バックアップ ジョブの終了直後のスキャン処理で使用することができます (-scan のグローバル 検証オプションを含んでいる場合)。または、別のスキャン ジョブの一部としても使用できます。

`-deletefiles`

ファイルのバックアップが完了した後に、そのファイルをハードディスクから削除します。メディアへのバックアップ後、ソース マシンからソース ファイルを削除する場合に、このオプションを選択します。このオプションでは、保護されていない指定フォルダのファイルのみが削除されます。空のフォルダ自体は削除されません。

このオプションはディスクのグルーミングを実行するために使用します。たとえば、バックアップ ジョブにフィルタを設定して、ある一定の期間アクセスのなかったファイルをバックアップした場合、その後このオプションを使用してこれらのファイルをソース ディスクから削除できます。

注:

- **Windows** マシンの場合、保護されているシステム ファイルおよび他のフィルタによってバックアップから除外されているファイルは削除されません。リモートバックアップ ジョブ、64 ビット オペレーティング システム ローカル バックアップ ジョブ、または **Windows Server 2008** ローカル バックアップでは、**Windows Client Agent** がファイルをバックアップします。バックアップ後に、このオプションは指定の保護されていないフォルダのファイルのみを削除します。空のフォルダ自体は削除されません。ただし、ブートファイルは保護されていないので削除できます。
- **UNIX/Linux** および **Mac** マシンの場合、バックアップされるすべてのファイルが削除されますが、例外は `/bin`、`/etc`、および `/lib` などの保護されているディレクトリ内のファイルです。保護されるディレクトリを追加指定するには、クライアント エージェント マシンの `groom.cntl` ファイルに追加します。

-preserveaccesstime

ファイル アクセス時刻を保存します (Windows ファイル システムのみ)。このオプションは、CA ARCserve Backup に前回バックアップが行なわれた時のアクセス時刻を保存させます。

ファイルのアクセス時刻は、ファイルがアクセス(読み取りまたは書き込み)されると常にオペレーティング システムにより自動的に更新されます。ただし、フルバックアップの実行後は、すべてのバックアップされたファイルのアクセス時刻も更新されます。そのため、ファイルが実際にアクセス(バックアップ以外)されたのかどうかを追跡したい場合は、元のアクセス時刻を保存する必要があります。

- このオプションを含めないと、バックアップされるすべてのファイルの前のファイル アクセス時刻がバックアップ完了時の新しい値に更新されます。これはデフォルトの設定です。
- このオプションを含めると、CA ARCserve Backup によって、バックアップされるすべてのファイルの前のファイル アクセス時刻が、バックアップが実行される前の現在の時刻で保存されます。

-eject

ジョブの終了後、ドライブからメディアをイジェクトします。このオプションを使用すると、他のジョブによってメディアの情報に上書きされるのを防ぐことができます。このオプションは、ライブラリの環境設定で選択した設定より優先されます。

-noeject

ジョブの終了後、ドライブからメディアをイジェクトしません。このオプションは、ライブラリの環境設定で選択した設定より優先されます。

-partialdbupdate

CA ARCserve Backup データベースにジョブ情報とセッション情報だけを記録します。このオプションを選択すると、ジョブとセッションの情報のみがデータベースに記録されます。この方法を選択することをお勧めします。

注: Windows でこのオプションを選択すると、詳細情報はデータベースにマージされません。カタログ データベースを有効にしてこのオプションを選択すると、カタログ ファイルは CATALOG.DB フォルダに格納されます。カタログ データベースを有効にしていない場合は、カタログ ファイルはマージ後に削除されます。

-nodbupdate

データベースに記録しません。このジョブに関する情報をいっさいデータベースに記録しません。CA ARCserve Backup データベースをバックアップしている場合や、ディスク容量が残り少ない場合に、このオプションを選択します。

データベース表示を使用してデータベースをリストアする前に、あらかじめ [メディアのマージ] 操作をサブミットする必要があります。

-disableResetArchiveBitForDedupe

コマンドで指定したすべてのファイルに対して、アーカイブ ビットのリセットを無効にします。このスイッチを省略すると、デフォルトでアーカイブ ビットがリセットされます。

重要: このスイッチは慎重に使用してください。アーカイブ ビットは、特定のファイルに「変更済み」マークを付けるものです。最適化を設定してデデュプリケーション ジョブを実行する場合、デデュプリケーションが実際に実行されるのは、前回のバックアップ以降に「変更済み」マークが付いたファイルのみです。バックアップ ジョブの完了後は、ファイルのアーカイブ ビットをリセットする必要があります。アーカイブ ビットがリセットされないと、ファイルが「変更済み」と自動的に見なされるため、実際は変更されていない場合でも、その後のバックアップ ジョブで最適化に含まれてしまいます。

アーカイブ ビットのリセットを無効にする必要があるのは、最適化ジョブでカスタム デデュプリケーションによってバックアップするファイルが、GFS ジョブなどのほかのバックアップ ジョブによってもバックアップされるような状況です。このような状況では、最初のジョブの後にアーカイブ ビットをクリアすると、GFS ジョブに影響を与えます。

ジョブ実行前/後の処理オプション

`ca_backup` コマンドには、以下の実行前/後のグローバル処理オプションが含まれます。

`ca_backup`

```
[-preexec <command>]
[-exitcode <exit code(>=0)> [-skip_delay|-skip_job] [-skip_post]
[-preexectimeout <minutes(0-32767)>]
[-postexec <command>]
[-skippostfail]
[-skippostincmp]
[-skippostcmp]
[-prepostuser <user name>]
[-prepostpassword <user password>]
```

-preexec <command>

指定したコマンドをジョブの開始前に実行します。

コマンドはフルパスで指定してください。

注: このオプションを使用するには、`-prepostpassword` オプションも指定する必要があります。`-prepostpassword` オプションを指定しないと、ジョブが失敗します。

-exitcode <exit code(>=0)>[-skip_delay|-skip_job] [-skip_post]

処理の前に実行されるコマンドの終了コードを指定します。`-skip_delay` スイッチ、`-skip_job` スイッチ、および `-skip_post` スイッチと共に使用します。

-skip_delay

指定された終了コードを受け取ると同時に、バックアップ ジョブを実行します。

-skip_job

指定された終了コードを受け取った場合に、バックアップ ジョブを完全にスキップします。

-skip_post

指定した終了コードを受け取った場合、ジョブの終了後に実行されるコマンドをスキップします。

-skippostfail

ジョブが失敗した場合に実行後コマンドを実行しないように指定します。

-skippostincmp

ジョブが未完了の場合に実行後コマンドを実行しないように指定します。

-skippostcmp

ジョブが完了した場合に実行後コマンドを実行しないように指定します。

-preexectimeout <minutes(0-32767)>

バックアップ ジョブが開始されるまでに待機する時間を分単位で指定し、ジョブの開始前に実行されるコマンドが完了する時間を確保します。指定する時間範囲は、0 ~ 32767 分です。

デフォルト: 0 分

-postexec <command>

指定したコマンドをジョブの完了後に実行します。

コマンドはフル パスで指定してください。

注: このオプションを使用するには、-prepostpassword オプションも指定する必要があります。-prepostpassword オプションを指定しないと、ジョブが失敗します。

-prepostuser <username>

このバックアップ ジョブをサブミットしているユーザの名前を指定します。

-prepostpassword <user password>

バックアップ ジョブをサブミットするユーザのパスワードを指定します。

ログ オプション

ca_backup コマンドには、以下のグローバル ログ オプションが含まれます。

ca_backup

```
[-logfile <allactivity | summary [consolidate] | disabled | errorsonly>]
```

-logfile <allactivity | summary [consolidate] | disabled | errorsonly>

バックアップ ジョブ 実行時のアクティビティを、ジョブ ログに記録します。従属オプションから 1 つを指定し、記録される情報を制御する必要があります。

allactivity

ジョブ実行中に発生したすべてのアクティビティを記録します。

summary

ソース、デスティネーション、セッション番号、合計、およびエラーなどのサマリ情報のみを記録します。

consolidate

子ジョブ ログをマスタ ジョブに統合します。このオプションは、サマリオプションを使用する場合にのみ使用できます。

disabled

ログが無効になり、ジョブに関する情報を記録しません。

errorsonly

ジョブの実行中に発生したエラーのみ記録します。

デフォルト: 統合なしのサマリです。

ウイルス オプション

ca_backup コマンドには、以下のグローバル ウィルス オプションが含まれます。

ca_backup

```
[-virus <skip|delete|rename|cure> [-virus_scanarchive]]
```

-virus

バックアップ処理中に自動的にウィルスをスキャンできます。ウィルス スキャンの従属オプションから 1 つを含める必要があります。

Skip (スキップ)

ウィルスに感染したファイルをバックアップしません。

Rename (名前の変更)

感染したファイルの拡張子を **AVB** に変更します。同じファイル名で拡張子が **AVB** のファイルがほかに存在する場合は、拡張子として **AV0** が使用され、順次 **AV1**、**AV2**... となります。

Delete (削除)

ウィルスに感染したファイルを削除します。

Cure (修復)

ウィルスに感染したファイルの修復を試みます。

-virus_scanarchive

圧縮されたアーカイブ内の各ファイルを個別にチェックします。このオプションを選択すると、バックアップ処理のパフォーマンスが低下しますが、より確実にウィルスからファイルを保護できます。

メディアのエクスポート オプション

`ca_backup` コマンドには、以下のグローバル メディア エクスポート オプションが含まれます。

`ca_backup`

`[-export <all|duplicate>]`

-export

バックアップ ジョブの最後にメディアをエクスポートできます。これにより、メディアをライブラリから移動したり、安全なオフサイトの保管場所へ移動したりできるようになります。ジョブで検証が行われる場合、エクスポートは検証後に行われます。このオプションを含めないと、バックアップ ジョブの最後にメディア エクスポートは行われません。

all

CA ARCserve Backup は、関連のバックアップのテープをすべてエクスポートします。ジョブが複数のテープにまたがっている場合、このジョブで使用されているすべてのテープがエクスポートされます。RAID テープ セットが対象の場合、このジョブのすべてのテープがエクスポートされます。CA ARCserve Backup は、次のテープをメール スロットに移動できるよう、メール スロットが空であるかどうか数回確認を行います。全テープをエクスポートするメール スロットがない場合、エクスポートできないテープは元のホーム スロットへ戻されます。オペレータがメール スロットからテープを取り出さないと、CA ARCserve Backup はその情報をアクティビティログに書き込みます。

duplicate

RAID1 をサポートするオプションです。CA ARCserve Backup は、関連バックアップの複製メディアをエクスポートします。ジョブが複数のメディアにまたがっている場合、このジョブで使用されているすべてのメディアがエクスポートされます。

詳細オプション

ca_backup コマンドには、以下の詳細グローバル オプションが含まれます。

ca_backup

```
[-skipdirandvol | -traversedirandvol]
[-bkmountpt]
[-preserve_hardlink]

[-dr_partialnodeinfo]
[-dr_includefiltered]

[-sql_norotation]
[-sql_nopartialupdate]
```

-skipdirandvol

ディレクトリジャンクションとボリューム マウント ポイントをスキップするように指定します。このオプションを含めた場合、バックアップ ジョブでは、ディレクトリジャンクションが参照するディレクトリ、およびボリューム マウント ポイントが参照しているボリュームがバックアップされません。そのため、リストア時には、参照先のディレクトリやボリュームに格納されているファイルやディレクトリはリストアできません。

注: このオプションは、Windows XP および Windows 2003 のオペレーティング システム上でのみサポートされています。

-traversedirandvol

ディレクトリジャンクションとボリューム マウント ポイントをトラバースするように指定します。このオプションを含めると、バックアップ ジョブは指定されたディレクトリまたはボリュームをトラバースしてバックアップすることができます。このセッションのリストア時には、参照先のボリュームやディレクトリに格納されているファイルやディレクトリをリストアできます。このオプションを含めない場合、バックアップ ジョブでは、ボリューム マウント ポイントが参照するボリュームまたはディレクトリジャンクションが参照するディレクトリがバックアップされません。そのため、リストア時には、参照先のボリュームやディレクトリに格納されているファイルやディレクトリはリストアできません。

-bkmountpt

マウントポイントがマウントされたボリュームの一部としてマウントポイントをバックアップします。このオプションを含めると、ボリューム マウントポイントによって参照されているボリュームは、ボリューム マウントポイントと同じセッションの一部としてバックアップされます。このオプションを含めない場合、ボリューム マウントポイントが参照するボリュームを、別のセッションとしてバックアップできます。

注: このオプションは、Windows XP および Windows 2003 のオペレーティングシステム上でのみサポートされています。

-preserve_hardlink

このオプションでは、ハードリンクはバックアップされますが、参照されているファイルはバックアップされません。このオプションを含めない場合、ハードリンクで参照されたファイルはバックアップされます。

注: このオプションは、Windows XP および Windows 2003 のオペレーティングシステム上でのみサポートされています。

-dr_partialnodeinfo

一部が選択されたノードの惨事復旧情報を生成します。惨事復旧情報は、通常はマシンのフルバックアップを実行する際に生成されます。ただし、マシンのフルバックアップを頻繁に実行できない環境 (SAN 共有ディスク環境など) でも、惨事復旧情報を最新の情報に更新する必要がある特殊なケースもあります。このオプションを含めることで、マシンにあるすべての情報をバックアップすることなく、マシンの惨事復旧情報を作成または更新できます。

-dr_includefiltered

リストア セッション情報の生成時にフィルタされたセッションを含めます。惨事復旧情報を生成する場合は、CA ARCserve Backup サーバでは、惨事復旧情報の生成時に、フィルタされていないマシン関連の最新バックアップセッションのみが追跡されます。デフォルトの場合、フィルタを使用してマシンをバックアップすると、フィルタされたバックアップ セッションは、システムの復旧時に、惨事復旧処理に使用されません。このオプションを含めると、デフォルトの動作が変更され、システムの復旧時に、フィルタされたバックアップ セッションを惨事復旧処理に使用することができます。

このオプションはデフォルトでは含まれません。このオプションを含めると、ジョブ単位でオプションが適用されます。ジョブに複数のマシンのバックアップが含まれている場合、これらのオプションはすべてのマシンに適用されます。

重要: 特に、システム ボリュームの場合、このオプションを含めることは非常に危険です。システム ファイルが失われ、完全には復旧できなくなる可能性があります。

-sql_norotation

差分または増分バックアップ方式を Microsoft SQL Server データベースに適用しません。CA ARCserve Backup で Microsoft SQL Server データベースのバックアップに対して差分バックアップまたは増分バックアップの方式を適用しないようにするには、このオプションを含めます。

-sql_nopartialupdate

データベースのフルバックアップが見つからない場合、Microsoft SQL Server 部分バックアップをデータベースのフルバックアップに自動的にアップグレードしません。

VSS オプション

ca_backup コマンドには、以下のボリューム シャドウ コピー サービス (VSS) オプションが含まれており、ファイル システムのバックアップ中にファイルが処理される頻度を指定できます。

ca_backup

```
[-vss_usevss [revertoff]]  
[-vss_exclinclsoff]  
[-vss_excllexclsoff]  
[-vss_onfail]
```

-vss_usevss

CA ARCserve Backup に、オープンファイルのバックアップの処理に VSS を使用するよう指定します。

このスイッチが含まれない場合、VSS サポートは使用されず、CA ARCserve Backup Agent for Open Files (利用可能な場合)が、オープンファイルを処理するのに使用されます。Agent for Open Files が使用不可能で、-vss スイッチが含まれない場合は、従来のバックアップが実行されます。ただし、バックアップできないオープンファイルがある場合は、バックアップは完了しません。

revertoff

このオプションを選択すると、VSS バックアップの作成に失敗した場合に、CA ARCserve Backup が従来のバックアップを実行するように設定できます。CA ARCserve Backup Agent for Open Files が使用可能な場合、このスイッチが含まれ、VSS バックアップが失敗すると、オープンファイルは CA ARCserve Backup Agent for Open Files によって処理されます。

このスイッチが含まれずに VSS バックアップが失敗した場合、バックアップジョブも失敗します。

接尾辞「off」は、このオプションがデフォルトではオンですが、ユーザがこの接尾辞を含めると、オプションがオフに設定されることを示します。

-vss_exclinclsoff

ライタに組み込まれたファイルを、ファイル システム バックアップから除外するように指定します。これにより、ライタのコンポーネントに属するファイルが従来のファイル システム バックアップによってバックアップされるのを回避できます。

このスイッチを含めることにより、以下の利点があります。

- VSS によってすでにバックアップされているファイルのバックアップを回避できます。
- 従来のバックアップから一部のファイルが除外されるため、従来のバックアップで処理されるファイル数が減り、処理時間を短縮できます。
- グループとして処理する必要のあるファイルに関する問題が発生しないので、バックアップの成功率が向上します。

接尾辞「off」は、このオプションがデフォルトではオンですが、ユーザがこの接尾辞を含めると、オプションがオフに設定されることを示します。

-vss_exclsexclsoff

ライタで除外されたファイルを、ファイル システム バックアップから除外するように指定します。これにより、コンポーネントによるバックアップから除去されたファイルが、従来のファイル システム バックアップによってバックアップされないようになります。

接尾辞「**off**」は、このオプションがデフォルトではオンですが、ユーザがこの接尾辞を含めると、オプションがオフに設定されることを示します。

-vss_onfail

コンポーネントファイルがライタのバックアップに失敗すると、バックアップを中止するように指定します。これにより、コンポーネントのバックアップのいずれかが失敗した場合は、ライタのバックアップをキャンセルします。コンポーネントのバックアップは、そのコンポーネントに含まれるファイルが 1 つでも正常にバックアップされなかった場合に失敗します。

このスイッチを含めると、バックアップの整合性が保たれ、ライタに関連付けられているコンポーネントの数に関係なく、ライタに関連付けられているすべてのファイルがバックアップされてはじめてバックアップが成功したとみなされます。

グローバル フィルタ オプション

フィルタを使用すると、特定のファイルやディレクトリをバックアップ ジョブから除外したり組み込んだりできます。フィルタを使用することで、目的のファイルを絞り込むことができます。フィルタには、ジョブ全体に適用されるグローバル フィルタ、特定のノードに適用されるノードレベル フィルタ、または特定のファイル システムに適用されるボリュームレベル フィルタがあります。適用されるフィルタのレベルは、`ca_backup` コマンド内での `-filter` スイッチの位置によって決定されます。

重要: フィルタを誤って使用すると、データがバックアップされない可能性があります。フィルタを指定または適用する場合は注意してください。

ca_backup コマンドには、以下のフィルタ オプションが含まれます。

ca_backup [-filter

[<include|exclude> <file|dir> <pattern>]]

[<include|exclude> [<attribute> [hidden] [readonly] [system] [archive]]]

[<include|exclude> [<date> <modify|create|access> <onorbefore|onorafter
<mm/dd/yy[yy]>]]

[<include|exclude> [<date> <modify|create|access> <between <mm/dd/yy[yy]>
<mm/dd/yy[yy]>]]

[<include|exclude> [<date> <modify|create|access> <within <count>
days|months|years>]]

[<include|exclude> [<size> <equalto|greaterthan|lessthan> <size val>
<Bytes|KBytes|MBytes|GBytes>]]

[<include|exclude> [<size between <<low size val> <Bytes|KBytes|MBytes|GBytes>>
<<high size val> <Bytes|KBytes|MBytes|GBytes>]]

include

結果には、フィルタの条件を満たすファイルのみが含まれます。たとえば、ローカル ハード ディスクドライブ全体のバックアップを選択して、¥SYSTEM ディレクトリ内のファイルを組み込むようフィルタを設定した場合を考えられます。この場合、¥SYSTEM ディレクトリ内のファイルのみが CA ARCserve Backup によってバックアップされます。それ以外のディレクトリにあるファイルはバックアップされません。

exclude

除外は常に組み込みに優先します。たとえば、フィルタを追加して、拡張子が .exe のファイルを組み込み、さらにもう 1 つフィルタを追加して、¥SYSTEM ディレクトリを対象から除外するよう設定すると、¥SYSTEM ディレクトリに保存されている拡張子 .exe のファイルは、すべて除外されます。

file|dir <pattern>

指定したパターンに基づいて、ファイルまたはディレクトリを組み込むか除外するかを指定します。

注: ディレクトリを組み込むパターンフィルタを選択して、絶対パスを指定しない場合、ユーザが指定した条件に一致しないすべての空のディレクトリがバックアップされます。リストア時に空のディレクトリが作成されることを防ぐには、リストア ジョブを作成するときにグローバル リストア オプションの[空のディレクトリを作成する]を無効にします。

attribute [hidden] [readonly] [system] [archive]

指定したファイル属性を持つファイルを組み込むか、または除外するかを指定します。

date <modify|create|access> <onorbefore|-onorafter <mm/dd/yy[yy]>>

指定した日付以前/以後に更新、変更、またはアクセスされたファイルを組み込むか、除外するかを指定します。

date <modify|create|access> <between <mm/dd/yy[yy]> <mm/dd/yy[yy]>>

指定した 2 つの日付の間に更新、状態変更、またはアクセスされたファイルを組み込むか、除外するかを指定します。

date <modify|create|access> <within <count> days|months|years>

指定された日数、月数、または年数以内で最後に更新、状態変更、またはアクセスされたファイルを組み込むか、除外するかを指定します。

size <equalto|greaterthan|lessthan> <size val/> <Bytes|KBytes|MBytes|GBytes>

指定されたサイズ「に等しい」、「より大きい」、「より小さい」ファイルを組み込むか、除外するかを指定します。

size between <<low size val> <Bytes|KBytes|MBytes|GBytes>> <<high size val>
<Bytes|KBytes|MBytes|GBytes>>

指定されたサイズの範囲内にあるファイルを組み込むか、除外するかを指定します。

注: グローバルフィルタオプションでは、以下のような条件があります。

- UNIX サーバの場合、CA ARCserve Backup は「-create」コマンドをファイルの変更日を指定しているものと自動的に解釈します。
- 更新時刻は、状態変更時刻とは異なります。更新時刻とは、ファイルの内容が変更された時刻のことです。状態変更時刻とは、ファイルのプロパティまたは属性が変更(権限や所有者情報の変更など)された時刻のことであり、内容が変更された時刻ではありません。
- ファイル システムによっては状態変更日やアクセス日が記録されないため、これらのグローバルフィルタがジョブに使用できない場合があります。
- CA ARCserve Backup では、組み込みおよび除外フィルタにワイルドカード文字であるアスタリスク「*」と疑問符「?」をサポートします。アスタリスクのワイルドカードは、任意の数の文字と一致するように指示します。疑問符のワイルドカードは、任意の一文字と一致するように指示します。

例:

- 拡張子「tmp」を持つすべてのファイルを組み込む/除外するには、以下を実行します。

```
-filter include/exclude file *.tmp
```

- パターン「a01???'」に一致するすべてのディレクトリを組み込む/除外するには、以下を実行します。

```
-filter include/exclude dir a01???
```

ソース引数

`ca_backup` ソース引数によって、バックアップを行うパスまたはロケーションを指定できます。

`ca_backup` コマンドは、以下のソース引数を提供します。

```
ca_backup -source [<hostname>[<hostIP>]] [node options] -filesystem <filesystem>
[<relative directory>] [-inputfile <file name>] [volume options]
```

```
ca_backup -source [<hostname>[<hostIP>]] [node options] [-fsfile <file name>]
```

```
host type: unix|nt|nwagent|ntagent|w95agent|mac
```

Windows での使用法は以下のとおりです。

```
ca_backup -source [<hostname>[<hostIP>]<hosttype>] [node options] -filesystem
<filesystem> | <folder path> [-filelist <file list>] [volume options]
```

UNIX での使用法は以下のとおりです。

```
ca_backup -source [<hostname>[<hostIP>]<hosttype>] [node options] -filesystem
<filesystem> [<realtive directory>] [-filelist <file list>] [volume options]
```

Raw デバイス特有のバックアップ(*UNIX* のみ)は以下のとおりです。

```
ca_backup -source [<hostname>[<hostIP>]] [node options] -raw <raw device> [volume
options]
```

VSS 特有のバックアップは以下のとおりです。

```
ca_backup -source [-vss <vsswriter path> [-vsswriter [-transport
[retainshadowcopy]] [-excludedefincludedinthis] [-erroronceffail]]] [-method
<full|incr|diff|copy|log>]
```

データベース バックアップ(*UNIX* のみ)は以下のとおりです。

```
ca_backup -source [<hostname>[<hostIP>]] [node options] -database <dbase type>
<dbase name|SQL server> [<tablespaces>] [dbase options]
```

-source [*<hostname>* [*<hostIP>*]]

バックアップするソース マシンを指定します。 *hostname* の指定がない場合、デフォルトのマシンがローカル マシンになります。このスイッチは、**ca_backup** コマンド内で複数回指定できます。バックアップするソース マシンごとに必ず指定してください。他のスイッチを指定せずに **-source** スイッチを使用すると、デフォルトではソース マシン全体がバックアップされます。

注: **-source** にはマシンのホスト名のみを指定できます。このホスト名には、使用しているネットワークで解決できるものを指定する必要があります。

-filesystem *<filesystem name>* *<relative directory>* *<folder path>*

バックアップするファイル システムまたはフォルダを指定します。オプションで、そのファイル システムに含まれるディレクトリも指定できます。このスイッチは、**ca_backup** コマンド内で複数回指定できます。バックアップするファイル システムごとに必ず指定してください。

注: Windows NT では、名前に空白文字が含まれるフォルダやファイルをバックアップする場合に、名前を引用符で囲む必要があります。

-filelist *<file list>*

バックアップするファイルを個別に指定します。 **-filesystem** スイッチと共に使用します。

-inputfile *<file name>*

バックアップするファイルのリストを含むファイル名を渡すために使用します。このスイッチを **-filelist <file list>** の代わりとして使用できます。また、**-source** および **-filesystem** オプションと共に使用することもできます。

-fsfile *<file name>*

バックアップするファイル システムのリストを含む外部テキストファイルからの入力を指定します。以下の情報を定義することで、バックアップの詳細レベルを指定できます。

- バックアップするファイル システム
- バックアップするファイル システムの関連ディレクトリ
- ターゲットのファイル システム内で使用するファイルを指定する **-filelist** オプションとファイル名
- 別の外部ファイルからファイルを追加する **-inputfile** オプションとファイル名

以下の構文を使用して実行します。

```
[filesystem name] [relative_dir][-filelist <file1><file2>][-inputfile <file name>]
```

-raw <raw device>

バックアップする raw デバイスを指定します。

注: この引数は、UNIX および Linux プラットフォームのみに適用されます。

-username <user name>

バックアップするソース マシンのユーザ名を指定します。ここで指定したユーザ名は、ソース マシンにログインするために使用されます。

-password <password>

ソース マシンへのログインに使用されるユーザのパスワードを指定します。

注: リリース r16 以降、バックアップ ジョブは自動的に ASDB から直接ユーザ認証情報を取得します。その結果、この **password** パラメータを指定する必要はなくなります。

ca_backup コマンドライン ユーティリティは、バックアップ ソースをさらに識別し検索するために、以下のオプションもサポートします。

- ノード オプション
- ボリューム設定オプション
- データベース オプション

ノード オプション

バックアップするホスト(ノード)を選択する際に、ノードレベルのオプションおよび適用されるフィルタを設定し、ノードレベルの情報を表示できます。

`ca_backup` コマンドには、以下のノード オプションが含まれます。

`ca_backup`

```
[-username <username>]
[-password <password>]
[-noestimation]
[-filter <node filters>]
```

(UNIX および Linux のみ)

```
[-traversesymLink]
[-traversenfs]
[-resetaccesstime <on|off>]
[-acrossfs]
```

-username <user name>

バックアップするソース マシンのユーザ名を指定します。ここで指定したユーザ名は、ソース マシンにログインするために使用されます。

注: `ca_backup` を使用する場合、バックアップ ソース マシンに関係なく、`-username` を指定する必要があります。

-password <password>

ソース マシンへのログインに使用されるユーザのパスワードを指定します。

注: `ca_backup` を使用する場合、バックアップ ソースに関係なく、`-password` を指定する必要があります。

-noestimation

バックアップの前に行われるファイル サイズの推定を無効にします。

-filter <node filters>

ノードレベルで(特定のノードへ)フィルタを適用します。適用されるフィルタのレベルは、`ca_backup` コマンド内での `-filter` スイッチの位置によって決定されます。

-traversesymlink

バックアップ中にシンボリック リンクをトラバースし、リンクそのものだけでなく、リンクがポイントする実際のファイルをバックアップします。

注: このオプションは、UNIX および Linux にのみ適用されます。

-traversenfs

マウントされている NFS ファイル システムをバックアップ中にトラバースします。デフォルトでは、マウントされているファイル システムは、バックアップ中にスキップされます

注: このオプションは、UNIX および Linux にのみ適用されます。

-resetaccesstime <on|off>

CA ARCserve Backup がバックアップ実行のためにファイルにアクセスした際に変更されるファイル アクセス時刻をリセットするかどうかを指定します。

注: このオプションは、UNIX および Linux にのみ適用されます。

-acrossfs

バックアップ中にファイル システムをトラバースします。

注: このオプションは、UNIX および Linux にのみ適用されます。

ボリューム設定

バックアップするボリューム オブジェクトを選択する際に、ボリュームレベルのオプションおよび適用されるフィルタを設定し、ボリューム関連の情報を表示できます。

ca_backup コマンドには、以下のボリューム設定オプションが含まれます。

ca_backup

```
[-volscan | -volcompare]
[-volgroomdisable]
[-volsessionpw <session password>]
[-volencryption <encryption key>]
[-volcompression]
[-filter <volume filters>]
```

(UNIX のみ)

```
[-priority <priority level>]
```

-volscan

ファイル システム(ボリューム)のバックアップの整合性を検証します。バックアップ メディアをスキャンして各ファイルのヘッダをチェックします。ヘッダが読み取り可能な場合、データは信頼できるものとみなされます。

-volcompare

ファイル システム(ボリューム)のバックアップの整合性を検証します。バックアップ メディアからデータブロックを読み出し、その内容をソースマシン上のソースファイルと1バイトずつ比較します。

-volsessionpw <session password>

ファイルシステム(ボリューム)のバックアップを含むテープのセッションにセッションパスワードを適用します。

このオプションを使用してバックアップされたセッションをリストアするには、**ca_restore -tapesessionpw** オプションを使用してリストア ジョブを実行する必要があります。

-volencryption <encryption key>

バックアップ前にファイルを暗号化します。このセッションに含まれる暗号化されたファイルをリストアするには、パスワードを入力する必要があります。

-volcompression

このファイル システム(ボリューム)のみ、ファイルを圧縮してからバックアップを実行します。

-filter <volume filters>

ボリュームレベルで(特定のファイルシステムに)フィルタを適用します。適用されるフィルタのレベルは、**ca_backup** コマンド内での **-filter** スイッチの位置によって決定されます。

-priority <priority level>

ジョブに含まれるノード/ボリュームにバックアップの優先順位を割り当てます。優先順位の範囲は1(最高)～255(最低)です。

注: このオプションは、UNIX および Linux にのみ適用されます。

データベースの操作オプション

バックアップするデータベース オブジェクトを選択する際に、一部のデータベース固有のオプションが適用されるように設定し、データベース関連の情報を表示できます。

注: CA ARCserve Backup は、すべてのデータベースエージェントに対しては、単一のコマンドによる複数のデータベース/アプリケーション インスタンスのバックアップをサポートしていません。複数のコマンドを使用してインスタンスごとにバックアップする必要があります。

ca_backup コマンドには、以下のデータベース オプションが含まれます。

ca_backup

```
[-dbusername <database username>]  
[-dbpassword <database password>]  
-database <database type> [database name]
```

-dbusername <database username>

バックアップするデータベースにログインするためのデータベース ユーザ名を指定します。

-dbpassword <database password>

バックアップするデータベースにログインするためのデータベース ユーザのパスワードを指定します。

`-database <database type> [database name]`

バックアップされる データベースのタイプと名前を指定します。

サポートされている有効なデータベースタイプは、

- SQL Server (SQL)
- Exchange DOC Level (EXCHANGEDOC)
- Exchange DB Level (EXCHANGEDB)
- Sybase (SYBASE)
- Informix (INFORMIX)
- Oracle (ORACLE)
- Oracle RMAN (ORACLERMAN)
- Lotus (LOTUS)

例:

```
-database SQL
-database EXCHANGEDOC
-database EXCHANGEDB
-database SYBASE
-database INFORMIX
-database ORACLE
-database ORACLERMAN
-database LOTUS
```

Oracle データベース オプション

ca_backup コマンドには、以下の Oracle データベース オプションが含まれます。

```
[-oracle_sid <Oracle SID>]
[-oracle_offline] (UNIX Oracle エージェントのみ)
[-oracle_purgelog] (UNIX Oracle エージェントのみ)
[-oracle_timefinder] (UNIX Oracle エージェントのみ)
```

注: ca_backup データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド ca_backup allusage を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

注: CA ARCserve Backup CLI (コマンドライン インターフェース) を使用する場合、名前に DBCS (2 バイト文字セット) または MBCS (マルチバイト文字セット) が使用されている Oracle オブジェクトをバックアップまたはリストアするには、CA ARCserve Backup サーバとエージェント ボックスの言語設定が同じであることを確認する必要があります。

-oracle_sid <Oracle SID>

バックアップする Oracle データベースの Oracle SID (システム識別子) を指定します。

-oracle_offline

Oracle データベースをオフライン モードでバックアップするように指定します (データベースのフル バックアップのみサポート)。

-oracle_purgelog

ログのバックアップ後にログをパージします。

-oracle_timefinder

データベースのバックアップに Symmetrix の Timefinder オプションを使用するかどうかを指定します。このオプションでは、データベースのミラー イメージが一時的に作成され、そのミラー イメージをエージェントがバックアップします。

例:

ca_backup の ORACLE データベース コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下のコマンドは、単一の表領域 tbs1 をバックアップします。

```
ca_backup -source [<hostname>[<hostIP>][<hosttype>]] -database ORACLE <instance name> "tbs1" [dbase options]
```

- 以下のコマンドは、複数の表領域 tbs1、tbs2、および tbs3 をバックアップします。

```
ca_backup -source [<hostname>[<hostIP>][<hosttype>]] -database ORACLE <instance name> "tbs1" "tbs2" "tbs3" [dbase options]
```

- 以下のコマンドは、表領域の単一のファイルをバックアップします。

```
ca_backup -source [<hostname> [<hostIP>][<hosttype>]]unix -database ORACLE <instance name> -table SYSAUX  
"|u01|app|oracle|product|10.1.0|db_1|oradata|dborcl|sysaux01.dbf" -dbusername system -dbpassword manager -username root -password caworld
```

- 以下のコマンドは、制御ファイルをバックアップします。

```
ca_backup -source [<hostname>[<hostIP>][<hosttype>]] -database ORACLE <instance name> "CONTROL FILE" [dbase options]
```

- 以下のコマンドは、アーカイブ ログをバックアップします。

```
ca_backup -source [<hostname>[<hostIP>][<hosttype>]] -database ORACLE <instance name> "ARCHIVE LOG" [dbase options]
```

- 以下のコマンドは、制御ファイルおよびアーカイブ ログをバックアップします。

```
ca_backup -source [<hostname>[<hostIP>][<hosttype>]] -database ORACLE <instance name> "CONTROL FILE" "ARCHIVE LOG" -dbusername system -dbpassword system -username root -password caworld
```

- 以下のコマンドは、データベースのフル バックアップを行います。データベースに 5 つの表領域 (tbs1、tbs2、tbs3、tbs4、tbs5) があり、フル データベース バックアップを行うと仮定します。これらすべての表領域、アーカイブ ログ、および制御ファイルをバックアップする場合があります。

```
ca_backup -source [<hostname>[<hostIP>][<hosttype>]] -database ORACLE <instance name> "tbs1" "tbs2" "tbs3" "tbs4" "tbs5" "CONTROL FILE" "ARCHIVE LOG" [dbase options]
```

Oracle RMAN データベース オプション

`ca_backup` コマンドには、以下の Oracle RMAN データベース オプションが含まれます。

```
-use_rmancat  
[-rman_catdbname <rman_catdbname>]  
[-rman_catuser <rman_catuser>]  
[-rman_catpassword <rman_catpassword>]  
-bkincremental  
[-rman_incrementallevel <bkincremental> [-cumulative]  
[-bkrecoveryarea  
[-oracle_offline]  
[-oracle_purgelog]  
[-rman_numberofchannels <rman_numberofchannels>]  
[-rman_archlogsel  
al_all | al_pattern -rman_alpattern <rman_alpattern> |  
al_time [-rman_alfromtime <rman_alfromtime>] [rman_aluntiltime  
<rman_aluntiltime>] |  
al_scn [-rman_alfromscn <rman_alfromscn>] [-rman_aluntilscn <rman_aluntilscn>]  
|  
al_logseq [-rman_alfromlogseq <rman_alfromlogseq>] [rman_aluntillogseq  
<rman_aluntillogseq>]  
[-rman_althread <rman_althread>]]  
[-rman_bakpieceprefix <rman_bakpieceprefix>]  
[-rman_bakpiecesuffix <rman_bakpiecesuffix>]  
[-rman_bakpiecesize <rman_bakpiecesize>]  
[-rman_baksetsize <rman_baksetsize>]  
[-rman_blocksize <rman_blocksize>]  
[-rman_readrate <rman_readrate>]  
[-rman_maxopenfile <rman_maxopenfile>]  
[-rman_numcopies <rman_numcopies>]  
[-rman_numfilesperbakset <rman_numfilesperbakset>]  
[-rman_baktag <rman_baktag>]  
[-rman_script <rman_script>]
```

注: `ca_backup` データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド `ca_backup allusage` を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

注: CA ARCserve Backup CLI (コマンドライン インターフェース) を使用する場合、名前に DBCS (2 バイト文字セット) または MBCS (マルチバイト文字セット) が使用されている Oracle オブジェクトをバックアップまたはリストアするには、CA ARCserve Backup サーバとエージェント ボックスの言語設定が同じであることを確認する必要があります。

-use_rmancat

カタログを使用します(推奨)。操作に RMAN カタログを使用するかどうかを指定します。常に RMAN カタログを使用することをお勧めします。カタログを使用しない場合、RMAN はデータベース制御ファイルを使用するためです。この制御ファイルが失われると、RMAN がデータベースをリストアできなくなります。

デフォルト: オン

-rman_catdbname <rman_catdbname>

このスイッチはリカバリ カタログ データベースで Oracle RMAN `ca_backup` ジョブを実行しようとした場合にのみ、カタログ データベース名を含めるために使用されます。

デフォルト: 空白

-rman_catuser <rman_catuser>

RMAN カタログを所有する Oracle ユーザの名前。

-rman_catpassword <rman_catpassword>

RMAN カタログを所有するユーザのパスワード。

-bkincremental

これは、フル バックアップ オプションの代わりに選択できる値です。以下に説明されている増分レベル オプションと累積オプションに応じて、最後に行われたバックアップ以降にバックアップされていないデータブロックのみを送るように、RMAN に指示します。このオプションはバックアップ マネージャ内でラジオ ボタンによって表され、デフォルトで選択されていません。当然ながら、増分バックアップをフル バックアップと一緒に選択することはできません。バックアップされる Oracle オブジェクトが制御ファイルやアーカイブ ログである場合は、このオプションを使用できません。

-rman_incrementallevel <bkincremental>

このオプションを使用すると、実行される増分バックアップのレベルを指定できます。RMAN は、指定されたレベル以下の最後の増分バックアップ以降に変更されたデータブロックのみをバックアップします。このフィールドに入力できる値は、Oracle 8、8i、および 9i の場合で 0~4 です。Oracle 10g では、レベルは 0 と 1 のみに限定されます。ユーザがこのフィールドにデータを入力できるのは、増分バックアップ オプションが選択されている場合だけです。

デフォルト: 0(フル バックアップ)

-cumulative

このオプションは、レベル n-1 以下で行われた最後の増分バックアップ以降に使用されたデータブロックを送るように指定します。このオプションは、バックアップ マネージャ内でチェック ボックスによって表されます。

デフォルト: オフ

-bkrecoveryarea

このスイッチを使用すると、バックアップされるオブジェクトのリストに Oracle リカバリ領域を含めることができます。Oracle 10g 以降にのみ適用されます。

デフォルト: オフ

-oracle_offline

Oracle データベースをバックアップする場合にのみ使用します。オフラインモードで Oracle データベースをバックアップします。表領域はバックアップしません。

-oracle_purgeolog

Oracle データベースをバックアップする場合にのみ使用します。ログのバックアップ後にログをパージします。

-rman_numberofchannels <rman_numberofchannels>

このオプションを使用すると、バックアップ操作を実行するために RMAN によって割り当てられるチャンネルの数を指定できます。RMAN は同時に複数のジョブ (各チャンネルにつき 1 つ) をサブミットします。

デフォルト: 1 チャンネル

-rman_archlogsel

バックアップ マネージャ GUI の [ソース] パネルに「アーカイブ ログ」オブジェクトが含まれている場合は、このパネルの [アーカイブ ログの選択] セクションでバックアップするアーカイブ ログを選択できます。選択内容はラジオ ボタン オプションによって示されます。[すべて] は、すべてのアーカイブ ログをバックアップします。

デフォルト: すべて

-rman_alpattern <rman_alpattern>

アーカイブ ログをその名前に基づいて選択するための文字列パターン。

-rman_alfromtime <rman_alfromtime>

このオプションを使用すると、バックアップされるアーカイブ ログをその作成時刻に基づいて選択できます。このフィールドは、アーカイブ ログを選択する際の時刻下限を指定します。この時刻以降に作成されたアーカイブ ログのみがバックアップされます。

-rman_aluntiltime <rman_aluntiltime>

このオプションを使用すると、バックアップされるアーカイブ ログをその作成時刻に基づいて選択できます。このフィールドは、アーカイブ ログを選択する際の時刻上限を指定します。この時刻以前に作成されたアーカイブ ログのみがバックアップされます。

-rman_alfromscn <rman_alfromscn>

このオプションを使用すると、バックアップされるアーカイブ ログの範囲を時刻ではなく SCN (システム変更番号) によって指定できます。このフィールドは、アーカイブ ログを選択する際の SCN 下限を示します。このフィールドは、「SCN 上限」フィールドが空白でない場合に空白にできます。

-rman_aluntilscn <rman_aluntilscn>

このオプションを使用すると、バックアップされるアーカイブ ログの範囲を時刻ではなく SCN (システム変更番号) によって指定できます。このフィールドは、アーカイブ ログを選択する際の SCN 上限を指定します。このフィールドは、ユーザが「SCN 下限」フィールドに値を入力した場合はオプションとなります。

-rman_alfromlogseq <rman_alfromlogseq>

このオプションを使用すると、アーカイブ ログのシーケンス番号に基づいてアーカイブ ログを選択できます。このフィールドは、バックアップするアーカイブ ログを決定するための最小のログ シーケンス番号に対応します。このフィールドは、[ログ シーケンスの終了]オプション (-rman_aluntillogseq) に値が入力されている場合のみ空白にできます。

-rman_aluntillogseq <rman_aluntillogseq>

このオプションを使用すると、アーカイブ ログのシーケンス番号に基づいてアーカイブ ログを選択できます。このフィールドには、選択するアーカイブ ログのシーケンス番号の上限を指定します。このフィールドへの値の入力は、ユーザが「ログ シーケンス下限」フィールドに値を入力した場合はオプションとなります。

-rman_althread <rman_althread>

このオプションを使用すると、アーカイブ ログを生成した Oracle サーバを識別するスレッド番号を指定できます。このパラメータは、以下で説明されている「時刻ベース」オプション、「SCN ベース」オプション、または「ログシーケンスベース」オプションと組み合わせて使用されます。このオプションは、「すべて」オプションまたは「パターンベース」オプションが使用されている場合は無視されます。

デフォルト: 1

注: この値は OPS (Oracle Parallel Server、Oracle 8 と 8i の場合) または RAC (Real Application Cluster、Oracle 9i と 10g の場合) でのみ使用され、それ以外の場合、スレッド番号は常に 1 です。

-rman_bakpieceprefix <rman_bakpieceprefix>

バックアップ ピースフォーマットのエントリの左部分 (または接頭辞)。

-rman_bakpiecesuffix <rman_bakpiecesuffix>

バックアップ ピースフォーマットのエントリの右部分 (または接尾辞)。

-rman_bakpiecesize <rman_bakpiecesize>

このオプションを使用すると、RMAN によって生成されるバックアップ ピースのサイズを制限できます。このオプションを設定すると、バックアップされるデータブロックが単一のバックアップ ピースに収まらない場合に、RMAN はすべてのデータを格納するために必要なだけの数のバックアップ ピースを生成します。デフォルトで、フィールドは空白になります。つまり RMAN は、通常は 1 つのバックアップ コマンド (1 つのチャンネルにつき) からのデータを単一のバックアップ ピースに入れます。

デフォルト: 空白

-rman_baksetsize <rman_baksetsize>

このオプションを使用すると、バックアップ セットに格納するデータ量を制限できます。このコマンドは、バックアップ セットが保有できる最大サイズ (単位は KB) を指定します。

デフォルト: 空白

-rman_blocksize <rman_blocksize>

このオプションを使用すると、バックアップの実行時に RMAN が Oracle エージェントに送るデータブロックのサイズを指定できます。このフィールドは、デフォルトで空白になります。値を入力した場合、ユーザはこのバックアップからリストアするときと同じブロックサイズを入力する必要があります。さもないと RMAN は、バックアップでのブロックサイズとリストアでのブロックサイズが一致していないことを示すエラーメッセージを生成します。その場合、バックアップ時に使用された値がエラーメッセージに表示されます。値が入力されない場合、RMAN は Oracle 8 または 8i では 64 KB を使用し、Oracle 9i では 256 KB を使用します。

このパラメータは Oracle 10g では廃止されました。

デフォルト: 空白

-rman_readrate <rman_readrate>

これはパフォーマンス調整オプションです。このオプションを使用すると、競合を回避するために、RMAN がハードディスクからデータを読み取る速度を遅くできます。デフォルトでは空白になりますが、このオプションを設定する場合、その値は RMAN がディスクからデータを読み取るために 1 秒あたりに使用できるバッファの最大数を表します。バッファのサイズは $DB_BLOCKSIZE * DB_FILE_DIRECT_IO_COUNT$ 値に対応します。これは、Oracle データベース構成に定義されているパラメータです。

デフォルト: 空白

-rman_maxopenfile <rman_maxopenfile>

このオプションを使用すると、RMAN が同時に開くファイルの総数を制限できます。このコマンドにより、「開いているファイルが多すぎる」エラーの可能性を減らすことができます。フィールドを空白にすると、RMAN はデフォルト値を使用します。

デフォルト: 8 ファイル (Oracle 10g 用)

デフォルト: 32 ファイル (Oracle 8、8i、および 9i 用)

-rman_numcopies <rman_numcopies>

このオプションを使用すると、RMAN によってバックアップピースのコピーがいくつ生成されるかを指定できます。このパラメータに使用できる値は 1~4 です。

Oracle 8.0 はこのパラメータをサポートしていません。

デフォルト: 1 コピー

`-rman_numfilesperbakset <rman_numfilesperbakset>`

このオプションを使用すると、RMAN がバックアップ セットあたりに格納するファイル(バックアップ ピース)の数を制限できます。指定されていない場合、RMAN は、入力ファイル数をチャンネル数で割った値と 64 のうちの小さい方を使用します。

デフォルト: 空白

`-rman_baktag <rman_baktag>`

このオプションを使用すると、「タグ」と呼ばれるバックアップ識別子を入力できます。その後、このタグを使用して、リストア操作中に Oracle オブジェクトのどのバージョンを RMAN で使用するかを指定できます。

`-rman_script <rman_script>`

このオプションを使用すると、RMAN スクリプトのパスを入力できます。このフィールドに値を入力すると、Oracle エージェントはユーザが GUI に入力したその他すべてのオプションを無視します。スクリプトはそのまま RMAN に渡され、Oracle エージェントは通常どおりバックアップ操作を実行します。

Exchange DOC レベル データベース オプション

`ca_backup` コマンドには、以下の Exchange DOC レベル データベース オプションが含まれます。

注: このデータベース オプションは Exchange 2003 以前のみで使用できます。Exchange 2007 または Exchange 2010 ではサポートされていません。

`ca_backup`

```
[-exsis_glosch | [-exsis_full | -exsis_diff | -exsis_incr | -exsis_timebased  
[onorafter|onorbefore date <mm/dd/yy> | days <daysprior>] [expurge]]]  
  
[-exsisfilter mailbox <Pattern List>]  
  
[-exsisfilter folder <Pattern List> [-defaultfolder  
<[Calendar][Contacts][DeletedItems][Drafts][Inbox][Journal][Notes][OutBox][Se  
ntItems][Tasks]>]]  
  
[-exsisfilter attachment <Pattern List> [-attsizeexclude <size>]]
```

注: `ca_backup` データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド `ca_backup allusage` を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

-exsis_glosch

グローバル スケジュールされたバックアップ方式を使用するように指定します。

-exsis_full

フル バックアップを実行するように指定します (メール ボックス全体をバックアップ)。

-exsis_diff

差分バックアップを実行するように指定します (最後のフル バックアップから変更された部分のみをバックアップ)。

-exsis_incr

増分バックアップを実行するように指定します (最後のバックアップから変更された部分のみをバックアップ)。

-exsis_timebased

時間単位のバックアップを実行するように指定します。

従属オプションを選択して、時間単位のバックアップをスケジュールできます。

[onorafter|onorbefore date <mm/dd/yyyy>]

指定した日付に基づいて時間単位のバックアップを実行するように指定します。このオプションは、特定の日時よりも前または後のすべてのドキュメントをバックアップします。

[days <daysprior>]

ジョブ実行までの日数に基づいて時間単位のバックアップを実行するように指定します。このオプションは、ジョブ実行までの日数に基づいてすべてのドキュメントをバックアップし、この日数にはジョブの実行日までの残存日数が表示され、この値が毎日変化します。

expurge

バックアップ後にドキュメントをパージするように指定します。ドキュメントは、バックアップ後に自動的に削除されます。これは、Exchange Server の廃棄処理に便利です。たとえば、このオプションを使用すると、3 年を過ぎたドキュメントをバックアップおよび削除することができます。したがって、Exchange Server のサイズが抑えられます。

重要: このオプションは、バックアップされたすべてのドキュメントが削除されるので、慎重に使用する必要があります。

-exsisfilter mailbox <Pattern List>

適用されるフィルタが、除外するメールボックスの名前、またはエージェントがそのメールボックスを除外するのに使用する基準 (パターンリスト) に基づくように指定します。

-exisfilter folder <Pattern List>

適用されるフィルタが、除外するフォルダの名前、またはエージェントがそのフォルダを除外するのに使用する基準(パターンリスト)に基づくように指定します。

-defaultfolder

適用されたフィルタからデフォルト フォルダを除外するように指定します。デフォルトフォルダを除外する場合は、除外するフォルダ タイプを少なくとも 1 つ指定する必要がありますが、複数指定してもかまいません。

デフォルトフォルダ オプションには以下のものが含まれます。

- Calendar
- Contacts
- DeletedItems
- Drafts
- Inbox
- Journal
- Notes
- OutBox
- SentItems
- Tasks

-exisfilter attachment <Pattern List>

適用されるフィルタが、除外する添付ファイルの名前、またはエージェントがその添付ファイルを除外するのに使用する基準(パターンリスト)に基づくように指定します。

-attsizeexclude <size>

指定したサイズよりも大きな添付ファイルを除外するように指定します。

Exchange DB レベル データベース オプション

`ca_backup` コマンドには、以下の Exchange DB レベル データベース オプションが含まれます。

注: このデータベース オプションは Exchange 2003 以前のみで使用できます。Exchange 2007 または Exchange 2010 ではサポートされていません。

```
ca_backup [-exdb_glosch | [-exdb_full | -exdb_copy | -exdb_incr | -exdb_diff]
```

注: `ca_backup` データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド `ca_backup allusage` を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

-exdb_glosch

グローバル スケジュールされたバックアップ方式を使用するように指定します。

-exdb_full

フルバックアップを実行するように指定します(メール ボックス全体をバックアップ)。

-exdb_copy

フルバックアップを実行し、ログ ファイルをパージしないように指定します。

-exdb_incr

増分バックアップを実行するように指定します(最後のバックアップ以降に変更された部分のみをバックアップ)。

-exdb_diff

差分バックアップを実行するように指定します(最後のフル バックアップから変更された部分のみをバックアップ)。

SQL Server データベース オプション

ca_backup コマンドには、以下の SQL Server 特有のオプションが含まれます。

```
ca_backup -source [<hostname>]
           [node options]
           <-database SQL <instance name>>
           [[<dbase name>] [dbase options]]
           [-sql_np]
           [dbaccess options]
```

注: ca_backup データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド ca_backup allusage を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

-sql_np

リモートプロトコルとして「名前付きパイプ」を指定します。名前付きパイプによって、関連のないプロセスが互いに通信できるようになります。この名前付きパイプは、オペレーティング システムおよび他のプログラムが、プロセス間通信および単一のマシン内部またはネットワークにわたって情報を交換するための手段として使用する名前付きパイプと同様の仕組みを持っています。

dbase オプション

検出された SQL Server エージェントのタイプ向けに利用可能な特定のデータベース オプションを提供します。

dbaccess オプション

検出された SQL Server エージェントのタイプで利用可能な特定のデータベース アクセス オプションを提供します。

SQLServer エージェント オプション

ca_backup コマンドには、以下の SQLServer エージェント オプションが含まれます。

ca_backup

```
[-sql_full | -sql_diff | -sql_log <trunc|no_trunc|no_recovery>]
[-sql_log_afterdata <trunc|no_trunc|no_recovery>][-sql_partial]
[-sql_filegroup <filegroupname> [-sql_file
<filename1>]...[-sql_file<filenamen>]]...
[-sql_dbcc [sql_before [continue]] [sql_after] [physical_only] [no_indexes]]
[-sql_checksum]
```

注: ca_backup データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド ca_backup allusage を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

-sql_full

SQLServer のフル バックアップを実行するように指定します。

-sql_diff

SQLServer の差分バックアップを実行するように指定します。

-sql_log

トランザクション ログのバックアップを実行するように指定します。

trunc

トランザクション ログのバックアップ後、それらを切り捨てるように指定します。このオプションは、トランザクション ログから非アクティブなエントリのすべてを削除します。トランザクション ログを切り捨てないと、サイズが大きくなる可能性があります。

no_trunc

トランザクション ログのバックアップ後、それらを切り捨てないように指定します。このオプションは、トランザクション ログから非アクティブなエントリを削除しません。

no_recovery

ログの末尾をバックアップし、データベースはロード状態にするように指定します。

ログの末尾とは、ログの最も古い内容のことです。

-sql_log_afterdata

データベースの後にトランザクション ログをバックアップするように指定します。

-sql_partial

部分バックアップを実行するように指定します。

-sql_filegroup <filegroupname>

バックアップされる、セッション内のファイルグループを指定します。

-sql_file <file name>

バックアップされる、セッション内のファイルを指定します。

-sql_dbcc

データベースの整合性チェック(DBCC)を実行するように指定します。

sql_before [continue]

データベースのバックアップ前に、DBCC を実行するように指定します。

DBCC が失敗してもバックアップを続行するように指定することもできます。

sql_after

データベースのバックアップ後に、DBCC を実行するように指定します。

physical_only

データベース内のすべてのオブジェクトの構造上の整合性をチェックするために、データベースの物理的な整合性のみをチェックするように指定します。

no_indexes

ユーザ定義のテーブル用インデックスをチェックせずに、データベースの整合性をチェックするように指定します。

-sql_checksum

バックアップ時に SQL Server が生成するチェックサムを含めるように指定します。

例:

ca_backup の SQL Server データベースコマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下のコマンドは、データベース全体をバックアップします。
-database SQL <instance name> <dbase name> -sql_full
- 以下のコマンドは、データベースの差分をバックアップします。
-database SQL <instance name> <dbase name> -sql_diff
- 以下のコマンドは、ファイルまたはファイル グループのデータベースをバックアップします。
-database SQL <instance name> <dbase name> -sql_filegroup [-sql_file <file name>...]
- 以下のコマンドは、データベースのログをバックアップします。
-database SQL <instance name> <dbase name> -sql_log[trunc|no_trunc|no_recovery]

Sybase エージェント データベース オプション

ca_backup コマンドには、以下の Sybase データベース オプションが含まれます。

```
ca_backup [-sybase_database|-sybase_transactionlog trunc|-sybase_transactionlog no_trunc ]
```

注: ca_backup データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド `ca_backup allusage` を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

-sybase_database

Sybase データベースのデータをバックアップするように指定します。

-sybase_transactionlog trunc

バックアップ時にトランザクション ログを切り捨てるように指定します。

トランザクション ログのサイズを減らすために、バックアップ時にトランザクション ログを切り捨てることもできます。切り捨てずにトランザクション ログをバックアップすると、トランザクション ログのバックアップが実行される時に、前回バックアップしたログから現時点のログまでがバックアップされます。バックアップされるログ ファイルには、アクティブな部分とアクティブではない部分があります。バックアップ時にログの切り捨てを選択すると、エージェントはログの非アクティブな部分を削除し、最も古いオープントランザクションを含んだログのアクティブな部分の始めまでログを切り捨てます。

デフォルトでは、このオプションが選択されています。

-sybase_transactionlog no_trunc

バックアップ時にトランザクション ログを切り捨てないように指定します。

例:

ca_backup の SYBASE データベース コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下のコマンドは、データベース データをバックアップします。
-database SYBASE <instance> <database> -sybase_database
- 以下のコマンドは、バックアップ中のトランザクション ログを切り捨てます。
-database SYBASE <instance> <database> -sybase_transactionlog trunc
- バックアップ中のトランザクション ログを切り捨てないようにするには、以下のコマンドを使用します。
-database SYBASE <instance> <database> -sybase_transactionlog no_trunc

Informix エージェント データベース オプション

`ca_backup` コマンドには、以下の Informix データベース オプションが含まれます。

`ca_backup`

```
[-ifmx_level <level (0-2)>]  
[-ifmx_currentLog | -ifmx_salvageLogs]
```

注: `ca_backup` データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド `ca_backup allusage` を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

`-ifmx_level <level (0-2)>`

実行されるバックアップのレベルを指定します。

- レベル 0 - フル バックアップ
 - レベル 1 - 最後にレベル 0 のバックアップ以降の変更をバックアップ
 - レベル 2 - 最後にレベル 1 のバックアップ以降の変更をバックアップ
- デフォルトでは、エージェントはレベル 0 のバックアップを実行します。

`-ifmx_currentLog`

現在のアクティブな論理ログ、およびバックアップされなかった他の論理ログ全体をバックアップするように指定します。

`-ifmx_salvageLogs`

ディスク上にある論理ログをすべてバックアップするように指定します。

例:

`ca_backup` の Informix データベース コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下のコマンドは、`dbspace` をバックアップします。
`-database INFORMIX <instance name> <dbspace name> -ifmx_level <0-2>`
- 以下のコマンドは、論理ログ (現在のログを含む) をバックアップします。
`-database INFORMIX <instance name> #LOGFILE# -ifmx_currentLog`
- 以下のコマンドは、サルベージ ログをバックアップします。
`-database INFORMIX <instance name> #LOGFILE# -ifmx_salvageLogs`

VSS エージェント データベース オプション

`ca_backup` コマンドには、以下の VSS (Volume Shadow Copy Service) エージェント データベース オプションが含まれます。

```
ca_backup -vss <vss_path>  
  
    [-vss_writer  
    [-transport [retainshadowcopy]]  
    [-excludedefincludedinthis]  
    [-excludedefexcludedbythis]  
    [-erroronceffail]  
    [-method <FULL|INCR|DIFF|COPY|LOG>]]
```

-vss <vss_path>

ライターレベルで設定したバックアップ オプションは、現在選択しているライター のみに反映され、これらは VSS バックアップのどのグローバル オプションよりも優先されるように指定します。バックアップするファイル システムのパスの場所を入力する必要があります。

-vss_writer

ライター オプションを使用するように指定します。選択したライターが提供するオプションを、VSS バックアップ プロセスが使用するようになり、その他のバックアップ オプションが有効になります。

-transport [retainshadowcopy]

トランスポータブル スナップショットを使用するように指定します。ボリューム全体のトランスポータブル VSS バックアップ コピーを作成します。このシャドウ コピーは LUN 全体のミラーリングですが、データは LUN の特定のボリュームでリストア可能です。転送可能なシャドウ コピーを作成すると、同じシステム内の他のサーバにシャドウ コピーをインポートできるため、より柔軟にクリティカルなアプリケーションやファイルをバックアップおよびリストアできるようになります。その後、転送したシャドウ コピー ボリュームを追加テープ バックアップやデータ マイニング、ソフトウェア開発のテストなどの他の用途に使用できます。

デフォルトでは、シャドウ コピーはバックアップが完了すると削除されます。バックアップ後もシャドウ コピーを保持するには、「retainshadowcopy」従属オプションも含める必要があります。

注: このオプションを含めた場合、使用可能なバックアップ方式はフル バックアップのみです。

retainshadowcopy

バックアップ後もシャドウ コピーを保持するように指定します。このオプションを含めると、バックアップ後に CA ARCserve Backup によってシャドウ コピー ボリュームが削除されないように指定します。シャドウ コピー ボリュームは転送可能なので、バックアップ後も保持することによって、ボリュームを別の用途で他のシステムにインポートすることができます。

-excludeincludedinthis

このライタに組み込まれたファイルをすべてのファイル システム バックアップから除外するように指定します。このオプションを選択すると、ライタのコンポーネントに属するファイルが従来のファイル システム バックアップによってバックアップされるのを回避できます。このオプションには以下の利点があります。

- VSS によってすでにバックアップされているファイルのバックアップを回避できます。
- 従来のバックアップからファイルを除外すると、処理するファイル数が減り、従来のバックアップの処理時間を短縮できます。
- グループとして処理するファイル(データベース アプリケーションに関連付けられたファイルなど)に関する問題が発生しないので、バックアップの成功率が向上します。従来のバックアップには、ファイルをまとめて処理するメカニズムはありません。

注: このオプションは、[トランスポータブル スナップショットを使用する]オプションが含まれる場合は使用できません。

-excludeexcludedbythis

このライタで特に除外されたファイルをファイル システム バックアップから除外するように指定します。このオプションを含めると、バックアップすべきではないアプリケーション関連ファイル (Windows のページファイルなど) を、ファイル システム バックアップから除外できます。各ライタは、関連付けられているアプリケーションにこのようなファイルが存在するかどうかを認識しています。このオプションを選択すると、CA ARCserve Backup が従来のバックアップを実行する際に、この情報を利用できます。

注: このオプションは、[トランスポートブル スナップショットを使用する] オプションが含まれる場合は使用できません。

-erroronceffail

このライタで 1 つ以上のコンポーネントファイルのバックアップに失敗した場合、全体のライタ バックアップを中止するように指定します。このオプションを含めると、コンポーネントのいずれかのバックアップが失敗した場合、選択したライタのバックアップをキャンセルします。コンポーネントに含まれる 1 つ以上のファイルを正常にバックアップできない場合、そのコンポーネントのバックアップは失敗します。

このオプションを含めると、ライタに関連付けられているコンポーネントの数に関係なく、ライタに関連付けられているすべてのファイルがバックアップされて初めてバックアップが成功したとみなされるようになります。

注: このオプションは、[トランスポートブル スナップショットを使用する] オプションが含まれる場合は使用できません。

-method <FULL|INCR|DIFF|COPY|LOG>

選択したライタのバックアップで使用するバックアップ方式を指定します。

FULL

データの最終変更日時に関係なく、選択したライタに関連付けられているすべてのファイルのフル バックアップを実行するように指定します。

-transport スナップショット オプションが選択されている場合は、これが唯一利用可能なバックアップ方式です。

INCR

前回のフル バックアップまたは増分バックアップ以後に変更があったファイルのみの増分バックアップを実行するように指定します。各バックアップ後に、バックアップ ファイルはマークされ、変更されない限りは次の増分バックアップ ジョブでバックアップされないようになります。この方法を使用したバックアップ ジョブの処理には通常より時間がかかりません。

DIFF

前回のフルバックアップ以後に変更があったファイルのみ差分バックアップを実行するように指定します。差分バックアップジョブは、バックアップされたとしてファイルをマークしないため、最後の差分ジョブでバックアップされたファイルが再度バックアップされます。この方法を使用したバックアップジョブの処理には通常より時間がかかります。

COPY

ライタに含まれるすべてのファイルをバックアップしますが、ファイルはバックアップ済みとはマークされないように指定します。このオプションを選択すると、既存の増分バックアップまたは差分バックアップを壊さずにデータのフルバックアップを作成できます。

LOG

選択したライタに関連付けられているログファイルのみをバックアップするように指定します。

Lotus エージェント データベース オプション

`ca_backup` コマンドには、以下の Lotus エージェント データベース オプションが含まれます。

```
ca_backup -source [<hostname> [<hostIP>]] [node options]
           -database LOTUS <LotusInstance_HostName> [<Lotus_DBFileName>]
           [-lotusfilter <include|exclude> <file|dir <pattern>>]
           [dbase options]
```

注: `ca_backup` データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド `ca_backup allusage` を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

LotusInstance_HostName

Lotus Domino がインストールされているホスト名を指定します。

Lotus_DBFileName

バックアップされる Lotus データベースのファイル名を指定します。

`-lotusfilter <include|exclude> <file|dir <pattern>>`

バックアップ ジョブに適用されるフィルタを指定します。これらのフィルタを使用すると、特定のファイルやディレクトリをバックアップ ジョブから除外したり組み込んだりできます。

デスティネーション引数

バックアップ デスティネーションとは、選択されたバックアップ ファイルのバックアップ先となる場所です。バックアップするオブジェクトを選択したら、バックアップ ジョブに使用するデスティネーションおよびデスティネーション引数を選択する必要があります。

ca_backup コマンドには、以下のデスティネーション引数が含まれます。

ca_backup

```
[-group <groupname>]
[-tape <tape name>]
[-mediapool <pool name>]
[-multiplextape [<num of steams (1-32)>]-muxChunkSize <size in MB (1-16)>]
[-multistream [<max streams (1-32)>]
[-dddpurgedata [<full|diff|incr> <weeks> <days> <hours> <minutes>]]
```

-group <groupname>

バックアップ ジョブで使用するメディア グループを指定します。

-tape <tape name>

バックアップ ジョブで使用するメディアの名前を指定します。

-mediapool <pool name>

バックアップ ジョブで使用するメディア プールを指定します。

注: ターゲットグループがデデュプリケーショングループであるか、またはステー징グループがデデュプリケーショングループである場合は、-mediapool スイッチを含めることはできません。

-multiplextape [<num of steams (1-32)>]

マルチプレキシング オプションを適用してバックアップ ジョブをサブミットするように指定します。

マルチプレキシングとは、複数のソースから取得されたデータが、同じメディアに同時に書き込まれるプロセスのことです。複数のソースが指定されたジョブを、マルチプレキシング オプションを有効にした状態でサブミットした場合、このジョブは複数の子ジョブに分割されます(各ソースにつき1つの子ジョブ)。これらの子ジョブにより、データが同じメディアに同時に書き込まれます。

マルチプレキシング機能を使用する場合は、同一のテープに同時に書き込み可能な最大ストリーム数を選択することができます。デフォルトのストリーム数は4であり、サポートされている範囲は1～32です。

-muxChunkSize <size in mB (1-16)>

マルチプレキシングのチャンク サイズを設定するように指定します。このチャンク サイズ値により、別のセッションがマルチプレキシングされるまで1回のセッションで連続して書き込まれるデータの量が決定されます。この値が大きいほど、一部のドライブではリストアが高速になりますが、バックアップ時に使用されるメモリサイズが増大します。

デフォルトの値は1 MBで、サポートされている範囲は1～16 MBです。

-multistream [<max streams(1-32)>]

マルチ ストリーミング オプションを適用してバックアップ ジョブをサブミットするように指定します。

マルチ ストリーミングでは、システムで利用可能なすべてのテープ デバイスを使用して、単一のバックアップ ジョブを複数のジョブに分割できます。その結果、順番に処理したときと比較して、バックアップ全体のスループットが向上します。

マルチストリーミングを使用すると、テープに同時に書き込み可能な最大ストリーム数を選択できます。デフォルトのストリーム数は4であり、サポートされている範囲は1～32です。

`-dddpurgedata [<full|diff|incr> <weeks> <days> <hours> <minutes>]`

指定したバックアップ方式(フル、差分、または増分)に対するデデュープリケーション デバイスのパージ ポリシーを、ステージングしないジョブで使用するデデュープリケーション デバイスに追加するように指定します。

`<weeks> <days> <hours> <minutes>`

デバイスのパージを開始するまでの時間(週、日、時間、分)を指定します。

スケジュール引数

`ca_backup` コマンドは、バックアップ ジョブ用のスケジュール方式を指定する手段を提供します。選択した方式によって、バックアップを実行する日時、特定の日に実行されるバックアップのタイプ、およびバックアップ メディアのローテーションが決まります。選択可能な 3 つのスケジュール方法には、カスタム スケジュール、ローテーション スケジュール、および GFS ローテーション スケジュールがあります。

以下の `ca_backup` スケジュール引数では、「`incr`」は増分バックアップを示し、「`diff`」は差分バックアップを示します。

注: `ca_backup` コマンドがサブミットしたジョブが、スケジュールされた時刻よりも 1 時間遅れで実行される場合、夏時間 (DST) の開始日における変更が原因の可能性もあります。これを避けるには、Microsoft の夏時間用のパッチをインストールしてオペレーティング システムを更新する必要があります。詳細については、「[Microsoft Daylight Saving Time Help and Support Center](#)」を参照してください。

`ca_backup` コマンドには、以下のスケジュール引数が含まれます。

カスタム スケジュール

`ca_backup` コマンドには、以下のフィルタ オプションが含まれます。

```
ca_backup [-custom
  -repeat <months> <days> <hours> <minutes>]
  -exclueday <Sun|Mon|Tue|Wed|Thu|Fri|Sat>[*]
  -method <incr|diff|full-clear|full-keep>]
  -retrymissed_at <hh:mm:ss>|-retrymissed_after <minutes> [-retrymissed_maxtimes
<count>]]
  -worm]
```

-custom

バックアップ ジョブのスケジュール タイプをカスタム スケジュールとして指定します。デフォルトでは、バックアップ ジョブに使用されるスケジュール タイプは、このカスタム スケジュールです。

-repeat <months> <days> <hours> <minutes>

-custom と共に使用します。バックアップ ジョブの繰り返し間隔を指定します。デフォルトでは、繰り返しの間隔はなく、ジョブは 1 度だけ実行されます。繰り返し間隔を指定すると、ジョブはここで指定された分/時間/日/月ごとに実行されます。このコマンドの構文では、月、日、時間、および分の各フィールドに値を指定する必要があります。

例: 繰り返しジョブを 26 時間ごと(1 日に 2 時間を足す)に実行するようにスケジュールするには、「`ca_backup -custom -repeat 0 1 2 0`」と入力します。

-excludeday <Sun|Mon|Tue|Wed| Thu|Fri|Sat>

-custom と共に使用し、指定された日に繰り返しバックアップ ジョブを実行しないようにします。

-method <incr|diff|full-clear|full-keep>

カスタム スケジュールのバックアップ ジョブ方式を指定します。

incr

増分バックアップを実行するように指定します。

最後のフル バックアップまたは増分バックアップの実行後にアーカイブ ビットが設定されたファイルのみをバックアップします。各バックアップ後に、アーカイブ ビットは次の増分バックアップ ジョブ中にバックアップされないよう再設定されます。

diff

差分バックアップを実行するように指定します。

最後のフル バックアップの実行後にアーカイブ ビットが設定されたファイルのみをバックアップします。差分バックアップ ジョブはファイルのアーカイブ ビットをクリアしないので、前回の差分ジョブにおいてバックアップされたファイルも再びバックアップされます。このバックアップ方式を使用した場合、増分バックアップよりもバックアップの処理に多くの時間がかかります。しかし、マシンをリストアするために必要なメディアの数が少なくすむため、サーバやワークステーションをリストアするにはこちらの方が適しています。

full-clear

ジョブが繰り返されるたびにフル バックアップが実行され、アーカイブ ビットがクリアされるように指定します。

full-keep

ジョブが繰り返されるたびにフル バックアップが実行され、アーカイブ ビットが維持されるように指定します。

-retention <days>

作成されたメディア プールに対するメディアの保存期間を日単位で指定します。

-retrymissed_at <hh:mm:ss>

指定された時間に失敗したターゲットのバックアップまたはコピーを行います。ファイルがそれでも使用できない場合、CA ARCserve Backup はその情報をアクティビティログに記録し、ジョブの結果は[未完了]となります。

-retrymissed_after <minutes>

他のソースファイルのバックアップがすべて終了した後で、指定した間隔(分)で失敗したターゲットのバックアップまたはコピーを行います。ファイルがそれでも使用できない場合、CA ARCserve Backup はその情報をアクティビティログに記録し、ジョブの結果は[未完了]となります。

-retrymissed_maxtimes <count>

ファイルのバックアップまたはコピーを再試行する回数を指定します。

-worm

WORM (Write Once Read Many) オプションを使用して、すべてのカスタムスケジュールルールに対してメディア データ保護を適用します。このオプションを有効化すると、CA ARCserve Backup はバックアップ セッションをメディア上の既存のデータの最後に追加します。これは、WORM メディアを上書きまたは消去できないためです。

重要: CA ARCserve Backup は、マルチプレキシング バックアップ ジョブでの WORM メディアの使用をサポートしていません。このため、デスティネーション オプションとして **-multiplextape** スイッチを含める場合は、**-worm** スケジュール オプションが無効化されます。

注:

- バックアップ ジョブがテープにスパンされ、メディアが WORM メディアである場合は、ジョブを完了するためには、CA ARCserve Backup は WORM メディアを必要とします。
 - 空の WORM メディアが利用できない場合で、空の DLT WORM 対応メディアが利用できる場合、CA ARCserve Backup は、自動的に空の DLT メディアを DLT WORM メディアに変換し、バックアップ ジョブを完了させます。
 - WORM メディアが WORM ジョブの続行に利用できない場合でも、CA ARCserve Backup は、空でないメディアを WORM メディアに変換することはありません。
- [WORM メディアを使用]を指定したバックアップ ジョブを実行しているときに、利用できる WORM メディアがない場合は、CA ARCserve Backup はジョブの実行のために空の WORM 対応メディアを WORM メディアに変換する場合があります。

ローテーション スケジュール

`ca_backup` コマンドには、以下の ローテーション スケジュール オプションが含まれます。

```
ca_backup [-rotation
  -mediapool <mediapool name>]
  -jobunit <full|diff|incr|off> <append|overwrite> <media name>[ds]]
  -saveunit <no. of tapes>]
  -retention <days>]
  -retrymissed_at <hh:mm:ss>|-retrymissed_after <minutes> [-retrymissed_maxtimes
  <count>]]
  -exception <full|diff|incr|off> <append|overwrite> <mm/dd/yy[yy]>]
  -method <incr|diff|full>]
  -worm]
```

`-rotation`

バックアップ ジョブのスケジュール タイプをローテーション スケジュールとして指定します。

`-mediapool <mediapool name>`

バックアップ ジョブに使用するメディア プールを指定します。このスイッチは `-rotation` または `-custom` と共に使用する必要があります。

- このスイッチを `-rotation` と共に使用すると、入力するメディア プール名が新たに作成され、このローテーション ジョブに関連付けられます。
- このスイッチを `-custom` と共に使用する場合は、すでに存在するメディア プール名を入力する必要があります。

注: ターゲットグループがデデュプリケーショングループであるか、またはステージンググループがデデュプリケーショングループである場合は、`-mediapool` スイッチを含めることはできません。

-jobunit <full|diff|incr|off> <append|overwrite> <media name> [ds]

各ジョブ単位は、日曜日から土曜日までのローテーションスキーマの曜日を表します。同じローテーションスケジュール内で差分バックアップと増分バックアップを併用できないなど、一定の制約はありますが、各曜日をカスタマイズすることができます。**-jobunit** スイッチは、最初が日曜日、次は月曜日、以下、順次各曜日に関連付けられます。1 週間の各曜日分のスイッチはユーザが指定します。つまり、7 つの **-jobunit** スイッチが必要になります。デフォルトでは、**-jobunit** スイッチで表されていない曜日は、すべてオフ日に設定され、その日のバックアップは行われません。**-jobunit** スイッチを指定せず、週 5 日の増分バックアップと金曜日のフルバックアップを組み合わせるデフォルトのローテーションスケジュールを設定することもできます。このスケジュールは、フロントエンドのバックアップマネージャに表示されるものと同じです。

ds

ローテーションジョブまたは GFS ローテーションジョブの日次バックアップのステージングを有効化します。

ca_backup -diskstage コマンドによって開始されたローテーションジョブでは、ディスクステージング機能を有効にするには、各ジョブ単位にパラメータ「**ds**」を含む必要があります。「**ds**」パラメータを含めないと、バックアップセッションのデータはステージングデバイスに送信されません。

例えば、「**my_jobs**」を毎週月曜日に実行するフルディスクステージングバックアップジョブをスケジュールするには、以下のコマンドを使用します。

```
-jobunit off -jobunit full overwrite my_job ds -jobunit off -jobunit off
-jobunit off -jobunit off -jobunit off
```

注: 各ジョブ単位は、日曜日から土曜日までのローテーションスキーマの曜日を表します。

-saveaset <number of tapes>

-rotation と共に使用します。作成されたメディアプールの保存セットに保存するメディア数の最小値を指定します。

-retention <days>

作成されたメディアプールに対するメディアの保存期間を日単位で指定します。

`-retrymissed_at <hh:mm:ss>`

指定された時間に失敗したターゲットのバックアップまたはコピーを行います。ファイルがそれでも使用できない場合、CA ARCserve Backup はその情報をアクティビティログに記録し、ジョブの結果は[未完了]となります。

`-retrymissed_after <minutes>`

他のソースファイルのバックアップがすべて終了した後で、指定した間隔(分)で失敗したターゲットのバックアップまたはコピーを行います。ファイルがそれでも使用できない場合、CA ARCserve Backup はその情報をアクティビティログに記録し、ジョブの結果は[未完了]となります。

`-retrymissed_maxtimes <count>`

ファイルのバックアップまたはコピーを再試行する回数を指定します。
回数オプションに利用可能な範囲は、1 から 12 回です。

`-exception <full|diff|incr|off> <append|overwrite> <mm/dd/yy[yy]>`

通常のローテーションスケジュールにおいて例外となる条件を指定します。祝日やその他の事情で、特定の日にバックアップジョブに通常と異なる動作をさせる必要がある場合に便利な機能です。

`-method <incr|diff|full>`

スケジュール バックアップ ジョブの方式を指定します。

`incr`

スケジュール増分バックアップを実行するように指定します。

`diff`

スケジュール差分バックアップを実行するように指定します。

`full`

スケジュールフルバックアップを実行するように指定します。

-worm

WORM (Write Once Read Many) オプションを使用して、すべてのローテーション スケジュール ルールに対してメディア データ保護を適用します。このオプションを有効化すると、CA ARCserve Backup はバックアップ セッションをメディア上の既存のデータの最後に追加します。これは、WORM メディアを上書きまたは消去できないためです。

重要: CA ARCserve Backup は、マルチプレキシング バックアップ ジョブでの WORM メディアの使用をサポートしていません。このため、デスティネーション オプションとして **-multiplextape** スイッチを含める場合は、**-worm** スケジュール オプションが無効化されます。

注:

- バックアップ ジョブがテープにスパンされ、メディアが WORM メディアである場合は、ジョブを完了するためには、CA ARCserve Backup は WORM メディアを必要とします。
 - 空の WORM メディアが利用できない場合で、空の DLT WORM 対応メディアが利用できる場合、CA ARCserve Backup は、自動的に空の DLT メディアを DLT WORM メディアに変換し、バックアップ ジョブを完了させます。
 - WORM メディアが WORM ジョブの続行に利用できない場合でも、CA ARCserve Backup は、空でないメディアを WORM メディアに変換することはありません。
- [WORM メディアを使用]を指定したバックアップ ジョブを実行しているときに、利用できる WORM メディアがない場合は、CA ARCserve Backup はジョブの実行のために空の WORM 対応メディアを WORM メディアに変換する場合があります。

GFS ローテーション スケジュール

`ca_backup` コマンドには、以下の GFS ローテーション スケジュール オプションが含まれます。

```
ca_backup [-gfsrotation
  -mpoolprefix <mediapool prefix>]
  -jobunit <full|diff|incr|off>[ds]]
  -preservedaily <no. of tapes>]
  -preserveweekly <no. of tapes>]
  -preservemonthly <no. of tapes>]
  -retrymissed_at <hh:mm:ss>|-retrymissed_after <minutes> [-retrymissed_maxtimes
  <count>]]
  -exception <full|diff|incr|off> <mm/dd/yy[yy]>]
  -method <incr|diff|full>]
  -worm [daily] [weekly] [monthly]]
```

-gfsrotation

バックアップ ジョブのスケジュール タイプとして、GFS (Grandfather、Father、Son) ローテーション スケジュールを指定します。

-mpoolprefix <mediapool prefix>

-gfsrotation と共に使用します。GFS ローテーション ジョブで作成されて、そのスケジュールに関連付けられる 3 種類のメディア プール (日単位、週単位、月単位) を指定するためのプレフィックスとして使用されます。

例: プレフィックスが「GFSJOB1」の場合は、次の 3 つのプールが作成されます。GFSJOB1_DLY、GFSJOB1_WLY、GFSJOB1_MLY。

注: ターゲットグループがデデュプリケーショングループであるか、またはステー징グループがデデュプリケーショングループである場合は、-mpoolprefix スイッチを含めることはできません。

-jobunit <full|diff|incr|off>

ローテーション スケジュールの指定の場合と同じです。ただし、GFS ローテーションの場合、引数は選択された日に行われるバックアップのタイプを指定するものに限定されます。

-preservedaily <no. of tapes>

-gfsrotation と共に使用して、日単位のメディア プールの保存セットに保存するメディア数の最小値を指定します。

-preserveweekly <no. of tapes>

-gfsrotation と共に使用して、週単位のメディア プールの保存セットに保存するメディア数の最小値を指定します。

-preservemonthly <no. of tapes>

-gfsrotation と共に使用して、月単位のメディア プールの保存セットに保存するメディア数の最小値を指定します。

-retrymissed_at <hh:mm:ss>

指定された時間に失敗したターゲットのバックアップまたはコピーを行います。ファイルがそれでも使用できない場合、CA ARCserve Backup はその情報をアクティビティログに記録し、ジョブの結果は[未完了]となります。

-retrymissed_after <minutes>

他のソース ファイルのバックアップがすべて終了した後で、指定した間隔 (分) で失敗したターゲットのバックアップまたはコピーを行います。ファイルがそれでも使用できない場合、CA ARCserve Backup はその情報をアクティビティログに記録し、ジョブの結果は[未完了]となります。

-retrymissed_maxtimes <count>

ファイルのバックアップまたはコピーを再試行する回数を指定します。

回数オプションに利用可能な範囲は、1 から 12 回です。

-exception <full|diff|incr|off> <mm/dd/yy[yy]>

ローテーション スケジュールの指定の場合と同じです。ただし、GFS ローテーションの場合、引数は除外日に行われるバックアップのタイプを指定するものに限定されます。

-method <incr|diff|full>

スケジュール GFS ローテーション バックアップ ジョブの方式を指定します。

incr

スケジュール増分バックアップを実行するように指定します。

diff

スケジュール差分バックアップを実行するように指定します。

full

スケジュールフル バックアップを実行するように指定します。

-worm [daily] [weekly] [monthly]

WORM (Write Once Read Many) オプションを使用して、すべての GFS ローテーション スケジュール ルールに対してメディア データ保護を適用します。このオプションを有効化すると、CA ARCserve Backup はバックアップ セッションをメディア上の既存のデータの最後に追加します。これは、WORM メディアを上書きまたは消去できないためです。このオプションを有効にすると、WORM メディア オプションを日次、週次、月次の GFS ローテーション ジョブに適用することも指定できます。

重要: CA ARCserve Backup は、マルチプレキシング バックアップ ジョブでの WORM メディアの使用をサポートしていません。このため、デスティネーション オプションとして **-multipletape** スイッチを含める場合は、**-worm** スケジュール オプションが無効化されます。

注:

- バックアップ ジョブがテープにスパンされ、メディアが WORM メディアである場合は、ジョブを完了するためには、CA ARCserve Backup は WORM メディアを必要とします。
 - 空の WORM メディアが利用できない場合で、空の DLT WORM 対応メディアが利用できる場合、CA ARCserve Backup は、自動的に空の DLT メディアを DLT WORM メディアに変換し、バックアップ ジョブを完了させます。
 - WORM メディアが WORM ジョブの続行に利用できない場合でも、CA ARCserve Backup は、空でないメディアを WORM メディアに変換することはありません。
- [WORM メディアを使用]を指定したバックアップ ジョブを実行しているときに、利用できる WORM メディアがない場合は、CA ARCserve Backup はジョブの実行のために空の WORM 対応メディアを WORM メディアに変換する場合があります。

ジョブ実行引数

`ca_backup` コマンドは、ジョブ実行引数を提供しており、これを使用してバックアップ ジョブにジョブ実行の方法を指定できます。`ca_backup` のジョブ実行オプションを使用すると、バックアップ ジョブをサブミットして即座に実行したり、ホールド状態のジョブをサブミットしたり、または後の日時で実行するようにジョブをスケジュールすることができます。選択した方式によって、バックアップを実行する日時が決まります。

重要: すべてのジョブがスケジュール時間どおりに開始するようにするには、メンバ サーバのシステム時間と対応するプライマリ サーバのシステム時間とを同期させる必要があります。**Windows Time Service** を使用して、ドメイン内のすべての **ARCserve** サーバ上の時刻を同期します。

`ca_backup` コマンドには、以下のジョブ実行引数が含まれます。

```
ca_backup
  [-at <hh:mm>]
  [-on <mm/dd/yy[yy]>]
  [-hold | -runjobnow]
  [-description <description string>]
```

-at <hh:mm>

バックアップ ジョブの実行時刻を指定します。

注: CA ARCserve Backup のジョブのすべての時刻は、CA ARCserve Backup サーバの所在地のタイムゾーンに基づいてスケジュール設定されます。エージェント マシンが CA ARCserve Backup サーバとは異なるタイムゾーンにある場合、ジョブを実行する現地時間を計算する必要があります。

-on <mm/dd/yy[yy]>

バックアップ ジョブの実行日を指定します。

-hold

バックアップ ジョブをホールド状態でサブミットします。

-runjobnow

バックアップ ジョブを即座にサブミットし、実行します。

`-description <description string>`

ジョブにコメントを追加します。

注: 文字列に空白文字が含まれる場合は、文字列を二重引用符(" ")で囲む必要があります。

ステージング オプション

`ca_backup` ステージング コマンドは、ステージング領域へデータをバックアップし、そのデータを最終的なデスティネーション (通常はテープ) へマイグレート (またはコピー) する方法を 2 つ提供します。

- `-diskstage` コマンドは、ディスクをステージング領域として使用し、一般的に **Backup to Disk to Tape** または **B2D2T** オプションと呼ばれます。
- `-tapestage` コマンドは、テープ ライブラリまたは仮想テープ ライブラリをステージング領域として使用し、一般的に **Backup to Tape to Tape** または **B2T2T** オプションと呼ばれます。

それぞれのステージング コマンドには、バックアップ プロセス時に **CA ARCserve Backup** の動作を制御する特定のオプションが含まれています。

Disk Staging Option

`ca_backup -diskstage` コマンドは、ディスク(ステージング領域)にデータをバックアップし、その後、選択したポリシー オプションに基づいて、最終的なデスティネーション(テープ、ディスクなど)にマイグレート(コピー)したり、指定時間を経過したデータをステージング領域からパージしたりできます。必要に応じて、ステージング領域から直接データをリストアすることもできます。

注: CA ARCserve Backup は、以下のエラー状態がある場合に、ステージングバックアップ ジョブを実行しません。

- **GROUP NAME** が「*」、NULL、または有効なグループ名でもステージンググループではない場合は、CA ARCserve Backup が有効なディスク ステージング **GROUP NAME** を提供するよう要求します。
- 有効なライセンスがなく、最大 2 つのストリームを超える入力を試みた場合。
- コピー ポリシーと **-DONOTCOPY** が指定された場合。
- マルチ ストリーミングまたはマルチプレキシングがディスク ステージング ジョブで指定されている場合。CA ARCserve Backup がディスク ステージングバックアップ ジョブでサポートするのは、マルチ ストリーミングのみです。
- 最終のデスティネーション デバイスグループが、ディスク ステージング デバイスグループである場合。

`ca_backup -diskstage` コマンドは、以下のような形式です。

```
ca_backup -diskstage
[Miscellaneous Options]
[Full Backup Policy]
[Incremental/Differential Backup Policy]
```

ディスク ステージングのその他のオプション

`ca_backup -diskstage` コマンドには、CA ARCserve Backup がディスク ステージング バックアップ ジョブ中に使用する基本ポリシーおよびパラメータを定義するのに使用されるその他のオプションが含まれます。

`ca_backup -diskstage` コマンドには、以下のその他のオプションが含まれます。

`ca_backup -diskstage <groupname>`

```
[ -maxstreams <Max # Streams(1-32)> ]
[ -chunksize <size in MB(1-16)> ]
[ -purgefailedsessions ]
[ -purgecancelledsessions ]
[ -makeupjobtotape ]
[ -createDMJMakeupJobOnHold ]
[ -leaveCatalogsOnDisk ]
[ -consolidate
  [ -consolidate_mediaprefix <media prefix> ]
  [ -consolidate_mediapoolprefix <mediapool prefix> ]
  [ -consolidate_copymethod <append|overwrite> ] ]
```

`-diskstage <groupname>`

ステージング機能を使用するバックアップ ジョブとディスク ステージング デバイス グループの名前を指定します。

`-maxStreams <Max # Streams(1-32)>`

ステージング デバイスに対してバックアップ ジョブを実行する際に CA ARCserve Backup が使用するストリームの数を指定します。

デフォルトのストリーム数は 4 であり、サポートされている範囲は 1 ~ 32 です。

`-chunksize <size in MB(1-16)>`

ステージング バックアップ中、CA ARCserve Backup がデータを小さいチャンク(サブ ジョブ)に分割して、ディスクに書き込むように指示します。各データの最大サイズまたはデータ量(MB 単位)を指定する必要があります。

デフォルトのチャンク サイズは 1 MB で、1 ~ 16 MB の範囲がサポートされています。

-purgefailedsessions

ディスクへのバックアップ(ステージング)中にセッションが失敗した場合、CA ARCserve Backup は、すぐにこのセッションを削除対象(ディスクからパージされる)としてマークするように指示されます。これにより、ディスク領域が速やかに開放されます。

-purgecancelledsessions

ディスクへのバックアップ(ステージング)中にセッションがキャンセルされた場合、CA ARCserve Backup は、すぐにこのセッションを削除対象(ディスクからパージされる)としてマークするように指示されます。これにより、ディスク領域が速やかに開放されます。

-makeupjobtotape

ディスクへのバックアップ(ステージング)処理中に、ディスクに空領域がないためエラーが発生すると、メイクアップ ジョブが作成され、メイクアップ ジョブの実行時に、バックアップが最終的なデスティネーション メディア(テープ)に直接書き込まれます。これにより、ディスクに空がない場合でも、バックアップが成功する確率が高くなります。

-createdmjmakeupjobonhold

データマイグレーションジョブ(DMJ)の実行時に、メディアまたはテープドライブでエラーが発生した場合、ホールド状態で、メイクアップジョブが自動的に作成されます。結果として、テープコピージョブを作成する必要がなくなります。ドライブまたはメディアのエラーの修正後、マイグレーションプロセス(ディスクからテープへ)を実行するには、メイクアップジョブのステータスをホールドからレディに変更する必要があります。

-leaveCatalogsOnDisk

CA ARCserve Backup に、カタログファイルをディスク上に残すように指示します。このオプションは、CATALOG.DB ディレクトリ内のステージング デバイス上にカタログファイルを保存するために使用します。

-migrationpassword <password>

マイグレーションパスワードを設定し、CA ARCserve Backup がマイグレーション(コピー)プロセス中にデータを暗号化するように指示します。マイグレーションを安全に行うには、パスワードを指定する必要があります。

注: ジョブのバックアップ プロセス中にデータが暗号化された場合は、CA ARCserve Backup はジョブのマイグレーション プロセスでデータを再度暗号化しようとはしません。

-consolidate

マイグレーション(コピー)プロセス中に、異なるバックアップ ジョブからのデータを、1つのテープに統合します。これにより、データがコピーされる際にテープの使用領域を最適化できます。

従属パラメータスイッチを指定して、データ統合を制御できます。統合されるデータについては、これらのパラメータのうち少なくとも1つを選択する必要がありますが、データ統合をさらに制御するために複数のパラメータを選択することができます。ただし、パラメータを複数含める場合は、指定されたこれらのパラメータすべてが、統合されるジョブに対して満たされる必要があります。従属パラメータを1つも含めない場合は、データが統合されることはありません。

さらに、複数のジョブ間でデータを同じテープに統合するには、バックアップ ジョブが同じマシン上で実行される必要があります。

注: -DO NOT COPY が含まれる場合、このオプションを使用できません。

[-consolidate_mediaprefix <media prefix>]

マイグレーションに使用する、指定したメディア プレフィックスに基づいてデータを統合します。これにより、CA ARCserve Backup がマイグレーションプロセス中に、統合を行うのに選択できるメディアグループ(プレフィックスに基づく)を指定できます。メディア プレフィックスのすべてが、指定したメディア接頭辞と異なる場合は、これらのジョブのデータは統合されません。

[-consolidate_mediapoolprefix <mediapool prefix>]

マイグレーションに使用する、指定したメディアプールに基づいてデータを統合します。これにより、CA ARCserve Backup がマイグレーションプロセス中に、統合を行うのに選択できるメディアグループ(メディアプールプレフィックスに基づく)を指定できます。メディアプールプレフィックスのすべてが、指定したメディアプールプレフィックスと異なる場合は、これらのジョブのデータは統合されません。

[-consolidate_copymethod <append|overwrite>]

CA ARCserve Backup が統合されたデータをデスティネーション テープへ追加するか、デスティネーション テープを上書きするかを指定します。

追加を指定すると、統合されたデータは、バックアップ サイクルの初日にフォーマットされた既存のテープに追加されます。

上書きを指定すると、毎日新しいテープがフォーマットされ、統合されたデータは、そのテープに追加されます。毎日大量のデータをバックアップする場合は、この方式が推奨されます。

上書き方式を指定することの利点は、毎日新しいテープが使用され、以前のテープをオフサイトに搬送できるという点です。

統合方式を指定しない場合、追加方式がデフォルトで選択されます。

ディスク ステージング フル バックアップ オプション

`ca_backup -diskstage` コマンドには、CA ARCserve Backup がディスク ステージング フル バックアップ ジョブ中に使用するオプションおよびパラメータを定義するのに使用されるポリシーが含まれます。

`ca_backup` コマンドには、以下のフル バックアップ ポリシーが含まれます。

```
ca_backup -diskstage [-fullbackup
  [-DONOTCOPY]
  [-enablesnaplock]
  [-copyDataToDestination
    [afterjobstarts <weeks> <days> <hours> <minutes>] |
    [afterjobends <weeks> <days> <hours> <minutes>] |
    [aftersessionends <weeks> <days> <hours> <minutes>] |
    [at <hh:mm:ss> [afterjobends]]]]
  [-purgeData
    [afterjobstarts <weeks> <days> <hours> <minutes>] |
    [afterjobends <weeks> <days> <hours> <minutes>] |
    [at <hh:mm:ss>]]]
```

-fullbackup

ステージング バックアップ ジョブがフル バックアップで構成されるように指定します。

-DONOTCOPY

ディスク ステージングによってデータをステージング デバイスにバックアップしますが、保持期間経過後も、最終的なデスティネーションにメディアをコピーしません。

-enablesnaplock

バックアップ ジョブで CA ARCserve Backup が SnapLock 保護を使用するように指定します。

-copyDataToDestination

[afterjobstarts <weeks> <days> <hours> <minutes>] |

[afterjobends <weeks> <days> <hours> <minutes>] |

[aftersessionends <weeks> <days> <hours> <minutes>] |

[at <hh:mm:ss> afterjobends]]

最終的なデスティネーションへのコピー操作の開始時期を指定します。

-afterjobstarts、-afterjobends、-aftersessionends では、使用する保持期間を入力する必要があります。

-purgeData

[afterjobstarts <weeks> <days> <hours> <minutes>] |

[afterjobends <weeks> <days> <hours> <minutes>] |

[at <hh:mm:ss>]]

ディスクからのデータのパージ操作の開始時期を指定します。

-afterjobstarts、-afterjobends では、パージ操作を開始する前に、経過する必要のある期間を入力する必要があります。

ディスク ステージング増分/差分バックアップ オプション

`ca_backup -diskstage` コマンドには、CA ARCserve Backup が増分または差分バックアップ ディスク ステージング ジョブ中に使用するオプションおよびパラメータを定義するのに使用されるポリシーが含まれます。

`ca_backup -diskstage` コマンドには、以下の増分/差分バックアップ ポリシーが含まれます。

```
ca_backup -diskstage [-incdiffbackup
  [-DONOTCOPY]
  [-enablesnaplock]
  [-copyDataToDestination
    [afterjobstarts <weeks> <days> <hours> <minutes>] |
    [afterjobends <weeks> <days> <hours> <minutes>] |
    [aftersessionends <weeks> <days> <hours> <minutes>] |
    [at <hh:mm:ss> [afterjobends]]]]
  [-purgeData
    [afterjobstarts <weeks> <days> <hours> <minutes>] |
    [afterjobends <weeks> <days> <hours> <minutes>] |
    [at <hh:mm:ss>]]]
```

-incdiffbackup

ステージング バックアップ ジョブが増分バックアップまたは差分バックアップのいずれかで構成されるように指定します。

-DONOTCOPY

ディスク ステージングによってデータをステージング デバイスにバックアップしますが、保持期間経過後も、最終的なデスティネーションにメディアをコピーしません。

-enablesnaplock

バックアップ ジョブで CA ARCserve Backup が SnapLock 保護を使用するように指定します。

-copyDataToDestination

[afterjobstarts <weeks> <days> <hours> <minutes>] |

[afterjobends <weeks> <days> <hours> <minutes>] |

[aftersessionends <weeks> <days> <hours> <minutes>] |

[at <hh:mm:ss> afterjobends]]

最終的なデスティネーションへのコピー操作の開始時期を指定します。

-afterjobstarts、-afterjobends、-aftersessionends では、使用する保持期間を入力する必要があります。

-purgeData

[afterjobstarts <weeks> <days> <hours> <minutes>] |

[afterjobends <weeks> <days> <hours> <minutes>] |

[at <hh:mm:ss>]]

ディスクからのデータのパージ操作の開始時期を指定します。

-afterjobstarts、-afterjobends では、パージ操作を開始する前に、経過する必要がある期間を入力する必要があります。

テープ ステージング オプション

`ca_backup -tapestage` コマンドを使用すると、データをステージング領域(テープ ライブラリまたは仮想テープ ライブラリ)にバックアップし、その後、データを選択したポリシー オプションに基づいて最終的なデスティネーション(異なるテープ ライブラリ)にマイグレート(コピー)できます。**Backup to Tape to Tape (B2T2T)**を使用すると、バックアップ処理の完了後、指定された期間が経過した後にデータを異なるテープにコピーできるポリシーベースのジョブをサブミットできます。

`ca_backup -tapestage` コマンドは、以下のような形式です。

```
ca_backup -tapestage <-tapestage_group <groupname>>
    [-tapestage_media <medianame>]
    [-tapestage_mediapool <poolname>]
    [-tapestage_enablemus -tapestage_maxstreams <maximum # of streams(1-32)> ]
    [-tapestage_enablemux -tapestage_chunksize <size in MB(1-16)>]
    [-fullbackup [Full Backup Policy]]-incdiffbackup [IncDiff Backup Policy]]
    [Miscellaneous Options]
```

`-tapestage <-tapestage_group <groupname>>`

バックアップ ジョブがテープ ステージング機能を使用すること、およびテープ ステージング グループの名前を指定します。

`-tapestage_media <medianame>`

ジョブ用のバックアップ ステージとして使用されるメディア名を指定します。

`-tapestage_mediapool <poolname>`

ジョブ用のバックアップ ステージに使用されるメディア プールを指定します。

`-tapestage_enablemus`

マルチ ストリーミングを有効化し、ステージング グループ内のファイル システム デバイスへの同時バックアップ処理を可能にするように指定します。マルチ ストリーミングが有効化されると、単一のバックアップ ジョブがすべてのテープ デバイスを使用して複数のジョブに分割されます。

-tapestage_maxstreams <maximum # of streams(1-32)>

ステージンググループ内の FSD への書き込み時に、ジョブで使用が許可されるデータストリームの最大数を指定します。使用可能な最大数は 1 ~ 32 ストリームです。

たとえば、ストリームの最大数が 4 に指定されている場合、このステージングジョブはどの時点においても、同時に FSD に書き込みを行う子ジョブを 5 以上持つことはできない、ということになります。

-tapestage_enablemux

マルチプレキシングを有効化し、データを複数のソースから同じメディアに同時に書き込めるように指定します。複数のソースが指定されたジョブを、マルチプレキシング オプションを有効にした状態でサブミットした場合、このジョブは複数の子ジョブに分割されます(各ソースにつき 1 つの子ジョブ)。これらの子ジョブにより、データが同じメディアに同時に書き込まれます。

-tapestage_chunksize <size in MB(1-16)>

一度の書き込み処理で、ステージング デバイスに書き込まれるデータの最大量 (MB) を指定します。このチャンク サイズ値により、別のセッションがマルチプレキシングされるまで 1 回のセッションで連続して書き込まれるデータの量が決定されます。

この値が大きいほど、一部のドライブではリストアが高速になりますが、バックアップ時に使用されるメモリサイズが増大します。使用可能なチャンク サイズは 1 ~ 16 MB です。大部分のドライブについては、デフォルト値を 1 MB に設定することをお勧めします。

-fullbackup [Full Backup Policy] | -incdiffbackup [IncDiff Backup Policy]

フルバックアップまたは増分/差分バックアップのいずれかに、バックアップジョブのポリシーを設定するよう指定します。続いて、対応するバックアップポリシーを指定できます。

テープ ステージング フル バックアップ ポリシー

`ca_backup -tapestage` コマンドには、CA ARCserve Backup がフル バックアップ ジョブでデータを処理する方法を制御する際に使用されるバックアップ ポリシーが含まれます。

`ca_backup -tapestage` コマンドには、以下のフル バックアップ ポリシーが含まれます。

```
ca_backup -tapestage <-tapestage_group <groupname>>
```

```
[-donotmigrate]|
```

```
[-afterjobends <-weeks|-days|-hours|-minutes <count> ...>[-migmonthdataonly]]
```

-donotmigrate

バックアップ データをステージングの場所から最終的なデスティネーションメディアへコピーしないことを指定します。

-afterjobends <-weeks|-days|-hours|-minutes <count> ...>

バックアップ プロセスが終了し、マイグレーションプロセスが開始するまでに経過する必要がある時間を、週数、日数、時数、分数で指定します。

-migmonthdataonly

月単位 GFS バックアップ データのみをマイグレートするよう指定します。このスイッチを含める場合、CA ARCserve Backup は月単位のフル バックアップを最終デスティネーションメディアにマイグレートします。CA ARCserve Backup は週単位のフル バックアップおよび最初のフル バックアップを GFS ローテーションにマイグレートしません。

注: GFS ローテーションを指定すると、CA ARCserve Backup は GFS ローテーション ジョブ内の最終の週単位のフル バックアップを月単位のバックアップとみなします。

テープ ステージング増分/差分バックアップ ポリシー

`ca_backup -tapestage` コマンドには、CA ARCserve Backup が増分/差分バックアップ ジョブでデータを処理する方法を制御する際に使用されるバックアップポリシーが含まれます。

`ca_backup -tapestage` コマンドには、以下の増分/差分バックアップ ポリシーが含まれます。

```
ca_backup -tapestage <-tapestage_group <groupname>>  
    [-donotmigrate]|  
    [-afterjobends <-weeks|-days|-hours|-minutes <count> ...>]
```

-donotmigrate

バックアップ データをステージングの場所から最終的なデスティネーションメディアへコピーしないことを指定します。

-afterjobends <-weeks|-days|-hours|-minutes <count> ...>

バックアップ プロセスが終了し、マイグレーションプロセスが開始するまでに経過する必要がある時間を、週数、日数、時数、分数で指定します。

テープ ステージングのその他のオプション

`ca_backup -tapestage` コマンドには、基本ポリシーおよびパラメータを定義するためのその他のオプションが含まれます。基本ポリシーとパラメータは、**CA ARCserve Backup** によりステージング バックアップ ジョブの実行中に使用されます。

`ca_backup -tapestage` コマンドには、以下のその他のオプションが含まれています。

```
ca_backup -tapestage <-tapestage_group <groupname>>
```

```
[-createdmjmakeupjobonhold]
[-rescheduleiffail <on <minutes>|off>]
[-consolidate
  [-consolidate_mediaprefix <prefix>]
  [-consolidate_mediapool <poolname>]
  [-consolidate_mediagroup <groupname>]
  [-consolidate_copymethod <append|overwrite>]
```

-createdmjmakeupjobonhold

データマイグレーションジョブに失敗した場合、ホールド状態のメークアップジョブを作成するように指定します。データマイグレーション(テープへのコピー)ジョブに失敗した場合に、**CA ARCserve Backup** がホールド状態のメークアップジョブを作成するよう指定するには、このオプションを含めます。

テープへのコピー中にメディアまたはテープドライブのエラーが発生した場合、データマイグレーションジョブは失敗する場合があります。このオプションを含めると[ホールド]状態のメークアップジョブを作成できます。そのジョブは、テープデバイスまたはメディアのエラーの修正後に[レディ]状態に変更できます。エラー条件がある場合、このオプションによって、テープコピージョブを作成する必要性を最小限にします。

`-rescheduleiffail <on <minutes>| off>`

ソースグループまたはテープが利用できないために、データマイグレーションジョブが続行できない場合は、そのジョブ用にメークアップジョブをスケジュールするように指定します。ソースグループまたはテープが利用できない場合に **CA ARCserve Backup** にメークアップジョブをスケジュールさせるには、このオプションを含めます。

さまざまな理由から、ソースを利用できない場合があります。たとえば、ジョブのバックアップフェーズが終了していない、テープライブラリまたは仮想テープライブラリにハードウェアの問題が発生している場合などです。

メークアップが再スケジュールされるまでに経過する必要がある時間(分単位)を指定できます。

デフォルトでは、このオプションはオンです。

`-consolidate`

マイグレーションプロセス中にバックアップデータを統合するように指定します。

複数のジョブ間でデータを同じテープに統合するには、バックアップジョブが同じマシン上で実行される必要があります。

`-consolidate_mediaprefix <prefix>`

統合するすべてのジョブに対してメディアプレフィックスを指定します。

`-consolidate_mediapool <poolname>`

統合するメディアプールの名前を指定します。

`-consolidate_mediagroup <groupname>`

統合するメディアグループの名前を指定します。

`-consolidate_copymethod <append|overwrite>`

統合処理に使用するコピー方法(追加または上書き)を指定します。指定する方法は、統合するすべてのジョブで同一である必要があります。

注: 曜日のスケジュールに追加オプションを指定すると、**CA ARCserve Backup** は、**GFS** バックアップサイクルの初日にフォーマットされたテープへ日次バックアップを追加します。平日のスケジュールに上書きオプションを指定すると、**CA ARCserve Backup** は新しいテープを日単位でフォーマットし、別のジョブからのデータをそのテープに統合します。

リターンコード

ca_backup コマンドからのリターンコードは以下のとおりです。

-waitForJobStatus オプションが指定されていない場合は以下のとおりです。

リターンコード:

- **0** - コマンドは正常に実行されました。
(allusage、-usage、または -list などのように、ジョブをサブミットしないコマンド向け)
- **N** (正の整数) - コマンドが正常にジョブをサブミットしました。
(ジョブをサブミットするコマンド向け。実際の戻り値はジョブ番号)
- **-1** - コマンドの実行中にエラーが発生しました。

-waitForJobStatus オプションが指定されている場合は以下のとおりです。

リターンコード:

- **0** - ジョブは正常に終了しました。
- **1** - ジョブは失敗しました。
- **2** - ジョブは完了していません。
- **3** - ジョブはキャンセルされました。
- **4** - ジョブのステータスが不明です。

注: -waitforjobstatus を allusage、-usage、または -list などのスイッチと合わせると、-waitforjobstatus スイッチは無視され、-waitforjobstatus なしのリターンコードのルールが有効になります。

例

例: ca_backup

ca_backup コマンドの構文例は以下のとおりです。

```
ca_backup -source machine1 -filesystem C:¥DIR1 -filesystem D:¥DIR2 -username Administrator -password abc
ca_backup -source machine1 -filesystem C:¥DIR1 -filelist File1.TXT -filelist File2.TXT -filelist FILE3.TXT -Group GROUP1 -tape TAPE1 -username Administrator -password abc
```

- 以下の構文は、リモートの CA ARCserve Backup Server にバックアップ ジョブをサブミットします。

```
ca_backup -cahost machine1 -source machine1 -filesystem D:¥DIR1 -username Administrator -password abc
```

- 以下の構文は、CA ARCserve Backup Client Agent for Windows でバックアップ ジョブをサブミットし、リモートクライアント マシンのデータをバックアップします。

```
ca_backup -source machine1 -filesystem C:¥Folder1 -Filesystem D:¥Folder2 -filelist file.TXT -username Administrator -password abc
```

```
ca_backup -source machine1 -filesystem "C:¥Program Files¥Back me up dir" (パスにスペースが含まれる場合は "" で囲む) -tape TAPE1 -runjobnow -username Administrator -password abc
```

例: ca_backup -filter

ca_backup -filter を使った構文例は以下のとおりです。

```
ca_backup [-filter include|exclude file|dir <pattern>] -username Administrator -password abc
```

```
ca_backup -source machine1 -filesystem c:¥DIR -filter include file "*.doc" -username Administrator -password abc
```

```
ca_backup [-filter include|exclude date modify|create|access onorbefore|onorafter <mm/dd/yyyy>] -username Administrator -password abc
```

```
ca_backup -source machine1 -filesystem C:¥DELL -filter exclude dir khan -username Administrator -password abc
```

```
ca_backup -source machine1 -filesystem c:¥DELL -filter exclude file ltrhd.doc -username Administrator -password abc
```

例: ca_backup -on -at

ca_backup -on -at を使用した構文例は以下のとおりです。

```
ca_backup -source machine1 -filesystem C:¥DIR -filter include file "*.doc" -at 12:50
-on 08/08/2002 -username Administrator -password abc
```

例: ca_backup セッションパスワードキー

ca_backup -sessionpassword を使用した構文例は以下のとおりです。

```
ca_backup -source machine1 -filesystem c:¥DIR -username Administrator -password abc
ca_restore -tape TAPE1 -session 2 -dest C:¥DIR -sessionpassword xyz -username
Administrator -password abcC:¥
```

例: ca_backup ローテーション ジョブ

ca_backup のローテーション ジョブ オプションを使用した構文例は以下のとおりです。

- 以下の例は、"testingpool" メディアプールにローテーション ジョブをサブミットする ca_backup コマンド構文を示しています。2010 年 12 月 12 日に例外となる条件が指定されています。この日、固有のローテーションスキーマはフルで、バックアップを追加します。

```
ca_backup -source machine1 -filesystem c:¥DIR1 -mediapool testingpool -exception
full append 12/12/2010 -username Administrator -password abc
```

- 以下の例は、"GFSpoolJob" というジョブ詳細で gfs ローテーション ジョブをサブミットする ca_backup コマンド構文を示しています。この gfs ローテーション ジョブでは、GFSpool_DLY、GFSpool_WLY、GFSpool_MLY3 という 3 つのプールが作成されます。ローテーションスキーマは、日曜日はフル、月曜日から金曜日は増分です。

```
ca_backup -source machine1 -filesystem D:¥DIR2 -username Administrator -password
abc -gfsrotation -mpoolprefix GFSpool -jobunit full -jobunit incr -jobunit incr
-jobunit incr -jobunit incr -jobunit incr -jobunit incr -description GFSpoolJob
```

- 以下の例は、"pool" というジョブ詳細で gfs ローテーション ジョブをサブミットする ca_backup コマンド構文を示しています。この gfs ローテーション ジョブでは、machine1_DLY、machine1_WLY、machine1_MLY という 3 つのプールが作成されます。ローテーションスキーマは、日曜日から水曜日と土曜日はフル、木曜日と金曜日は増分です。

```
ca_backup -source machine1 -filesystem c:¥dell -gfsrotation -mpoolprefix
machine1 -jobunit full -jobunit full -jobunit full -jobunit full -jobunit incr
-jobunit incr -jobunit full -description pool -username Administrator -password
abc
```

- 以下の例は、"khan" メディアプールにローテーション ジョブをサブミットする `ca_backup` コマンド構文を示しています。ローテーション スキーマは以下のとおりです。

注: 以下の例では、アスタリスク記号 * は、いずれのテープも使用できることを示します。

- 日曜日: この日はバックアップを行いません
- 月曜日: 増分バックアップを実行し、メディアを追加します
- 火曜日: 増分バックアップを実行し、メディアを追加します
- 水曜日: 増分バックアップを実行し、メディアを追加します
- 木曜日: 増分バックアップを実行し、メディアを追加します
- 金曜日: フルバックアップを実行し、メディアを上書きします
- 土曜日: この日はバックアップを行いません

```
ca_backup -source machine1 -filesystem C:%ca_lic -rotation -mediapool khan
-jobunit off -jobunit incr append * -jobunit incr append * -jobunit incr append
* -jobunit incr append * -jobunit full overwrite * -jobunit off -username
Administrator -password abc
```

- 以下の例は、"hello" メディアプールにローテーション ジョブをサブミットする `ca_backup` コマンド構文を示しています。ローテーション スキーマを下に示します。

- 日曜日: この日はバックアップを行いません
- 月曜日: フルバックアップを実行し、メディアを上書きします
- 火曜日: 増分バックアップを実行し、メディアを追加します
- 水曜日: 増分バックアップを実行し、メディアを追加します
- 木曜日: 増分バックアップを実行し、メディアを追加します
- 金曜日: フルバックアップを実行し、メディアを上書きします
- 土曜日: この日はバックアップを行いません

```
ca_backup -source machine1 -filesystem c:%temp -rotation -mediapool hello
-jobunit off overwrite -jobunit full overwrite -jobunit incr append -jobunit incr
append -jobunit incr append -jobunit full overwrite -jobunit off -username
Administrator -password abc
```

- 以下の例は、"khan" メディアプールにローテーション ジョブをサブミットする `ca_backup` コマンド構文を示しています。ローテーション スキーマは、標準のローテーション スケジュールを使用します。

```
ca_backup -source machine1 -filesystem C:¥ca_lic -rotation -mediapool khan
-username Administrator -password abc
```

例: デデュプリケーション デバイスへの `ca_backup`

ジョブ完了の 4 週間、3 日、2 時間、1 分後のフル バックアップに対するパージ ポリシーをデデュプリケーション デバイスに設定する `ca_backup` コマンド構文の例は以下のとおりです。

```
ca_backup -cahost hostname -source -filesystem c:¥temp -group Dedupegroup
-dddpurgedata full 4 3 2 1 -username administrator -password caworld
```


第 6 章: ca_dbmgr - データベース マネージャ コマンド

データベース マネージャ コマンド (ca_dbmgr) は、データベース マネージャ およびメディア プール マネージャ で使用する コマンド ライン インターフェース です。このコマンドを使用すると、メディア プールの設定を含む、データベースの管理が可能になります。このコマンドを使用して、データベース情報を照会し、データベース オプションを設定することができます。この強力なユーティリティを使用すると、バックアップ イベントに応じて他のプログラムと簡単に連携することができます。データベース マネージャ およびメディア プール マネージャ から実行可能な機能は、すべてコマンドラインでも実行できます。

構文

ca_dbmgr のコマンドラインの構文は、以下のような形式です。

```
ca_dbmgr [-cahost <hostname>]
          -show [display options]
          -tape delete <tapeID[:seqNo]>
          -mediapool [media pool management options]
          [database management options]
          -prune on|off|set <count> day(s) <hh:mm>
          -maintenance
          -migrationstatus <job description> [migration status options]
          -help
          -examples
```

注: [-cahost <hostname>] スイッチはオプションです。このコマンドをローカルホスト上で使用する場合、このスイッチは必要ありません。ただし、リモートで実行する場合は、hostname を指定する必要があります。cahost スイッチで指定されたホストは、メンバ サーバまたはプライマリサーバにすることができます。ただし、CA ARCserve Backup は常にプライマリサーバのジョブ キューにジョブを追加し、その後、プライマリサーバが、ジョブが処理される際にこのスイッチに従ってジョブを適切なサーバ (プライマリ/メンバ) へ送信します。

注: 「ARCserve Manager(コンソール)」モードを使用して CA ARCserve Backup をインストールした場合、ローカル マシンから `-cahost` スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソール インストール モードは、ローカル マシンに CA ARCserve Backup のすべての機能を実際にインストールするわけではないので、このコマンドを CA ARCserve Backup を含むプライマリまたはメンバサーバにリモートでサブミットする際には `-cahost` を含めることが必須です。そうしないと、コマンドが失敗します。

注: コマンド出力で Unicode 文字が正しく表示されるようにするには、最初に、以下のように環境変数「ARCSERVE_UNICODE_DISPLAY_CMDL」に 1 の値を設定してから、コマンドを実行する必要があります。

```
C:¥Documents and Settings¥cb>set ARCSERVE_UNICODE_DISPLAY_CMDL=1
```

また、これらの Unicode 文字を正しく表示するには、以下のように環境変数を設定した後で、`ca_log` の出力をリダイレクトする必要があります。

```
C:¥>ca_log -view activity.log >UNICODE_log.txt
```

使用方法

`ca_dbmgr` コマンドを使用すると、以下のオプションおよび引数を設定できます。

- その他のオプション
- 表示オプション
- メディア プール管理オプション
- データベース管理オプション
- メンテナンス オプション
- マイグレーション ステータス オプション

その他のオプション

`ca_dbmgr` コマンドには、関連するすべてのオプションを表示したり、CA ARCserve Backup がデータベース 管理プロセス中に使用する基本ポリシーおよびパラメータを定義するのに使用されるその他のオプションが含まれます。

`ca_dbmgr` コマンドには、以下のその他のオプションが含まれます。

`-cahost <hostname>`

処理をホストするシステムの名前を識別します。

処理をリモートシステムで実行する場合は、コマンドにこのスイッチを含める必要があります。

この処理をローカル システムで実行する場合は、このスイッチは必要なく、コマンドに含める必要はありません。

注: `-cahost` をコマンドに含める場合、その処理をホストするシステム(ローカルまたはリモート)のホスト名も指定する必要があります。

注: 「ARCserve Manager (コンソール)」モードを使用して CA ARCserve Backup をインストールした場合、ローカル マシンから `-cahost` スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソール インストールモードは、ローカル マシンに CA ARCserve Backup のすべての機能を実際にインストールするわけではないので、このコマンドを CA ARCserve Backup を含むプライマリまたはメンバ サーバにリモートでサブミットする際には `-cahost` を含めることが必須です。そうしないと、コマンドが失敗します。

`-usage`

基本的な `ca_dbmgr` コマンドの一覧を表示します。

`-help`

`ca_dbmgr` ヘルプトピックを開きます。

`-examples`

`ca_dbmgr` の使用例が記載されたヘルプトピックを開きます。

表示オプション

`ca_dbmgr` 表示オプションを使用すると、CA ARCserve Backup で処理されるジョブ、使用するメディア、バックアップしたデータ、セッション情報、ディスク使用率、およびクライアント情報などを表示できます。

`ca_dbmgr` コマンドには、以下の表示オプションが含まれます。

```
ca_dbmgr [-cahost <host>] -show
  prune
  summary
  jobs | jobsessions <jobID>
    [-completed]
    [-cancelled]
    [-failed]
    [-incomplete]
    [-last <no_of> days | weeks | months]
  tapes | tapesessions <tapeID [:seqNo]>
  pools | poolmedia <poolName>
  scratchmedia | savemedia
```

注: コマンド出力で Unicode 文字が正しく表示されるようにするには、最初に、以下のように環境変数「ARCSERVE_UNICODE_DISPLAY_CMDL」に 1 の値を設定してから、コマンドを実行する必要があります。

```
C:¥Documents and Settings¥cb>set ARCSERVE_UNICODE_DISPLAY_CMDL=1
```

また、これらの Unicode 文字を正しく表示するには、以下のように環境変数を設定した後で、`ca_log` の出力をリダイレクトする必要があります。

```
C:¥>ca_log -view activity.log >UNICODE_log.txt
```

prune

廃棄処理の状態および設定を表示します。

summary

データベースサイズと制限、廃棄およびページの状態、スペース情報、およびデータベース情報を表示します。

jobs -completed | -cancelled | -failed | -incomplete

指定したジョブの状態およびその他の情報を表示します。

jobs | jobsessions <jobID>

[-completed]

[-cancelled]

[-failed]

[-incomplete]

[-last <no_of> days | weeks | months]

特定のタイプのすべてのジョブまたは指定したジョブ ID に含まれるすべてのセッションに関する情報を表示します。

たとえば、「-completed」と入力すると、完了したジョブがすべて表示されます。また、たとえば [-last 2 weeks] のように、時間制限を入力することもできます。

パラメータなしでコマンドを入力すると、データベース内のジョブすべてに関する情報が表示されます。

tapes | tapesessions <tapeID[:seqNo]>

指定したテープまたはテープ セッションに関する情報を表示します。

pools | poolmedia <poolName>

指定したプールまたはプール メディアに関する情報を表示します。

scratchmedia

メディアプールの再利用セット内に現在あるすべてのメディアに関する情報を表示します。この情報には、テープ名、シリアル番号、テープ ID、シーケンス番号、フォーマット日、有効期限、およびメディアが属しているメディアプールが含まれます。

savemedia

メディアプールの保存セット内に現在あるすべてのメディアに関する情報を表示します。この情報には、テープ名、シリアル番号、テープ ID、シーケンス番号、フォーマット日、有効期限、およびメディアが属しているメディアプールが含まれます。

メディア プール管理オプション

`ca_dbmgr` メディア プール管理オプションを使用すると、メディアの論理グループ(メディア プール)を管理、作成、および保守できるので、バックアップの識別が簡単になります。

`ca_dbmgr` コマンドには、以下のメディア プール管理オプションが含まれます。

```
ca_dbmgr [-cahost <host>] -mediapool
  add <poolName> <saveTapes>
    [-b <baseSerial>]
    [-i <serialIncr>]
    [- m <maxSerial>]
    [-retention <retentionDays>]
  modify <poolName>
    [-save <saveTapes>]
    [-retention <retentionDays>]
  delete [-f] <poolName> [tapeID[:seqNo]]
  move <tapeID[:seqNo]> <fromPoolName> <toPoolName> SCRATCH | SAVE
```

`add <poolName> <saveTapes>`

`[-b <baseSerial>]`

`[-i <serialIncr>]`

`[-m <maxSerial>]`

`[-retention <retentionDays>]`

新しいメディア プールを作成します。メディア プールの名前と、保存セットに保存するメディア数の最小値を指定します。

必要に応じて、シリアル番号情報と保存期間も指定できます。

`modify <poolName>`

`[-save <saveTapes>]`

`[-retention <retentionDays>]`

指定したメディア プールの保存セットに保管するメディアの最小数と保存期間を変更できます。

delete [-f] <poolName> [tapeID [:seqNo]]

指定したテープを、指定したメディア プールから削除します。

テープを指定せずにメディア プールの名前を入力すると、メディア プール全体が削除されます。

非対話モードで削除を実行するには、-f スイッチを使用します。

move <tapeID [:seqNo]> <fromPoolName> <toPoolName> SCRATCH|SAVE

テープをメディア プール間で移動します。再利用セットから保存セットへの移動、またはその逆の移動も可能です。 *fromPoolName* 値または *toPoolName* 値のいずれかにデフォルト値を使用して、プール以外の設定を使用することができます。

たとえば、プール値が割り当てられていないテープを移動するには、 *fromPoolName* 値のデフォルト値を使用します。このコマンドには、メディア プール マネージャのユーザ インターフェースの[メディアの移動]と同じ機能もあります。

データベース管理オプション

ca_dbmgr データベース管理オプションを使用すると、データベース情報の照会およびデータベース オプションの設定ができます。

ca_dbmgr コマンドには、以下のデータベース管理オプションが含まれます。

```
ca_dbmgr [-cahost <host>]
-tape delete <tapeID[:seqNo]
-prune on | off | set <count> days | months | year(s) <hh:mm>
```

-tape delete <tapeID[:seqNo]

データベースから指定したテープを削除します。

`-prune on | off | set <count> day(s) <hh:mm>`

データベースの廃棄のオン/オフを設定します。

経過した日数および廃棄期間の開始時間を指定します。廃棄処理中は、指定した日数よりも古いすべての詳細レコードは、毎日指定時刻にデータベースから削除されます。

たとえば、7 日より古いデータの廃棄を毎日午後 5 時に行われるようにするには、以下のコマンドを入力します。

```
ca_dbmgr -prune set 7 days 17:00
```

注: 廃棄処理では、指定した日数を経過した詳細レコードが削除されますが、ジョブレコードおよびセッションレコードは保持されます。

メンテナンス オプション

`ca_dbmgr` メンテナンス オプションを使用すると、データベースを効率的な状態で管理できるサイズになるように調整および保守できます。これらのメンテナンス タスクを定期的 to 実施することで、CA ARCserve Backup データベースの全体的なパフォーマンスを向上させることができます。

メンテナンス タスクの結果は、`SQLMaint.log` と呼ばれる特別なメンテナンス ログに保存されます。このログは、CA ARCserve Backup の LOG ディレクトリにあります。

`ca_dbmgr` コマンドには、以下のメンテナンス オプションが含まれます。

```
ca_dbmgr [-cahost <host>]
  -maintenance
    [UpdateStatistics]
    [ReBuildIndex]
    [CheckIntegrity]
    [ReduceDBSize]
```

UpdateStatistics

データベース内のすべてのテーブルおよびインデックスに関する統計を更新します。

SQL Server では、テーブルおよびインデックス内のデータの分布に関する統計を収集し、これらの統計を使用して、照会プロセスにおいてどのインデックスを使用するかを決定します。統計が古い場合、SQL Server は照会を実行する際にどのインデックスを使用するかを適切に評価できない可能性があり、その結果、インデックスをスキャンする代わりに、時間のかかるテーブル全体のスキャンを選択してしまう場合があります。インデックスを効果的に使用するには、最新の統計を持つことが重要です。

推奨: 毎日

ReBuildIndex

データベース内のすべてのインデックスを再構築し、データが断片化しないようにします。

データを変更する操作(挿入、更新、削除)を実行すると、テーブルの断片化が発生する可能性があります。このデータ変更がインデックスに影響を与えると、インデックスの断片化も発生する可能性があり、インデックス内の情報が、データベース内部に散らばってしまう場合があります。断片化したデータによって、照会プロセス時に SQL Server による不必要なデータの読み込みが発生し、パフォーマンスが低速、非効率になってしまう場合があります。断片化が進むにつれて、インデックスの効率が劣化します。インデックスを定期的に再構築することで、断片化がなくなり、ディスク領域を再利用し、データベース照会時の全体的なパフォーマンスが向上します。

推奨: 毎週

CheckIntegrity

CA ARCserve Backup データベース内のすべてのオブジェクトの整合性をチェックします。

データベースは、ハードウェア障害、突然の電源遮断、オペレーティングシステム障害、またはオペレータの不適切な動作などのような異常事態によって、壊れてしまう可能性があります。CA ARCserve Backup データベース内のすべてのオブジェクトの割り当て、構造、および論理的な整合性を定期的にチェックすることが重要です。定期的にデータベースの整合性チェックを実施すると、最後に実施された整合性チェック以来、データベース内部で変更された部分が検出され、レポートされます。ご使用のデータベースのサイズに応じて、このタスクには時間がかかる場合があります。

推奨: 毎週

ReduceDBSize

CA ARCserve Backup データベース内のデータおよびログ ファイルのサイズを小さくし、オペレーティング システムへ領域を解放します。

時間が経つにつれて、ログ ファイルおよびデータ ファイルが急速に非常に大きくなり、データベースの効率を低減してしまう可能性があります。データベースのサイズを制御すると、パフォーマンスが向上し、より多くのユーザがデータベースにアクセスできるようになります。

ReduceDBSize を実行する場合、データベースの各ファイルに残す空き領域の割合と共に、圧縮するデータベースの名前を入力する必要があります。たとえば、**100 MB** のデータベース ファイルのうち **60 MB** を使用している場合、圧縮の割合を **25 %** に指定できます。これにより **SQL Server** は、ファイルを **80 MB** のサイズに圧縮し、**20 MB** の空き領域ができます。

推奨: 必要に応じて

マイグレーション ステータス オプション

ca_dbmgr マイグレーション ステータス オプションを使用すると、指定したジョブをチェックしてマイグレーション プロセスが正常に完了したかどうかを判断できます。

ca_dbmgr コマンドには、以下のマイグレーション ステータス オプションが含まれます。

```
ca_dbmgr [-cahost <host>]
          -migrationstatus <job description>
          [-lastjobbeforestarttime <mm/dd/yyyy hh:mm:ss>] |
          [-lastjobbeforeendtime <mm/dd/yyyy hh:mm:ss>]
```

-migrationstatus <job description>

指定したジョブのマイグレーション ステータスをチェックできます。このコマンドは、ジョブをサブミットする際に、固有のジョブ詳細を割り当てた場合のみ、ステータスを適切に返します。

このチェックで使用できるリターンコードは、以下のとおりです。

- 1 - マイグレーションは失敗しました。
- 2 - マイグレーションは完了しました。
- 3 - マイグレーションは実行中です。
- 4 - マイグレーションは必要ありません。
- 5 - マイグレーション ステータスの取得に失敗しました。

-lastjobbeforestarttime <mm/dd/yyyy hh:mm:ss>

指定した日時に開始した最後のジョブのマイグレーション ステータスをチェックできます。これは、同じ日に複数回開始されたジョブに対して有用です。

-lastjobbeforeendtime <mm/dd/yyyy hh:mm:ss>

指定した日時に終了した最後のジョブのマイグレーション ステータスをチェックできます。これは、同じ日に複数回開始されたジョブに対して有用です。

例

ca_dbmgr コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下のコマンドは、CA ARCserve Backup データベースの廃棄設定を表示します (DB 廃棄時間、セッションが削除されてからの日数)。

```
ca_dbmgr -cahost machine1 -show prune
```

- 以下のコマンドは、CA ARCserve Backup データベース サマリを表示します。(合計占有領域、DB サイズ、DB ジョブ/テープ/メディア レコード カウント、など)

```
ca_dbmgr -cahost machine1 -show summary
```

- 以下のコマンドは、指定したジョブ ID の詳細を表示します。

```
ca_dbmgr -cahost machine1 -show jobs 8
```

- 以下のコマンドは、「完了」のステータスを持つ、最近 8 日間のジョブすべてを表示します。

```
ca_dbmgr -cahost machine1 -show jobs -completed -last 8 days
```

- 以下のコマンドは、指定したジョブ ID のすべてのセッションの詳細を表示します。

```
ca_dbmgr -cahost machine1 -show jobsessions 8
```

- 以下のコマンドは、データベースに記録されているすべてのテープの詳細を表示します。

```
ca_dbmgr -cahost machine1 -show tapes
```

- 以下のコマンドは、指定したテープ上のすべてのセッションの詳細を表示します。

```
ca_dbmgr -cahost machine1 -show tapesessions AB3C
```

- 以下のコマンドは、すべてのメディア プールの詳細を表示します。

```
ca_dbmgr -cahost machine1 -show pools
```

- 以下のコマンドは、指定したメディア プールの詳細を表示します。

```
ca_dbmgr -cahost machine1 -show poolmedia P00L1
```

例: ca_dbmgr メディア プール 管理オプション

- 以下のコマンドは、指定したパラメータで新しいメディア プールを追加します。

```
ca_dbmgr -cahost machine1 -mediapool add P00L1 0 -b 1200000 -i 1000 -m 1299999 -retention 100
```

- 以下のコマンドは、保存セット内のメディアの数および保存日数(99 日間)を指定した設定でメディア プールを変更します。

```
ca_dbmgr -cahost machine1 -mediapool modify P00L1 -save 0 -retention 99
```

- 以下のコマンドは、指定したメディア (AB3C) をメディア プール TMPPOOL から削除します。

```
ca_dbmgr -cahost machine1 -mediapool delete -f TMPPOOL AB3C
```

- 以下のコマンドは、指定したメディア (AB3C) をメディア プール「POOL1」からメディア プール「POOL2」の保存セットへ移動します。

```
ca_dbmgr -cahost machine1 -mediapool move AB3C P00L1 P00L2 SAVE
```

例: ca_dbmgr データベース管理オプション

- 以下のコマンドは、ID AB3C:1 のメディアレコードを削除します。

```
ca_dbmgr -cahost machine1 -tape delete AB3C:1
```

- 以下のコマンドは、データベース廃棄設定のジョブ実行時刻を 23:59 に変更し、20 日を過ぎたすべてのレコードを廃棄します。

```
ca_dbmgr -cahost machine1 -prune set 20 days 23:59
```

例: ca_dbmgr データベースメンテナンスオプション

- 以下のコマンドを使用して、インデックスを再構築します。

```
ca_dbmgr -cahost machine1 -maintenance RebuildIndex
```


第 7 章: ca_devmgr - デバイス マネージャ コマンド

デバイス マネージャコマンド(`ca_devmgr`)を使用すると、デバイス マネージャと連携することなく、CA ARCserve Backup でさまざまなデバイス管理コマンドを実行できます。このツールを使用して、情報を収集したり、テープ デバイスやライブラリ デバイスを操作したりできます。このコマンドを使用することで、ストレージ デバイスを制御でき、デバイスまたはチェンジャ内のメディアをフォーマットまたは消去することができます。デバイス マネージャで実行可能なすべての機能を、コマンドラインから実行することができます。

`ca_devmgr` を使用するには、CA ARCserve Backup が実行中で、認証サービスに認証を受ける必要があります。権限が与えられてない場合は、`ca_auth` ユーティリティを実行して、権限を取得します。

構文

`ca_devmgr` のコマンドラインの構文は、以下のような形式です。

```
ca_devmgr [-cahost <hostname>]
           [miscellaneous options]
           [general command options]
           [tape drive command options]
           [tape library command options]
           [FSD command options]
```

注: [-cahost <hostname>] スイッチはオプションです。このコマンドをローカルホスト上で使用する場合、このスイッチは必要ありません。ただし、リモートで実行する場合は、`hostname` を指定する必要があります。`cahost` スイッチで指定されたホストは、メンバサーバまたはプライマリサーバにすることができます。ただし、CA ARCserve Backup は常にプライマリサーバのジョブキューにジョブを追加し、その後、プライマリサーバが、ジョブが処理される際にこのスイッチに従ってジョブを適切なサーバ(プライマリ/メンバ)へ送信します。

注: 「ARCserve Manager (コンソール)」モードを使用して CA ARCserve Backup をインストールした場合、ローカルマシンから `-cahost` スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソールインストールモードは、ローカルマシンに CA ARCserve Backup のすべての機能を実際にインストールするわけではないので、このコマンドを CA ARCserve Backup を含むプライマリまたはメンバサーバにリモートでサブミットする際には `-cahost` を含めることが必須です。そうしないと、コマンドが失敗します。

使用方法

`ca_devmgr` コマンドには、以下のオプションが含まれます。

- その他のオプション
- 一般的なオプション
- テープドライブ オプション
- テープライブラリ オプション
- FSD オプション

その他のコマンド

`ca_devmgr` コマンドには、関連するすべてのコマンドを表示したり、CA ARCserve Backup がデバイス管理プロセス中に使用する基本ポリシーおよびパラメータを定義したりするのに使用されるその他のコマンドが含まれます。その他のコマンドは、テープドライブまたはテープライブラリとは連携しませんが、CA ARCserve Backup とは連携します。

`ca_devmgr` コマンドには、以下のその他のコマンドが含まれます。

`-cahost <hostname>`

処理をホストするシステムの名前を識別します。

処理をリモートシステムで実行する場合は、コマンドにこのスイッチを含める必要があります。

この処理をローカルシステムで実行する場合は、このスイッチは必要なく、コマンドに含める必要はありません。

注: `-cahost` をコマンドに含める場合、その処理をホストするシステム(ローカルまたはリモート)のホスト名も指定する必要があります。

注: 「ARCserve Manager (コンソール)」モードを使用して CA ARCserve Backup をインストールした場合、ローカルマシンから `-cahost` スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソールインストールモードは、ローカルマシンに CA ARCserve Backup のすべての機能を実際にインストールするわけではないので、このコマンドを CA ARCserve Backup を含むプライマリまたはメンバサーバにリモートでサブミットする際には `-cahost` を含めることが必須です。そうしないと、コマンドが失敗します。

`-usage`

基本的な `ca_devmgr` コマンドのリストを表示します。

`allusage`

すべての `ca_devmgr` コマンドおよびそれらのスイッチのリストを表示します。

`-help`

`ca_devmgr` ヘルプトピックを開きます。

`-examples`

`ca_devmgr` の使用例が記載されたヘルプトピックを開きます。

一般的なコマンド

共通コマンドは、システムにテープドライブまたはテープライブラリのいずれが接続されている場合に使用できます。

ca_devmgr [-cahost <host>]

-v <-adapterinfo...>|<-deviceinfo...>|<-groupinfo...>|<-mediainfo...>

-adapterinfo

-groupinfo [-alldomain]

-deviceinfo <adapter #> <scsi ID> <lun>|<groupname>|<-all>|<-alldomain>

-mediainfo <adapter #> <scsi ID> <lun>

-setdebug <none|summary|detail|detail+>

-v

adapterinfo、deviceinfo、groupinfo、mediainfo の各コマンドでのみ使用されます。-v スイッチを使用した場合の主な違いは、これらの 4 つのコマンドについて追加の情報が出力されることです。-v スイッチは、単なる verbose コマンドではありません。

- adapterinfo

システムに接続されているすべての SCSI アダプタを順に調査し、アダプタ名、アダプタ番号、SCSI ID、ベンダ ID、プロダクト ID、および接続されているテープ デバイスやライブラリのファームウェアを出力します。

-groupinfo

CA ARCserve Backup で設定されているすべてのデバイスグループについて、アダプタ番号、SCSI ID、ベンダ ID、プロダクト ID、ファームウェア、ステータス情報(テープライブラリのみ)を出力します。

-deviceinfo <adapter #> <scsi ID> <lun>

任意のテープドライブまたはテープライブラリについて、デバイスの種類、SCSI ID、ベンダ ID、プロダクト ID、ファームウェア、ステータス、およびデバイス共有情報(テープライブラリのみ)を出力します。

アダプタ番号、SCSI ID、および LUN は省略できません。

-mediainfo <adapter #> <scsi ID> <lun>

任意のテープ デバイスについて、テープ名、テープ ID、シーケンス番号、シリアル番号、および有効期限を出力します。テープ ライブラリの場合は、上記と同じ情報以外に、スロット番号、テープがロードされているかどうか、およびテープが書き込み保護されているかどうかが表示されます。また、テープ ライブラリについては、各スロットが表示されます。

アダプタ番号、SCSI ID、および LUN は省略できません。

-setdebug <none/summary/detail/detail+>

CA ARCserve Backup¥Log フォルダの中に生成され、保存される TAPE.LOG ファイルに表示されるデバッグ情報のレベルを制御します。

none

情報は記録されません。

summary

不要な情報を除外し、重要なメッセージだけをログに記録することにより、テープ ログのサイズを小さくします。

これはデフォルトの設定です。

detail

接続したバックアップ デバイスに CA ARCserve Backup が送信したすべてのコマンドを記録しますが、読み取り/書き込みコマンドおよびテスト装置レディコマンドは除外されます。カスタマ サポートがバックアップやリストアの問題を解決する際に使用するテープ エンジン特有の情報も記録されます。

detail+

接続したバックアップ デバイスに CA ARCserve Backup が送信したすべてのコマンドを記録します。読み取り/書き込みコマンドおよびテスト装置レディコマンドも含まれます。カスタマ サポートがバックアップやリストアの問題を解決する際に使用するテープ エンジン特有の情報も記録されます。

テープドライブ コマンド

以下のテープドライブ コマンドは、テープドライブだけに使用できます。

ca_devmgr [-cahost <host>]

```
-format [<adapter #> <scsi ID> <lun> <tape name>] [<mm/dd/yyyy> <serial no.>]
[MEDIAPOOL <mediapool name>]
-erase [<adapter #> <scsi ID> <lun>] [q|qz|qw|l]
-online [<adapter #> <scsi ID> <lun>]
-offline [<adapter #> <scsi ID> <lun>]
-compression [<adapter #> <scsi ID> <lun>] <on|off>
-eject [<adapter #> <scsi ID> <lun>]
-retension [<adapter #> <scsi ID> <lun>]
```

```
-format [<adapter #> <scsi ID> <lun> <tape name>] [<mm/dd/yyyy> <serial no.>]
[MEDIAPOOL <mediapool name>]
```

テープドライブ内のテープをフォーマットします。

-force オプションと共に使用すると、指定したメディアが保存セットまたは再利用セットのいずれに含まれるかにかかわらず、指定したメディアをフォーマットします。

アダプタ番号、SCSI ID、LUN、テープの新しい名前を指定する必要があります。日付とシリアル番号は省略可能です。

`-erase [<adapter #> <scsi ID> <lun>] [q|qz|qw|l]`

テープドライブ内のテープを消去します。

-force オプションと共に使用すると、指定したメディアが保存セットまたは再利用セットのいずれに含まれるかにかかわらず、指定したメディア内のすべてのデータを消去します。

アダプタ番号、SCSI ID、および LUN オプションを指定する必要があります。

表示されるオプションは以下のとおりです。

- **q** - クイック消去 (メディア ラベルを消去) デフォルトでは、このオプションが選択されています。
- **qz** - クイック消去プラス (メディア ラベルとシリアル番号を消去)
- **qw** - クイック消去と WORM への変換 (メディアおよびテープドライブが WORM テクノロジをサポートしている場合) ハードウェアが WORM テクノロジをサポートしていない場合、消去の操作は失敗します。
- **l** - ロング消去 (メディア上のすべてのデータを消去)

重要: ロング消去では、テープの最初から最後までメディア全体が消去されるため、完了までに長時間かかる可能性があります。

`-online [<adapter #> <scsi ID> <lun>]`

指定されたデバイス (FSD またはテープ デバイス) をオンライン ステータスに設定します。デバイスをオンラインに設定すると、複数のサーバ間で共有できます。

同じデバイスに同時にバックアップ データを書き込むのは、1 つのサーバのみであることを確認してください。複数のサーバが同時にデバイスにアクセスすると、バックアップが失敗し、データが失われる可能性があります。

例: アダプタ番号、SCSI ID、および LUN が 0、0、1 の FSD/テープ デバイスを使用しており、それをオンライン ステータスにするには、以下のコマンドを入力します。

```
ca_devmgr -online 0 0 1
```

-offline [*<adapter #>* *<scsi ID>* *<lun>*]

指定されたデバイス (FSD またはテープ デバイス) をオフライン ステータスに設定します。オフラインに設定すると、デバイスに他のバックアップ ジョブをサブミットできません。

デバイスへのバックアップ処理がすでに実行中の場合は、ジョブが完了するまでデバイス ステータスをオフラインに変更できません。これにより、FSD では、複数のサーバが不注意からデバイスへ同時にアクセスしないようになります。デバイスがオフラインに設定される際に、バックアップ ジョブがデバイスにアクセスしようとする、ジョブが失敗します。

例: アダプタ番号、SCSI ID、および LUN が 0、0、1 の FSD/テープ デバイスを使用しており、それをオンライン ステータスにするには、以下のコマンドを入力します。

```
ca_devmgr -offline 0 0 1
```

-compression [*<adapter #>* *<scsi ID>* *<lun>*] *<on|off>*

テープドライブでの圧縮を有効にしたり無効にしたりします。

このコマンドを使用するには、テープ デバイスで圧縮がサポートされ、ドライブに何も記録されていないテープが装備されている必要があります。

アダプタ番号、SCSI ID、LUN、およびオン/オフのフラグを指定する必要があります。

-eject [*<adapter #>* *<scsi ID>* *<lun>*]

テープドライブ内にあるテープをイジェクトします。

このコマンドを使用するには、テープドライブでイジェクトコマンドがサポートされている必要があります。アダプタ番号、SCSI ID、および LUN オプションを指定する必要があります。

-retension [*<adapter #>* *<scsi ID>* *<lun>*]

テープドライブ内のテープのリテンションを行います。

アダプタ番号、SCSI ID、および LUN は省略できません。

テープライブラリコマンド

以下のテープライブラリコマンドは、テープライブラリだけに使用できます。

ca_devmgr [-cahost <host>]

```
-cherase <adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> [<slot #> [q|qz|qw|l] ...]
or
-cherase <adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> SLOT_RANGE <slot range>
[q|qz|qw|l]

-chformat <changer adapter#> <changer scsi ID> <changer lun>
SLOT <slot#> <tape name> [<mm/dd/yy[yy]>|def [<serial no.> ]] MEDIAPool
[<mediapool name>] SLOT <slot#> <tape name> [<mm/dd/yy[yy]>|def [<serial no.>]]
MEDIAPool [<mediapool name>] ...]

-load <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> <drive adapter #> <drive
scsi ID> <drive lun> <slot #>

-unload <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> <drive adapter #>
<drive scsi ID> <drive lun>

-mount <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> <beg. slot> <end slot>
[q|l]

-dismount <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> <beg. slot> <end
slot>

-ieinfo <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun>

-import <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> <slot #> [<slot #> ...]

-export <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> <slot #> [<slot #> ...]

-clean <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> <drive adapter #> <drive
scsi ID> <drive lun>

-importall <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun>
```

```
-cherase <adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> [<slot #> [q|qz|qw|l] ...]
```

```
-cherase <adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> SLOT_RANGE <slot range> [q|qz|qw|l]
```

テープ ライブラリ内の 1 つ、あるいは複数のテープを消去します。

-force オプションと共に使用すると、指定したメディアが保存セットまたは再利用セットのいずれに含まれるかにかかわらず、指定したメディア内のすべてのデータを消去します。

アダプタ番号、チェンジャの SCSI ID、チェンジャの LUN、およびスロット番号は省略できません。

表示されるオプションは以下のとおりです。

- **q** - クイック消去 (メディア ラベルを消去) デフォルトでは、このオプションが選択されています。
- **qz** - クイック消去プラス (メディア ラベルとシリアル番号を消去)
- **qw** - クイック消去と WORM への変換 (メディアおよびテープドライブが WORM テクノロジーをサポートしている場合) ハードウェアが WORM テクノロジーをサポートしていない場合、消去の操作は失敗します。
- **l** - ロング消去 (メディア上のすべてのデータを消去)

また、「ca_devmgr -cherase [groupname] slot # [q|qz|qw|l] [,slot # [q|qz|qw|l] ,...]」と入力して、グループ名とスロット番号だけを使用してテープを消去することも可能です。

注: 例に示されている「,」はスイッチではありません。ここでは単に複数のスロットを消去する方法を示す目的で表記されています。

```
-chformat <changer adapter#> <changer scsi ID> <changer lun> SLOT <slot#>
<tape name> [<mm/dd/yy[yy]>|def [<serial no.> ]] MEDIAPOOL [<mediapool
name>] SLOT <slot#> <tape name> [<mm/dd/yy[yy]>|def [<serial no.>]]
MEDIAPOOL [<mediapool name>] ...]
```

テープライブラリ内の 1 つ、または複数のテープをフォーマットします。

-force オプションと共に使用すると、指定したメディアが保存セットまたは再利用セットのいずれに含まれるかにかかわらず、指定したメディアをフォーマットします。

このコマンドでは、チェンジャのアダプタ番号、SCSI ID、SCSI LUN、およびグループ名を指定する必要があります。スロット番号を指定する箇所では、各スロット番号の前に「SLOT」を付けます。また、フォーマットするテープの場所を示すスロット番号と、テープ名を指定する必要があります。有効期限 (mm/dd/yyyy) は省略可能です。

デフォルトの有効期限を表す **def** スイッチは有効期限と同時に指定することはできません。(有効期限とデフォルトの有効期限の間の「|」は、いずれか一方を選択する必要があることを示します。) シリアル番号はオプションです。一番最後の 3 つの「.」は、スロット番号をさらに指定することができるという意味です。

または、`ca_devmgr -chformat [SLOT <slot#> <tape name> [<mm/dd/yy[yy]>|def [<serial no.>]]` と入力することもできます。

このチェンジャフォーマットでは、スロット番号およびテープ名を使用できます。有効期限とシリアル番号は省略可能ですが、残りは必ず指定する必要があります。スロット番号を指定する箇所では、各スロット番号の前に「SLOT」を付けます。

```
-load <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> <drive adapter #>
<drive scsi ID> <drive lun> <slot #>
```

指定されたスロットからテープドライブへテープをロードします。

チェンジャのアダプタ番号、SCSI ID、および LUN、さらにドライブのアダプタ番号、SCSI ID、LUN、およびスロット番号を指定する必要があります。

```
-unload <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> <drive adapter #>
<drive scsi ID> <drive lun>
```

テープドライブからテープをアンロードして、指定したスロットに戻します。

チェンジャのアダプタ番号、SCSI ID、LUN およびスロット数は省略できません。

`-mount <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> <beg. slot> <end slot> [q|l]`

テープ ライブラリ全体のインベントリを実行します。

テープ ライブラリにバーコードリーダーが装備されていない場合、CA ARCserve Backup によってすべてのテープがテープドライブに挿入され読み取られます。テープ ライブラリにバーコードリーダーがある場合は、データベースから情報を取得するか、それとも CA ARCserve Backup ですべてのテープの読み込みを行うかを指定できます。チェンジャのアダプタ番号と SCSI ID、LUN、開始スロット、および終了スロットは省略できません。

開始スロットと終了スロットには、現在マウント中のグループと合致していさえすれば、任意のスロット番号を指定できます。ただし、終了スロット番号は開始スロット番号より大きい番号であることが必要です。q(クイック マウント)またはl(ロング マウント)は省略可能です。バーコードリーダー付きのテープ ライブラリには、クイック マウントがデフォルトになります。

テープ ライブラリにバーコードリーダーがあれば、CA ARCserve Backup データベースから情報を取得します。ロング マウントでは、CA ARCserve Backup によって各テープがテープドライブに強制的に挿入されて、情報が読み取られます。テープ ライブラリにバーコードリーダーがなければ q スイッチは機能せず、各テープはテープドライブに挿入されて読み込まれます。

`-dismount <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> <beg. slot> <end slot>`

オプションで指定された範囲内にある指定されたグループ内のスロットをマウント解除し、すべてのスロットの名前を「マウント解除されたスロット」に変更します。

CA ARCserve Backup が再起動されるか、マウント解除されたグループにマウントコマンドが発行されるまで、マウントが解除されたスロットに対して他のコマンドを発行することはできません。チェンジャのアダプタ番号と SCSI ID、LUN、開始スロット、および終了スロットは省略できません。

`-ieinfo <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun>`

ライブラリのインポート/エクスポート スロットの情報を表示します。スロットがフルかどうかも示され、スロットがフルの場合は、スロットに入っているテープのバーコード番号が表示されます。

チェンジャのアダプタ番号、SCSI ID、および LUN は省略できません。

`-import <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> <slot #> [<slot #> ...]`

テープをテープライブラリのインポート/エクスポートスロットから取り出し、デスティネーションスロットに挿入します。

テープライブラリにバーコードリーダーがあれば、テープの情報がデータベースから取得されます。ドライブデバイスではテープを読み取られません。

しかし、テープライブラリにバーコードリーダーがない場合は、テープがドライブに挿入されて読み取られます。

チェンジャのアダプタ番号、SCSI ID、LUN、およびスロット番号は省略できません。省略できるスイッチは、2番目以降の `slot #...` のみです。これは、複数のインポート/エクスポートスロットを持つテープライブラリ用のスイッチです。このスイッチを使用すると、同時に複数のテープをインポートできます。テープライブラリにインポート/エクスポートスロットが1つしかない場合、1度にインポートできるテープは1つだけです。

`-export <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> <slot #> [<slot #> ...]`

テープをテープライブラリのスロットからインポート/エクスポートスロットへと移します。

チェンジャのアダプタ番号、SCSI ID、LUN およびスロット数は省略できません。`slot #...` は、複数のテープをエクスポートする場合に使用します。このオプションはテープライブラリにインポート/エクスポートスロットが複数ある場合にのみ指定できます。

`-clean <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> <drive adapter #> <drive scsi ID> <drive lun>`

テープライブラリにクリーニングテープが入っている場合は、そのクリーニングテープを指定のドライブに挿入し、そのテープドライブをクリーニングします。

チェンジャのアダプタ番号、SCSI ID、LUN、テープドライブのアダプタ番号、SCSI ID およびテープドライブの LUN が必要となります。

`-importall <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun>`

ライブラリのメール スロットで見つかった各テープを、指定されたライブラリで最初に使用可能なストレージ スロットにインポートします。

このオプションは、テープをメール スロットからインポートするだけでよく、特定のストレージ スロットに移動する必要がない場合に使用できます。

メール スロットのすべてのテープに対応するライブラリ スロットが存在しない場合は、空のライブラリ スロットがなくなると、「テープをすべてインポートするのに十分な空スロットがありません」というメッセージが表示されます。

チェンジャのアダプタ番号、SCSI ID、および LUN は省略できません。

FSD のコマンド

以下のファイル システム デバイス (FSD) コマンドは、FSD だけに使用できます。

```
ca_devmgr [-cahost <host>]
  -format [<adapter #> <scsi ID> <lun> <tape name>] [<mm/dd/yyyy> <serial no.>]
  -erase [<adapter #> <scsi ID> <lun>] [q|qz|qw|l]
  -online [<adapter #> <scsi ID> <lun>]
  -offline [<adapter #> <scsi ID> <lun>]
  -purge <adapter #> <scsi ID> <lun> -sessions <session no.> [<session no.>]
  or
  -purge <adapter #> <scsi ID> <lun> -sessions <session range>
      <session range> can be either <start session no.>-<end session no.> or "all"
      which means all sessions
  -query <adapter #> <scsi ID> <lun>
  <-all|-copied|-uncopied|-purgable|-snaplocked|-failed> -sessions <session
  no.>[<-session no.>]
  or
  -query <adapter #> <scsi ID> <lun>
  <-all|-copied|-uncopied|-purgable|-snaplocked|-failed> -sessions all
  -regenerate [<adapter #> <scsi ID> <lun> <tape name>] [<tape ID> <mm/dd/yy[yy]>]
  -createfsd <FSD Description> <FSD Name> <FSD Path>[<Domain Name> <User>
  <Password>]
  -removefsd <FSD Path>
  -setstaging <Group Name> [[-mstreams <Max Stream>] [-mthreshold <Max
  Threshold/Purge to Threshold <"xx/xx%"|"xx/xx">]] [-snaplock <Enable Snaplock
  <0|1>]] [-pausemig <Pause Migration <0|1>]] [-chunksize <Chunk Size>]]
  -cleanstaging <Group Name>
  -getstaging <Group Name>
  -queryfsd <FSD Path> [-group]
  -creatededupefsd <FSD Description><FSD Name><Data Path><Index Path>[<Domain
  Name> <User><Password>][<-GrpName <Group Name>]
  -removededupefsd <Group Name>
  -configdedupefsd <Group Name> [-FSDsp<FSD Description>][<-FSDName <FSD Name>]
  [<-DataPath <Data Path>] [<-IndexPath <IndexPath>]
  -setdedupegrpproperties <Group Name> [[-mstreams <Max Stream>][<-mthreshold <Max
  Threshold <"xx%"|"xx">]]<-pausemig <Pause Migration <0|1>]]<-optimization <Allow
  Optimization <0|1>]]
  -getdedupegrpproperties <Group Name>
```

`-format [<adapter #> <scsi ID> <lun> <tape name>] [<mm/dd/yyyy> <serial no.>]`

テープドライブ内のテープをフォーマットします。

-force オプションと共に使用すると、指定したメディアが保存セットまたは再利用セットのいずれに含まれるかにかかわらず、指定したメディアをフォーマットします。

アダプタ番号、SCSI ID、LUN、テープの新しい名前を指定する必要があります。日付とシリアル番号は省略可能です。

`-erase [<adapter #> <scsi ID> <lun>] [q|qz|qw|l]`

テープドライブ内のテープを消去します。

-force オプションと共に使用すると、指定したメディアが保存セットまたは再利用セットのいずれに含まれるかにかかわらず、指定したメディア内のすべてのデータを消去します。

アダプタ番号、SCSI ID、および LUN オプションを指定する必要があります。

表示されるオプションは以下のとおりです。

- **q** - クイック消去 (メディア ラベルを消去) デフォルトでは、このオプションが選択されています。
- **qz** - クイック消去プラス (メディア ラベルとシリアル番号を消去)
- **qw** - クイック消去と WORM への変換 (メディアおよびテープドライブが WORM テクノロジをサポートしている場合) ハードウェアが WORM テクノロジをサポートしていない場合、消去の操作は失敗します。
- **l** - ロング消去 (メディア上のすべてのデータを消去)

重要: ロング消去では、テープの最初から最後までメディア全体が消去されるため、完了までに長時間かかる可能性があります。

-online [<adapter #> <scsi ID> <lun>]

指定されたデバイス (FSD またはテープ デバイス) をオンライン ステータスに設定します。デバイスをオンラインに設定すると、複数のサーバ間で共有できます。

同じデバイスに同時にバックアップ データを書き込むのは、1 つのサーバのみであることを確認してください。複数のサーバが同時にデバイスにアクセスすると、バックアップが失敗し、データが失われる可能性があります。

例: アダプタ番号、SCSI ID、および LUN が 0、0、1 の FSD/テープ デバイスを使用しており、それをオンライン ステータスにするには、以下のコマンドを入力します。

```
ca_devmgr -online 0 0 1
```

-offline [<adapter #> <scsi ID> <lun>]

指定されたデバイス (FSD またはテープ デバイス) をオフライン ステータスに設定します。オフラインに設定すると、デバイスに他のバックアップ ジョブをサブミットできません。

デバイスへのバックアップ処理がすでに実行中の場合は、ジョブが完了するまでデバイス ステータスをオフラインに変更できません。これにより、FSD では、複数のサーバが不注意からデバイスへ同時にアクセスしないようになります。デバイスがオフラインに設定される際に、バックアップ ジョブがデバイスにアクセスしようとする、ジョブが失敗します。

例: アダプタ番号、SCSI ID、および LUN が 0、0、1 の FSD/テープ デバイスを使用しており、それをオンライン ステータスにするには、以下のコマンドを入力します。

```
ca_devmgr -offline 0 0 1
```

`-purge <adapter #> <scsi ID> <lun> -sessions <session no.> [<session no.>]`

`-purge <adapter #> <scsi ID> <lun> -sessions <session range>`

指定したセッションまたはセッショングループをパージします。このコマンドを使用して、FSD からデータを削除します。

- セッションの 1 つが SnapLock で保護されている場合、そのセッション向けには警告が記録され、パージプロセスは、指定した残りのセッションに対して行われます。
- セッションがマイグレートされる予定で、まだマイグレートされていない場合、警告が記録され、そのセッションはパージされず、パージプロセスは、指定した残りのセッションに対して行われます。

セッションがマイグレートされたかどうかにかかわらず、**-force** オプションを指定してセッションをパージできます。

- セッションがアクティブであると、警告が記録され、そのセッションはパージされず、パージプロセスは、指定した残りのセッションに対して行われます。

単一セッションまたは複数セッションのパージを、セッション番号(単一またはグループ)、範囲、またはすべて、の 3 つの方法の中から指定できます。

`-sessions <session no.> [<session no.>]`

`-sessions <session range>`

注: `<session range>` は、`<start session no.>-<end session no.>` またはすべてのセッションを示す「all」のいずれかを指定できます。

パージするセッション番号(またはセッション番号のグループ)、セッション番号の範囲、またはすべてのセッション番号を指定します。

- 単一セッションをパージするように指定するには、以下の構文形式を使用する必要があります。

`-sessions 1`

- セッションのグループをパージするように指定するには、以下の構文形式を使用して、スペースによって区切られたセッション番号のリストを指定する必要があります。

`-sessions 1 2 5 7 8`

- セッションの範囲をパージするように指定するには、以下の構文形式を使用して、開始セッション番号と終了セッション番号をダッシュで接続して指定する必要があります。

`-sessions 3-5`

- すべてのセッションをページするように指定するには、以下の構文形式を使用する必要があります。

`-sessions all`

`-query <adapter #> <scsi ID> <lun>`
`<-all|-copied|-uncopied|-purgable|-snaplocked|-failed> -sessions`

指定したセッションを照会します。このコマンドを使用して、現在アクティブなユーザセッションをサーバに照会します。すべてのアクティブなセッション、または指定したタイプに一致するセッションだけに関する情報をリクエストできます。

`-query` コマンドは、以下の情報を提供します。

- すべてのコピー済みセッションおよびコピー済みでないセッション
- SnapLock で保護されたすべてのセッション
- 各セッションの保存期間
- パージ可能なすべてのセッション

アダプタ番号、SCSI ID、および LUN は省略できません。

`-copied`

すべてのコピー済みセッションのリストを表示します。

`-uncopied`

コピーされなかったすべてのセッションのリストを表示します。

`-purgable`

パージ可能なすべてのセッションのリストを表示します。

`-snaplocked`

SnapLock 保護が有効になっているすべてのセッションのリスト、および、各セッションの保存期間を表示します。

`-failed`

失敗したすべてのセッションのリストを表示します。

`-sessions <list of space separated sessions | all>`

照会するセッション番号、セッション番号のグループ、またはすべてのセッション番号を指定します。

- 単一セッションを照会するように指定するには、以下の構文形式を使用する必要があります。

`-sessions 1`

- セッションのグループを照会するように指定するには、以下の構文形式を使用して、スペースによって区切られたセッション番号のリストを指定する必要があります。

-sessions 1 2 3

- すべてのセッションを照会するように指定するには、以下の構文形式を使用する必要があります。

-sessions all

-regenerate [*<adapter #>* *<scsi ID>* *<lun>* *<tape name>*] [*<tape ID>*
<mm/dd/yy[yy]>]

誤ってテープ ヘッダを削除してしまった場合に、ファイル システム デバイスで使用します。ファイル システム デバイスに対し、指定したテープ名 (*<tape name>*) でテープ ヘッダを再度作成またはリビルドできます。新しいテープ ヘッダを作成した後は、ファイル システム デバイス上のセッションをすべて CA ARCserve Backup データベースにマージすることで、point-and-select リストア機能 (リストア ポイントを選択できる機能) を使用できます。

オリジナルのテープ名 (*<tapename>*) とそのテープ ID (*<tape ID>*) がわかっている場合、これらを再使用することで、CA ARCserve Backup データベースはセッションレコードを再度マージしなくてもボリュームに再接続できます (テープ名とテープ ID は、CA ARCserve Backup データベースにある元のテープレコードで確認できます)。

<mm/dd/yyyy> パラメータを使用して、デフォルトの有効期限とは異なる日付をテープの有効期限に指定できます。

-createfsd

実行時にテープ エンジン を停止することなく、FSD を動的に作成するように指定します。CA ARCserve Backup は、作成するデバイスがデバイスリストシステムにすでに存在しないかをチェックし、存在しない場合は、それをデバイスリストへ追加します。

注: `ca_devmgr` では、CA ARCserve Backup [デバイス グループの環境設定] が開いていると `-createfsd` は失敗します。

FSD Description

作成される FSD の説明を指定します。

FSD Name

作成される FSD の識別名を指定します。

FSD path

作成される FSD の物理パスを指定します。

Domain Name

作成される リモート FSD へアクセスするためのドメインを指定します。

User

作成される リモート FSD へアクセスするためのユーザ名を指定します。

Password

作成される リモート FSD へアクセスするためのユーザ パスワードを指定します。

-removefsd <FSD Path>

実行時にテープ エンジン を停止することなく、FSD を動的に削除するように指定します。

-setstaging <Group Name>

FSD グループをステージング グループとして設定するように指定します。

-mstreams <Max Stream>

ステージング グループ内の FSD に送信される同時データ ストリームの最大数を指定します。

使用できるオプションは、1 または 2 ストリームで、デフォルトは 1 ストリームです。

-mthreshold <Max Threshold/Purge to Threshold <"xx/xx%"|"xx/xx">>

FSD の最大容量しきい値、およびページしきい値を指定します。

FSD 上の使用済みスペースの量が、指定した最大しきい値を超える場合は、最も古いマイグレート終了済みセッションからの順番でデータが FSD からページされます。「ページしきい値」は最小しきい値であり、CA ARCserve バックアップがページを中断するときの FSD 上の使用済みスペースの大きさをページしきい値で指定することができます。

最大しきい値およびページしきい値は、絶対値 (MB 単位) またはボリューム容量 (% 値) で表すことができます。

デフォルトの最大しきい値は 80% です。

デフォルトのページしきい値は 60% です。

最大しきい値を 80% に設定し、ページしきい値を 60% に設定する例を、次に示します。

```
ca_devmgr -setstaging group0 -mthreshold "80/60"
```

しきい値を 1 つのみ指定した場合、自動的に表されるのは最大しきい値の方であり、ページしきい値は無効になります。(ページしきい値の設定は、最大しきい値に常に依存します。)

最大しきい値を 80% に設定し、ページしきい値を無効にする例を次に示します。

```
ca_devmgr -setstaging group0 -mthreshold "80"
```

注:

- 最大しきい値に指定する値は、ページしきい値よりも常に大きくなければなりません。
- しきい値をパーセント単位で設定する場合、最大しきい値には 100% 未満の値を指定し、ページしきい値は 0% を超える値になります。(ページしきい値が 0% の場合、自動ページが無効になります。)

- しきい値を絶対値として設定する場合、最大しきい値には 1 MB を超える値を指定する必要があります。目標パーシステンスしきい値は 0 を超える値になります。(値が 0 の場合、パーシステンスが無効になります。)

-snaplock <Enable Snaplock <0|1>>

SnapLock 保護の有効/無効を指定します。SnapLock 保護を有効にしてデータをバックアップすると、指定された保存期間を過ぎるまで、バックアップされたデータのパーシステンスまたは上書きができません。これにより、FSD 上のデータをどのユーザも削除できなくなります。

0 = 無効

1 = 有効

デフォルトでは、SnapLock は無効です。

-pausemig <Pause Migration <0|1>>

FSD から、最終的なデスティネーション メディアへのデータのマイグレーションを停止するように指定します。このオプションにより、最終的なデスティネーション メディアのメンテナンスがスケジュールされている場合、またはハードウェアに問題がある場合、FSD へのバックアップは継続しますが、FSD から最終的なデスティネーションへのマイグレーションを停止することができます。

0 = 無効

1 = 有効

デフォルトでは、データ マイグレーション停止オプションは無効です。

-chunksize <Chunk Size>

一度の書き込み処理で、ステージング デバイスに書き込まれるデータの最大量 (KB) を指定します。

デフォルトでは、ステージングのチャンク サイズは 512 KB です。

-cleanstaging <Group Name>

ローカル/リモートサーバから FSD ステージング グループの属性をクリーニング (削除) するように指定します。

-getstaging <Group Name>

ローカル/リモートサーバからステージング グループの属性を取得するように指定します。

`-queryfsd <FSD Path> [-group]`

デフォルトで FSD のアダプタ番号、SCSI ID、および LUN を照会するか、スイッチ「-group」をによって FSD グループを照会するかを指定します。これは主に自動化スクリプトで使用されます。

`-creatededupefsd <FSD Description><FSD Name><Data Path><Index Path>
[<Domain Name> <User><Password>] [-GrpName <Group Name>]`

CA ARCserve Backup にデデュプリケーション デバイスの新規作成を指示します。FSD の説明、FSD 名、データパス、およびインデックスパスを指定する必要があります。グループ名はオプションです。必要な場合は、有効なグループ名を指定します。指定しない場合、新しいデバイスはデフォルトのデデュプリケーショングループに追加されます。

FSD Description

作成するデデュプリケーション デバイスの説明を入力します。

FSD Name

作成するデデュプリケーション デバイスの識別名を指定します。

Data Path

デデュプリケーション データを保存する物理パスを指定します。

Index Path

インデックスファイルおよびリファレンスファイルのデータを保存する物理パスを指定します。このパスは、データパスとは異なるボリューム上である必要があります。誤ってデータパスと同じパスを指定した場合、別のパスを指定するよう促すプロンプトが表示されます。

Domain Name

作成するリモート デデュプリケーション デバイスへアクセスするためのドメインを指定します。

User

作成するリモート デデュプリケーションへアクセスするためのユーザ名を指定します。

Password

作成するリモート デデュプリケーションへアクセスするためのユーザパスワードを指定します。

-GrpName

新しいデデュプリケーション デバイスグループを作成します。

Group Name

-GrpName によって作成した新しいデデュプリケーション デバイスグループの名前を指定します。グループ名はオプションです。グループ名を指定しない場合、CA ARCserve Backup はデデュプリケーション デバイスを新しいデフォルトグループに追加します。

-removededupefsd <Group Name>

CA ARCserve Backup に、グループ名で指定したデデュプリケーション デバイスの削除を指示します。

<Group Name>

削除するデデュプリケーション デバイスを含んでいるグループ名を指定します。

-configdedupefsd <Group Name> [-FSDDsp<FSD Description>][-FSDName <FSD Name>] [-DataPath <Data Path>] [-IndexPath <IndexPath>]

CA ARCserve Backup に既存のデデュプリケーション デバイスの変更を指示します。FSD の説明、FSD 名、データパス、およびインデックスパスの新しい値を指定します。

-FSDDsp <FSD Description>

グループ名で指定したデデュプリケーション デバイスの新しい説明を入力します。

-FSDname <FSD Name>

グループ名で指定したデデュプリケーション デバイスの新しい識別名を入力します。

-DataPath <Data Path>

グループ名で指定したデデュプリケーション デバイスが、デデュプリケーション データの保存時に使用する新しいデータパスを入力します。

-IndexPath <Index Path>

グループ名で指定したデデュプリケーション デバイスが、デデュプリケーション処理に関連付けたインデックスファイルおよびリファレンスファイルの保存時に使用する新しいインデックスパスを入力します。

注: データパスとインデックスパスは、デデュプリケーション デバイスのメディアがブランクである場合にのみ変更できます。

```
-setdedupegrpproperties <Group Name> [[-mstreams <Max Stream>][-mthreshold <Max Threshold <"xx%"|"xx">][-pausemig <Pause Migration <0|1>>][-optimization <Allow Optimization <0|1>>]]
```

CA ARCserve Backup に、<Group Name> で指定したデバイスのデデュプリケーショングループ プロパティを設定するように指示します。

-mstreams <Max Stream>

デデュプリケーション デバイスに送信する同時データ ストリームの最大数を指定します。

デフォルト値は 1 です。

-mthreshold <Max Threshold <"xx%"|"xx">>

デデュプリケーション デバイスの容量の最大しきい値を指定します。このしきい値は、デバイス容量のパーセントとして、または絶対値 (MB) として指定します。

デフォルト値は 80 % です。

-pausemig <Pause Migration <0|1>>

デデュプリケーション デバイスから、最終的なデスティネーション メディアへのデータのマイグレーションを停止するように指定します。

0 = 無効

1 = 有効

デフォルトでは、データ マイグレーション停止オプションは無効です。

-optimization <Allow Optimization <0|1>>

デデュプリケーション処理の最適化を有効または無効にします。最適化を有効にしてデータのデデュプリケーションを実行すると、ファイル全体ではなくファイルのヘッダ データのみを確認します。

0 = 無効

1 = 有効

デフォルトでは、最適化は無効になっています。

-getdedupegrpproperties <Group Name>

CA ARCserve Backup に、<Group Name> で指定したグループのプロパティ設定を取得するように指示します。

クラウドのコマンド

以下のコマンドは、クラウド デバイスに適用されます。

```
ca_devmgr [-cahost <host>]
  -format [<adapter #> <scsi ID> <lun> <tape name>] [<mm/dd/yyyy> <serial no.>]
  [MEDIAPPOOL <mediapool name>]
  -erase [<adapter #> <scsi ID> <lun>] [q|qz|qw|l]
  -online [<adapter #> <scsi ID> <lun>]
  -offline [<adapter #> <scsi ID> <lun>]
  -compression [<adapter #> <scsi ID> <lun>] <on|off>
  -listcloudconnectionname
  -listcloudfolder <cloud connection name>
  -createclouddevice <device name> <device description> <cloud connection name>
  <cloud folder> [<password>]
  -removeclouddevice <cloud connection name> <cloud folder>
  -setcloudgrpproperties <Group Name> -mstreams <Max Stream>
  -getcloudgrpproperties <groupname>
  -testthroughput <cloud connection name>[<Total Data Size(MB)> <Chunk Size(KB)>
  <Thread Number>]
  -purge <adapter #> <scsi ID> <lun> -sessions <session no.> [<session no.>]
  OR
  -purge <adapter #> <scsi ID> <lun> -sessions <session range>
  <session range> は、<start session no.>-<end session no.> またはすべてのセッションを示す「all」のいずれかを指定できます。
```

-adapterinfo

システムに接続されているすべてのアダプタを順に調査し、アダプタ名、アダプタ番号、SCSI ID、ベンダ ID、プロダクト ID、および接続されているテープ デバイスやクラウド デバイスのファームウェアを出力します。

```
-format [<adapter #> <scsi ID> <lun> <tape name>] [<mm/dd/yyyy> <serial no.>]
[MEDIAPPOOL <mediapool name>]
```

クラウド デバイスをフォーマットします。

クラウド ベース デバイスはメディア プールに割り当てることができないので、シリアル番号およびメディア プール オプションは無効になります。

アダプタ番号、SCSI ID、LUN、およびクラウド ベース デバイスの新しい名前を指定する必要があります。日付とシリアル番号は省略可能です。

-erase [*<adapter #>* *<scsi ID>* *<lun>*] [*q|qz|qw|l*]

クラウド ベース デバイスを消去します。

アダプタ番号、SCSI ID、および LUN オプションを指定する必要があります。

表示されるオプションは以下のとおりです。

- **q** - クイック消去 (ラベルを破棄) デフォルトでは、このオプションが選択されています。
- **qz** - クイック消去プラス (ラベルとシリアル番号を破棄)

-online [*<adapter #>* *<scsi ID>* *<lun>*]

指定されたデバイス (FSD、テープ、またはクラウド ベース デバイス) をオンライン ステータスに設定します。デバイスをオンラインに設定すると、マイグレーション ジョブに使用できます。

例: アダプタ番号、SCSI ID、および LUN が 0、0、1 の FSD、テープ、またはクラウド ベース デバイスを使用しており、それをオンライン ステータスにするには、以下のコマンドを入力します。

```
ca_devmgr -online 0 0 1
```

-offline [*<adapter #>* *<scsi ID>* *<lun>*]

指定されたデバイス (FSD、テープ、またはクラウド ベース デバイス) をオフライン ステータスに設定します。オフラインに設定すると、デバイスに他のマイグレーション ジョブをサブミットできません。

デバイスへのマイグレーション処理がすでに実行中の場合は、ジョブが完了するまでデバイス ステータスをオフラインに変更できません。クラウド ベース デバイスの場合、この動作により、複数のサーバがデバイスに同時にアクセスするのを防ぎます。デバイスがオフラインに設定される際に、マイグレーション ジョブがデバイスにアクセスしようとする、ジョブが失敗します。

例: アダプタ番号、SCSI ID、および LUN が 0、0、1 の FSD、テープ、またはクラウド ベース デバイスを使用しており、それをオフライン ステータスにするには、以下のコマンドを入力します。

```
ca_devmgr -offline 0 0 1
```

-compression [*<adapter #>* *<scsi ID>* *<lun>*] *<on|off>*

クラウド ベース デバイスでの圧縮を有効にしたり無効にしたりします。

アダプタ番号、SCSI ID、LUN、およびオン/オフのフラグを指定する必要があります。

`-purge <adapter #> <scsi ID> <lun> -sessions <session no.> [<session no.>]`

`-purge <adapter #> <scsi ID> <lun> -sessions <session range>`

指定したセッションまたはセッショングループをパージします。このコマンドを使用して、クラウド ベース デバイスからデータを削除します。

- セッションがアクティブであると、警告が記録され、そのセッションはパージされず、パージプロセスは、指定した残りのセッションに対して行われます。

単一セッションまたは複数セッションのパージを、セッション番号(単一またはグループ)、範囲、またはすべて、の3つの方法の中から指定できます。

`-sessions <session no.> [<session no.>]`

`-sessions <session range>`

注: `<session range>` は、`<start session no.>-<end session no.>` またはすべてのセッションを示す「all」のいずれかを指定できます。

パージするセッション番号(またはセッション番号のグループ)、セッション番号の範囲、またはすべてのセッション番号を指定します。

- 単一セッションをパージするように指定するには、以下の構文を使用する必要があります。

`-sessions 1`

- パージする一群のセッションを指定するには、スペースによって区切られたセッション番号のリストを指定します。例:

`-sessions 1 2 5 7 8`

- パージするセッションの範囲を指定するには、開始セッション番号と終了セッション番号をハイフンでつないで指定する必要があります。例:

`-sessions 3-5`

- すべてのセッションをパージするように指定するには、以下の構文を使用します。

`-sessions all`

`-listcloudconnectionname`

デフォルトでは、このコマンドを使用すると、既存のすべてのクラウド接続に関する基本情報をリスト形式でコンソールにエクスポートできます。また、出力を `.txt` または `.csv` ファイルにリダイレクトすることもできます。

-listcloudfolder

指定されたクラウド接続に関連付けられているクラウド アカウントの下にあるすべてのクラウド ベース デバイスに関する基本情報をエクスポートします。

このオプションには以下の引数があります。

- -listcloudfolder <cloud connection name>

-createclouddevice

新しいクラウド フォルダまたは既存のクラウド フォルダを参照する 1 つのクラウド ベース デバイスを作成します。クラウド フォルダにパスワード保護を設定する場合は、検証用の正しいパスワードを入力する必要があります。パスワードを入力しないと、クラウド フォルダにリンクさせる 1 つのクラウド ベース デバイスを作成できません。

このオプションには以下の引数があります。

- -createclouddevice <Device Name> <Device Description> <Cloud Connection Name> <Cloud Folder> [<Password> <Password Confirmation>]

-removeclouddevice

CA ARCserve Backup からクラウド ベース デバイスを削除します。

このオプションには以下の引数があります。

- -removeclouddevice <Cloud Connection Name > <Cloud Folder>

-setcloudgrpproperties

<Group Name> で指定したデバイスのクラウド グループ プロパティを設定し、クラウド ベース デバイスに送信する同時データ ストリームの最大数を指定します。

デフォルト値は 4 です。

このオプションには以下の引数があります。

- -setcloudgrpproperties <Group Name> -maxstream <Max Streams>

-getcloudgrpproperties

CA ARCserve Backup に、<Group Name> で指定したグループのプロパティ設定を取得するように指示します。

このオプションには以下の引数があります。

- -getcloudgrpproperties <Group Name>

-testthroughput

特定のクラウド接続のスループットをデフォルトの引数を使ってテストし、クラウド接続用のマイグレーション ジョブとして同様の結果を取得します。

テスト用のデフォルト値は、データ サイズ合計が **16 MB**、チャンク サイズが **1024 KB**、およびスレッド番号が **4** です。

このオプションには以下の引数があります。

- **-testthroughput <cloud connection name>**

例

ca_devmgr コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下のコマンドは、アダプタ情報を SCSI ID およびアダプタ番号付きで表示します。

```
ca_devmgr -adapterinfo
```

- 以下のコマンドは、指定したアダプタおよび SCSI 番号のテープ情報(名前およびシリアル番号)を表示できます。

```
ca_devmgr -mediainfo 3 4
```

- FSD グループをステージング グループとして指定し、次のように設定するには、下記のコマンドを使用します。

- 最大ストリーム数を 2 に設定
- しきい値を 80%(最大)および 60%(最小)に設定
- チャンク サイズを 512MB に設定

```
ca_devmgr -setstaging group0 -mstreams 2 -mthreshold "80/60%" -chunksize 512
```

- DDD1 という新しいデデュプリケーション デバイスを作成し、DDDGrp1 というグループに割り当てるには、以下のコマンドを使用します。

```
ca_devmgr -createdupefsd DedupeDeviceSalesData DDD1 c:%data d:%index -GrpName DDDGrp1
```

- DDGrp0 というグループに割り当てた DDD0 という既存のデデュプリケーション デバイスのデータおよびインデックス パスを変更するには、以下のコマンドを使用します。

```
ca_devmgr -configdedupefsd DDGrp0 -FSDName DDD0 -DataPath c:%dataFiles -Index d:%refFiles¥
```

- DDGrp9 というグループに次のようなデデュプリケーション グループ プロパティを設定するには、以下のコマンドを使用します。

- 最大データ ストリーム数を 2 に設定
- 最大しきい値を 90% に設定
- マイグレーションの一時停止を有効に設定
- 最適化を有効に設定

```
ca_devmgr -setdedupegrproperties DDDGrp9 -mstreams 2 -mthreshold "90%"  
-pausemig 1 -optimization 1
```

第 8 章: ca_jobsecmgr - ジョブ セキュリティ マネージャ コマンド

ユーザ名またはパスワードが変更された場合は、ジョブ キュー内のすべてのジョブにその変更を反映させる必要があります。ジョブ セキュリティ マネージャ コマンド (ca_jobsecmgr) を使用すると、ジョブ キュー内のすべてのジョブに対して、ユーザ名またはパスワードの一括変更を行うことができます。特定の CA ARCserve Backup サーバまたは現在の CA ARCserve Backup ドメイン内のすべての CA ARCserve Backup サーバに対して、これらの変更を行えます。

注: ca_jobsecmgr を実行するには、CA ARCserve Backup ユーザと同等の権限が必要です。ほとんどの場合、CA ARCserve Backup システム アカウント向けにユーザが定義したパスワードを使用できます。同等の権限を割り当てるには、[ca_auth](#) (P. 33) を使用します。

構文

ca_devmgr のコマンド ラインの構文は、以下のような形式です。

```
ca_jobsecmgr
    [server arguments]
    <current security>
    <new security>
```

使用方法

ca_jobsecmgr コマンドは、以下のオプションおよび引数を含みます。

- サーバ引数
- 現在のセキュリティ
- 新しいセキュリティ

サーバ引数 (server arguments)

`ca_jobsecmgr` コマンドは、変更 (ユーザ名およびパスワード) を特定の CA ARCserve Backup サーバまたは現在の CA ARCserve Backup ドメインのすべての CA ARCserve Backup サーバに適用するかどうかを指定する方法を提供します。

`ca_jobsecmgr` コマンドには、以下のサーバ引数が含まれます。

注: 1 回の `ca_jobsecmgr` コマンドで使用できるのは、以下の引数のうち 1 つのみです。

`-s`

この引数を使用して、特定の CA ARCserve Backup サーバ上のユーザ名またはパスワードを変更します。

`-d`

この引数を使用して、CA ARCserve Backup ドメインのすべてのサーバ上のユーザ名またはパスワードを変更します。

現在のセキュリティオプション

いずれかのサーバ引数を指定した場合は、ジョブの現在のセキュリティクレデンシャルを指定する必要があります。

`ca_jobsecmgr` コマンドには、以下の現在のセキュリティオプションが含まれます。

`ca_jobsecmgr`

`-u`

`-p`

`-u`

この引数は、ジョブ キュー内のジョブに使用されている、現在のソース ノードのユーザ名を指定します。

ドメイン ユーザを指定するには、以下の形式を使用します。

<ドメイン>*<ユーザ名>

`-p`

この引数を使用して、ジョブ キュー内のジョブに使用されている、現在のソース ノードのパスワードを指定します。

新しいセキュリティオプション

現在のユーザ名およびパスワードを指定すると、ジョブに適用する新しいセキュリティ認証情報を提供できます。新しいセキュリティオプションを使用して、新しいパスワードおよびオプションで新しいユーザ名を指定できます。

`ca_jobsecmgr` コマンドには、以下の新しいセキュリティオプションが含まれます。

`ca_jobsecmgr`

-np
-nu

-np

このオプションを使用して、ソース ノード ユーザがジョブ キュー内のジョブに対して使用する新しいパスワードを指定します。

-nu

オプションです。このオプションは、キュー内のジョブに対して使用される新しいソース ノード ユーザ名を指定します。

ドメイン ユーザを指定するには、以下の形式を使用します。

ドメイン*ユーザ

例

`ca_jobsecmgr` コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 特定の CA ARCserve Backup サーバ上のユーザ名とパスワードを変更するには、以下の構文を使用します。

```
ca_jobsecmgr -s mahcine1 -u administrator -p xyz -nu administrator2 -np xyz2
```

- CA ARCserve Backup ドメインのすべてのサーバ上のユーザ名とパスワードを変更するには、以下の構文を使用します。

```
ca_jobsecmgr -d -u administrator -p xyz -nu administrator2 -np xyz2
```


第 9 章: ca_log - ログ コマンド

ログ コマンド (`ca_log`) は、CA ARCserve Backup ログを表示、ページ、クリア、および管理することができるユーティリティです。`ca_log` を使用すると、アクティビティログとジョブ ログを表示することができます。また、これらはいずれもジョブステータスマネージャからも利用することができます。

構文

`ca_log` のコマンドラインの構文は、以下のような形式です。

```
ca_log [-cahost <hostname>] [-entiredomain]
    -browse
    -view <logname> [view options]
    -purge <logname> [purge options][-yes]
    -clear <logname>[-yes]
    -help
    -examples
```

注: 「ARCserve Manager (コンソール)」モードを使用して CA ARCserve Backup をインストールした場合、ローカル マシンから `-cahost` スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソール インストール モードは、ローカル マシンに CA ARCserve Backup のすべての機能を実際にインストールするわけではないので、このコマンドを CA ARCserve Backup を含むプライマリまたはメンバサーバにリモートでサブミットする際には `-cahost` を含めることが必須です。そうしないと、コマンドが失敗します。

使用方法

`ca_log` コマンドには、以下のオプションが含まれます。

- その他のオプション
- ログ名操作オプション
- 表示オプション
- ページ オプション

その他のオプション

`ca_log` コマンドには、関連するすべてのオプションを表示したり、CA ARCserve Backup がログ生成プロセス中に使用する基本ポリシーおよびパラメータを定義するために使用される、その他のオプションが含まれます。

`ca_log` コマンドには、以下のその他のオプションが含まれます。

-cahost <hostname>

処理をホストするシステムの名前を識別します。

スイッチはフィルタの役割を果たします。処理をドメイン内の特定のマシン上で実行する場合は、コマンドにこのスイッチを含める必要があります。このスイッチがないと、すべての処理はドメイン全体に適用されます。

注: 「ARCserve Manager (コンソール)」モードを使用して CA ARCserve Backup をインストールした場合、ローカル マシンから `-cahost` スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソール インストールモードは、ローカル マシンに CA ARCserve Backup のすべての機能を実際にインストールするわけではないので、このコマンドを CA ARCserve Backup を含むプライマリまたはメンバ サーバにリモートでサブミットする際には `-cahost` を含めることが必須です。そうしないと、コマンドが失敗します。

-entiredomain

検索範囲を制限し、検索範囲をデフォルトでローカル ホストにする代わりに、ドメインに含まれるログのみを対象にします。`-entiredomain` が指定されていない場合、`ca_log` コマンドは特定のホストのすべてのログに検索範囲を拡大します。

-usage

基本的な `ca_log` コマンドの一覧を表示します。

-help

`ca_log` ヘルプトピックを開きます。

-examples

`ca_log` の使用例が記載されたヘルプトピックを開きます。

ログ名操作オプション

ログファイルの操作および表示に使用できるオプションには数種類あります。

ca_log コマンドには、以下のログ名操作オプションが含まれます。

```
ca_log [-cahost <hostname>] [-entiredomain]
        -clear <logname>[-yes]
        -browse
```

-clear <logname> [-yes]

指定されたログ名を持つすべてのログをデータベースから削除します。

注: このオプションにより、データベース内のすべての情報が失われます。

-browse

特定のホスト上の表示できるすべてのログファイルを一覧表示します。

ドメイン全体のログ名すべてを一覧表示します。このスイッチが **-cahost** に含まれている場合、特定のホストのすべてのログ名が一覧表示されます。

表示オプション

ログの表示に使用できるオプションには数種類あります。

ca_log コマンドには、以下のログ表示オプションが含まれます。

```
ca_log [-cahost <hostname>][-entiredomain]
        -view <logname>[<view options>]
            -jobID <ID>
            -groupbyjob
            -before <mm/dd/yyyy>
            -after <mm/dd/yyyy>
            -monitor
            -sev
```

注: コマンド出力で Unicode 文字が正しく表示されるようにするには、最初に、以下のように環境変数「ARCSERVE_UNICODE_DISPLAY_CMDL」に 1 の値を設定してから、コマンドを実行する必要があります。

```
C:¥Documents and Settings¥cb>set ARCSERVE_UNICODE_DISPLAY_CMDL=1
```

また、これらの Unicode 文字を正しく表示するには、以下のように環境変数を設定した後で、ca_log の出力をリダイレクトする必要があります。

```
C:¥>ca_log -view activity.log >UNICODE_log.txt
```

logname

1 つまたは複数の表示オプションに従って、ログ名で指定されたログを表示します。

-jobID <ID>

アクティビティログ向けのジョブ ID またはジョブリスト ID で指定されたログを表示します。

例:

- ca_log -view activity.log -jobID 5
- ca_log -view activity.log -jobID 1,2,3 (カンマで区切る)

-groupbyjob

表示されるファイル名がアクティビティログの場合のみ利用できます。

ca_log -view コマンドがまずジョブ ID でグループ化されたログを表示し、次にジョブ ID を持たないジョブのログを表示するように指定します。ジョブログは、他のログの前にまずマスタジョブとその子ジョブログをグループ化します。

このスイッチを含めないと、アクティビティログは時系列で表示されます。

このスイッチを含めると、アクティビティログはジョブごとに表示され、グループ化されます。

たとえば、出力は以下ようになります。

- アクティビティログ内のジョブ 1 のログ
- アクティビティログ内のジョブ 2 のログ ...
- アクティビティログ内のジョブ n のログ
- アクティビティログ内のジョブ ID を持たないログ

-before <mm/dd/yyyy>

指定したログ名を持つ、日付 `mm/dd/yyyy` より前のエントリをすべて表示します。

注: `-before` オプションと `-after` オプションを共に使用して、ある期間のログを表示できます。

-after <mm/dd/yyyy>

指定したログ名を持つ、日付 `mm/dd/yyyy` より後のエントリをすべて表示します。

注: `-before` オプションと `-after` オプションを共に使用して、ある期間のログを表示できます。

-monitor

指定したログ名を持つログを表示し、開いた状態を無期限に維持します。このログ名は、ログに追加エントリが記録されるとリアルタイムで更新されます。

指定した最後のログの表示後に `ca_log` コマンドが終了しないようにして、ログが利用可能になったときに、ログファイルから追加ログの読み取りと表示を続行します。

-sev

指定したログ名を持つエントリごとにその重要度レベルを表示します。重要度レベルは、日付カラムの後に表示されます。重要度レベルは以下のとおりです。

I - 情報

W - 警告

E - エラー

注: `-sev` オプションは、`-jobID`、`-before`、および `-after` オプションと共に使用できます。

パージオプション

`ca_log` パージオプションを使用して、時間を基準としてログの最も古い部分を削除します。`-purge` は、一時的なオンデマンドのコマンドで、コマンドを発行する際に開始されます。

`ca_log` コマンドには、以下のログファイルパージオプションが含まれます。

```
ca_log [-cahost <hostname>][-entiredomain]
```

```
    -purge <logname>
```

```
    -olderthan num <day[s] | week[s] | months[s] | year{s}>
```

logname

`-olderthan` パージオプションで指定した時間基準に従って、指定したログ名を持つログをパージします。

```
-olderthan num <day[s] | week[s] | months[s] | year[s]>
```

指定した日数、週数、月数、または年数よりも古いログをパージします。時間基準に基づいて、指定したログ名を持つ情報がデータベースからパージされます。

注: 指定する日数は 1 ~ 365 の間です。

パージの期間を指定する際には、適切に「`day`」、「`week`」、「`month`」、または「`year`」の単語を付ける必要があります。例:

```
ca_log -purge <log name> -olderthan 3 day
ca_log -purge <log name> -olderthan 3 week
ca_log -purge <log name> -olderthan 3 month
ca_log -purge <log name> -olderthan 3 year
```

例

ca_backup コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下のコマンドは、ドメイン全体のアクティビティログを表示します。

```
ca_log -entiredomain -view Activity.log
```

- 以下のコマンドは、指定したホストのアクティビティログを表示します。

```
ca_log -cahost hostname -view Activity.log
```

- 以下のコマンドは、メンバサーバのアクティビティログを表示します。

```
ca_log -cahost <member server> -view Activity.log
```

- 以下のコマンドは、まずマスタ ジョブとそれに対応する子ジョブのログごと、次にその他のアクティビティログごとにグループ化して、ドメイン全体のアクティビティログを表示します。

```
ca_log -entiredomain -view Activity.log -groupbyjob
```

- 以下のコマンドは、指定したジョブのアクティビティログを表示します。ジョブがマスタ ジョブの場合、出力されるログには、マスタ ジョブのログだけでなく、それに対応する子ジョブのログも含まれます。

```
ca_log -view jobXXX.log
```

- 以下のコマンドは、ドメイン全体からアクティビティログをクリアします。

```
ca_log -entiredomain -clear Activity.log
```

- 以下のコマンドは、指定したホストからアクティビティログをクリアします。

```
ca_log -cahost hostname -clear Activity.log
```

- 以下のコマンドは、指定したホスト上で、4 日よりも経過したアクティビティログのすべてのエントリをパージします。

```
ca_log -cahost hostname -purge Activity.log -olderthan 4 days
```

- 以下のコマンドは、1 日を経過したジョブ 8 のログのすべてのエントリをパージします。

```
ca_log -purge Job8.log -olderthan 1 day
```


第 10 章: ca_merge - マージ マネージャ コマンド

マージ マネージャ コマンド (`ca_merge`) は、CA ARCserve Backup マージ マネージャへのコマンドライン インターフェースです。このコマンドは、マージ ジョブを作成してジョブ キューにサブミットするときに使用します。バックアップ メディアからデータベース情報を CA ARCserve Backup データベースにマージできます。マージ マネージャから実行可能な機能はすべてコマンドラインでも実行できます。

構文

`ca_merge` のコマンドラインの構文は、以下のような形式です。

```
ca_merge
  [-cahost <hostname>]
  <source args>
  <run job args>
  <options>
```

注: [-cahost <hostname>] スイッチはオプションです。このコマンドをローカル ホスト上で使用する場合、このスイッチは必要ありません。ただし、リモートで実行する場合は、hostname を指定する必要があります。cahost スイッチで指定されたホストは、メンバ サーバまたはプライマリサーバにすることができます。ただし、CA ARCserve Backup は常にプライマリサーバのジョブ キューにジョブを追加し、その後、プライマリサーバが、ジョブが処理される際にこのスイッチに従ってジョブを適切なサーバ(プライマリ/メンバ)へ送信します。

注: 「ARCserve Manager (コンソール)」モードを使用して CA ARCserve Backup をインストールした場合、ローカル マシンから -cahost スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソール インストール モードは、ローカル マシンに CA ARCserve Backup のすべての機能を実際にインストールするわけではないので、このコマンドを CA ARCserve Backup を含むプライマリまたはメンバサーバにリモートでサブミットする際には -cahost を含めることが必須です。そうしないと、コマンドが失敗します。

使用方法

ca_merge コマンドを使用すると、以下のオプションおよび引数を設定できます。

- その他のオプション
- ソース引数
- ジョブ実行引数
- マージオプション
- ジョブ ステータスのリターンコード

その他のオプション

ca_merge コマンドには、関連するすべてのオプションを表示したり、CA ARCserve Backup がマージプロセス中に使用する基本ポリシーおよびパラメータを定義するのに使用されるその他のオプションが含まれます。

ca_merge コマンドには、以下のその他のオプションが含まれます。

-cahost <hostname>

処理をホストするシステムの名前を識別します。

処理をリモートシステムで実行する場合は、コマンドにこのスイッチを含める必要があります。

この処理をローカルシステムで実行する場合は、このスイッチは必要なく、コマンドに含める必要はありません。

注: -cahost をコマンドに含める場合、その処理をホストするシステム(ローカルまたはリモート)のホスト名も指定する必要があります。

注: 「ARCserve Manager (コンソール)」モードを使用して CA ARCserve Backup をインストールした場合、ローカルマシンから -cahost スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソールインストールモードは、ローカルマシンに CA ARCserve Backup のすべての機能を実際にインストールするわけではないので、このコマンドを CA ARCserve Backup を含むプライマリまたはメンバサーバにリモートでサブミットする際には -cahost を含めることが必須です。そうしないと、コマンドが失敗します。

-f <file name>

コマンドのスイッチおよびパラメータを含むファイル名を指定するのに使われます。

このスイッチにより、シェルによるコマンドラインからの入力文字数制限 (1024 文字) を克服できます。また、このスイッチを使用して、ファイルにパスワードを保存することにより、これらのパスワードを隠すこともできます。

usage

基本コマンドのリストを表示します。

-help

ca_merge ヘルプトピックを開きます。

-examples

ca_merge の使用例が記載されたヘルプトピックを開きます。

ソース引数

ca_merge コマンド ソース引数を使用すると、マージするデータを指定できます。これらの引数を使用して、マージ処理に使用するグループ、テープ、およびセッションを指定できます。

ca_merge コマンドには、以下のソース引数が含まれます。

ca_merge

```
[-group <group name> -tape <tape name> [<tape ID>]]
```

```
[-tape <tape name> [<tape ID>]]
```

WINDOWS での使用法は以下のとおりです。

```
[-currenttapeseq][-allsessions|-session [<session #>|<session range>]]
```

UNIX での使用法は以下のとおりです。

```
[-currenttapeseq][-allsessions|-session <session range>]
```

-group <group name> -tape <tape name> [<tape ID>]

マージジョブで使用するテープグループ名を指定します。

-group を含める場合は、-tape 情報も含める必要があります。

-tape <tape name> [<tape ID>]

マージジョブで使用するテープを指定します。テープ ID は省略可能です。テープ ID は、同じ名前のテープが複数存在するときに使用します。

-currenttapeseq

マージジョブに現在のテープ シーケンスを使用するよう指定します。

-allsessions

マージジョブのためにテープのすべてのセッションをマージするように指定します。

注: すべてのセッションおよびテープ セット スパンを複数のシーケンスにマージする場合、この操作が正常終了するにはシーケンス番号 1 のテープが存在する必要があります。

-session [<session #> /<session range>]

テープの単一のセッションをマージするのか、または複数のセッションをマージするのかを指定します。複数セッションをマージするには、セッション範囲を指定します。

例:

「MYTAPE」というテープのセッション 27 をマージするには、以下のコマンドを使用します。

```
ca_merge -tape MYTAPE -session 27
```

「MYTAPE」というテープのセッション 9 ~ 24 をマージするには、以下のコマンドを使用します。

```
ca_merge -tape MYTAPE -session 9-24
```

ジョブ実行引数

`ca_merge` コマンドは、ジョブ実行引数を提供しており、これを使用してマージジョブにジョブ実行の方法を指定できます。`ca_merge` のジョブ実行オプションを使用すると、マージジョブをサブミットして即座に実行したり、ホールド状態のジョブをサブミットしたり、または後の日時で実行するようにジョブをスケジュールすることができます。選択する方法によって、マージジョブがいつ実行されるかが決まります。

重要: すべてのジョブがスケジュール時間どおりに開始するには、メンバサーバのシステム時間と対応するプライマリサーバのシステム時間を同期させる必要があります。**Windows Time Service** を使用して、ドメイン内のすべての **ARCserve** サーバ上の時刻を同期します。

`ca_merge` コマンドには、以下のジョブ実行引数が含まれます。

```
ca_merge
  [-at <hh:mm>]
  [-on <mm/dd/yy[yy]>]
  [-hold | -runjobnow]
  [-description <description string>]
```

-at <hh:mm>

マージジョブの実行時刻を指定します。

注: CA ARCserve Backup のジョブのすべての時刻は、CA ARCserve Backup サーバの所在地のタイムゾーンに基づいてスケジュール設定されます。エージェントマシンが CA ARCserve Backup サーバとは異なるタイムゾーンにある場合、ジョブを実行する現地時間を計算する必要があります。

-on <mm/dd/yy[yy]>

マージジョブの実行日を指定します。

-hold

マージジョブをホールド状態でサブミットします。

-runjobnow との併用はできません。

-runjobnow

マージジョブを即座にサブミットし、実行します。

-hold との併用はできません。

`-description <description string>`

マージ ジョブにコメントを追加します。

注: 文字列に空白文字が含まれる場合は、文字列を二重引用符 ("") で囲む必要があります。

マージ オプション

`ca_merge` コマンドを使用すると、ジョブ全体に適用されるさまざまなマージ オプションを指定できます。

`ca_merge` コマンドには、以下のマージ オプションが含まれます。

`ca_merge`

[データベースの操作オプション] (UNIX ホスト用)

[復号化パスワード リスト オプション]

[ログ オプション] (UNIX でのみ使用)

[ジョブ実行前/後の処理オプション]

[終了コード オプション]

[メディア オプション]

[その他のマージ オプション]

[ジョブ ステータス オプション]

データベースの操作オプション

注: このオプションは、UNIX でのみ使用されます。

`ca_merge` コマンドには、以下のデータベース オプションが含まれます。

`ca_merge`

[`-partialdbupdate`]

`-partialdbupdate`

CA ARCserve Backup データベースにジョブ情報とセッション情報のみを記録します。

復号化パスワードリスト オプション

`ca_merge` コマンドには、以下の復号化パスワードリスト オプションが含まれます。

`ca_merge`

```
[decryptionpwdlist <password 1> [<password 2>] [<password 3>] ... [password 8>]
```

`[decryptionpwdlist <password 1> [<password 2>] [<password 3>] ... [<password 8>]`

セッションが暗号化されている場合に使用される、復号化パスワードのリストが提供されます。マージ ジョブに異なるパスワードを持つ複数のセッションが含まれる場合、**CA ARCserve Backup** はセッションごとに停止して、パスワードを要求しません。代わりに、指定した復号化パスワードは組み合わせリストとしてパッケージ化され、暗号化された各セッションがマージされるたびに、このリストが自動的にチェックされます。

必要なパスワードが復号化パスワードリストに含まれていた場合、ジョブは、さらにユーザ入力を求めることなく続行されます。必要なセッションパスワードが復号化リストに含まれていなかった場合は、その暗号化セッションの続行を許可する前に、セッションパスワードを入力するようメッセージが表示されます。

復号化パスワードリストには、最大 **8** 個のパスワードを含めることができます。各パスワードはスペースで区切ります。各パスワードは最大 **23** 文字であり、スペースまたはカンマを含むことはできません。

ログ オプション

注: このオプションは、UNIX でのみ使用されます。

`ca_merge` コマンドには、以下のログ オプションが含まれます。

`ca_merge`

```
[-logfile <file name> [summary | allactivity]]  
[-snmp] [-tng] [-email <email address>] [-printer <printer name>]
```

`-logfile <file name> [summary | allactivity]`

マージジョブ実行中のアクティビティを、`filename` で指定されたファイルに記録します。全アクティビティまたはアクティビティのサマリのみを記録するように指定できます。

-snmp

SNMP (Simple Network Management Protocol) アラートを有効化します。

-tng

Unicenter Network and Systems Management (NSM) アラート(旧名 TNG)を有効化します。

-email <email address>

指定された電子メール アドレスに、アクティビティログのコピーを送信します。

-printer <printer name>

指定されたプリンタに、アクティビティログのコピーを送信します。

このプリンタは環境設定ファイル `ARCServe_HOME/config/caloggerd.cfg` で設定しておく必要があります。

ジョブ実行前/後の処理オプション

`ca_merge` コマンドには、以下のジョブ実行前/後の処理オプションが含まれます。

`ca_merge`

```
[ -preexec <command> ]  
[ -preexec timeout <minutes> ]  
[ -postexec <command> ]  
[ -prepostuser <user name> ]  
[ -prepostpassword <user password> ]
```

-preexec <command>

指定したコマンドをジョブの開始前に実行します。

コマンドはフル パスで指定してください。

注: このオプションを使用するには、`-prepostuser` オプションも指定する必要があります。

-preexec timeout <minutes>

マージジョブが開始されるまでに待機する時間を分単位で指定し、ジョブの開始前に実行されるコマンドが完了する時間を確保します。

-postexec <command>

指定したコマンドをジョブの完了後に実行します。

コマンドはフルパスで指定してください。

注: このオプションを使用するには、**-prepostuser** オプションも指定する必要があります。

-prepostuser <user name>

このマージジョブをサブミットするユーザのユーザ名です。

-prepostpassword <user password>

このマージジョブをサブミットするユーザのパスワードです。

終了コード オプション

ca_merge コマンドには、以下の終了コード オプションが含まれます。

ca_merge

```
[-exitcode <exit code1>]
[-skip_delay|-skip_job]
[-skip_post]
```

-exitcode <exit code1>

処理の前に実行されるコマンドの終了コードを指定します。

-skip_delay スイッチ、**-skip_job** スイッチ、および **-skip_post** スイッチと共に使用します。

注: 遅延のスキップ、ジョブのスキップ、処理終了後のアプリケーションの実行をスキップの各オプションは、**CA ARCserve Backup** によって、戻された終了コードが選択された条件(等しい、大きい、小さい、等しくない)に一致することが検出された場合にのみ有効になります。

-skip_delay

指定した終了コードを受け取った場合、マージジョブを即実行します。

-skip_job

指定した終了コードを受け取った場合、マージジョブを完全にスキップします。

-skip_post

指定した終了コードを受け取った場合、実行後のコマンドをスキップします。

メディア オプション

ca_merge コマンドには、以下のメディア オプションが含まれます。

```
ca_merge
  [-firsttapetimeout <minutes>]
  [-spantapetimeout <minutes>]
```

-firsttapetimeout <minutes>

メディアがマージ ジョブに使用できる状態になるまでに待機する時間を、分単位で指定します。したがって、ここで指定された時間内にメディアが使用可能にならない場合、ジョブはタイムアウトして失敗します。

デフォルト: 5 分

-spantapetimeout <minutes>

使用可能なスパン メディアが実際にマージ ジョブで利用可能になるまで待機する時間を分単位で指定します。したがって、ここで指定された時間内にメディアがロードされない場合、ジョブはタイムアウトして失敗します。

無制限を指定した場合は、使用可能なメディアがロードされるか、ユーザによってキャンセルされるまで、ジョブは待機してプロンプトを表示し続けます。

デフォルト: 無制限

その他のマージ オプション

ca_merge コマンドには、以下のその他のマージ オプションが含まれます。

```
ca_merge
  [-list]
  (UNIX でのみ使用)
  -savescript <script name>
```

-list

マージ ジョブに使用可能なテープのリストを表示します。

-savescript <script name>

このジョブをジョブ キューにサブミットするのではなく、マージ ジョブをスクリプトとして保存します。保存したスクリプトは後でジョブ キューにロードできます。

注: このオプションは、UNIX でのみ使用されます。

ジョブ ステータス オプション

ca_merge コマンドには、以下のジョブ ステータス オプションが含まれます。

ca_merge

`[-waitForJobStatus [<polling interval (secs)>]]`

`-waitForJobStatus [<polling interval (secs)>]`

ca_merge コマンドは、ジョブが完了するまで待機してから終了します。その際、ジョブが正常に終了したのか、または失敗したのかを表す[リターンコード](#) (P. 209)が返されます。

<polling interval> 値は、ca_merge ユーティリティがキュー サービスを使用してジョブのステータスをチェックする頻度 (秒数) を定義します。デフォルトのポーリング間隔は 60 秒です。

リターンコード

ca_merge コマンドからのリターンコードは以下のとおりです。

リターンコード:

- **0** - コマンドは正常に実行されました。
- **-1** - コマンドの実行中にエラーが発生しました。

例

ca_merge コマンドの構文例は以下のとおりです。

マージされるソースがあるマシンの指定

- 以下のコマンドは、マージ用のソース マシンがデフォルトで localhost であることを指定します。

```
ca_merge -tape TAPE01
```

- 以下のコマンドは、マージ用のソース マシンが hostA であることを指定します。

```
ca_merge -cahost hostA -tape TAPE01
```

ソースの範囲の限定

- 以下のコマンドは、localhost のグループに属するテープのすべてのセッションをマージします。

```
ca_merge -group <グループ名> -tape <テープ名> [<テープ ID>]
```

- 以下のコマンドは、hostA 上のテープ TAPE01 のすべてのセッションをマージします。

```
ca_merge -cahost hostA -tape TAPE01
```

- 以下のコマンドは、hostA 上の tapeid B5E3 を持つテープ TAPE01 のすべてのセッションをマージします。

```
ca_merge -tape TAPE01 B53E
```

- 以下のコマンドは、指定したセッション範囲をマージします。

```
ca_merge -cahost hostA -tape TAPE01 -allsessions
```

```
ca_merge -cahost hostA -tape TAPE01 -session 6
```

```
ca_merge -tape TAPE02 -session 2-8
```

マージ ジョブが実行される時刻の制限

- 以下のコマンドは、マージが実行される現在の日付の時刻を指定します。

```
ca_merge -cahost hostB -tape TAPE03 -session 6-9 at 11:20
```

- 以下のコマンドは、マージが実行される日時を指定します。

```
ca_merge -cahost hostB -tape TAPE03 -session 6-9 -at 11:20 -on 07/03/25
```

- 以下のコマンドは、ホールド状態のマージ ジョブをサブミットします。

```
ca_merge -cahost hostB -tape TAPE03 -session 6-9 -hold
```

- 以下のコマンドは、ジョブを即時実行します。

```
ca_merge -cahost hostB -tape TAPE03 -session 6-9 -runjobnow
```

ジョブ ステータスの待機

- 以下のコマンドを使用して、ジョブが終了するまで、指定したポーリング間隔 (秒数) でジョブ ステータスを照会します。

```
ca_merge -cahost hostB -tape TAPE03 -session 6-9 -runjobnow -waitforjobstatus 60
```

第 11 章: ca_mmo - メディア管理マネージャコマンド

メディア管理マネージャコマンド(`ca_mmo`)は、コマンドプロンプトから CA ARCserve Backup メディア管理マネージャ(MMO Admin)を使用するためのコマンドラインインターフェースです。このコマンドは、ボルト処理とレポートを制御およびモニタするのに使用されます。メディア管理マネージャから使用できる多数の機能は、コマンドラインから使用できます。

注: この機能を有効にするには、CA ARCserve Backup Enterprise Module がインストールされている必要があります。

構文

ca_mmo のコマンドラインの構文は、以下のような形式です。

```
ca_mmo

[vault cycle options]
  -start [-alert] [-export] [-jid] [-vaultname <Vault Name>]
  -startAll [-alert] [-exportAll] [-jid] [-vaultname <Vault Name>]

[vault status reset options]
  -reset

[mmo database options]
  -init

[vaulted media options]
  -checkin -tapename <Tape name>
  -tapeid <Tape id #>
  -seqnum <Tape seq #>
  -type <Check in type>

  -checkin -serialnum <Tape serial #>
  -type <Check in type>
  Check in types: temp | manual | manualretire

[vault assignment options]
  -assign -tapename <Tape name>
  -tape id <Tape id #>
  -seqnum <Tape seq #>
  -vaultname <Vault Name>

  -assign -serialnum <Tape serial #>
  -vaultname <Vault Name>

[print report options]
  -printreport <Print type>
  Print types: VaultSelection | Shipping | ShippingContent | Receiving |
  ReceivingContent | InventoryByMedia | InventoryByVault

[vault export options]
  -export
  -exportAll
```

オプション

`ca_mmo` コマンドは、ボールド ポリシーを設定し、メディア リソースを管理するオプションを提供します。メディア管理マネージャ (MM Admin) を使用すると、テープをオフサイトの保管場所に移動したり、テープが上書きされないようにテープを保護するための保存ポリシーを定義することができます。また、テープ内のファイルに安全にアクセスしたり、テープ ライブラリ リソースの包括的なインベントリを保持することもできます。

`ca_mmo` コマンドには、以下のオプションが含まれます。

`-start [-alert] [-export] [-jid] [-vaultname <Vault Name>]`

プライマリ サーバまたはスタンドアロン サーバ上にあるローカル テープに対してボールド サイクルを開始し、次に、指定されたボールドからこれらのローカル テープをエクスポートします。

`-start` コマンドのみを使用し、オフサイト ボールドに送信する必要のあるテープが出力に含まれる場合は、これらのテープをチェンジャから手動でエクスポートする必要があります。テープを手動でエクスポートしない場合は、`-export` コマンドを使用します。

`-export` コマンドを使用すると、メディア管理マネージャによりローカルのボールド テープすべてが自動的にチェンジャのメールスロットにエクスポートされるので、これらのテープを手動でエクスポートする必要がありません。メールスロットの数よりも、エクスポートするボールド テープの数がメールスロットの数よりも多い場合、メディア管理マネージャは管理者がメールスロットを空にするのを待って、残りのテープのエクスポートを継続します。

メールスロットを空にする必要が生じた場合に通知を受け取るには、`-alert` オプションを使用します。通知の送信後、メディア管理マネージャはメールスロットが空になるのを最大で 24 時間待ちます。

`-startAll [-alert] [-exportAll] [-jid] [-vaultname <Vault Name>]`

プライマリ サーバとメンバ サーバ、またはスタンドアロン サーバ上にあるドメイン内のすべてのテープに対してボールド サイクルを開始し、次に、指定されたボールドからドメイン内のテープをすべてエクスポートします。

SAN 内でボールド サイクルを開始し、すべてのローカル テープおよび SAN 内のテープをエクスポートする場合は、`-exportAll` スイッチを `-startAll` と組み合わせて使用します。

-export

ローカルですべてのテープをエクスポートします。

このオプションは、**-start** または **-startAll** オプションと組み合わせて使用する場合を除き、通常は独立して使用します。ボルトサイクルを実行するたびにエクスポートを行いたくない場合に、このオプションを使用します。

-exportAll

すべてのローカルテープ、および、SAN 内あるいはプライマリサーバ/メンバサーバ上のすべてのテープをエクスポートします。

このオプションは、**-start** または **-startAll** オプションと組み合わせて使用する場合を除き、通常は独立して使用します。ボルトサイクルを実行するたびにエクスポートを行いたくない場合に、このオプションを使用します。

-jid

ジョブ ID を指定します。

-reset

ボルトのステータスをリセットします。

-init

メディア管理マネージャデータベースを初期化します。

-checkin -tapename <Tape name> -tapeid <Tape id #> -seqnum <Tape seq #> -type <Check in type>

テープ名、ID、およびシーケンス番号を使用して、メディアをテープサービスにチェックインします。

チェックインタイプには、一時チェックイン **<temp>**、手動チェックイン **<manual>**、永久(手動およびリタイア)チェックイン **<manualretire>** があります。

-checkin -serialnum <Tape serial #> -type <Check in type>

シリアル番号を使用して、メディアをテープサービスにチェックインします。

チェックインタイプには、一時チェックイン **<temp>**、手動チェックイン **<manual>**、永久(手動およびリタイア)チェックイン **<manualretire>** があります。

-assign -tapename <Tape name> -tapeid <Tape id #> -seqnum <Tape seq #> -vaultname <Vault Name>

テープ名、ID、およびシーケンス番号を使用して、メディアをボールドに割り当てます。

ボールド基準記述子 (VCD) を選択するときに、制御データセットとして [ユーザ割り当て] オプションを選択している場合、このコマンドまたは **-assign -serialnum** コマンドを使用して特定のテープを割り当てる必要があります。

-assign -serialnum <Tape serial #> - vaultname <Vault Name>

メディアのシリアル番号を使用して、メディアをボールドに割り当てます。

ボールド基準記述子 (VCD) を選択するときに、制御データセットとして [ユーザによる割り当て] オプションを選択している場合、このコマンドまたは **-assign -tapename** コマンドを使用してテープを割り当てる必要があります。

-printreport <Print type>

レポートを出力します。

出力するレポートの種類に応じて、<Print type> に「VaultSelection」、「Shipping」、「ShippingContent」、「Receiving」、「ReceivingContent」、「InventoryByMedia」、「InventoryByVault」と入力します。

-usage

基本 **ca_mmo** コマンドのリストを表示します。

例

ca_mmo コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下の構文は、すべてのテープをローカルでエクスポートします。

```
ca_mmo -export
```

- 以下の構文は、すべてのローカルテープおよび SAN 内のすべてのテープをエクスポートします。

```
ca_mmo -exportAll
```

- 以下の構文は、ボルトサイクルを開始し、指定されたボルトのすべてのローカルテープをエクスポートします。

```
ca_mmo -start | -startall [-alert] [-export] [-jid] [-vaultname <Vault Name>]
```

- 以下の構文は、SAN 内のボルトサイクルを開始し、指定されたボルトのすべてのローカルテープおよび SAN 内のテープをエクスポートします。

```
ca_mmo -startAll -exportAll [-vaultname <Vault Name>]
```

第 12 章: ca_qmgr - キュー マネージャ コマンド

キュー マネージャ コマンド (`ca_qmgr`) はジョブ ステータス マネージャ とのコマンドライン インターフェイス であり、CA ARCserve Backup のジョブ キュー にサブミットされたジョブを モニタ および 制御 できます。これらのジョブ管理コマンドは、情報を取得したり、ジョブ キュー 中のジョブを操作したりするのに使われます。ジョブ ステータス マネージャ および アクティビティ ログ マネージャ から実行可能な機能は、すべて コマンドライン でも 実行 できます。

構文

ca_qmgr のコマンドラインの構文は、以下のような形式です。

```
ca_qmgr [-cahost <hostname>] [-entiredomain]
  -list [<job #>
  [jobid][jobtype][jobstatus][execheost][execdate][exectime][lastresult][owner][
  description]]
  -listscripts
  -load <job script> [<script owner>]
  -addscript <job script>
  -removescript <job script> [<script owner>]
  -changestatus <job #> <ready|hold>
  -changedate <job #> <mm/dd/yy[yy]>
  -changetime <job #> <hh:mm>
  -stop <job #>
  -view <job #>
  -delete <job #>
  -waitForJobStatus <job #> [<polling interval <secs>>]
  -move <-s_server <source primary server>> <-d_server <dest primary server>>
  [-m_server <member server>] [-jobnum <<job #>>] [-hold]
  -changeSessionPasswd <job number> [<old password> <new password>]
  -usage
  -help
  -examples
```

注: [-cahost <hostname>] スイッチはオプションです。このコマンドをローカルホスト上で使用する場合、このスイッチは必要ありません。ただし、リモートで実行する場合は、hostname を指定する必要があります。cahost スイッチで指定されたホストは、メンバサーバまたはプライマリサーバにすることができます。ただし、CA ARCserve Backup は常にプライマリサーバのジョブキューにジョブを追加し、その後、プライマリサーバが、ジョブが処理される際にこのスイッチに従ってジョブを適切なサーバ(プライマリ/メンバ)へ送信します。

注: 「ARCserve Manager (コンソール)」モードを使用して CA ARCserve Backup をインストールした場合、ローカルマシンから -cahost スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソールインストールモードは、ローカルマシンに CA ARCserve Backup のすべての機能を実際にインストールするわけではないので、このコマンドを CA ARCserve Backup を含むプライマリまたはメンバサーバにリモートでサブミットする際には -cahost を含めることが必須です。そうしないと、コマンドが失敗します。

使用方法

ca_qmgr コマンドを使用すると、以下のオプションおよびコマンドを設定できます。

- その他のオプション
- ジョブ キュー コマンド
- ジョブ スクリプトコマンド
- ジョブ固有のコマンド

その他のオプション

`ca_qmgr` コマンドには、関連するすべてのオプションを表示したり、CA ARCserve Backup がジョブ キューにサブミットしたジョブに使用する基本ポリシーおよびパラメータを定義するのに使用されるその他のオプションが含まれます。

`ca_qmgr` コマンドには、以下のその他のオプションが含まれます。

`-cahost <hostname>`

処理をホストするシステムの名前を識別します。

処理をリモートシステムで実行する場合は、コマンドにこのスイッチを含める必要があります。

この処理をローカルシステムで実行する場合は、このスイッチは必要なく、コマンドに含める必要はありません。

注: [`-cahost <hostname>`] スイッチはオプションです。このコマンドをローカルホスト上で使用する場合、このスイッチは必要ありません。ただし、リモートで実行する場合は、`hostname` を指定する必要があります。`cahost` スイッチで指定されたホストは、メンバサーバまたはプライマリサーバにすることができます。ただし、CA ARCserve Backup は常にプライマリサーバのジョブキューにジョブを追加し、その後、プライマリサーバが、ジョブが処理される際にこのスイッチに従ってジョブを適切なサーバ(プライマリ/メンバ)へ送信します。

注: 「ARCserve Manager (コンソール)」モードを使用して CA ARCserve Backup をインストールした場合、ローカルマシンから `-cahost` スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソールインストールモードは、ローカルマシンに CA ARCserve Backup のすべての機能を実際にインストールするわけではないので、このコマンドを CA ARCserve Backup を含むプライマリまたはメンバサーバにリモートでサブミットする際には `-cahost` を含めることが必須です。そうしないと、コマンドが失敗します。

`-entiredomain`

検索範囲を制限し、検索範囲をデフォルトでローカルホストにする代わりに、ドメインに含まれるジョブのみを対象にします。`-entiredomain` が指定されていない場合、`ca_qmgr` コマンドは特定のホストのすべてのジョブに検索範囲を拡大します。

`-usage`

基本的な `ca_qmgr` コマンドのリストを表示します。

-help

ca_qmgr ヘルプトピックを開きます。

-examples

ca_qmgr の使用例が記載されたヘルプトピックを開きます。

ジョブ キュー コマンド

ca_qmgr コマンドには、ジョブ キューの表示および制御を可能にするジョブ キュー コマンドが含まれます。

ca_qmgr コマンドには、以下のジョブ キュー コマンドが含まれます。

```
ca_qmgr [-cahost <hostname> [-entiredomain] -list  
  [<job #>  
    [jobid]  
    [jobtype]  
    [jobstatus]  
    [exechost]  
    [execdate]  
    [exectime]  
    [lastresult]  
    [owner]  
    [description]]
```

-list

現在のジョブ キューおよびジョブの実行がスケジュールされているメンバサーバが表示されます。

job

ジョブ キューにある、指定したジョブ番号のすべてのジョブを一覧表示します。ジョブ番号を指定しないと、**-list** コマンドは指定したホスト上のすべてのジョブを一覧表示します。従属オプションを追加して、指定したジョブに関連するさまざまな情報を表示するように指定することもできます。

jobid

指定したジョブのジョブ ID を含めます。

jobtype

指定したジョブのジョブ タイプを含めます。

jobstatus

指定したジョブのジョブ ステータスを含めます。

exechost

指定したジョブの実行ホストを含めます。

execdate

指定したジョブの実行日を含めます。

exectime

指定したジョブの実行時刻を含めます。

lastresult

指定したジョブの最終結果を含めます。

owner

指定したジョブのオーナーを含めます。

description

指定したジョブの説明を含めます。

ジョブ固有のコマンド

ca_qmgr コマンドには、個々のジョブのモニタおよび制御を可能にするジョブ固有のコマンドが含まれます。

ca_qmgr コマンドには、以下のジョブ固有のコマンドが含まれます。

```
ca_qmgr [-cahost <hostname>] [-entiredomain]
  -changestatus <job #> <ready|hold>
  -changedate <job #> <mm/dd/yy[yy]>
  -changetime <job #> <hh:mm>
  -stop <job #>
  -view <job #>
  -delete <job #>
  -waitForJobStatus <job #> [<polling interval <secs>>]
  -move <-s_server <source primary server>> <-d_server <dest primary server>>
  [-m_server <member server>] [-jobnum <job #>] [-hold]
  -changeSessionPasswd <job #> [<old password> <new password>]
```

-changestatus <job #> <ready|hold>

ジョブ ステータスを「レディ」に変更するか、ジョブを「ホールド」状態にします。

例:

```
ca_qmgr -changestatus 12 hold
```

-changedate <job # mm/dd/yy[yy]>

ジョブの実行日を変更します。

例:

```
ca_qmgr -changedate 12 06/04/01
```

-changetime <job # hh:mm>

ジョブの実行時刻を変更します。

例:

```
ca_qmgr -changetime 12 12:08
```

注: CA ARCserve Backup のジョブのすべての時刻は、CA ARCserve Backup サーバの所在地のタイムゾーンに基づいてスケジュール設定されます。エージェントマシンが CA ARCserve Backup サーバとは異なるタイムゾーンにある場合、ジョブを実行する現地時間を計算する必要があります。

`-changeSessionPasswd <job #> [<old password> <new password>]`

レディ、ホールド、または終了ステータスを持つ、指定したバックアップジョブのセッションパスワードを変更します。以下の2つの形式のいずれかを使用して、このコマンドを実行できます。

- このスイッチを使用して、新旧のセッションパスワードをすべて1行に指定できます。

```
ca_qmgr -changeSessionPasswd 5 AAA BBB
```

- このスイッチを使用し、新旧いずれのパスワードも含まないと、それぞれのパスワードを入力するように要求されます

```
ca_qmgr -changeSessionPasswd 5
```

古いパスワードを入力してください。
新しいパスワードを入力してください。
新しいパスワードを確認してください。

job

セッションパスワードを変更するバックアップジョブのジョブ番号を指定します。

old password

バックアップジョブに対して置き換えられる古いセッションパスワードを指定します。このパラメータはオプションですが、これを含める場合は、新しいパスワードも含める必要があります。

new password

バックアップジョブに適用される新しいセッションパスワードを指定します。このパラメータはオプションですが、古いパスワードを含める場合は、これを空にできません。

注:

- バックアップジョブが以前のセッションパスワードを持たない場合は、新しいセッションパスワードを追加できません。
- 入力した古いパスワードと指定したジョブの元のセッションパスワードが一致しない場合、このコマンドは失敗します。
- 古いセッションパスワードのみを含め、新しいセッションパスワードを含めない場合、このコマンドは失敗します(新しいセッションパスワードは空にできません)。
- セッションパスワードの最大長は23文字です。

-stop <job #>

現在実行中のジョブを停止します。繰り返しジョブの場合、シーケンスの次のジョブがキューされます。一度だけ実行するジョブの場合、ジョブは停止し、削除されます。ジョブが「ホールド」の場合、何も起こりません。

例:

```
ca_qmgr -stop 12
```

重要: ジョブの停止前に確認は表示されません。ジョブは、本当に中止してもよいかどうかの確認なしに中止されます。

-view <job #>

ジョブ番号の詳細を表示します(ジョブ サマリ)。

例:

```
ca_qmgr -view 12
```

-delete <job #>

実行中でないジョブを削除します。実行中でないジョブを削除すると、そのジョブはジョブ キューから完全に削除されます。

例:

```
ca_qmgr -delete 12
```

注: 実行中のジョブを削除するには、削除する前にジョブを中止する必要があります。

-waitForJobStatus <job #> [<polling interval <secs>>]

ca_qmgr コマンドは、ジョブが完了するまで待機し、完了後にプロンプトに戻ります。オプションの <polling interval> は、内部的なジョブ ステータスのポーリング間隔を示します。

<polling interval> の値は、ca_qmgr ユーティリティがキュー サービスに対してジョブ ステータスをチェックする間隔(秒数)を定義します。デフォルトのポーリング間隔は 60 秒です。

注: ジョブ番号がジョブ キュー内に存在しなければ、コマンドは停止します。ジョブ番号がジョブ キュー内に存在することを確認してください。

```
-move <-s_server <source primary server>> <-d_server <dest primary server>>
[-m_server <member server>] [-jobnum <job #>] [-hold]
```

サーバ間でジョブを移動します。このコマンドを含める場合は、ソースサーバおよびデスティネーションサーバを指定する必要があります。さらに、従属オプションを含めて移動するジョブを定義できます。従属オプションを含めないと、ソースのプライマリサーバ上のすべてのジョブがデスティネーションのプライマリサーバにデフォルトで移動します。

-s_server <source primary server>

ジョブの移動元となるソースのプライマリサーバを指定します。ソースのプライマリサーバ名を含める必要があります。

-d_server <dest primary server>

ジョブの移動先となるデスティネーションのプライマリサーバを指定します。デスティネーションのプライマリサーバ名を含める必要があります。

-m_server <member server>

移動ジョブが実行されるホストを指定します。このオプションを含める場合は、メンバサーバを指定する必要があります。

-jobnum <job #>

移動されるジョブのジョブ番号を指定します。このオプションを含める場合は、ソースのプライマリサーバ上のジョブ番号を指定する必要があります。

-hold

このオプションを含める場合、ソースのプライマリサーバ上でジョブの移動が正常終了後に、デフォルトでは削除される代わりに、ホールドのステータスに変更されるように指定します。

ジョブ スクリプト コマンド

ca_qmgr コマンドには、ジョブ スクリプトの制御および使用を可能にするジョブ スクリプト コマンドが含まれます。

ca_qmgr コマンドには、以下のジョブ スクリプト コマンドが含まれます。

```
ca_qmgr [-cahost <hostname>] [-entiredomain]
-listscripts
-load <job script> [<script owner>]
-addscript <job script>
-removescript <job script> [<script owner>]
```

-listscripts

ARCserve_HOME/jobscripsts フォルダにある、使用可能なジョブ スクリプトを表示します。

ジョブ スクリプトとは保存したジョブ ファイルのことで、拡張子は.asx です。CA ARCserve Backup マネージャの GUI では、どのジョブでもジョブ スクリプトとして保存できます。

例:

```
ca_qmgr -listscripts
```

-load <job script> [<script owner>]

以前に保存されたジョブ スクリプトをロードし、実行します。

ロードするスクリプトは、CA ARCserve Backup のホーム ディレクトリに保存しておく必要があります。

例:

```
ca_qmgr -load myscript caroot
```

注: X.asx は、プライマリ サーバにのみロード可能です。ca_qmgr -load X.asx をメンバ サーバで実行すると、エラーが発生します。

-addscript <job script>

ジョブ スクリプトを取り込んで登録します。

ジョブ スクリプト ファイル名とパスを指定します。ジョブ スクリプト ファイルが、指定されたパスから CA ARCserve Backup ホーム ディレクトリにコピーされます。

例:

```
ca_qmgr -addscript C:%myscript.asx
```

-removescript <job script> [<script owner>]

ジョブ スクリプトを削除して登録を取り消します。

ジョブ スクリプト ファイルは、CA ARCserve Backup ホーム ディレクトリから削除されます。

例:

```
ca_qmgr -removescript myscript caroot
```

例

ca_qmgr コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下の構文を使用すると、現在のジョブ キューを表示できます。

```
ca_qmgr -list
```

- 以下の構文を使用すると、ドメインのすべてのジョブを表示します。

```
ca_qmgr -list -entiredomain
```

- 現在実行中のジョブ(この例では、Job 5)を停止するには、以下の構文を使用します。

```
ca_qmgr -stop 5
```

- 以下の構文を使用すると、ジョブを削除できます(この例では、ジョブ 5)。

```
ca_qmgr -delete 5
```

- 以下の構文を使用すると、利用可能なジョブ スクリプトを表示できます。

```
ca_qmgr -listscripts
```

- 以下の構文を使用すると、特定のパスからジョブ スクリプトをインポートして登録できます。

```
ca_qmgr -addscript C:\%bkpjob1.asx
```

- 以下の構文を使用すると、保存されたジョブ スクリプトをロードして実行できます。

```
ca_qmgr -load bkpjob1
```

第 13 章: ca_recoverdb - データベース回復 コマンド

バックアップ ジョブを実行するたびに、バックアップされたマシン、ディレクトリ、およびファイルの情報が CA ARCserve Backup データベースに記録されます。また、そのジョブに使用されたメディアに関する情報も記録されます。これにより、ファイルをリストアする必要があるときに、簡単にそのファイルの場所を特定できます。データベース回復コマンド(`ca_recoverdb`)は自己プロテクト機能であり、CA ARCserve Backup データベースが失われた場合、そのデータベースを使用している CA ARCserve Backup ドメインによってバックアップされている場合にデータベースを回復できます。

注: `ca_recoverdb` ユーティリティは、`ca_restore` コマンドを起動して、データベース回復機能を実装します。`ca_recoverdb` ユーティリティは、CA ARCserve Backup データベースが SQL Server データベースか SQL Server 2005 Express Edition インスタンスかを自動的に判断し、`ca_restore` コマンドに適切なパラメータを提供します。

注: CA ARCserve Backup サーバをクラスタ対応に設定すると、すべての重要な ARCserve ベース関連のサービス(エージェント関連のサービスではない)が適切なクラスタ サービス(MSCS または NEC CLUSTERPRO)によってモニタされます。ARCserve ベース関連のサービスが失敗するか、またはシャットダウンする必要がある場合は、クラスタ サービスは自動的にその再起動を行い、それに失敗するとフェールオーバーをトリガします。このサービスを実行するには、ARCserve サービスを停止する必要があります。ただし、クラスタ対応の環境では、まずはクラスタ サービスを手動で停止して、サービスのモニタが続行されないようにし、自動再起動またはフェールオーバーが実行されないようにする必要があります。クラスタ サービスによる HA サービス モニタリングを停止する手順については、「管理者ガイド」を参照してください。

注: `ca_recoverdb` ユーティリティは、同じマシン上にある ARCserve データベース (ASDB) を回復するため、またはその ASDB のバックアップが作成された ARCserve ドメイン上にある ARCserve データベースを回復するためにのみ使用されます。あるマシン上に ASDB のバックアップを作成し、(同じ ARCserve ドメイン内ではない) 別のマシン上で回復した場合、このコマンドは使用できません。このような場合は、次のような 2 つの解決策があります。

解決策 1:

1. マシン A から DR バックアップを作成し、マシン B 上で回復します。
この解決策では、DR オプションをインストールする必要があります。

解決策 2:

1. マシン A と マシン B の両方に CA ARCserve Backup をインストールします。
2. マシン A で ASDB のバックアップを実行します。
3. テープをマシン B に移動し、マージ ジョブをサブミットして、マシン B 上の CA ARCserve Backup にテープの情報をマージします。
4. マシン B で、リストア マネージャを開き ([ツリー単位] オプションを使用)、[CA ARCserve Backup データベース] を参照します。
5. [CA ARCserve Backup データベース] を右クリックし、コンテキストメニューから [エージェント オプション] を選択します。
6. [エージェント リストア オプション] ダイアログ ボックスから、以下のオプションを選択します。
 - リストアで強制的に既存ファイルまたはデータベースに上書き
 - 現在の ARCserve データベースを元の場所として使用する
 - 現在の ARCserve ドメイン メンバシップを残しておく
7. リストア ジョブをサブミットします。

構文

`ca_recoverdb` のコマンドラインの構文は、以下のような形式です。

```
ca_recoverdb [ -cahost <hostname> ]
               [-i [n]]
               -username <username> [-password <password>]
               [-dbusername <database username> [-dbpassword <database password> ] ]
               [-sessionpassword [session password] -session password [session password]...]
               [-waitForjobstatus <polling interval>]
```

オプション

`ca_recoverdb` は、消失した CA ARCserve Backup データベースを回復するためのさまざまなオプションを提供します。

`ca_recoverdb` コマンドには、以下のオプションが含まれます。

`cahost <hostname>`

デフォルトのホストを、バックアップ ログから `cahost` が指定するホストへリダイレクトします。

例:

HostA - `ca_restore` の中で使用される、バックアップ ログに存在するデフォルトホスト。

HostB - 指定するホスト。

この例では、`cahost` スイッチを指定しないと、`ca_recoverdb` ユーティリティによって起動された `ca_restore` コマンドは以下のようになります。

```
ca_restore -cahost HostA
```

パラメータ **HostB** を使用して `cahost` スイッチを指定すると、`ca_recoverdb` ユーティリティによって起動された `ca_restore` コマンドは以下のようになります。

```
ca_restore -cahost HostB
```

-i [n]

対話モードを使用するように指定します。このスイッチを含めると、ベースラインとして使用するバックアップを選択することで、CA ARCserve Backup のデータベース回復を実施する時点を指定できます。対話モードが起動されると、ca_recoverdb は、ログ ファイルを持つ CA ARCserve Backup シーケンスのリストを表示します。それぞれのログ ファイルは、まずフル データベースバックアップで始まり、リストアするフル バックアップに依存するその他のすべてのバックアップを含みます (フル バックアップは、各セッションに対して「依存チェーン」のルートとなります)。

パラメータ *n* を使用して、選択対象の最新のバックアップ ログ セット (依存チェーン) の数を指定します。 *n* の値の範囲は、1 ~ 99 で、デフォルト値は 10 です。

フル バックアップ シーケンスを選択すると、リストア ポイントとして、どのセッションを使用するかを選択するように求められます。セッション選択後、ca_recoverdb ユーティリティがそのシーケンスの依存チェーンを判断し、ca_restore を使用して各セッション向けにリストア ジョブをサブミットします。

-i スwitchを含めないと、ca_recoverdb ユーティリティは最新のバックアップを指定した選択として自動的に使用し、そのセッション用に依存チェーンを構築します。これは、バックアップの最新の状態に復旧する場合に便利です。ただし、最新のバックアップが消失または破損している場合、対話モードを使用して古いセッションからリストアし、テープをマージして最新の情報を再統合することができます。

-username <username> [-password <password>]

実際のリカバリ ジョブを実行する、データベース エージェント用の認証情報を指定します。password オプションを含めないと、デフォルトでパスワード不要に設定されます。

-dbusername <database username> [-dbpassword <database password>]

データベース用の認証情報を指定します。database username およびそれに対応する database password を含めない場合、認証用にデフォルトで「dbusername」および「dbpassword」に設定されます。

`[-sessionpassword [session password] -sessionpassword [session password] ...]`

セッション用の認証情報を認証パスワードに設定するように指定します。

`[-waitForJobStatus <polling interval>]`

`ca_recoverdb` がジョブの完了まで待機し終了するまでの時間間隔(秒数)を指定します。その際、ジョブが正常に終了したのか、または失敗したのかを表すコードが返されます。

`<polling interval>` の値は、`ca_recoverdb` ユーティリティがキュー サービスに対してジョブ ステータスをチェックする間隔(秒数)を定義します。デフォルトのポーリング間隔は 60 秒です。

例

`ca-recoverdb` コマンドの構文例は以下のとおりです。

- `ASDB` がプライマリ サーバ上でホストされている場合に、`ASDB` を回復するには以下の構文を使用します。

```
ca_recoverdb.exe -username Administrator -password win_pwd
```

- `ASDB` セッションが暗号化されるかパスワード保護されている場合に、`ASDB` を回復するには以下の構文を使用します。

```
ca_recoverdb.exe -username Administrator -password win_pwd -sessionpassword ses_pwd
```

- 外部 `ASDB` サーバと `SQL` 認証が使用されている場合に、`ASDB` を回復するには以下の構文を使用します。

```
ca_recoverydb.exe -cahost machinename -username Administrator -password win_pwd -dbusername db_username -dbpassword db_password
```


第 14 章: ca_restore - リストア マネージャ コマンド

リストア マネージャへのコマンドライン インターフェースであるこのコマンド (`ca_restore`) を使用すると、リストア ジョブを作成してジョブ キューにサブMITしたり、関連するすべてのオプションを設定したりできます。リストア マネージャから実行可能な機能はすべてコマンドラインでも実行できます。`ca_restore` コマンドのオプションおよびスイッチを使用すると、グローバル オプションとグローバル フィルタの設定、リストア ジョブのソースとデスティネーションの選択、およびリストア ジョブのサブMIT (即実行またはスケジュールした時間での実行) が可能です。

構文

`ca_restore` のコマンドラインの構文は、以下のような形式です。

```
ca_restore [-cahost <hostname>]
           [global options]
           [global filters]
           -source [source arguments]
           -dest [destination arguments]
           [run job arguments]
           [info arguments]
```

注: [-cahost <hostname>] スイッチはオプションです。このコマンドをローカルホスト上で使用する場合、このスイッチは必要ありません。ただし、リモートで実行する場合は、`hostname` を指定する必要があります。`cahost` スイッチで指定されたホストは、メンバサーバまたはプライマリサーバにすることができます。ただし、CA ARCserve Backup は常にプライマリサーバのジョブキューにジョブを追加し、その後、プライマリサーバが、ジョブが処理される際にこのスイッチに従ってジョブを適切なサーバ(プライマリ/メンバ)へ送信します。

注: 「ARCserve Manager (コンソール)」モードを使用して CA ARCserve Backup をインストールした場合、ローカルマシンから `-cahost` スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソールインストールモードは、ローカルマシンに CA ARCserve Backup のすべての機能を実際にインストールするわけではないので、このコマンドを CA ARCserve Backup を含むプライマリまたはメンバサーバにリモートでサブミットする際には `-cahost` を含めることが必須です。そうしないと、コマンドが失敗します。

使用方法

`ca_restore` コマンドを使用すると、以下のオプションおよび引数を設定できます。

- その他のオプション
- リストア オプション
- フィルタ引数
- ソース引数
- デスティネーション引数
- ジョブ実行引数
- 情報引数
- リターンコード

リストア処理を構築するには、`ca_restore` 構文の中で指定した順序に従って、オプションのカテゴリを一度に 1 つずつ設定する必要があります。

その他のオプション

`ca_restore` コマンドには、関連するすべてのオプションを表示したり、CA ARCserve Backup がリストア プロセス中に使用する基本ポリシーおよびパラメータを定義するために使用される、その他のオプションが含まれます。

`ca_restore` コマンドには、以下のその他のオプションが含まれます。

```
ca_restore
[-cahost <hostname>] [info args]
[-f <file name>]
[-sessionpassword <session password/encryption key>]
[-waitForJobStatus [<polling interval (secs)>]]
[-help]
[-examples]
[-usage]
[allusage]
```

-cahost <hostname>

処理をホストするシステムの名前を識別します。

処理をリモートシステムで実行する場合は、コマンドにこのスイッチを含める必要があります。

この処理をローカルシステムで実行する場合は、このスイッチは必要なく、コマンドに含める必要はありません。

注: [-cahost <hostname>] スwitchはオプションです。このコマンドをローカルホスト上で使用する場合、このスイッチは必要ありません。ただし、リモートで実行する場合は、hostname を指定する必要があります。cahost スwitchで指定されたホストは、メンバサーバまたはプライマリサーバにすることができます。ただし、CA ARCserve Backup は常にプライマリサーバのジョブキューにジョブを追加し、その後、プライマリサーバが、ジョブが処理される際にこのスイッチに従ってジョブを適切なサーバ(プライマリ/メンバ)へ送信します。

注: 「ARCserve Manager (コンソール)」モードを使用して CA ARCserve Backup をインストールした場合、ローカルマシンから -cahost スwitchを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソールインストールモードは、ローカルマシンに CA ARCserve Backup のすべての機能を実際にインストールするわけではないので、このコマンドを CA ARCserve Backup を含むプライマリまたはメンバサーバにリモートでサブミットする際には -cahost を含めることが必須です。そうしないと、コマンドが失敗します。

-f <file name>

コマンドのスイッチおよびパラメータを含むファイル名を指定するのに使用します。

このスイッチにより、シェルによるコマンドラインからの入力文字数制限(1024文字)を克服できます。また、このスイッチを使用して、ファイルにパスワードを保存することにより、これらのパスワードを隠すこともできます。

-sessionpassword <session password/encryption key>

このデータをメディアからリストアするために必要となるセッション/暗号化パスワードを指定します。これらのセッションのいずれかからデータをリストアするには、バックアップ中にパスワードの入力が必要となります。

-waitForJobStatus [*polling interval (secs)*>]

このオプションが指定された場合、`ca_restore` コマンドはジョブが終了するまで待機し、ジョブの結果である成功または失敗を示すリターンコードを受けて終了します。

<polling interval> 値は、`ca_restore` ユーティリティがキュー サービスを使用してジョブのステータスをチェックする頻度(秒単位)を定義します。デフォルトのポーリング間隔は 60 秒です。

-help

`ca_restore` ヘルプトピックを開きます。

-examples

`ca_restore` の使用例が記載されたヘルプトピックを開きます。

-usage

基本コマンドのリストを表示します。

allusage

すべての `ca_restore` コマンドとそのスイッチの一覧を表示します。

グローバル ジョブ オプション

`ca_restore` グローバル オプションを使用すると、ジョブ全体に適用されるさまざまなマージ オプションを指定できます。

`ca_restore` コマンドは、以下のグローバル オプションを提供します。

- メディア オプション
- デスティネーション オプション
- 操作オプション
- 実行前/後の処理オプション
- ログ オプション
- ウイルス オプション

リストア メディア オプション

`ca_restore` コマンドには、以下のグローバル メディア エクスポート オプションが含まれます。

`ca_restore`

```
[-firsttapetimeout <minutes<1-9999>>]  
[-spantapetimeout <minutes<1-9999>>]  
[-optimizerestoreoff]
```

`-firsttapetimeout <minutes>`

使用可能なメディアがリストア ジョブで実際に利用可能になるまで待機する時間を分単位で指定します。したがって、ここで指定された時間内にメディアが使用可能にならない場合、ジョブはタイムアウトして失敗します。

デフォルト: 5 分

`-spantapetimeout <minutes>`

使用可能なスパン メディアが実際にリストア ジョブで利用可能になるまで待機する時間を分単位で指定します。したがって、ここで指定された時間内にメディアがロードされない場合、ジョブはタイムアウトして失敗します。

無制限を指定した場合は、使用可能なメディアがロードされるか、ユーザによってキャンセルされるまで、ジョブは待機してプロンプトを表示し続けます。

デフォルト: 無制限

`-optimizerestoreoff`

リストアの最適化オプションを無効にします。

リストア処理中に **CA ARCserve Backup** で重複するバックアップ セッションが検出された場合、1 つのセッションはテープ メディア上にあり、もう 1 つのセッションはファイル システム デバイス上にあれば、**CA ARCserve Backup** は、デフォルトでファイル システム デバイス上のセッションからデータをリストアします。

ほとんどの場合、ファイル システム デバイスからデータをリストアする方が、テープ メディアからリストアするより高速です。ただし、テープ メディアや高速リーダ機能があるライブラリを使用する場合、またはご使用のファイル システム デバイスに関する既知の問題がある場合は、リストアの最適化オプションを無効にすることもできます。リストアの最適化オプションを無効にするには、このスイッチを `ca_restore` コマンドに含める必要があります。

デスティネーション オプション

`ca_restore` コマンドには、以下のグローバル デスティネーション オプションが含まれます。

`ca_restore`

```
[-nobase|-base|-entirepath]  
[-onconflict <overwrite|rename|skip|overwriteold>]  
[-createversion|-replaceversion|-restoreversion]
```

-nobase

デスティネーション パスにベース ディレクトリを作成せず、リストア中にソースベース ディレクトリの下のすべてのサブディレクトリを作成します。デフォルトでは、このオプションが選択されています。

-base

リストア中にベース ディレクトリからデスティネーション パスを作成します。

-entirepath

デスティネーション上にソースパス全体を作成します。親ディレクトリ上のどのファイルもリストアされません。ベース ディレクトリまでのディレクトリパスのみがデスティネーション上に作成されます。

-onconflict <overwrite|rename|skip|overwriteold|confirm>

ソースからコピーするファイルと同名のファイルがデスティネーション ディスクに存在する場合に、CA ARCserve Backup が使用する方法を選択します。

overwrite

ファイル名の重複に関係なく、すべてのソース ファイルをデスティネーションに上書きしリストアするように指定します。デスティネーション上の既存のファイルは、ソースからのファイルによって上書きされます。

デフォルトでは、このオプションが選択されています。

rename

ソース ファイルの名前を変更し、ファイル名は同じで拡張子が異なるファイルをデスティネーションへコピーするようにします。名前が変更された拡張子の形式は、ターゲット パーティションにあるファイル システムにより異なります。

skip

デスティネーションに同名のファイルが存在する場合、ソース ファイルをスキップしリストアしないように指定します。

overwriteold

より新しいファイルで上書きし、デスティネーション上の同名ファイルより修正日が新しいソース ファイルだけをリストアするように指定します。デスティネーションのファイルより修正日が古いソース ファイルは上書きされません。

-createversion

新しいファイル バージョンを作成するように指定します。CA ARCserve Backup は、すべてのファイルを元のファイルの新しいバージョンとしてリストアします。ターゲット ディレクトリ内のファイルは影響を受けません。

-replaceversion

ターゲット ディレクトリ内のファイルがリストア データ内のファイルと同じ名前およびバージョン番号を持つ場合、ファイル バージョンを置き換える(上書きする)ように指定します。

-restoreversion

ファイル バージョンのリストア(上書きしない)を指定すると、ターゲット ディレクトリ内のファイルがリストア データ内のファイルと同じ名前およびバージョン番号を持つ場合、CA ARCserve Backup はファイルをリストアしません。その他のすべてのファイルは、元の名前およびバージョン番号でリストアされます。

操作オプション

ca_restore コマンドには、以下のグローバル操作オプションが含まれます。

ca_restore

```
[-createemptydiroff]
[-restoreretry]
[-preservefileattroff]
[-nodbupdate [-stopdb [-restartdb]] | -partialdbupdate]
[-preserveuserspaceoff]
[-preservedirspaceoff]
```

-createemptydiroff

[ディレクトリの属性とセキュリティ情報をリストア]オプションをオフ(無効)にします。

空のディレクトリを作成せずに、既存のディレクトリ属性(「書き込み禁止」、「アーカイブ」および「隠しファイル」など)およびセキュリティデータをマシンにリストアするように指定します。

クライアントエージェントが **Windows** クライアントエージェントの場合、**CA ARCserve Backup** はディレクトリの属性とセキュリティ情報をリストアします。クライアントエージェントが **UNIX** クライアントエージェントの場合、**CA ARCserve Backup** は空のディレクトリを作成します。

-restoreretry

[レジストリファイルおよびイベントログをリストア]オプションをオン(有効)にします。

リストア用に選択されたセッションがレジストリファイルおよびイベントログファイルを持つ場合は、レジストリファイルおよびイベントログファイルをリストアのターゲットとなるマシンへリストアするように指定します。

-preservefileattroff

[ファイルの属性とセキュリティ情報をリストア]オプションをオフ(無効)にします。

既存のファイル属性(「書き込み禁止」、「アーカイブ」、「隠しファイル」などの)およびセキュリティデータをリストアするように指定します。

-nodbupdate [-stopdb [-restartdb]]

データベース記録オプションをオフ(無効)にします。

CA ARCserve Backup データベースに、このジョブの記録を保存しないように指定します。

-stopdb

リストア前にデータベース エンジンを停止します。

-restartdb

リストア後にデータベース エンジンを再起動します。

-partialdbupdate

[ジョブ情報のみ記録]オプションをオン(有効)にします。

CA ARCserve Backup データベースに、このジョブの記録を保存するように指定します。

ジョブ実行前/後の処理オプション

ca_restore コマンドには、以下の実行前/後のグローバル処理オプションが含まれます。

ca_restore

```
[ -preexec <command> ]  
[ -exitcode <exit code(>=0)> [ -skip_delay | -skip_job ] [ -skip_post ] ]  
[ -preexectimeout <minutes(0-32767)> ]  
[ -postexec <command> ]  
[ -skippostfail ]  
[ -skippostincmp ]  
[ -skippostcmp ]  
[ -prepostuser <user name> ]  
[ -prepostpassword <user password> ]
```

-preexec <command>

指定したコマンドをジョブの開始前に実行します。コマンドはフルパスで指定してください。

注: このオプションを使用するには、**-prepostpassword** オプションも指定する必要があります。**-prepostpassword** オプションを指定しないと、ジョブが失敗します。

-exitcode <exit code(>=0)> [-skip_delay|-skip_job] [-skip_post]

処理の前に実行されるコマンドの終了コードを指定します。-skip_delay スイッチ、-skip_job スイッチ、および -skip_post スイッチと共に使用します。

-skip_delay

指定された終了コードを受け取ったらただちにリストア ジョブを実行します。

-skip_job

指定された終了コードを受け取った場合に、処理後に実行されるコマンドをスキップします。

-skip_post

指定した終了コードを受け取った場合、実行後のコマンドをスキップします。

-skippostfail

ジョブが失敗した場合に実行後コマンドを実行しないように指定します。

-skippostincmp

ジョブが未完了の場合に実行後コマンドを実行しないように指定します。

-skippostcmp

ジョブが完了した場合に実行後コマンドを実行しないように指定します。

-preexectimeout <minutes(0-32767)>

リストア ジョブが開始されるまで待機する時間を分単位で指定して、処理の前に実行したコマンドが終了するまでの時間を確保します。指定する時間範囲は、0 ~ 32767 分です。

デフォルト: 0 分

-postexec <command>

指定したコマンドをジョブの完了後に実行します。コマンドはフルパスで指定してください。

注: このオプションを使用するには、-prepostpassword オプションも指定する必要があります。-prepostpassword オプションを指定しないと、ジョブが失敗します。

-prepostuser <username>

このリストア ジョブをサブミットするユーザ名を指定します。

`-prepostpassword <user password>`

このリストア ジョブをサブミットするユーザのパスワードを指定します。

ログ オプション

`ca_restore` コマンドには、以下のグローバル ログ オプションが含まれます。

`ca_restore`

`[-logfile <allactivity|summary|disabled|errorsonly>]`

`-logfile <allactivity | summary | disabled | errorsonly>`

リストア ジョブ実行時のアクティビティを、ジョブ ログに記録します。従属オプションから 1 つを指定し、記録される情報を制御する必要があります。

allactivity

ジョブ実行中に発生したすべてのアクティビティを記録します。

summary

ソース、デスティネーション、セッション番号、合計、およびエラーなどのサマリ情報のみを記録します。

disabled

ログが無効になり、ジョブに関する情報を記録しません。

errorsonly

ジョブの実行中に発生したエラーのみ記録します。

デフォルト: 統合なしのサマリです。

ウイルス オプション

ca_restore コマンドには、以下のグローバル ウィルス オプションが含まれます。

ca_restore

```
[-virus <skip|delete|rename|cure> [-virus_scanarchive]]
```

-virus

リストア処理中に自動的にウィルスをスキャンできます。ウィルス スキャンの従属オプションから 1 つを含める必要があります。

skip

ウィルスに感染したファイルをリストアしません。

rename

感染したファイルの拡張子を AVB に変更します。同じファイル名で拡張子が AVB のファイルがほかに存在する場合は、拡張子として AV0 が使用され、順次 AV1、AV2... となります。

delete

ウィルスに感染したファイルを削除します。

cure

ウィルスに感染したファイルの修復を試みます。

-virus_scanarchive

圧縮されたアーカイブ内の各ファイルを個別にチェックします。このオプションを選択すると、リストア処理のパフォーマンスが低下しますが、より確実にウィルスからファイルを保護できます。

グローバルフィルタオプション

フィルタを使用すると、特定のファイルやディレクトリをリストア ジョブに組み込んだり、ジョブから除外したりできます。フィルタを使用することで、目的のファイルを絞り込むことができます。フィルタには、ジョブ全体に適用されるグローバルフィルタ、特定のノードに適用されるノードレベルフィルタ、ボリュームレベルフィルタがあります。適用されるフィルタのレベルは、`ca_restore` コマンド内での `-filter` スイッチの位置によって決定されます。

重要: フィルタを誤って使用すると、リストア中にデータが欠落する可能性があります。フィルタを指定または適用する場合は注意してください。

注: CA ARCserve Backup では、組み込みおよび除外フィルタにワイルドカード文字であるアスタリスク「*」と疑問符「?」をサポートします。アスタリスクのワイルドカードは、任意の数の文字と一致するように指示し、疑問符のワイルドカードは、任意の一文字と一致するように指示します。

`ca_restore` コマンドには、以下のフィルタオプションが含まれます。

`ca_restore [-filter`

`<[include|exclude] <file|dir> <pattern>]`

`<[include|exclude] [<attribute> [hidden] [readonly] [system] [archive]]]`

`<[include|exclude] [<date> <modify|create|access> <onorbefore|onorafter> <mm/dd/yy[yy]>]>]`

`<[include|exclude] [<date> <modify|create|access> <between <mm/dd/yy[yy]> <mm/dd/yy[yy]>]>]`

`<[include|exclude] [<date> <modify|create|access> <within <count> <days|months|years>]>]`

`<[include|exclude] [<size> <equalto|greaterthan|lessthan> <size val> <Bytes|KBytes|MBytes|GBytes>]>]`

`<[include|exclude] [<size between <<low size val> <Bytes|KBytes|MBytes|GBytes>> <<high size val> <Bytes|KBytes|MBytes|GBytes>>]>]`

include

結果には、フィルタの条件を満たすファイルのみが含まれます。たとえば、ローカルハードディスクドライブ全体のリストアを選択して、¥SYSTEM ディレクトリ内のファイルを組み込むようフィルタを設定した場合、¥SYSTEM ディレクトリ内のファイルだけが CA ARCserve Backup によってリストアされます。それ以外のファイルはリストアされません。

exclude

除外は常に組み込みに優先します。たとえば、フィルタを追加して、拡張子が .exe のファイルを組み込み、さらにもう 1 つフィルタを追加して、¥SYSTEM ディレクトリを対象から除外するよう設定すると、¥SYSTEM ディレクトリに保存されている拡張子 .exe のファイルは、すべて除外されます。

file | dir <pattern>

指定したパターンに基づいて、ファイルまたはディレクトリを組み込むか除外するかを指定します。

注: ディレクトリを組み込むパターンフィルタを選択して、絶対パスを指定しなかった場合、ユーザが指定した条件に一致しないすべてのディレクトリにある空のディレクトリがリストアされます。リストア時に空のディレクトリが作成されることを防ぐには、リストアジョブを作成するときにグローバルリストアオプションの[空のディレクトリを作成する]を無効にします。

attribute

指定したファイル属性を持つファイルを組み込むか、または除外するかを指定します。

隠し

ディレクトリの一覧に表示されないファイル。たとえば、IO.SYS は隠しファイルです。

読み取り専用

変更できないファイル。

システム

使用しているマシンに固有のファイル。

アーカイブ

アーカイブビットが設定されたファイル。

date <modify|create|access> <onorbefore|onorafter> <mm/dd/yy[yy]>

指定した日付以前/以後に更新、変更、またはアクセスされたファイルを組み込むか、除外するかを指定します。

`date <modify|create|access> <between <mm/dd/yy[yy]> <mm/dd/yy[yy]>>`

指定した 2 つの日付の間に更新、状態変更、またはアクセスされたファイルを組み込むか、除外するかを指定します。

`date <modify|create|access> <within <count> <days|months|years>>`

指定された日数、月数、または年数以内に最後に更新、状態変更、またはアクセスされたファイルを組み込むか、除外するかを指定します。

`size <equalto|greaterthan|lessthan> <size val> <Bytes|KBytes|MBytes|GBytes>`

指定されたサイズ「に等しい」、「より大きい」、「より小さい」ファイルを組み込むか、除外するかを指定します。

`size between <<low size val> <Bytes|KBytes|MBytes|GBytes>> <<high size val> <Bytes|KBytes|MBytes|GBytes>>`

指定されたサイズの範囲内にあるファイルを組み込むか、除外するかを指定します。

注: グローバルフィルタオプションでは、以下のような条件があります。

- UNIX サーバの場合、CA ARCserve Backup は「-create」コマンドをファイルの変更日を指定しているものと自動的に解釈します。
- 更新時刻は、状態変更時刻とは異なります。更新時刻とは、ファイルの内容が変更された時刻のことです。状態変更時刻とは、ファイルのプロパティまたは属性が変更（権限や所有者情報の変更など）された時刻のことであり、内容が変更された時刻ではありません。
- ファイルシステムによっては状態変更日やアクセス日が記録されないため、これらのグローバルフィルタがジョブに使用できない場合があります。

ソース引数

`ca_restore` コマンドライン ユーティリティでは、ソース情報を表示するさまざまな方法が提供されます。どの方法を使用するかは、リストアの対象となるファイルと使用する必要のあるメディアについて把握している情報に依存します。

- ツリーの表示単位のリストア
-source [-group] [-filter]
- セッションの表示単位のリストア
-source -tape -session [-group] [-tapesession] [-filter]
- メディアの表示単位のリストア
-tape -session [-group] [-tapesessionpw] [-filter]

`ca_restore` コマンドライン ユーティリティでは、以下のソース引数がサポートされています。

```
ca_restore
  -source [<hostname> [<hostIP>]]<filelist>
  -tape <tapename> [<tapeID>]
  -session <session no>
  -group <groupname>
  -tapesessionpw <password/encryption key>
```

-source [<hostname> [<hostIP>]]<filelist>

リストアするファイルまたはディレクトリを指定します。

-source スイッチを、-tape および -session の指定なしで単独で使用した場合、ツリーの表示単位のリストアとして処理され、リストアされるファイルのバージョンは CA ARCserve Backup によって決定されます。

たとえば、異なるセッションやテープに複数回バックアップされているファイルを、テープまたはセッションを指定しないでリストアすると、CA ARCserve Backup によって最新のバックアップが検索されてリストアされます。

例:

</myfiles> の最新のバックアップをリストアするには、以下を使用します。

```
ca_restore -source /myfiles
```

テープ MYTAPE のセッション 24 にバックアップされた /myfiles をリストアするには、以下を使用します。

```
ca_restore -source /myfiles -tape MYTAPE -session 24
```

-tape <tapename> [<tapeID>]

リストア ジョブに使用するテープを指定します。テープ ID は省略可能です。テープ ID は、同じ名前のテープが複数存在するときに使用します。

-tape スイッチを -source スイッチと共に使用した場合、処理はセッションの表示単位のリストアとして扱われ、CA ARCserve Backup データベースがリストアに使用されます。リストア用に指定されたファイルおよびテープに関するレコードがデータベースに保管されているかどうかチェックされます。保管されていない場合、指定した情報が実際にすべて正しくても、リストア ジョブはサブミットされません。このテープおよびセッションは、リストア ジョブがサブミットされる前に CA ARCserve Backup データベースにマージする必要があります。

-tape スイッチを -source スイッチと共に使用しなかった場合、処理はメディアの表示単位のリストアとして処理され、CA ARCserve Backup データベースは使用されません。指定したテープ名またはセッション番号が間違っている場合、リストア ジョブは実行時に失敗します。

-tape スイッチは、-session スイッチと共に使用する必要があります。

-session <session no>

リストア ジョブに使用するテープ セッション番号を指定します。

このスイッチは -tape スイッチと共に使用する必要があります。

-group <group name>

リストア ジョブに使用するテープ グループを指定します。

-tapesessionpw <session password/encryption key>

テープからデータをリストアするために必要なセッション パスワードまたは暗号化キーを指定します。この作業は、バックアップ ジョブの実行中にセッション パスワードまたは暗号化キーが適用された場合にのみ必要になります。

デスティネーション引数

`ca_restore` コマンドラインユーティリティでは、以下のデスティネーション引数がサポートされています。

`ca_restore -dest`

```
[<hostname> <hosttype>] <path> [-username <username> -password <password>]
```

```
[<hostname>]<-orglocation>
```

```
[<hostname> <hosttype>] [-username <username> -password <password>] -database  
<dbase type> [dbase name] [dbase options]
```

注: `ca_restore` データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド `ca_restore allusage` を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

`-dest [<hostname> <hosttype>] <path> [-username <username> -password <password>]`

ファイルのリストア先にするデスティネーションマシンおよびディレクトリパスを指定します。ホスト名は省略可能です。省略した場合、デフォルトでローカルマシンが使用されます。

`hostname` を指定した場合は、`hosttype` は省略できません。使用できるホストタイプは、`unix`、`nt`、`nwagent`、`ntagent`、`w95agent`、および `mac` です。

ターゲットエージェントに接続するにはユーザ名とパスワードが必要です。また、リモートの場所にリストアできるのは、CA ARCserve Backup Agent がリモートマシンで実行されている場合のみです。

例:

テープ `MYTAPE` からローカルマシンの「`/restoreDir`」へセッション 2 ファイルをリストアするには、以下のコマンドを使用します。

```
ca_restore -tape MYTAPE -session 2 -dest "/restoreDir"
```

テープ `MYTAPE` からリモートマシン `RMACHINE` の「`/restoreDir`」へセッション 2 ファイルをリストアするには、以下のコマンドを使用します。

```
ca_restore -tape MYTAPE -session 2 -dest RMACHINE "/restoreDir"
```

-username <user name>

リストア先のデスティネーション マシンのユーザ名を指定します。ここで指定したユーザ名は、目的のマシンにログインするために使用されます。

注: `ca_restore -source` オプションを使用する場合、または、64 ビット マシン上で `ca_restore` を使用する場合は、`-username` を指定する必要があります。

-password <password>

デスティネーション マシンにユーザがログインする際に使用するパスワードを指定します。

注: `ca_restore -source` オプションを使用する場合、または、64 ビット マシン上で `ca_restore` を使用する場合は、`-username` を指定する必要があります。

-orglocation

バックアップの元の場所(元のマシンとパス)にファイルをリストアするよう指定します。

データベースの操作オプション

リストアするデータベース オブジェクトを選択する際に、一部のデータベース固有のオプションが適用されるように設定し、データベース関連の情報を表示できます。

`ca_restore` コマンドには、以下のデータベース オプションが含まれます。

`ca_restore`

```
[-dbusername <database username>]
[-dbpassword <database password>]
-database <database type> [database name]

[Oracle Database Options]
[Oracle RMAN Database Options]
[Exchange DOC Level Database Options]
[SQLServer Database Options]
[Sybase Agent Database Options]
[INFORMIX Agent Database Options]
[VSS Agent Database Options]
[LOTUS Agent Database Options]
```

`-dbusername <database username>`

リストアするデータベースにログインするためのデータベース ユーザ名を指定します。

`-dbpassword <database password>`

リストアするデータベースにログインするためのデータベース ユーザ名に対するパスワードを指定します。

`-database <dbase type> [dbase name]`

リストア先のデータベースタイプおよび名前を指定します。

サポートされている有効なデータベースタイプは、

- SQL Server (SQL)
- Exchange DOC Level (EXCHANGEDOC)
- Exchange DB Level (EXCHANGEDB)
- Sybase (SYBASE)
- Informix (INFORMIX)
- Oracle (ORACLE)
- Oracle RMAN (ORACLERMAN)
- Lotus (LOTUS)

例:

```
-database SQL
-database EXCHANGEDOC
-database EXCHANGEDB
-database SYBASE
-database INFORMIX
-database ORACLE
-database ORACLERMAN
-database LOTUS
```

注: Oracle インスタンス名とデータベース名が異なる場合、`-database` オプションは「`-database ORACLERMAN [データベース名]`」の代わりに「`-database ORACLERMAN [インスタンス名@データベース名]`」にする必要があります。

Oracle データベース オプション

ca_restore コマンドには、以下の Oracle データベース オプションが含まれます。

ca_restore

- [-oracle_controlfile] (UNIX Oracle エージェントのみ)
- [-oracle_overwritelog] (UNIX Oracle エージェントのみ)
- [-oracle_multistream] (UNIX Oracle エージェントのみ)
- [-oracle_recover] (UNIX Oracle エージェントのみ)

注: ca_restore データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド `ca_restore allusage` を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

注: CA ARCserve Backup CLI (コマンドライン インターフェース) を使用する場合、名前に DBCS (2 バイト文字セット) または MBCS (マルチバイト文字セット) が使用されている Oracle オブジェクトをバックアップまたはリストアするには、CA ARCserve Backup サーバとエージェント ボックスの言語設定が同じであることを確認する必要があります。

-oracle_controlfile

制御ファイルをリストアするように指定します。(UNIX Oracle エージェントのみ)

-oracle_overwritelog

リストア時に既存のログを上書きするように指定します。(UNIX Oracle エージェントのみ)

-oracle_multistream

複数のストリームを使用して Oracle をリストアするように指定します。(UNIX Oracle エージェントのみ)

-oracle_recover

データファイルのリストアされたコピーを取得し、データベースの REDO ログに記録されている変更があれば、そのデータファイルに適用するように指定します。データベース全体を回復するには、そこに含まれるデータファイルそれぞれに対して回復処理を実行します。(UNIX Oracle エージェントのみ)

例:

ca_restore ORACLE コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下のコマンドは、単一の表領域 (SYSAUX) をリストアします。

```
ca_restore -source [<hostname> [<hostIP>]]  
"dbora7@instance¥DIRECT_ONLINE¥2007_07_16-06:31 [40]¥SYSAUX" -dest  
[<hostname>] <-orglocation> -database ORACLE [dbase name] [dbase options]
```

```
ca_restore -source [<hostname> [<hostIP>]]  
"dbora7@instance¥OFFLINE¥2007_07_17-08:20 [44]¥SYSAUX" -dest [<hostname>]  
<-orglocation> -database ORACLE [dbase name] [dbase options]
```

- 以下のコマンドは、複数の表領域 (SYSAUX および USERS) をリストアします。

```
ca_restore -source [<hostname> [<hostIP>]] "  
dbora7@instance¥DIRECT_ONLINE¥2007_07_16-06:31 [40]¥SYSAUX" "  
dbora7@instance¥DIRECT_ONLINE¥2007_07_16-06:31 [40]¥USERS" -dest [<hostname>]  
<-orglocation> -database ORACLE [dbase name] [dbase options]
```

- 以下のコマンドは、制御ファイルをリストアします。

```
ca_restore -source [<hostname> [<hostIP>]] "  
dbora7@instance¥DIRECT_ONLINE¥2007_07_16-06:30 [37]¥CONTROL FILE" -dest  
[<hostname>] <-orglocation> -database ORACLE [dbase name] [dbase options]
```

- 以下のコマンドは、アーカイブ ログをリストアします。

```
ca_restore -source [<hostname>[<hostIP>]] "  
dbora7@instance¥DIRECT_ONLINE¥2007_07_16-06:30 [37]¥ARCHIVE LOG" -dest  
[<hostname>] <-orglocation> -database ORACLE [dbase name] [dbase options]
```

- 以下のコマンドは、データベース全体をリストアします。データベース全体をリストアするのに 5 つの表領域 (tbs1、tbs2、tbs3、tbs4、および tbs) があり、すべての表領域、アーカイブ ログ、および制御ファイルをリストアすると仮定します。

```
ca_restore -source [<hostname>[<hostIP>]] "  
dbora7@instance¥DIRECT_ONLINE¥2007_07_16-06:30 [37]¥tbs1" "  
dbora7@instance¥DIRECT_ONLINE¥2007_07_16-06:30 [37]¥tbs2" "  
dbora7@instance¥DIRECT_ONLINE¥2007_07_16-06:30 [37]¥tbs3" "  
dbora7@instance¥DIRECT_ONLINE¥2007_07_16-06:30 [37]¥tbs4" "  
dbora7@instance¥DIRECT_ONLINE¥2007_07_16-06:30 [37]¥tbs5" "  
dbora7@instance¥DIRECT_ONLINE¥2007_07_16-06:30 [37]¥ARCHIVE LOG" "  
dbora7@instance¥DIRECT_ONLINE¥2007_07_16-06:30 [37]¥CONTROL FILE" -dest  
[<hostname>] <-orglocation> -database <dbase type> [dbase name] [dbase options]
```

Oracle RMAN データベース オプション

ca_restore コマンドには、以下の Oracle RMAN データベース オプションが含まれます。

```
ca_restore -use_rmancat
    [-rman_catdbname <rman_catdbname>]
    [-rman_catuser <RMan Catalog User>]
    [-rman_catpassword <RMan Catalog Password>]
ca_restore [-put_online]
ca_restore [-oracle_controlfile]
ca_restore [-listbakset]
ca_restore [-rman_archlogsel

    al_all |
    al_pattern [-rman_alpattern <Archive Log Pattern>] |
    al_time [-rman_alfromtime <Archive Log From Time>] [-rman_aluntiltime <Archive
    Log Until Time>] |
    al_scn [-rman_alfromscn <Archive Log From SCN>] [-rman_aluntilscn <Archive Log
    Until SCN>] |
    al_logseq [-rman_alfromlogseq <Archive Log From Sequence>] [-rman_aluntillogseq
    <Archive Log Until Sequence>] [-rman_althread <Archive Log Number of Threads>]
    |
    al_none]
ca_restore [-rman_script <RMan Script>]
ca_restore [-rman_numberofchannels <Number of Channels>]
ca_restore [-rman_blocksize <Block Size (Bytes)>]
ca_restore [-rman_baksetnum <Validate Backup Set Number>]
ca_restore [-rman_restoremethod

    rm_lastbackup |
    rm_time [-rman_restoretime <Restore From Backup Made On (Date/Time)>] |
    rm_tag -rman_baktag <RMan Backup Tag> ]
ca_restore [-rman_recoverytype

    rec_norec |
    rec_untilendoflogs |
    rec_untilscn [-rman_recoveruntilscn <Until SCN>] |
    rec_untillogseq [-rman_recoveruntilseq <Until Log Sequence>] [-rman_recthread
    <Recovery Thread Number>] |
    rec_untiltime [-rman_recoveruntiltime <Until Time>]]
```

注: `ca_restore` データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド `ca_restore allusage` を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

注: CA ARCserve Backup CLI (コマンドライン インターフェース) を使用する場合、名前に DBCS (2 バイト文字セット) または MBCS (マルチバイト文字セット) が使用されている Oracle オブジェクトをバックアップまたはリストアするには、CA ARCserve Backup サーバとエージェント ボックスの言語設定が同じであることを確認する必要があります。

注: Oracle インスタンス名とデータベース名が異なる場合、`-database` オプションは「`-database ORACLERMAN [データベース名]`」の代わりに「`-database ORACLERMAN [インスタンス名@データベース名]`」にする必要があります。

`-use_rmancat`

カタログを使用するように指定します (推奨)。操作に RMAN カタログを使用するかどうかを指定します。常に RMAN カタログを使用することをお勧めします。カタログを使用しない場合、RMAN はデータベース制御ファイルを使用するためです。この制御ファイルが失われると、RMAN がデータベースをリストアできなくなります。

`-rman_catdbname <rman_catdbname>`

このスイッチはリカバリ カタログ データベースで Oracle RMAN `ca_restore` ジョブを実行しようとした場合にのみ、カタログ データベース名を含めるために使用されます。

デフォルト: 空白

`-rman_catuser <rman_catuser>`

RMAN カタログを所有する Oracle ユーザの名前を指定します。

`-rman_catpassword <rman_catpassword>`

RMAN カタログを所有するユーザのパスワードを指定します。

`-put_online`

リストアされた Oracle オブジェクトを回復処理実行後にオンラインにするように RMAN に指定します。

`-oracle_controlfile`

制御ファイルをリストアするように指定します。

-listbakset

ソース ノードで選択されたオブジェクトを含むすべてのバックアップ セットを表示するように指定します。

-rman_archlogsel

リストア マネージャ GUI の [ソース] パネルに「アーカイブ ログ」オブジェクトが含まれている場合は、このパネルの [アーカイブ ログの選択] セクションでリストアするアーカイブ ログを選択できます。選択内容はラジオ ボタン オプションによって示されます。[すべて] は、すべてのアーカイブ ログをバックアップします。

デフォルト: すべて

-rman_alpattern <rman_alpattern>

アーカイブ ログをその名前に基づいて選択するための文字列パターン。

-rman_alfromtime <rman_alfromtime>

このオプションを使用すると、リストアされるアーカイブ ログがその作成時刻に基づいて選択されます。このフィールドは、アーカイブ ログを選択する際の時刻下限を指定します。この時刻以降に作成されたアーカイブ ログのみがリストアされます。

-rman_aluntiltime <rman_aluntiltime>

このオプションを使用すると、リストアされるアーカイブ ログがその作成時刻に基づいて選択されます。このフィールドは、アーカイブ ログを選択する際の時刻上限を指定します。この時刻以前に作成されたアーカイブ ログのみがリストアされます。

-rman_alfromscn <rman_alfromscn>

このオプションを使用すると、リストアされるアーカイブ ログの範囲が時刻ではなく SCN (システム変更番号) によって決定されるように指定されます。このフィールドは、アーカイブ ログを選択する際の SCN 下限を示します。このフィールドは、「SCN 上限」フィールドが空白でない場合に空白にできます。

-rman_aluntilscn <rman_aluntilscn>

このオプションを使用すると、リストアされるアーカイブ ログの範囲が時刻ではなく SCN (システム変更番号) によって決定されるように指定されます。このフィールドは、アーカイブ ログを選択する際の SCN 上限を指定します。このフィールドは、ユーザが「SCN 下限」フィールドに値を入力した場合はオプションとなります。

-rman_alfromlogseq <rman_alfromlogseq>

このオプションを使用すると、アーカイブ ログのシーケンス番号に基づいてアーカイブ ログを選択できます。このフィールドは、リストアするアーカイブ ログを決定するための最小のログ シーケンス番号に対応します。このフィールドは、「ログ シーケンスの上限」フィールドに値が入力されている場合のみ空白にできます。

-rman_aluntillogseq <rman_aluntillogseq>

このオプションを使用すると、アーカイブ ログのシーケンス番号に基づいてアーカイブ ログを選択できます。このフィールドには、選択するアーカイブ ログのシーケンス番号の上限を指定します。このフィールドへの値の入力は、ユーザが「ログ シーケンス下限」フィールドに値を入力した場合はオプションとなります。

-rman_althread <rman_althread>

このオプションを使用すると、アーカイブ ログを生成した Oracle サーバを識別するスレッド番号を指定できます。このパラメータは、以下で説明されている「時刻ベース」オプション、「SCN ベース」オプション、または「ログ シーケンス ベース」オプションと組み合わせて使用されます。このオプションは、「すべて」オプションまたは「パターン ベース」オプションが使用されている場合は無視されます。

デフォルト: 1

注: この値は OPS (Oracle Parallel Server、Oracle 8 と 8i の場合) または RAC (Real Application Cluster、Oracle 9i と 10g の場合) でのみ使用され、それ以外の場合、スレッド番号は常に 1 です。

-rman_script <rman_script>

このオプションを使用すると、RMAN スクリプトのパスを入力できます。このフィールドに値を入力すると、Oracle エージェントはユーザが GUI に入力したその他すべてのオプションを無視します。スクリプトはそのまま RMAN に渡され、Oracle エージェントは通常どおりリストア操作を実行します。

-rman_numberofchannels <rman_numberofchannels>

このオプションを使用すると、リストア操作を実行するために RMAN によって割り当てられるチャンネルの数を指定できます。RMAN は同時に複数のジョブ (各チャンネルにつき 1 つ) をサブミットします。

デフォルト: 1 チャンネル

-rman_blocksize <rman_blocksize>

このオプションを使用すると、リストアの実行時に RMAN が Oracle エージェントに送るデータブロックのサイズを指定できます。このフィールドは、デフォルトで空白になります。バックアップ時にユーザが値を入力した場合は、このバックアップからリストアするときと同じブロックサイズを入力する必要があります。さもないと RMAN は、バックアップでのブロックサイズとリストアでのブロックサイズが一致していないことを示すエラーメッセージを生成します。その場合、バックアップ時に使用された値がエラーメッセージに表示されます。値が入力されない場合、RMAN は Oracle 8 または 8i では 64 KB を使用し、Oracle 9i では 256 KB を使用します。

このパラメータは Oracle 10g では廃止されました。

デフォルト: 空白

-rman_baksetnum

テープ上のデータのコピーが有効で、リストア可能かを必要に応じて確認するように指定します。このコマンドによって、RMAN が実際にデータをリストアすることはありません。

必要となるバックアップ セット番号は、ご使用の環境にある RMAN に接続し、「list backupset」コマンドを発行することで入手できます。バックアップ セット番号は、-listbakset オプションを ca_restore コマンド内で実行した結果からも取得することができます。また、利用可能なバックアップ セット情報を表示することもできます。

-rman_restoremethod

実施される方法に基づいてデータリストアを実行するように指定します。

rm_lastbackup

RMAN が最新のバックアップからデータのリストアを試行するように指定します。

rm_time [-rman_restoretime <Restore From Backup Made On (Date/Time)>]

データの取得先に RMAN が使用するセットを、指定した日時に基づいて指定します。

rm_tag -rman_baktag <RMan Backup Tag>

RMAN が指定したタグに従ってデータのリストアを試行するように指定します。実際のバックアップ時にバックアップ タグを指定した場合、タグ名を使用してデータをリストアできます。

`-rman_recoverytype`

実施される回復のタイプに基づいてデータ回復を実行するように指定します。

`rec_norec`

このスイッチは、データのリストア後に **RMAN** が回復処理を実行しないように指定します。

`rec_untilendoflogs`

RMAN が、現在のログの最後まで、できる限り最新の状態にデータを回復するように指定します。

`rec_untilscn [-rman_recoveruntilscn <Until SCN>]`

RMAN が、指定したシステム変更番号 (SCN) の値まで回復を実行するように指定します。

`rec_untilogseq [-rman_recoveruntilseq <Until Log Sequence>]`

指定したアーカイブ ログのシーケンスが表す時点までデータベース全体の回復を実行するように指定します。このアーカイブ ログは、回復プロセスの終了時点を示します。

`[-rman_recthread <Recovery Thread Number>] |`

指定した回復スレッド番号が表す時点までデータベース全体の回復を実行するように指定します。この値は、**OPS** または **RAC** 環境でアーカイブ ログを生成した Oracle サーバを識別するのに使用されます。

`rec_untiltime [-rman_recoveruntiltime <Until Time>]`

指定した時点までデータベース全体の回復を実行するように指定します。

Exchange DOC レベル データベース オプション

ca_restore コマンドには、以下の Exchange DOC レベル データベース オプションが含まれます。

注: このデータベース オプションは Exchange 2003 以前のみで使用できます。Exchange 2007 または Exchange 2010 ではサポートされていません。

```
ca_restore -source <hostname> < absolute path of the exchaneg doc file> -username
<username> -password <password>
-database EXCHANGEDOC <dbase name> [Exchange DOC options]
```

Exchange dbase オプション

```
[-exsis_createmailbox
[-exsis_createuser <password>]
[-exsis_overwrite|-exsis_overwritemodified
|-exsis_copyrestore|-exsis_copyrestoremodified]]
```

注: ca_restore データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド ca_restore allusage を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

-exsis_createmailbox

メールボックスが存在しない場合、作成するように指定します。

-exsis_createuser <password>

ユーザが存在しない場合、作成するように指定します。このスイッチを含める場合は、このユーザ用にデフォルトのパスワードも含める必要があります。

-exsis_overwrite

リストアされるファイルを上書きするように指定します。

-exsis_overwritemodified

リストアされるファイルが変更されている場合にのみ上書きするように指定します。

-exsis_copyrestore

ファイルをコピーとしてリストアするように指定します(上書きなし)。

-exsis_copyrestoremodified

ファイルが変更されている場合にのみ、ファイルをコピーとしてリストアします。

Exchange DB レベル データベース オプション

ca_restore コマンドには、以下の Exchange DB レベル データベース オプションが含まれます。

注: このデータベース オプションは Exchange 2003 以前のみで使用できます。Exchange 2007 または Exchange 2010 ではサポートされていません。

```
ca_restore -source <hostname> <storage group name > -dest [<hostname>] [-username <username> -password <password>]
-database EXCHANGEDB <dbase name> [Exchange DB options]
```

Exchange DB オプション

```
[-exdb_dismountdb]
[-exdb_allow_db_overwritten -exdb_rest_orig_sg|-exdb_rest_recovery_sg]
[-exdb_rest_create_sg]]
[-exdb_lastset]
[-exdb_apply_logs]
[-exdb_mount_db]
[-exdb_wait_for_db_commit]
[-exdb_temp_location]
```

注: ca_restore データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド ca_restore allusage を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

-exdb_dismountdb

データベースをリストア前に自動的にマウント解除するように指定します。

-exdb_allow_db_overwritten

データベースがリストアによって上書き可能になるように指定します。

-exdb_rest_orig_sg

データベースを元のストレージグループにリストアするように指定します。

-exdb_rest_recovery_sg

回復ストレージグループが存在する場合は、データベースをそのグループにリストアするように指定します。

-exdb_rest_create_sg

回復ストレージグループが存在しない場合は作成するように指定します。

-exdb_lastset

リストアが完了した後にデータベースをコミットするように指定します。リストアセットをリストアする場合は、セット内の最終のバックアップをリストアするときのみこのスイッチを使用します。このスイッチを含めない場合は、データベースが中間状態のまま残り、使用できるようにはなりません。ただし、後続の差分または増分リストアを実行することはできます。

-exdb_apply_logs

リストア後にコミットし、ログを適用するように指定します。

-exdb_mount_db

リストア後にコミットし、データベースをマウントするように指定します。

-exdb_wait_for_db_commit

リストア後にコミットし、データベースのコミットを待機するように指定します。

-exdb_temp_location

ログおよびパッチファイルの一時的な場所を指定します。

SQL Server データベース オプション

ca_restore コマンドには、以下の SQL Server データベース オプションが含まれます。

```
ca_restore -source -tape -session [-group] [-tapesessionpw]
-dest [<hostname>] [-username <username> -password <password>]
-database SQL <Instance name> [SQLServer agent options]
```

SQLServer エージェント オプション

```
[[[-sql_filegroup <filegroupname>[[-partial_restore] | [[-sql_file <file
name>]...[-sql_file <file name>]]]] | [-autorepair_online] |
[-autorepair_offline]][-force_replace_exist]
```

```
[-sql_stopat [-time <timestamp>]-at_mark <markname> [-after
<timestamp>]]-before _mark <markname> [-after <timestamp>]]]
```

```
[-sql_db_op | -sql_db_noop | -sql_db_readonly [<undo_filename>]]
```

```
[-sql_dbcc <-sql_after|-sql_before> [-physical_only] [-no_indexes]]
```

```
[-sql_restrict_access]
```

```
[-sql_keep_replication]
```

```
[-sql_move_rule [[db][[fg <filegroup name>]][[-drive <drive name>]][-path
<path>]]...]]
```

```
[-sql_move_rule [file <filegroup name> <file name> [[[-drive <drive name>]][-path
<path name>]][-name <file name>]]...]][-location <target location>]]]]
```

```
[-sql_move_rule [sql_transactionlog [[-drive <drive name>]][-path <path name>]]
...]]
```

```
[-sql_move_rule [sql_transactionlog <log file name> [[[-drive <drive
name>]][-path <path name>]][-name <file name>]]...]][-location <target
location>]]]]
```

```
[-sql_auto_off]
```

```
[-sql_forcenp]
```

```
[-sql_continue_after_checksum_failed]
```

注: ca_restore データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド ca_restore allusage を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

-sql_filegroup <filegroupname>

セッション内のリストア対象のファイル グループを指定します。

-sql_file <file name>

セッション内のリストア対象のファイルを指定します。

-partial_restore

部分リストアを実行するように指定します。

-autorepair_online

データファイル内の破損したページを自動的に修復し、データベースをオンラインの状態になるように指定します。

注: SQL2005 のみに適用されます。

-autorepair_offline

データファイル内の破損したページを自動的に修復し、データベースをオフラインの状態になるように指定します。

注: SQL2005 のみに適用されます。

-force_replace_exist

既存ファイルの上から強制リストアを実行するように指定します。

-sql_stopat

指定したイベント時(時刻またはマーク)のデータベースの状態にリストアするように指定します。

-time <timestamp>

指定された日時の状態までデータベースを回復するように指定します。Microsoft SQL Server は、バックアップの開始時間と終了時間を格納する各トランザクション ログの記録をリストアし、指定した時間に対してこの記録を検索します。

デフォルトでは、このオプションが選択されています。

-at_mark <markname>

指定したマークで回復を停止するように指定します。このオプションでは、指定されたログ マークの状態までデータベースを回復し、さらにそのマークを伴うトランザクションも回復します。**-after** オプションを含めない場合、指定した名前の最初のマークで回復が停止します。**-after** オプションを含める場合、指定日時以後の、指定された名前の最初のマークで回復が停止します。

マーク名は、トランザクション ログに特有のログ マークに適用され、ファイル/ファイル グループ リストアには適用されません。

-before_mark <markname>

ログ マークの前でリストアを停止するように指定します。このオプションでは、指定したマークの状態までデータベースを回復しますが、そのマークを伴うトランザクションは回復しません。**-after** オプションを含めない場合、指定した名前の最初のマークで回復が停止します。**-after** オプションを含める場合、指定日時以後の、指定された名前の最初のマークで回復が停止します。

マーク名は、トランザクション ログに特有のログ マークに適用され、ファイル/ファイル グループ リストアには適用されません。

-after <timestamp>

指定した日時のマークより後で回復が停止するように指定します。指定した時刻ではなく、ログ マークでのタイムスタンプ時のみで、指定されたマークでリカバリが停止されます。

-at_mark または **-before_mark** オプションと共にこのオプションを使用します。

-sql_db_op

データベースを使用可能な状態のままにし、追加のトランザクション ログをリストアできないように指定します。このオプションを選択すると、確定されていないトランザクションがリストア操作でロールバックされます。回復プロセス後、データベースは使用可能な状態になり、追加のリストアを実施できます。

-sql_db_noop

データベースは使用不可能な状態のままにし、追加のトランザクション ログはリストアできるようにします。このオプションを選択すると、コミットされていないトランザクションをロールバックしないようにリストアが行われます。他の差分バックアップまたはトランザクション ログを適用する場合は、このオプションまたはデータベースは読み取り専用オプションを選択する必要があります。

-sql_db_readonly [<undo_filename>]

データベースを読み取り専用モードのままにし、追加のトランザクション ログはリストアできるように指定します。

<undo_filename> は、データベースを読み取り専用の状態にしておくリストア向けのものです。

-sql_dbcc

データベースの整合性チェック (DBCC) を実行するように指定します。

sql_after

データベースのリストア後に DBCC を実行するように指定します。

sql_before

データベースのリストア前に DBCC を実行するように指定します。

-physical_only

データベース内のすべてのオブジェクトの構造上の整合性をチェックするために、データベースの物理的な整合性のみをチェックするように指定します。

-no_indexes

ユーザ定義のテーブル用インデックスをチェックせずに、データベースの整合性をチェックするように指定します。

-sql_restrict_access

新しくリストアされたデータベースへのアクセスを、db_owner、dbcreator、sysadmin の各ロールのメンバに制限するように指定します。

-sql_keep_replication

パブリッシュされたデータベースを、それが作成された場所ではないサーバにリストアする際に、レプリケーション設定を維持するように指定します。

-sql_move_rule

データベースを移動するように指定します。

sql_move_rule [db]

移動ルールがデータベース全体に適用されるように指定します。

-sql_move_rule [fg <filegroupname>]

移動ルールが指定したファイルグループに含まれるファイルに適用されるように指定します。

-sql_move_rule [file <filegroupname> <file name>]

移動ルールが指定したファイルに適用されるように指定します。

-sql_transactionlog [<log_filename>]

移動ルールがトランザクションログのファイルグループに適用されるように指定します。<log_filename> が指定されている場合、移動ルールは指定したログファイルに適用されるように指定します。

-drive <drive_name>

移動ファイルのターゲットドライブを指定します。

-path <path_name>

以下のように、移動ファイルのターゲットパスを指定します。

```
sqlserver%restoreddata
```

-name <file_name>

指定した移動ファイル用にターゲットファイル名を指定します。

-location <target location>

指定した移動ファイル用の場所を指定します。以下のように、<target location> パラメータの値には、ドライブ名、パス名、およびファイル名を含める必要があります。

```
c:%sqlserver%restoreddata%log.ldf
```

-sql_auto_off

セッション依存関係の自動選択をオフにし、リストア オプションを手動で選択できるように指定します。

自動選択オプションは、自動的に以下を選択します。

- リストア ジョブが正常に終了するために、そのジョブと共にリストアする必要があるその他のセッション
- リストア ジョブに適切なオプション

すべてのリストア ジョブでは、自動選択オプションがデフォルトです。

-sql_forcenp

名前付きパイプ プロトコルを使用するように指定します。

注: SQL2000 以前のバージョンのみに適用されます。

-sql_continue_after_checksum_failed

チェックサム エラーの後でリストア ジョブを続行するよう指定します。

注: SQL2005 のみに適用されます。

Sybase エージェント データベース オプション

ca_restore コマンドには、以下の Sybase エージェント データベース オプションが含まれます。

```
ca_restore [-database SYBASE -dbusername <dbusername> -dbpassword <dbpassword>]
```

Sybase エージェントには、リストア用のデータベース オプションは特に存在しません。

Informix エージェント データベース オプション

`ca_restore` コマンドには、以下の Informix エージェント データベース オプションが含まれます。

```
ca_restore [-database INFORMIX <instance> [-ifmx_method <both|physical|logical>]]
```

```
ca_restore [-database INFORMIX <instance> [-ifmx_lastlog <number (0-16959)> |  
-ifmx_time <time [MM/dd/yyyy,HH:mm:ss | yyyy-MM-dd,HH:mm:ss]>]]
```

注: `ca_restore` データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド `ca_restore allusage` を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

-ifmx_method <both|physical|logical>

リストア方法を指定します。

both

物理方式および論理方式の両方を使用し、`dbspaces`、`blobspaces`、および論理ログすべてをリストアします。

physical

物理リストア方式のみを使用し、`dbspaces` および `blobspaces` をすべてリストアするように指定します。

logical

論理リストア方式のみを使用し、ログのみをリストアするように指定します。

-ifmx_lastlog <number (0-16959)>

リストアするログの最終番号を指定します。この番号よりも後のログが存在する場合はリストアされません。

-ifmx_time <time [MM/dd/yyyy,HH:mm:ss | yyyy-MM-dd,HH:mm:ss]>

リストアを停止する時刻を指定します。

VSS エージェント データベース オプション

`ca_restore` コマンドには、以下の VSS エージェント データベース オプションが含まれます。

```
ca_restore -source <vss_path>
          -dest [-vss [-vss_auth]]
```

-VSS

VSS バックアップからデータをリストアするように指定します。

-vss_auth

VSS リストアでは、このオプションはリストアされたコピーが「権限付き」バージョンになるように強制します。つまり、リストアされたレプリカ セットが現在のレプリカより古い場合でも、古いデータがすべてのレプリケーション パートナーにレプリケートされます。権限付きのリストアは、通常、以前の既知の状態にシステムをリストアするために使用されるか、または管理者が間違っただけでオブジェクトを削除し、その変更がすべてのドメイン コントローラにレプリケートされてしまった場合に使用されます。管理者がこれらのオブジェクトを簡単に再作成できる場合は、権限付きリストアよりもこちらを選択する必要があります。権限付きリストアは、バックアップ取得後に作成された新規オブジェクトを上書きしません。

このオプションは、VSS ライタが DFS (分散ファイル システム) レプリケーション サービス ライタのような権限付きリストアをサポートする場合にのみ適用されます。ライタが権限付きリストアをサポートしない場合、このオプションには効果がありません。

デフォルトでは、CA ARCserve Backup は権限のない方式を使用します。

Lotus エージェント データベース オプション

ca_restore コマンドには、以下の Lotus エージェント データベース オプションが含まれます。

```
ca_restore [-database LOTUS <instance> [-lotus_recovery [-lotus_pointintime <mm/dd/yyyy> <hh:mm:ss>]] -dbusername <dbusername> -dbpassword <dbpassword>]
```

注: ca_restore データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド `ca_restore allusage` を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

-lotus_recovery

データベースを現在の日時(最新)まで回復します。

-lotus_pointintime <mm/dd/yyyy> <hh:mm:ss>

指定した時点(日付と時刻)までデータベースを回復します。回復は、データベースがバックアップされた後に発生したデータベースの変更を適用する処理です。回復を行うと、データベースが最近の状態に戻ります。

[Point-In-Time 回復]を選択すると、データベースの状態を特定の時点まで戻すことができるため、より柔軟にデータベースを回復できます。

ジョブ実行引数

`ca_restore` コマンドは、ジョブ実行引数を提供しており、これを使用してリストアジョブにジョブ実行の方法を指定できます。`ca_restore` のジョブ実行オプションを使用すると、リストアジョブをサブミットして即座に実行したり、ホールド状態のジョブをサブミットしたり、または後の日時で実行するようにジョブをスケジュールすることができます。選択した方式によって、リストアジョブを実行する日時が決まります。

重要: すべてのジョブがスケジュール時間どおりに開始するようにするには、メンバサーバのシステム時間と対応するプライマリサーバのシステム時間とを同期させる必要があります。**Windows Time Service** を使用して、ドメイン内のすべての **ARCserve** サーバ上の時刻を同期します。

`ca_restore` コマンドラインユーティリティは、以下のジョブ実行引数をサポートします。

`ca_restore`

```
[-at <hh:mm>]
[-on <mm/dd/yy[yy]>]
[-hold|-runjobnow]
[-description <description string>]
```

`-at <hh:mm>`

リストアジョブの実行時刻を指定します。

注: CA ARCserve Backup のジョブのすべての時刻は、CA ARCserve Backup サーバの所在地のタイムゾーンに基づいてスケジュール設定されます。エージェントマシンが CA ARCserve Backup サーバとは異なるタイムゾーンにある場合、ジョブを実行する現地時間を計算する必要があります。

`-on <mm/dd/yy[yy]>`

リストアジョブの実行日を指定します。

`-hold`

リストアジョブをホールド状態でサブミットします。

`-runjobnow` との併用はできません。

`-runjobnow`

リストアジョブを即座にサブミットし、実行します。

`-hold` との併用はできません。

-description <description string>

ジョブのコメントを追加します。文字列に空白文字が含まれる場合は、文字列を二重引用符("")で囲む必要があります。

情報引数

ca_restore コマンドライン ユーティリティでは、以下の情報引数がサポートされています。

ca_restore

```
[-listgroups]
[-listtapes]
[-listsessions <tapename> [<tapeID>]]
[-version [<hostname>] <path>]
[-findfile <file name> <ignorecase|casesensitive> <<hostname>|any> <search path>
<inclsubdir|noinclsubdir> <<mm/dd/yy[yy]>|today> <within #>
<days|months|years>]
```

-listgroups

リストア ジョブで使用可能なグループの一覧を表示するように指定します。

-listtapes

リストア ジョブで使用可能なテープの一覧を表示するように指定します。

-listsessions <tapename> [<tapeID>]

指定されたテープにバックアップされている、リストアに使用可能なテープセッションの一覧を表示するように指定します。

-version [<hostname>] <path>

指定されたバックアップ済みファイル/ディレクトリのバージョン(復旧ポイント)のリストを表示するように指定します。ホスト名は省略可能です。省略した場合、デフォルトでローカル マシンが使用されます。

```
-findfile <file name> <ignorecase|casesensitive> <<hostname>|any> <search path> <inclsubdir|noinclsubdir> <<mm/dd/yy[yy]>|today> <<within #> <days|months|years>>
```

Recover Management Backup データベースを検索して、ファイルがすでにバックアップされているかどうかを確認します。

ファイル名、名前の大文字と小文字が区別されるかどうか、ホスト名 (またはホスト名に該当する何らかの名前)、ファイル検索に使用するパス (最上位レベルで検索する場合は「/」を使用)、検索にサブディレクトリを含めるかどうかを指定する必要があります。

検索するファイルに対して、時間間隔を指定する必要もあります。この時間間隔は、開始時点および終了時点に基づいています。終了時点とは、ファイルが作成された日付 (バックアップの日付ではない) で、<<mm/dd/yy[yy]>|today> という形式で表現されます。開始時点とは、終了時点から遡って検索を始める時点までの日数、月数、年数のことで、<<within #> <days/months/years>> という形式で表現されます。

例:

- 03/11/2007 ~ 03/15/2007 に作成されたバックアップ ファイルをすべて検索するには、次のように表現します。

形式は「03/15/2007 within 4 days」です。

- 03/11/2007 ~ 04/11/2007 に作成されたバックアップ ファイルをすべて検索するには、次のように表現します。

形式は「04/11/2007 within 31 days」または「04/11/2007 within 1months」です。

- 03/11/2006 ~ 03/11/2007 に作成されたバックアップ ファイルをすべて検索するには、次のように表現します。

形式は「03/11/2007 within 365 days」、「03/11/2007 within 12 months」、または「03/11/2007 within 1 years」のいずれかです。

リターンコード

ca_restore コマンドからのリターンコードは以下のとおりです。

-waitForJobStatus オプションが指定されていない場合は以下のとおりです。

リターンコード:

- **0** - コマンドは正常に実行されました。
(allusage、-usage、または -list などのように、ジョブをサブミットしないコマンド向け)
- **N** (正の整数) - コマンドが正常にジョブをサブミットしました。
(ジョブをサブミットするコマンド向け。実際の戻り値はジョブ番号)
- **-1** - コマンドの実行中にエラーが発生しました。

-waitForJobStatus オプションが指定されている場合は以下のとおりです。

リターンコード:

- **0** - ジョブは正常に終了しました。
- **1** - ジョブは失敗しました。
- **2** - ジョブは完了していません。
- **3** - ジョブはキャンセルされました。
- **4** - ジョブのステータスが不明です。

注: -waitforjobstatus を allusage、-usage、または -list などのスイッチと合わせると、-waitforjobstatus スイッチは無視され、-waitforjobstatus なしのリターンコードのルールが有効になります。

例

ca_restore コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下の構文を使用して、ディレクトリをツリー単位で元の場所にリストアできます。

```
ca_restore -source machine1 c:%DIR1 -dest machine1 c:%DIR1 -username Administrator -password abc
```

- 以下の構文を使用して、ディレクトリを別の場所にリストアできます。

```
ca_restore -source machine1 c:%ALTDIR -dest machine1 c:%DIR1 -username Administrator -password abc
```

- 以下の構文を使用して、ディレクトリをセッション単位で元の場所にリストアできます。

```
ca_restore -tape TAPE1 -session 3 -dest machine1 c:%DIR1 -username Administrator -password abc
```

- 以下の構文を使用して、ディレクトリを別の場所にリストアできます。

```
ca_restore -tape TAPE1 -session 3 -dest machine1 c:%DIR1 -username Administrator -password abc
```

```
ca_restore -tape TAPE1 -session 7 -dest machine1 c:%temp2 -username Administrator -password abc
```

```
ca_restore -source machine2 c:%ca_lic%lic98.dll -dest machine1 D:%temp -username Administrator -password abc
```

```
ca_restore -source c:%ca_lic -dest machine1 ntagent c:%DIR1 -username Administrator -password abc
```

- 以下の構文を使用して、データベースのすべてのテープを表示します。

```
ca_restore -listtapes
```

- 以下の構文を使用して、TAPE1 の全セッションを表示します。

```
ca_restore -listsessions TAPE1
```

- 以下の構文を使用して、CA ARCserve Backup を検索し、指定したファイルがバックアップされたかどうかを確認します。

```
ca_restore -findfile lic98.dll ignorecase bluejays C:%ca_lic inclsubdir within 1 months
```

```
ca_restore -findfile * ignorecase any c:% noinclsubdir within 1 days
```

```
ca_restore -findfile * ignorecase any C:% inclsubdir within 1 months
```

```
ca_restore -findfile lic98.dll ignorecase any C:% inclsubdir within 1 months
```

```
ca_restore -findfile lic98.dll ignorecase any C:%ca_lic inclsubdir today 1 day
```

```
ca_restore -findfile lic98.dll ignorecase any C:%ca_lic inclsubdir today 1 months
```


第 15 章: ca_scan - スキャン マネージャ コマンド

スキャン マネージャ コマンド (`ca_scan`) は、コマンドライン インターフェイスで、スキャン ジョブを作成して、ジョブ キューにサブミットすることができます。スキャン マネージャから実行可能な機能の多くは、コマンドラインから実行できます。`ca_scan` コマンドは、メディア上の 1 つまたは複数のバックアップ セッションについての情報のレポートも行います。

構文

`ca_scan` のコマンドラインの構文は、以下のような形式です。

```
ca_scan
```

```
[-cahost <hostname>] <source arguments> <run job arguments> <options>
```

注: 「ARCserve Manager (コンソール)」モードを使用して CA ARCserve Backup をインストールした場合、ローカル マシンから `-cahost` スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソール インストール モードは、ローカル マシンに CA ARCserve Backup のすべての機能を実際にインストールするわけではないので、このコマンドを CA ARCserve Backup を含むプライマリまたはメンバ サーバにリモートでサブミットする際には `-cahost` を含めることが必須です。そうしないと、コマンドが失敗します。

使用方法

`ca_scan` コマンドを使用すると、以下のオプションおよび引数を設定できます。

- その他のオプション
- ソース引数
- ジョブ実行引数
- スキャン オプション

その他のオプション

`ca_scan` コマンドには、関連するすべてのオプションを表示したり、CA ARCserve Backup がスキャン プロセス中に使用する基本ポリシーおよびパラメータを定義するのに使用されるその他のオプションが含まれます。

`ca_scan` コマンドには、以下のその他のオプションが含まれます。

-cahost <hostname>

処理をホストするシステムの名前を識別します。

処理をリモートシステムで実行する場合は、コマンドにこのスイッチを含める必要があります。

この処理をローカル システムで実行する場合は、このスイッチは必要なく、コマンドに含める必要はありません。

注: [-cahost <hostname>] スイッチはオプションです。このコマンドをローカル ホスト上で使用する場合、このスイッチは必要ありません。ただし、リモートで実行する場合は、hostname を指定する必要があります。cahost スイッチで指定されたホストは、メンバ サーバまたはプライマリ サーバにすることができます。ただし、CA ARCserve Backup は常にプライマリ サーバのジョブキューにジョブを追加し、その後、プライマリ サーバが、ジョブが処理される際にこのスイッチに従ってジョブを適切なサーバ(プライマリ/メンバ)へ送信します。

注: 「ARCserve Manager (コンソール)」モードを使用して CA ARCserve Backup をインストールした場合、ローカル マシンから -cahost スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソール インストールモードは、ローカル マシンに CA ARCserve Backup のすべての機能を実際にインストールするわけではないので、このコマンドを CA ARCserve Backup を含むプライマリまたはメンバ サーバにリモートでサブミットする際には -cahost を含めることが必須です。そうしないと、コマンドが失敗します。

-f <file name>

コマンドのスイッチおよびパラメータを含むファイル名を指定するのに使用します。

このスイッチにより、シェルによるコマンドラインからの入力文字数制限(1024 文字)を克服できます。また、このスイッチを使用して、ファイルにパスワードを保存することにより、これらのパスワードを隠すこともできます。

usage

基本コマンドのリストを表示します。

allusage

すべてのコマンドとそのスイッチの一覧を表示します。

ソース引数

ca_scan コマンド ソース引数を使用すると、スキャンするデータを指定できます。これらの引数を使用して、スキャン処理に使用するグループ、テープ、およびセッションを識別できます。すべてのグループのメディアをスキャンするには、ワイルドカード文字「*」を使用できます

ca_scan コマンドには、以下のソース引数が含まれます。

ca_scan

[-group <group name>]

[-tape <tape name> [<tape ID>]]

[-currenttapeseq]

Windows での使用法は以下のとおりです。

[-allsessions | -session <session # | session range>]

UNIX での使用法は以下のとおりです。

[-allsessions | -session <session range>]

-group <group name>

スキャン ジョブに使用するテープ グループ名を指定します。

グループの名前がわからない場合は、「**Group ***」のようにワイルドカード文字「*」を使用することができます。

ただし、ワイルドカード文字を使用する場合は、グループのリストで最初に利用可能なテープ グループに該当するメディアのみをスキャンします。この例では、「**Group0**」のみがスキャンされます。

-tape <tape name> [<tape ID>]

スキャン ジョブに使用するテープを指定します。テープ ID は省略可能です。テープ ID は、同じ名前のテープが複数存在するときに使用します。

-currenttapeseq

スキャン ジョブで、現在のテープ シーケンスを使用するよう指定します。

-allsessions

スキャン ジョブで、テープのすべてのセッションをスキャンするよう指定します。

-session <session # | session range>

テープの単一セッションまたは複数セッションをスキャンするよう指定します。

複数セッションをスキャンするには、セッション範囲を指定します。

例:

「MYTAPE」というテープのセッション 27 をスキャンするには、以下のコマンドを使用します。

```
ca_scan -tape MYTAPE -session 27
```

「MYTAPE」というテープのセッション 9 ~ 24 をスキャンするには、以下のコマンドを使用します。

```
ca_scan -tape MYTAPE -session 9-24
```

ジョブ実行引数

`ca_scan` コマンドは、ジョブ実行引数を提供しており、これを使用してスキャン ジョブにジョブ実行の方法を指定できます。`ca_scan` のジョブ実行オプションを使用すると、スキャン ジョブをサブミットして即座に実行したり、ホールド状態のジョブをサブミットしたり、または後の日時で実行するようにジョブをスケジュールすることができます。選択した方式によって、スキャン ジョブを実行する日時が決まります。

重要: すべてのジョブがスケジュール時間どおりに開始するようにするには、メソッドサーバのシステム時間と対応するプライマリ サーバのシステム時間とを同期させる必要があります。**Windows Time Service** を使用して、ドメイン内のすべての **ARCserve** サーバ上の時刻を同期します。

`ca_scan` コマンドには、以下のジョブ実行引数が含まれます。

```
ca_scan
  [-at <hh:mm>]
  [-on <mm/dd/yy[yy]>]
  [-hold | -runjobnow]
  [-description <description string>]
```

-at <hh:mm>

スキャン ジョブの実行時刻を指定します。

注: CA ARCserve Backup のジョブのすべての時刻は、CA ARCserve Backup サーバの所在地のタイムゾーンに基づいてスケジュール設定されます。エージェント マシンが CA ARCserve Backup サーバとは異なるタイムゾーンにある場合、ジョブを実行する現地時間を計算する必要があります。

-on <mm/dd/yy[yy]>

スキャン ジョブの実行日を指定します。

-hold

スキャン ジョブをホールド状態でサブミットします。

-runjobnow との併用はできません。

-runjobnow

スキャン ジョブを即座にサブミットし、実行します。

-hold との併用はできません。

-description <description string>

スキャン ジョブにコメントを追加します。

注: 文字列に空白文字が含まれる場合は、文字列を二重引用符(“”)で囲む必要があります。

スキャン オプション

ca_scan コマンドを使用して、ジョブに適用されるさまざまなスキャン オプションを指定できます。

ca_scan コマンドには、以下のスキャン オプションがあります。

ca_scan

- [パスワード暗号化リスト オプション]
- [ログ オプション](UNIX および Linux のみ)
- [ジョブ実行前/後の処理オプション]
- [終了コード オプション]
- [メディア オプション]
- [各種スキャン オプション]
- [ジョブ ステータス オプション]

復号化パスワード リスト オプション

ca_scan コマンドには、以下のパスワード復号化リスト オプションがあります。

```
ca_scan
  [-decryptionpwdlist <password 1> [<password 2>] [<password 3>] ... [<password 8>]
[decryptionpwdlist <password 1> [<password 2>] [<password 3>] ... [<password 8>]
```

セッションが暗号化されている場合に使用される、復号化パスワードのリストが提供されます。異なるパスワードを持つ複数のセッションが 1 つのスキャンジョブに含まれる場合に、CA ARCserve Backup がセッションごとに停止して、パスワードを要求しません。代わりに、指定された復号化パスワードが組み合わせリストとしてパッケージ化され、各暗号化セッションのスキャン時にこのリストが自動的にチェックされます。

必要なパスワードが復号化パスワードリストに含まれていた場合、ジョブは、さらにユーザ入力を求めることなく続行されます。必要なセッションパスワードが復号化リストに含まれていなかった場合は、その暗号化セッションの続行を許可する前に、セッションパスワードを入力するようメッセージが表示されます。

復号化パスワードリストには、最大 8 個のパスワードを含めることができます。各パスワードはスペースで区切ります。各パスワードは最大 23 文字であり、スペースまたはカンマを含むことはできません。

ログ オプション

ca_scan コマンドには、以下のログ オプションがあります。

注: UNIX および Linux プラットフォームの場合のみです。

```
ca_scan
  [-logfile <file name> [summary | allactivity]]
  [-snmp] [-tng] [-email <email address>] [-printer <printer name>]
```

-logfile <file name> [summary | allactivity]

スキャン ジョブ実行中のアクティビティを、filename で指定されたファイルに記録します。すべてのアクティビティを記録するか、アクティビティのサマリを記録するかを指定します。

-snmp

SNMP (Simple Network Management Protocol) アラートを有効にします。

-tng

Unicenter Network and Systems Management (NSM) アラート(旧名 TNG)を有効化します。

-email <email address>

指定された電子メール アドレスに、アクティビティログのコピーを送信します。

-printer <printer name>

指定されたプリンタに、アクティビティログのコピーを送信します。

このプリンタは環境設定ファイル `ARCServe_HOME/config/caloggerd.cfg` で設定しておく必要があります。

ジョブ実行前/後の処理オプション

`ca_scan` コマンドには、以下のジョブ実行前/後の処理 オプションがあります。

ca_scan

```
[-preexec <command>]
[-preexec timeout <minutes>]
[-postexec <command>]
[-prepostuser <user name>]
[-prepostpassword <user password>]
```

-preexec <command>

ジョブの開始前に、指定されたコマンドを実行します。コマンドはフルパスで指定してください。

-preexec timeout <minutes>

スキャン ジョブが開始されるまでに待機する時間を分単位で指定し、ジョブの開始前に実行されるコマンドが完了する時間を確保します。

-postexec <command>

ジョブの終了後に、指定されたコマンドを実行します。コマンドはフルパスで指定してください。

注: このオプションを使用するには、`-prepostuser` オプションも指定する必要があります。

-prepostuser <user name>

このスキャン ジョブをサブミットするユーザの名前です。

`-prepostpassword <user password>`

このスキャン ジョブをサブミットするユーザのパスワードです。

終了コード オプション

`ca_scan` コマンドには、以下の終了コード オプションがあります。

`ca_scan`

```
[-exitcode <exit code>]
[-skip_delay|-skip_job]
[-skip_post]
```

`-exitcode <exit code>`

ジョブの開始前に実行されるコマンドの終了コードを指定します。

`-skip_delay` スイッチ、`-skip_job` スイッチ、および `-skip_post` スイッチと共に使用します。

注: 遅延のスキップ、ジョブのスキップ、処理終了後のアプリケーションの実行をスキップの各オプションは、CA ARCserve Backup によって、戻された終了コードが選択された条件(等しい、大きい、小さい、等しくない)に一致することが検出された場合にのみ有効になります。

`-skip_delay`

指定された終了コードを受け取ると同時に、スキャン ジョブを実行します。

`-skip_job`

指定された終了コードを受け取った場合、スキャン ジョブを完全にスキップします。

`-skip_post`

指定された終了コードを受け取った場合、ジョブの終了後に実行するコマンドをスキップします。

メディア オプション

ca_scan コマンドには、以下のメディア オプションがあります。

```
ca_scan
    [-firsttapetimeout <minutes>]
    [-spantapetimeout <minutes>]
```

-firsttapetimeout <minutes>

使用可能なメディアがスキャン ジョブで実際に利用可能になるまで待機する時間を分単位で指定します。したがって、ここで指定された時間内にメディアが使用可能にならない場合、ジョブはタイムアウトして失敗します。

デフォルト: 5 分

-spantapetimeout <minutes>

使用可能なスパン メディアが実際にスキャン ジョブで利用可能になるまで待機する時間を分単位で指定します。したがって、ここで指定された時間内にメディアがロードされない場合、ジョブはタイムアウトして失敗します。

無制限を指定した場合は、使用可能なメディアがロードされるか、ユーザによってキャンセルされるまで、ジョブは待機してプロンプトを表示し続けます。

デフォルト: 無制限

各種スキャン オプション

ca_scan コマンドには、以下の各種スキャン オプションがあります。

```
ca_scan
    [-list]
    UNIX のみです。
    -savescript <script name>
```

-list

スキャン ジョブで使用可能なテープのリストが表示されます。

-savescript <script name>

このジョブをジョブ キューにサブミットする代わりに、後でジョブ キューにロードできるスクリプトとしてスキャン ジョブが保存されます。

ジョブ ステータス オプション

ca_scan コマンドには、以下のジョブ ステータス オプションがあります。

ca_scan

-waitForJobStatus <polling interval <secs>>

-waitForJobStatus <polling interval <secs>>

このオプションが指定された場合、ca_scan コマンドはジョブが完了するまで待機し、ジョブの結果である成功または失敗を示すリターンコードで終了します。

<polling interval> 値は、ca_scan ユーティリティがキュー サービスを使用してジョブのステータスをチェックする頻度 (秒数) を定義します。デフォルトのポーリング間隔は 60 秒です。

リターンコード

ca_scan コマンドからのリターンコードは以下のとおりです。

リターンコード:

- **0** - コマンドは正常に実行されました。
- **-1** - コマンドの実行中にエラーが発生しました。

例

ca_scan コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下の構文を使用して、ホスト サーバで使用可能なグループとテープ名のリストを表示できます。

```
ca_scan -cahost machine1 -list
```

- 以下の構文を使用して、テープをスキャンする全セッションを指定します。

```
ca_scan -tape TAPE1 -allsessions
```

- 以下の構文を使用して、テープをスキャンするセッションを指定できます。

```
ca_scan -tape Tape1 -session 2
```

第 16 章: ca_vcbpopulatedb - VMware VCB ユーティリティコマンド

VMware VCB ユーティリティコマンド(`ca_vcbpopulatedb`)はデータ収集ツールで、バックアップ環境内の VMware ベースの VM に関する情報を CA ARCserve Backup データベースに入力することができます。このユーティリティはバックアッププロキシシステム上で実行する必要があります。ユーティリティは、VMware ESX ホストシステム内および VMware vCenter Server システム内のすべての VM に関する情報を取得し、データベースにこの情報を追加します。

以下のような情報が、`ca_vcbpopulatedb` ユーティリティによって CA ARCserve Backup データベースに入力されます。

- VCB バックアップ プロキシシステム名
- VMware ESX/ESXi ホスト名および VMware vCenter Server 名
- VM ホスト名
- Windows システムの VM 内に含まれているボリューム名

このユーティリティを定期的に行い、CA ARCserve Backup データベースに格納されている ESX Host システムの VM とボリュームの情報が最新になるようにしてください。プロキシマシンに(プライマリ/メンバの) CA ARCserve Backup サーバがインストールされている場合は、一般ジョブスケジューラを使用してこのユーティリティを定期的に行うことができます。

構文

ca_vcbpopulatedb コマンドライン構文のフォーマットは以下のとおりです。

```
ca_vcbpopulatedb
  -Primary <PrimaryServerName>
  -carootUser <ARCserve caroot User>
  -carootPass <ARCserve caroot Password>
  [-vcb <VCBMachineName>]
  -esxserver <ESXServerName>
  -esxUser <ESXAdmin>
  -esxUserPass <ESXAdminPassword>
  [-proto <https/http>]
  [-VCBMountableVM]
  [-DelProxydb]
  [-retainVMInDB]
  [-silent]
  [-debug]
  -insertvm <VMname>
  -deleteVM <VMname>
  [-stopAutoPopulate]
  -config <config_file_name>
```

使用方法

ca_vcbpopulatedb コマンドには、VM 情報を CA ARCserve Backup データベースに入力する際に実行するアクションを定義するために使用される、引数およびオプションがあります。

ca_vcbpopulatedb コマンドには、以下の引数およびオプションがあります。

-Primary <PrimaryServerName>

プライマリ CA ARCserve Backup システムのホスト名を指定します。

-carootUser <ARCserve caroot User>

caroot アクセス権を持つ、プライマリ CA ARCserve Backup システムのユーザー名を指定します。

-carootPass <ARCserve caroot password>

root ユーザのパスワードを指定します。

-vcb <VCBMachineName>

VCB プロキシ マシンの名前を指定します。

注: これは、任意の引数です。この引数を省略した場合は、現在のマシン名を VCB マシン名として使用するとみなされます。

-esxserver <ESXServerName>

iSCSI/SAN LUN 上に存在する、VM を含む VMware ESX ホストシステムまたは VMware vCenter Server システムの名前を示します。

-esxUser <ESXAdmin>

管理者権限を持つ、VMware ESX ホストシステム ユーザの名前を指定します。

-esxUserPass <ESXAdminPassword>

VMware ESX ホスト システムの管理者ユーザ用パスワードを指定します。

-proto <https/http>

バックアップ プロキシ システムと、VMware ESX ホスト システムまたは VMware vCenter Server システムの間の通信プロトコルを指定します。

注: これは、任意の引数です。この引数を省略した場合は、通信プロトコルとして https を使用するとみなされます。

-VCBMountableVM

パラメータとしてこのスイッチを指定すると、iSCSI/SAN LUN ストレージデバイスに配置されている、稼働中の VM の情報のみがデータベースに入力されます。このスイッチを指定した場合、iSCSI/SAN LUN 以外のストレージメディアに配置された VMware ESX ホストシステムにある VM はスキップされます。

ESX ホストシステムのローカル ディスク、SAN LUN、NAS/NFS、または iSCSI のストレージ デバイスなど、複数のストレージメディアに配置された VMware ESX ホストシステムに VM が存在する場合は、このスイッチを指定して `ca_vcbpopulatedb` コマンドライン ユーティリティを実行する必要があります。

このスイッチを含めると、ユーティリティは、iSCSI/SAN LUN ストレージデバイスに配置された稼働中 VM の情報のみを CA ARCserve Backup プライマリサーバデータベースに入力します。

注:

このスイッチを指定して `ca_vcbpopulatedb` コマンドライン ユーティリティを実行する場合は、VCB プロキシシステムで実行する必要があります。

VCBMountableVM スwitchを指定してこのユーティリティを実行すると、SAN LUN ストレージデバイスに配置された稼働中 VM ごとにマウント操作およびマウント解除操作が実行されるため、実行時間が長くなることがあります。

-DelProxydb

指定されたバックアップ プロキシシステムにある、指定された VMware ESX ホストシステムまたは VMware vCenter Server システムのデータベース内で使用可能なすべての VM を削除します。

-retainVMInDB

このコマンドの実行時に、使用不可能な VM に関するデータ(バックアップ情報)を保持します。

デフォルトでは、このユーティリティの実行時には、使用可能な VM のバックアップ情報のみが取得されます。VM を使用できない場合 (VM の電源が入っていない、環境から削除されているなど) は、CA ARCserve Backup データベースからこの VM に関する情報が削除されます。このオプションを有効にしておけば、使用可能な VM の情報が取得され、使用不可能な VM のバックアップ情報は保持されます。

-silent

ユーティリティによりコマンドライン コンソールにメッセージが表示されないようにする場合に指定します。

-debug

詳細なデバッグ ログを書き込むようユーティリティに指示します。ログは、現在の作業ディレクトリに作成されます。

注: ログ ファイルの名前は `ca_vcbpopulatedb.log` です。

-insertVM

VM ホスト システムにある特定の VM に関する情報を CA ARCserve Backup データベースに追加します。

注: `ca_vcbpopulateDB` を使用する際に、この引数をほかの引数と組み合わせることはできません。

-deleteVM

CA ARCserve Backup データベースから特定の VM に関する情報を削除します。

注: `ca_vcbpopulateDB` を使用する際に、この引数をほかの引数と組み合わせることはできません。

-stopAutoPopulate

指定したバックアップ プロキシ システムの自動保存プロセスを無効にします。

-config <config_file_name>

`ca_vcbpopulatedb` 環境設定ファイルの名前を指定します。

`ca_vcbpopulatedb` ユーティリティは環境設定ファイルに指定された情報を使用して、CA ARCserve Backup データベースに入力します。

この環境設定ファイルには、プライマリ サーバ マシン、プライマリ ユーザ、プライマリ ユーザのパスワード、VCB システム名、VMware ESX ホスト名、および VMware ESX ホストシステム ユーザ認証の詳細情報が含まれます。

環境設定ファイルに持つことのできるエントリは 1 つのみです。

注: このユーティリティを使用するには、環境設定ファイルを作成する必要があります。

ca_vcbpopulatedb 設定ファイルの作成

CA ARCserve Backup プライマリ サーバ マシン、CA ARCserve Backup プライマリ ユーザ名などの詳細が記録された設定ファイルを作成します。

ca_vcbpopulatedb ユーティリティは、設定ファイルに指定されている情報を使用して CA ARCserve Backup データベースに追加します。

ca_vcbpopulatedb 設定ファイルを作成する方法

1. メモ帳などのテキスト エディタを開きます。ca_vcbpopulatedb ユーティリティと同じディレクトリに .cfg ファイル拡張子の付いた環境設定ファイルを保存します。

2. 以下の構文で引数を入力します。

```
ca_vcbpopulatedb -Primary <PrimaryServerName> -carootUser <ARCserve caroot User>
-carootPass <ARCserve caroot password> [-vcb <VCBMachineName>] -esxServer
<ESXServerName> -esxUser <ESXAdmin> -esxUserPass <ESXAdminPassword> [-proto
<https/http>] [-vcbMountableVM] [-delProxydb] [-retainVMInDB] [-silent]
[-debug] -insertvm <VMname> -deleteVM <VMname> [-stopAutoPopulate]
```

注: このコマンドの使用方法の詳細については「[ca_vcbpopulatedb の使用方法](#)」(P. 294)を参照してください。

3. 設定ファイルを閉じて保存します。

ユーティリティリターンコード

ca_vcbpopulatedb コマンドからのリターンコードは以下のとおりです。

ジョブ ステータスリターンコード:

- 0 - ジョブは正常に終了しました。
- 1 - 無効な引数が指定されました。
- 2 - CA ARCserve Backup ドメイン ユーザの認証エラーが発生しました。
- 3 - VMware ESX ホスト システムでユーザ認証が失敗しました。
- 4 - VMware ESX ホスト システムの接続で障害が発生しました。
- 5 - データベース操作で障害が発生しました。
- 6 - XML 作成で障害が発生しました。
- 7 - Microsoft .NET バージョン 2.0 以降が使用環境にみつかりません。
- 8 - ca_vcbpopulatedb のインスタンスが複数実行されています。
- 9 - 不明なエラーが発生しました。

例

ca_vcbpopulatedb コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下のコマンドを使用して、ホスト名「ESXServer1」を持つ VMware ESX ホスト システムの VM の詳細を、デバッグ フラグをセットした状態で、http プロトコルを使用して、VCB プロキシ マシン「VCBProxy1」の下にある ARCserve サーバの「ARCserver1」データベースに入力します。

```
ca_vcbpopulatedb.exe -Primary ARCserver1 -carootUser caroot -carootPass ca123  
-vcb VCBProxy1 -esxServer ESXServer1 -esxUser root -esxUserPass rootpasswd -proto  
http -debug
```

- 以下のコマンドを使用して、ホスト名「ESXServer1」を持つ VMware ESX ホスト システムの VM の詳細すべてを、デバッグ フラグを解除した状態で VCB プロキシ マシン「VCBProxy1」の下にある ARCserve サーバの「ARCserver1」データベースから削除します。

```
ca_vcbpopulatedb.exe -Primary ARCserver1 -carootUser caroot -carootPass ca123  
-vcb VCBProxy1 -esxServer ESXServer1 -esxUser root -esxUserPass rootpasswd  
-delProxydb
```

- 以下のコマンドを使用して、ホスト名「ESXServer1」を持つ VMware ESX ホストシステムの VM の詳細を、VCB プロキシマシン「VCBProxy1」の内部で VM のみマウント可能な状態で、デバッグフラグをセットして、ARCserve サーバの「ARCserver1」データベースに入力します。

```
ca_vcbpopulatedb.exe -Primary ARCserver1 -carootUser caroot -carootPass ca123  
-vcb VCBProxy1 -esxServer ESXServer1 -esxUser root -esxUserPass rootpasswd  
-vcbMountableVM -debug
```

- 以下のコマンドを使用して CA ARCserve Backup データベースの自動入力を停止します。

- サーバ名が Myvirtualserver で、サーバが VMware vCenter Server システムにある場合

```
ca_vcbpopulatedb.exe -stopAutoPopulate Myvirtualserver
```

- サーバ名が MyEsxserver で、サーバが VMware ESX ホストシステムにある場合

```
ca_vcbpopulatedb.exe -stopAutoPopulate MyEsxserver
```

第 17 章: ca_msvmpopulatedb - Hyper-V VM ユーティリティコマンド

ARCserve Hyper-V 環境設定ツールのユーティリティコマンド

(ca_msvmpopulatedb)は、ご使用の Hyper-V システム上の仮想マシン (VM) に関する情報を CA ARCserve Backup データベースに入力するデータ収集ツールです。このユーティリティは Hyper-V ホストシステム上で実行する必要があります。実行すると、Hyper-V ホストシステム内のすべての VM に関連するすべての情報を取得し、それをデータベースに追加します。

ca_msvmpopulatedb ユーティリティによって、以下のような情報が CA ARCserve Backup データベースに入力されます。

- Hyper-V ホスト名
- VM ホスト名
- Windows システムの VM 内に含まれているボリューム名

このユーティリティを定期的に行って、CA ARCserve Backup データベースに格納されている Hyper-V ホストの VM とボリュームの情報が最新になるようにしてください。Hyper-V ホストに (プライマリ/メンバの) CA ARCserve Backup サーバがインストールされている場合は、一般ジョブ スケジューラを使用してこのユーティリティを定期的に行うことができます。

構文

ca_msvmpopulatedb のコマンドラインの構文は、以下のような形式です。

```
ca_msvmpopulatedb
    -Primary <PrimaryServerName>
    [-Debug <Debug Level>]
    [-retainVMinDB]
    [-DelVMinDB]
```

使用方法

`ca_msvmpopulatedb` コマンドには、CA ARCserve Backup データベースへの VM 情報の入力時に実行されるアクションを定義するために使用される引数およびオプションがあります。

`ca_msvmpopulatedb` コマンドには、以下の引数およびオプションがあります。

-Primary <PrimaryServerName>

プライマリ CA ARCserve Backup システムのホスト名を指定します。

-debug

詳細なデバッグ ログを書き込むようユーティリティに指示します。ログは、現在の作業ディレクトリに作成されます。

注: ログファイルの名前は `ca_msvmpopulatedb.log` です。

デバッグ レベル

デバッグ ログ (`ca_mshvpopulatedb.log`) に必要な情報の詳細レベルを指定します。デバッグレベルの値が高くなるほど、デバッグ ログに記載される情報もより詳細になります。

デフォルト: 2

範囲: 1 ~ 6

-retainVMinDB

このコマンドの実行時に、使用不可能な VM に関するデータ (バックアップ情報) を保持します。

デフォルトでは、このユーティリティの実行時には、使用可能な VM のバックアップ情報のみが取得されます。VM を使用できない場合 (VM の電源が入っていない、環境から削除されているなど) は、CA ARCserve Backup データベースからこの VM に関する情報が削除されます。このオプションを有効にしておけば、使用可能な VM の情報が取得され、使用不可能な VM のバックアップ情報は保持されます。

-DelVMinDB

指定した Hyper-V Server 用の CA ARCserve Backup データベースの中で利用可能な VM を削除し、最新の VM データを CA ARCserve Backup データベースに入力します。

ユーティリティリターンコード

ca_msvmpopulatedb コマンドからのリターンコードは以下のとおりです。

ジョブ ステータスリターンコード:

- 0 - ジョブは正常に終了しました。
- 2 - CA ARCserve Backup ドメイン ユーザの認証エラーが発生しました。
- 5 - データベース操作で障害が発生しました。
- 6 - XML 作成で障害が発生しました。
- 8 - ca_msvmpopulatedb のインスタンスが複数実行されています。
- 9 - 不明なエラーが発生しました。

例

ca_msvmpopulatedb コマンドの構文例は以下のとおりです。

- CA ARCserve Backup プライマリ(またはスタンドアロン)サーバ「CASrvr1」に VM を追加するには以下のコマンドを使用します。

```
ca_msvmpopulatedb -P CASrvr1
```

- CA ARCserve Backup プライマリ(またはスタンドアロン)サーバ「CASrvr1」に VM を追加し、その時点でアクセスできないか電源がオフになっていた既存の VM を削除しない場合には、以下のコマンドを使用します。

```
ca_msvmpopulatedb -P CASrvr1 -retainVMInDB
```

- この Hyper-V ホスト用に、CA ARCserve Backup プライマリ(またはスタンドアロン)サーバ「CASrvr1」に登録された VM を削除するには以下のコマンドを使用します。

```
ca_msvmpopulatedb -P CASrvr1 -DeLVMInDB
```


第 18 章: cabatch - バッチ コマンド

バッチ コマンド (`cabatch`) では、外部スクリプト ファイルを使用して、ジョブをローカルまたはリモートの CA ARCserve Backup ジョブ キューにサブミットしたり、ジョブ キューからジョブを削除したり、ジョブ キューに含まれる全ジョブの実行日時を変更したりできます。`cabatch` ユーティリティがジョブを CA ARCserve Backup ジョブ キューにサブミットするために、バックアップ マネージャが実行されている必要はありませんが、すべての CA ARCserve Backup エンジンが起動している必要があります。

注: ジョブをリモート サーバの CA ARCserve Backup ジョブ キューにサブミットするには、そのサーバに対する適切なアクセス権を持っている必要があります。

`cabatch` ユーティリティを使用してジョブをサブミットするには、バックアップ マネージャを使用してジョブ スクリプトを作成し保存するか、`cabatch` ジョブ情報 テンプレートを使用してジョブの説明を記入したテキスト ファイルを準備する必要があります。このテンプレートが完成したら、`cabatch` はこのジョブの説明ファイルを読み込み、ジョブを CA ARCserve Backup ジョブ キューにサブミットして実行します。`cabatch` ジョブ情報 テンプレート (`Template.txt`) は、ARCserve Backup のホーム ディレクトリに保存されています。

このコマンドは、Unicenter NSM (旧名 TNG) のジョブ管理オプションで、`/J` (ジョブ リターン コードを返す) や `/W` (ジョブの完了まで待機する) スイッチを使用して自動化できます。このコマンドを使用した Unicenter NSM との統合の詳細については、「Unicenter NSM - ジョブ管理オプションの統合」を参照してください。

注: Unicenter NSM r11 より前のリリースでは、ジョブ管理オプションはワークロード管理と呼ばれていました。

ジョブの送信

以下の構文を使用すると、スクリプトファイルを使用してジョブをサブミットできます。

```
CABATCH /MODE=Execute|Submit /H=ServerName /S=<path>ScriptName
```

例:

```
CABATCH /H=QANT /S=C:¥BACKUP.ASX /W
```

リターンコード:

- 0 - ジョブは正常に終了しました。
- 1 - ジョブは完了していません。
- 2 - ジョブはキャンセルされました。
- 3 - ジョブは失敗しました。
- 4 - ジョブはクラッシュしました。
- 5 - ジョブはシステム エラーでした。
- 6 - パラメータエラーが発生しました。
- 7 - メモリの不具合が発生しました。メモリを使用していると思われるアプリケーションのうち、重要ではないものを閉じてから、ジョブを再試行してください。
- 8 - 一般エラーが発生しました。

モード:

ジョブのサブミット

ジョブを即座に実行するよう指定します。ジョブはスクリプトファイルに従ってジョブ キューに追加されます。次に、**carunjob** がジョブ キューから番号でこのジョブを取得して起動します。

実行

(即座ではなく)指定されたスケジュール時刻に基づいてジョブを実行するよう指定します。ジョブはジョブ キューに追加されません。**carunjob** は、スクリプトファイルからこのジョブを直接起動します。

オプション:**/H [server name]**

ジョブのサブミット先となるジョブ キューのあるサーバ名を指定します。「*」を入力すると、cabatch では、CA ARCserve Backup ドメイン サーバ名としてローカル コンピュータの名前が使用されます。

/S [script name]

バイナリ スクリプト、または cabatch のジョブ情報テンプレート (Template.txt) を使用して準備したジョブの説明ファイルを指定します。

/RS [Computer Name]

スクリプト内のソース コンピュータ名を **Computer Name** で置換するよう指定します。

注: コンピュータ名を指定しない場合は、ホスト名が使用されます。

/RD [Computer Name]

スクリプト内のデスティネーション コンピュータ名を **Computer Name** で置換するよう指定します。

注: コンピュータ名を指定しない場合は、ホスト名が使用されます。

/D [MM/DD/YY]

ジョブを実行する日付を指定します。

/T [HH:MM]

ジョブを実行する時刻を指定します。

/G [device group]

デバイスグループ名を指定します。

/TP [media name]

メディア名を指定します。

/TID [media id]

メディア ID を指定します。

/TSN[media sequence number]

メディア シーケンス番号を指定します。

/POST [command]

指定したコマンドをジョブの完了後に実行します。コマンドはフルパスで指定してください。

/PRE [command]

指定したコマンドをジョブの開始前に実行します。コマンドはフルパスで指定してください。

/PREPOSTUSER=user

ジョブの実行前/後のコマンドを実行するユーザの認証情報を指定します。

/PREPOSTPWD=password

ジョブの実行前/後のコマンドを実行するユーザのパスワードを指定します。

/SSN[session number]

リストア ジョブのセッション番号を指定します。

/RSessPW

スクリプト内のセッション パスワードを置換する場合に指定します。

/J

CA ARCserve Backup ジョブ ステータスをリターンコードとして使用する場合に指定します。

/W

ジョブの完了を待機する場合に指定します。

ジョブの削除

以下の構文を使用すると、ジョブ キューからすべてまたは指定したジョブを削除できます。

```
CABATCH /E=AL|BK|RS|CP|CT/H=ServerName
```

オプション

/H [server name]

ジョブの削除元となるジョブ キューのあるサーバ名を指定します。「*」を入力すると、cabatch では、CA ARCserve Backup ドメイン サーバ名としてローカルコンピュータの名前が使用されます。

AL

すべてのジョブを削除する場合に指定します。

BK

バックアップ ジョブを削除する場合に指定します。

RS

リストア ジョブを削除する場合に指定します。

CP

コピー ジョブを削除する場合に指定します。

CT

カウント ジョブを削除する場合に指定します。

ジョブの修正

以下の構文を使用すると、ジョブ キューにあるすべてのジョブの実行時刻を変更できます。

```
CABATCH /H=ServerName /MT=nnn
```

オプション

/H [server name]

ジョブの修正元となるジョブ キューのあるサーバ名を指定します。「*」を入力すると、cabatch では、CA ARCserve Backup ドメイン サーバ名としてローカルコンピュータの名前が使用されます。

/MT [nnn]

分数を入力して、ジョブの実行時刻を変更します。

- 正の数の場合は、その数値のみを入力します。
- 負の数の場合は、数値の前に「-」(マイナス記号)を入力します。たとえば、「30」または「-30」と入力します。

例

cabatch コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下の構文を使用すると、スクリプトファイルを使用してジョブをサブミットできます。

```
cabatch /MODE=Execute|Submit /H=ServerName /S=<path>ScriptName
```

- 以下の構文を使用すると、スクリプトファイルを使用し、/W スイッチを指定してジョブをサブミットできます。

注: /W スイッチを含めた場合、cabatch コマンドはすぐに復帰せず、ジョブの完了を待機します。

```
cabatch /MODE=Execute|Submit /H=ServerName /S=<path>ScriptName /W
```

- ジョブ キューからすべてのジョブ (AL) を削除する場合は、以下の構文を使用します。

```
cabatch /E=AL /H=ServerName
```

- ジョブ キューからバックアップ ジョブ (BK) を削除する場合は、以下の構文を使用します。

```
cabatch /E=BK /H=ServerName
```

- ジョブ キューからリストア ジョブ (RS) を削除する場合は、以下の構文を使用します。

```
cabatch /E=RS /H=ServerName
```

- ジョブ キュー内の全ジョブの実行時間を変更して、30 分後に実行されるようジョブを起動するには、以下の構文を使用します。

```
cabatch /H=ServerName /MT=30
```


第 19 章: careports - レポートライターコマンド

レポートライターコマンド (CAreports) を使用すると、[CA ARCserve Backup レポートライターユーティリティ] ダイアログ ボックスにアクセスして、カスタム (定義済み、ユーザ作成) レポートを作成できます。[レポートライター] ダイアログ ボックスには、CA ARCserve Backup ホーム画面の [ユーティリティ] メニュー (または [ユーティリティ] セクション) からアクセスできます。

CAreports コマンドには、サイレントモードでレポートを実行したり、CA ARCserve Backup Alert マネージャを使用して Alert を送信するためのオプションが用意されています。レポートライターを使って作成したレポートは、レポートマネージャでプレビュー、印刷、またはスケジューリングできます。

CAreports 構文の説明をすべて表示するには、以下のコマンドを入力します。

```
CAreports /?
```

構文

careports コマンド ライン構文のフォーマットは以下のとおりです。

```
careports
    [m <machine_name>]
    [-r <report_name>]
    [-s]
    [-o <output_filename>]
    [-alert]
    [-f <format_type>]
    [?]
```

オプション

careports には、レポートの生成と CA ARCserve Backup Alert マネージャを使用したアラートの送信に関する多数のオプションが用意されています。

careports コマンドには、以下のオプションがあります。

-a

ファイルの出力を自動的に有効にします。-o オプション (出力ファイル名) と組み合わせて使用すると、指定したディレクトリに新しい出力ファイルを作成することができます。出力ファイル名は、レポートテンプレートの命名規則に従って付けられます。さらに -o オプションを指定して、その既存のファイルを指定しても、ファイルは上書きされません。

-s

サイレントモードで (ダイアログ ボックスまたはメッセージ ボックスを使用しないで) レポートを作成します。

-s オプションは、-r オプション (レポートテンプレート) と組み合わせて使用します。また、「ジョブ スケジューラ ウィザード」ツールでレポートのスケジューリングを行う場合は、必ずこのオプションを使用します。

-r <report_name>

レポートに使用するレポートテンプレートの名前を指定します。-r オプションを指定しないと、他のオプション (-s、-o、および -alert) が無視されます。

-o <output_filename>

実行したレポートによって生成される結果の保存先となる、出力ファイル名を指定します。指定したファイルが存在する場合は、拡張子 .bak の付いた名前に変更されます。たとえば、c:¥temp¥report.xml は c:¥temp¥report.bak.xml に名前変更されます。

-m <machine_name>

レポートをリモートコンピュータに生成する場合に、そのコンピュータの名前を指定します。

-f <format_type>

出力ファイルのフォーマットを指定します。

- XML (*.xml) (デフォルト)
- CSV (*.csv) (カンマ区切りフォーマット)

-alert

レポート完了時にアラートメッセージが送信されます。アラートメッセージを、Alert マネージャで設定する必要があります。場所は、「ARCserve」環境設定です。

-append

新規作成されたレポートが既存のファイルに追加されます。

注: 新規作成されるレポートファイルと既存のレポートファイルの両方が CSV 形式である必要があります。

?

CA ARCserve Backup クエリレポート画面が表示されます。この画面で、レポートに含める情報を指定できます。

例

careports コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下のコマンドを使用して、レポートテンプレートを開き、<machine name> についての xml 出力をサイレントモードで作成します。

```
careports -s -r <report name> -o <output name> -m <machine name>
```

- 以下のコマンドを使用して、出力を Alert マネージャ(alert)に送信します。

```
careports -s -r <report name> -o <output name> -alert -m <machine name>
```

- 以下のコマンドを使用して、レポートテンプレートを開き、<machine name> についての CSV 出力(デフォルト値では XML)をサイレントモードで作成します。

```
careports -s -r <report name> -o <output name> -f CSV -m <machine name>
```


第 20 章: caadvreports - 詳細レポート ジェネレータ コマンド

詳細レポートジェネレータコマンド(`caadvreports`)は、さまざまなレポートを生成できるユーティリティです。これにより、現在のデータ保護ステータスの概要を知ることができます。`caadvreports` ユーティリティでは、すべてのログ メッセージを、`ARCServe_HOME¥logs` フォルダの `CAAdvReports.Log` ファイルに書き込みます。このファイルは、レポートの生成時に `caadvreports` が実行したアクションについての詳細情報を提供します。このログ ファイルは、レポートに関するあらゆる問題をデバッグするときの出発点として使用できます。

構文

`caadvreports` コマンド ライン構文のフォーマットは以下のとおりです。

```
caadvreports
  -ReportType <report_ID>
  -OutFile <output file name>
  -StartDate <mm/dd/yyyy> [hh:mm:ss]
  -EndDate <mm/dd/yyyy> [hh:mm:ss]
  -Server <remote server name>
  -JobDesc <string text>
  [-XML][[-CSV]
  -Percent <percent value>
  -Top <n>
  -Serial <serial>
  -PastDays <n>
  -AutoName
  -Alert
  -VaultCycle
```

caadvreports - レポート

caadvreports コマンドには、詳細レポートを生成するためのさまざまなオプションがあります。**caadvreports** コマンドでは、さまざまなレポートパラメータを受け入れ、解析できます。ただしすべてのレポートにすべてのパラメータが必要であるわけではありません。生成中のレポートのタイプに基づいて、指定されたレポートに必要なパラメータとサポートされるパラメータのみが使用されます。不要なパラメータは、そのまま無視されます。

詳細レポートを実行するには、少なくともレポートタイプと生成されたレポートファイルの保存先パスを指定する必要があります。そのレポートにおけるいずれかの必須パラメータを指定しなかった場合は、ユーティリティが失敗して、失敗の原因がログファイルに書き込まれます。

caadvreports コマンドを使用して生成できるレポートのタイプを、サポートされるフィルタパラメータを含めて、以下に示します。

バックアップ試行成功率: サマリ

このレポートは、成功したバックアップ試行の比率を示します。未完了および失敗のバックアップ試行の比率も示します。

サポートされるフィルタパラメータは以下のとおりです。

- StartDate
- EndDate
- PastDays
- JobDesc (詳細の一致するジョブのみを含めるよう出力を限定)

バックアップ試行成功率

このレポートは、成功したバックアップ試行の比率に関する情報をノード単位で示します。

サポートされるフィルタパラメータは以下のとおりです。

- StartDate
- EndDate
- PastDays
- JobDesc (詳細の一致するジョブのみを含めるよう出力を限定)
- Percent (失敗率が、指定した比率より高いノードのみを含めるよう出力を制限)

リストア試行成功率

このレポートは、全リストア試行での成功率を示します。

サポートされるフィルタ パラメータは以下のとおりです。

- StartDate
- EndDate
- PastDays
- JobDesc (詳細の一致するジョブのみを含めるよう出力を限定)

ドライブ スループット

このレポートは、各ドライブで観察された、平均スループットに関する情報を示します。

サポートされるフィルタ パラメータは以下のとおりです。

- StartDate
- EndDate
- PastDays
- Serial (フィルタが一致するシリアル番号を持つドライブのみを含めるよう出力を制限)

バックアップ エラー

このレポートは、レポート期間中にバックアップ ジョブに関連して発生した、各バックアップ パスでのエラーおよび警告の件数を示します。

サポートされるフィルタ パラメータは以下のとおりです。

- StartDate
- EndDate
- PastDays
- JobDesc (詳細の一致するジョブのみを含めるよう出力を限定)

失敗したバックアップ試行

このレポートは、レポート期間中にバックアップ試行が多く失敗したクライアントを示します。

サポートされるフィルタ パラメータは以下のとおりです。

- StartDate
- EndDate
- PastDays
- JobDesc (詳細の一致するジョブのみを含めるよう出力を限定)
- Top (最初の「n」クライアントのみに出力を制限)

連続して失敗したバックアップ試行

このレポートは、レポート期間中にバックアップ試行が連続して多く失敗したクライアントを示します。

サポートされるフィルタ パラメータは以下のとおりです。

- StartDate
- EndDate
- PastDays

部分バックアップ

このレポートは、部分バックアップ回数の多いクライアントを示します。

サポートされるフィルタ パラメータは以下のとおりです。

- StartDate
- EndDate
- PastDays
- JobDesc (詳細の一致するジョブのみを含めるよう出力を限定)
- Top (最初の「n」クライアントのみに出力を制限)

フル バックアップ期間

このレポートは、レポート期間でのすべてのバックアップ パスについて、フル バックアップの平均バックアップ時間、平均バックアップ データ量、平均スループットを示します。

サポートされるフィルタ パラメータは以下のとおりです。

-StartDate

-EndDate

-PastDays

-JobDesc (詳細の一致するジョブのみを含めるよう出力を限定)

前回のバックアップ ステータス レポート

このレポートは、キューにある全バックアップ ジョブの前回の実行ステータスを示します。ジョブがまだアクティブである場合は、実行中ジョブの現在のステータスが示されます。このレポートは、レポート生成時におけるキュー内のジョブのステータスのみを示します。

サポートされるフィルタ

なし

ボールドレポート

このレポートは、レポート日にボールドに入るまたはボールドから外れるテープのリストを示します。-VaultCycle コマンドを使用して、レポートの生成前にボールド サイクルを実行できます。

サポートされるフィルタ

なし

caadvreports - オプション

caadvreports コマンドには、詳細レポートの生成と CA ARCserve Backup Alert マネージャを使用したアラートの送信に関する多数のオプションが用意されています。

caadvreports コマンドでは、以下のオプションがサポートされています。

-ReportType <n>

生成するレポートのタイプを指定します。このパラメータはすべてのレポートで必要です。

値 <n> によって、生成されるレポートのタイプが決まります。

以下のリストに、値 <n> と生成されるレポートの対応を示します。

<n>	レポート名
1	バックアップ試行成功率: サマリ
2	バックアップ試行成功率
3	リストア試行成功率
4	ドライブ スループット
5	バックアップ エラー
6	失敗したバックアップ試行
7	連続して失敗したバックアップ試行
8	部分バックアップ
9	フル バックアップ期間
10	前回のバックアップ ステータスレポート
11	ボールドレポート

注: 各レポートの詳細については、「[caadvreports - レポート \(P. 318\)](#)」を参照してください。

-OutFile <file name>

生成されるレポートの保存先ファイルのフルパスを指定します。これは、すべてのレポートに必要なパラメータです。

「-AutoName」を使用した場合は、このスイッチは不要です。

-StartDate <mm/dd/yyyy> [hh:mm:ss]

レポート期間の開始日時を指定します。時刻パラメータ「hh:mm:ss」はオプションです。時刻を指定しなかった場合は、「00:00:00」(12:00 AM)であるとみなされます。時刻を指定する場合は、24 時間形式で指定する必要があります。

注: 「-PastDays <n>」スイッチを含める場合、このスイッチは不要です。

-EndDate <mm/dd/yyyy> [hh:mm:ss]

レポート期間の終了日時を指定します。時刻パラメータ「hh:mm:ss」はオプションです。時刻を指定しなかった場合は、「11:59:00」(11:59 PM)であるとみなされます。時刻を指定する場合は、24 時間形式で指定する必要があります。

注: 「-PastDays <n>」スイッチを含める場合、このスイッチは不要です。

-Server <remote server>

レポートを実行するリモート サーバを指定します。通常、レポートは、プライマリ サーバで実行されます。このスイッチは、リモートメンバサーバでレポートを実行する場合に含めます。

-JobDesc <string text> [-XML | -CSV]

ジョブ詳細の文字列テキストを指定します。ジョブ詳細が文字列テキストに一致する特定のジョブのみを含めるよう出力を制限するために、いくつかのレポートで使用します。

-XML

レポートを XML 形式で生成する場合に指定します。生成された XML レポートは、提供された .xsl レスponse ファイルと組み合わせて、HTML レポートの生成に使用できます。

これは、このオプションを上書きする他のオプションを指定しなかった場合のデフォルト オプションであり、-CSV パラメータと組み合わせることはできません。

-CSV

CSV 形式でレポートを生成する場合に指定します。

-Percent <percent value>

レポートのフィルタリングに使用されるパーセント値を指定します。

-Top <n>

レポート出力を先頭の「n」個のみに制限する場合に指定します。

-Serial <serial>

シリアル番号が指定したシリアル文字列パターンと一致するドライブのみに、レポート出力を制限する場合に指定します。シリアル番号は、ドライブ スループットレポートでデバイスシリアル番号と比較されます。

-PastDays <n>

レポートを生成対象期間として、現在時刻までの日数を指定します。このスイッチは、固定期間のレポートを生成するために **-StartDate** および **-EndDate** スwitchの代わりに使用できます。

たとえば、週次レポートを生成する場合は、「**n**」の値に **7** を設定します。これにより、過去 **7** 日間のレポートが生成されます。

-AutoName

出力レポート名を自動生成する場合に指定します。自動生成されるファイル名は、レポート名と実行日時を組み合わせることにより作成されます。

-Alert

レポート完了時にアラートメッセージが送信されます。アラートメッセージを、**Alert** マネージャで設定する必要があります。場所は、「**ARCserve**」環境設定です。

-VaultCycle

ボールドレポートで使用して、レポートの生成前にボールド サイクルが自動実行されるようにします。

重要: このスイッチを使用する場合は、このレポートが生成される日のレポート前後に、ボールド サイクルを手動で実行しないでください。

例

caadvreports コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下のコマンドを使用して、最近 7 日間の「ドライブ スループット」レポート (レポートタイプ 4) を生成し、自動生成したファイル名のファイルに結果を格納します。

```
CAAdvReports.exe -reporttype 4 -pastdays 7 -autoname
```

- 以下のコマンドを使用して、1/1/2007 から 3/30/2007 までに実行された全ジョブの「フル バックアップ期間」レポート (レポートタイプ 9) を生成し、「full_backup_report.xml」という名前のファイルに送ります。

```
CAAdvReports.exe -reporttype 9 -startdate 01/01/2007 -enddate 03/30/2007  
-outfile full_backup_report.xml
```

- 以下のコマンドを使用して、1/1/2007 から 3/30/2007 までに実行された全ジョブの「フル バックアップ期間」レポート (レポートタイプ 9) を生成し、「full_backup_report.csv」という名前の CSV ファイルに送ります。ジョブ詳細に「ACCT」を含むジョブのみに出力を制限します。

```
CAAdvReports.exe -reporttype 9 -startdate 01/01/2007 -enddate 03/30/2007  
-outfile full_backup_report.csv -CSV -JobDesc 'ACCT'
```


第 21 章: pfc - プレフライト チェックリスト ユーティリティ コマンド

プレフライト チェックリスト ユーティリティ コマンド (pfc) により、CA ARCserve Backup サーバおよびエージェントに対してバイタル チェックを実行して、バックアップ ジョブの失敗の原因となる可能性のある条件を検出できます。このコマンドは、CA ARCserve Backup の稼働中に実行することを想定されています。

pfc によって実行されるチェックは、以下のように、システム チェック、ARCserve チェック、エージェント チェック、メディア チェックの 4 つのカテゴリに分類されます。

システム チェック

サーバのシステム要件、データベースの空きディスク容量、および RPC (Remote Procedure Calls) サービス登録のチェックが含まれます。

ARCserve チェック

ARCserve システム アカウントと権限、CA ARCserve Backup エンジンのステータス、SAN サーバとの接続状況 (SAN Option がインストールされている場合)、およびサーバに接続されているテープ デバイスの状態などがチェックされます。

エージェント チェック

ジョブに必要なすべてのクライアントおよびデータベース エージェントに関する、接続とクレデンシャルのチェックが含まれます。

メディア チェック

再利用セット内のメディアの使用可能性 (ジョブにメディア プールが指定されている場合)、メディアの有効期限、ファイル システム デバイスでのソースとデスティネーションの競合のチェックが含まれます。

pfc ユーティリティを使用するたびに、以下のログが作成されます。

```
PFC_SERVERNAME_#####.LOG
```

このログには、pfc の実行時にコマンド プロンプト ウィンドウに出力された情報と同じ情報が書き込まれ、CA ARCserve Backup ログ ディレクトリ (ARCserve Home Directory/logs/pfclogs) に配置されます。このディレクトリは、-logpath オプションを使用して変更できます。

構文

pfc コマンドライン構文のフォーマットは以下のとおりです。

```
pfc [-cahost <hostname>] [options] [filename(s)]
```

使用方法

pfc コマンドでは、以下のチェックを設定できます。

- システム チェック
- ARCserve チェック
- エージェント チェック
- メディア チェック

プレフライト チェック

pfc システム プレフライト チェックは、サーバのシステム要件チェック、CA ARCserve Backup システム アカウント チェック、ジョブに必要なクライアントとデータベース エージェントのチェック、および再利用セット内のメディアの使用可能性チェック(該当する場合)を含みます。

pfc コマンドには、以下のオプションがあります。

```
pfc [-cahost <hostname>] [options] [filename(s)]
```

```
-allchecks  
-syschecks  
-bchecks  
-agentchecks  
-mediachecks  
-a  
-n  
-s  
-v  
-logpath <path>  
-alert
```

-cahost <hostname>

処理をホストするシステムの名前を識別します。

処理をリモートシステムで実行する場合は、コマンドにこのスイッチを含める必要があります。

この処理をローカルシステムで実行する場合は、このスイッチは必要なく、コマンドに含める必要はありません。

注: [-cahost <hostname>] スイッチはオプションです。このコマンドをローカルホスト上で使用する場合、このスイッチは必要ありません。ただし、リモートで実行する場合は、hostname を指定する必要があります。cahost スイッチで指定されたホストは、メンバサーバまたはプライマリサーバにすることができます。ただし、CA ARCserve Backup は常にプライマリサーバのジョブキューにジョブを追加し、その後、プライマリサーバが、ジョブが処理される際にこのスイッチに従ってジョブを適切なサーバ(プライマリ/メンバ)へ送信します。

注: 「ARCserve Manager (コンソール)」モードを使用して CA ARCserve Backup をインストールした場合、ローカルマシンから -cahost スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソールインストールモードは、ローカルマシンに CA ARCserve Backup のすべての機能を実際にインストールするわけではないので、このコマンドを CA ARCserve Backup を含むプライマリまたはメンバサーバにリモートでサブミットする際には -cahost を含めることが必須です。そうしないと、コマンドが失敗します。

filename(s)

特定のジョブに対してチェックを実行する場合に、ジョブスクリプトのファイル名を指定します。(例: 00000005.job)。これらのファイルは、CA ARCserve Backup のインストールディレクトリ直下の 00000001.qsd ディレクトリに保管されています。

-allchecks

システムチェック、ARCserve チェック、エージェントチェック、およびメディアチェックなど、CA ARCserve Backup パラメータの全チェックが実行されます。これらのチェックは、ジョブキューにあるすべてのレディ状態ジョブに対して、非対話モードで実行されます。このスイッチの使用時は、ファイル名を指定できません。

-syschecks

ディスク容量、RPC (Remote Procedure Calls) 通信、システムリソースなど、システム関連チェックが実行されます。

-bchecks

CA ARCserve Backup デーモンのステータス チェック、データベース チェック、テープ チェンジャ チェックなどのプロセスとリースに関連するチェックが実行されます。

-agentchecks <filenames>

指定されたバックアップ ジョブに必要なエージェントリソースのチェックが実行されます。このオプションの使用時は、1 つまたは複数のジョブ スクリプト ファイル名を指定する必要があります。これらのファイルは、CA ARCserve Backup のインストール ディレクトリ直下の 00000001.qsd ディレクトリに保管されています。

このコマンドでは、\$ARCSERVE_HOME¥00000001.qsd ディレクトリの下にあるジョブ ファイルを最後のパラメータとして指定する必要があります。

たとえば、ジョブ番号 3 のジョブでエージェント チェックを実行する場合は、\$ARCSERVE_HOME¥00000001.qsd ディレクトリの下に「00000003.job」というジョブ ファイルが存在する必要があります。このチェックの pfc コマンドは以下のようになります。

```
pfc -agentchecks 00000003.job
```

注: また、このオプションと -a スイッチを組み合わせで使用し、キューに含まれるすべてのジョブに対して、エージェント チェックを実行することもできます。

注: マスタ サーバの認証情報は、PFC (Preflight Checklist、プレフライト チェックリスト) ユーティリティでは確認できません。

-mediachecks <filenames>

メディア チェックを実行します。このオプションの使用時は、1 つまたは複数のジョブ スクリプト ファイル名を指定する必要があります。これらのファイルは、CA ARCserve Backup のインストール ディレクトリ直下の 00000001.qsd ディレクトリに保管されています。たとえば、「pfc -mediachecks job105」のように入力します。

このコマンドでは、\$ARCSERVE_HOME¥00000001.qsd ディレクトリの下にあるジョブ ファイルを最後のパラメータとして指定する必要があります。

たとえば、ジョブ番号 3 のジョブでメディア チェックを実行する場合は、\$ARCSERVE_HOME¥00000001.qsd ディレクトリの下に「00000003.job」というジョブ ファイルが存在する必要があります。このチェックの pfc コマンドは以下ようになります。

```
pfc -mediachecks 00000003.job
```

注: また、このオプションと -a スイッチを組み合わせて使用し、キューに含まれるすべてのジョブに対して、メディア チェックを実行することもできます。

-a

ジョブ キューに含まれているレディ状態のすべてのジョブを指定する場合は、このスイッチを指定します。このスイッチの使用時は、ファイル名を指定できません。

-n

非対話モードで実行します。このスイッチを使用すると pfc が無人で実行され、ユーザ入力を求めて停止することがありません。

-s

実行されていない CA ARCserve Backup エンジンすべての起動を試行します。-bchecks オプションと共に使用しないと、-s は機能しません。

-v

冗長モードで実行します。このオプションを使用すると、コマンド プロンプト ウィンドウに詳細情報が出力され、実行されたチェックに関する情報が記録されます。これには、デバッグに使用する情報 (失敗した関数の名前、API コールが失敗したときに返されるエラー コードなど) が含まれています。

-logpath <path>

ログ ファイルのパスを設定します。デフォルト パスは、CA ARCserve Backup ログ ディレクトリ (ARCServe_HOME/logs/pfclogs) です。-logpath オプションにパスを指定することにより、この場所を変更できます。

-alert

Alert 機能を設定している場合、このコマンドを使用すると Alert を送信できます。たとえば、電子メールを送信するように Alert 設定した状態で `-alert` コマンドを使用すると、PFC ログが電子メールに添付されて送信されます。

Alert の設定の詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

例

`pfc` コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下の構文は、ジョブ キュー内のすべてのレディ状態ジョブに対して、非対話モードですべてのチェックを実行します。

```
pfc -allchecks
```

- 以下の構文は、冗長モードと非インタラクティブモードでシステム チェックを実行します。

```
pfc -syschecks -v -n
```

- 以下の構文を使用して、ARCserve チェックを行い、実行されていないすべての CA ARCserve Backup エンジンを開始します。

```
pfc -bchecks -s
```

- 以下の構文は、キューに含まれるすべてのレディ状態ジョブに対してエージェント チェックを実行します。

```
pfc -agentchecks -a
```

- 以下の構文は、ジョブ 9 のエージェント チェックを実行します。

```
pfc -agentchecks 00000009.job
```

- 以下の構文は、ジョブ 8 とジョブ 9 のメディア チェックを実行します。

```
pfc -mediachecks 00000008.job 00000009.job
```

- 以下の構文を使用して、ジョブ 9 のメディア チェックを実行してコンソールに出力を表示し、この出力を `/tmp` ディレクトリ内のファイルに記録できます。

```
pfc -mediachecks -logpath /tmp/ 00000009.job
```

- ホールド状態のジョブに対してエージェント チェックを実行します。

```
pfc -agentchecks 00000009.job
```

第 22 章: tapecomp - テープ比較ユーティリティ

テープ比較コマンド(tapecomp)は、メディアを比較することができるコマンドライン インターフェース ユーティリティです。このユーティリティは、CA ARCserve Backup で生成されたメディアでのみ使用できます。また、CA ARCserve Backup のホーム ディレクトリで使用する必要があります。

構文

tapecomp コマンドライン構文のフォーマットは以下のとおりです。

```
tapecomp [options]
-s<SourceGroup>
-d<DestGroup>
-r<Source TapeName>
-t<Dest TapeName>
-n#
-x#
```

オプション

tapecomp ユーティリティは、CA ARCserve Backup のメディアを比較するためのさまざまなオプションを提供します。

tapecomp ユーティリティには、以下のオプションがあります。

-s <source group name>

テープが存在するソースグループの名前を指定します。

-d <destination group name>

デスティネーショングループの名前を指定します。このスイッチは必ず使用する必要があります。

-r <source tape name>

比較するテープのソーステープの名前を指定します。

-t <dest tape name>

比較するテープのデスティネーションテープの名前を指定します。

-n#

先頭のソース セッション番号を指定します。

デフォルトは 1 です。

-x#

先頭のターゲット セッション番号を指定します。

デフォルトは 1 です。

注:

- このユーティリティは CA ARCserve Backup の認定テープ デバイスをすべてサポートしています。ソースとターゲットのテープドライブが、それぞれ異なるモデルであってもかまいません。
- ログ ファイルはコピー処理のたびに生成されます。
- テープ比較ユーティリティでは、特定のセッションから最後のセッションまで、またはメディア セット全体を比較できます。
- ソースとターゲットでは複数のメディアを使用できます。このユーティリティの使用中に最後のメディアに達すると、次のシーケンスメディアを指定するように求めるメッセージが表示されます。
- ユーティリティの進行状況は、CA ARCserve Backup デバイス マネージャでモニタできます。
- テープ比較ユーティリティは、マルチプレキシングまたは暗号化を使用して作成されたテープの比較をサポートしません。
- テープ比較ユーティリティは、同じグループ内で同じ名前を持つ 2 つのテープの比較をサポートしません。

例

`tapecomp` コマンドの構文例は以下のとおりです。

- ソースの `GROUP0` に属する `Tape1` の全セッションを、デスティネーショングループ `1` に属する `Tape2` と比較するには、以下のコマンドを使用します。

```
tapecomp -sGROUP0 -rTAPE1 -dGROUP1 -tTAPE2
```

- ソースの `GROUP0` に属する `TAPE1 TEST` のセッション `3` の全セッションを、デスティネーショングループ `1` に属するターゲット `TAPE2 TEST` のセッション `4` の全セッションと比較するには、以下のコマンドを使用します。

```
tapecomp -sGROUP0 -r"TAPE1 TEST" -n3 -dGROUP1 -t"TAPE2 TEST" -x4
```


第 23 章: tapecopy - テープコピー ツール コマンド

テープコピーコマンド(**tapecopy**)は、テープコピーツールユーティリティで使用するコマンドラインインターフェースです。メディア間で素早くデータをコピーできます。コピー元とコピー先のメディアが同じである必要はありません。テープ全体またはセッション全体をコピーできます。コピーするソースを指定するか、CA ARCserve Backup データベースに格納されているセッションに対して検索条件を指定して、この処理を実行できます。

tapecopy によりテープコピー機能が実行されると、処理のステータスを示す終了リターンコードが生成されます。

注: **tapecopy** を使用して、データを VM:Tape メディアへコピーすることはできません。

構文

tapecopy コマンドライン構文のフォーマットは以下のとおりです。

テープコピー ジョブ (ユーザ指定ソース)

```
<Base Install Path>/tapecopy -s[source group] -d[destination group] -t[source tape name] {[source options] [destination options]}
```

テープ統合ジョブ (データベース指定ソース)

```
<Base Install Path>/tapecopy -d[destination group] [query options]{-c[destination tape name] [destination options]}
```

使用方法

tapecopy コマンドには、以下のオプションおよび引数を設定できます。

- データベース照会オプション
- ソース引数
- デスティネーション引数

データベース照会オプション

データベース照会オプションを使用すると、特定の属性に基づいてソースセッションを選択できます。データベースオプションを指定すると、データベースへの照会が行われ、検索基準と一致するすべてのセッションが **tapecopy** のソースセッションとなります。以下のスイッチを 1 つ以上指定して、複雑な照会条件を指定できます。

デフォルトでは、照会により検索された全セッションが、デスティネーショングループ内の 1 本のテープにコピーされます。**tapecopy** コマンドは、デスティネーショングループでブランクテープを検出し、これをフォーマットして、**mm/dd/yyyy-hh:mm** の形式でテープに名前を付けます。

tapecopy コマンドには以下の照会オプションがあります。

tapecopy

- [-qType <Backup Session Type>]
- [-qMethod <Backup Session Method>]
- [-qNode <Backup Session Node>]
- [-qOnOrBefore <MM/DD/YYYY> [<hh:mm>]]
- [-qOnOrAfter <MM/DD/YYYY> [<hh:mm>]]
- [-qMID <Master Job Number>]
- [-qJobNo <Job No Query>]
- [-qMediaPool <Media Pool Name>]
- [-qPreview (View Query Details)]
- [-qIgnoreRep (Ignore Replication Flag)]
- [-qExclude <Exclude List File Name>]
- [-qPastTime <Number of Days>]
- [-qCA_RHAType <Type of CA RHA Session>] (-qType CA_RHA と組み合わせてのみ使用)

-qType <Backup Session Type>

選択されたタイプのセッションのみをコピーに含めるよう CA ARCserve Backup データベースを照会します。

セッションの種類をカンマで区切って指定することにより、複数のセッションの種類を同時に照会できます。

例:

```
tapecopy -d PGROUP0 -qType SQL,WindowsNT
```

以下のセッションタイプを使用できます。

MSNetDrive、UNIX、BABDatabase、OracleLog、DBAGENT、SYBASE、LotusNotes、Informix、TAR、CPIO、UNIXImage、WindowsNT (WinNT/2000/XP を含む)、Windows98 (Win95/98/ME を含む)、NTSAP、UNIXSAP、ORACLE、ORACLE8、ORACLE9I、NTOracle、UNIXRAW、UNIXSYBASE、UNIXORACLERMAN。WINORACLERMAN、DRTAR、CA_RHA、DBAEXDB、DBAEXDBVSS、DBAEXSIS、SQL、ASDBSQL、SQLDR、ASDBSQLE、および SPA2007。

-qMethod <Backup Session Method>

指定したバックアップ方式によってバックアップされたセッションのみを含めるよう CA ARCserve Backup データベースを照会します。

以下のセッション方式を使用できます。

FULL、DIFF、INCR

(FULL = フル バックアップ、DIFF = 差分バックアップ、INCR = 増分バックアップ)

-qNode <Backup Session Node>

指定したノードからのセッション バックアップのみを含めるよう CA ARCserve Backup データベースを照会します。

-qOnOrBefore <MM/DD/YYYY> [<hh:mm>]

指定した日時以前にバックアップされたセッションを含めるよう CA ARCserve Backup データベースを照会します。時刻の指定はオプションです。日付と時刻は、スペースで区切る必要があります。

-qOnOrAfter <MM/DD/YYYY> [<hh:mm>]

指定した日時以降にバックアップされたセッションを含めるよう CA ARCserve Backup データベースを照会します。時刻の指定はオプションです。日付と時刻は、スペースで区切る必要があります。

-qMID <Master Job Number>

Master Job Number に従属するすべてのセッションを含めるよう CA ARCserve Backup データベースを照会します。

このオプションは、マルチ ストリーミング セッションを統合する際に使用します。このオプションは、マルチ ストリーミング ジョブのマスタ ジョブ番号に従属するすべてのセッションについて CA ARCserve Backup データベースを照会します。マスタ ジョブ番号は、親マルチ ストリーミング ジョブのジョブ番号を表します。

-qJobNo <Job No Query>

指定したジョブ番号に従属するすべてのセッションを含めるよう CA ARCserve Backup データベースを照会します。このオプションでは、指定したジョブ番号に属するセッションが検索されて、デスティネーションメディアにコピーされます。ローテーション ジョブの場合、このコマンドは、指定したジョブ番号の各ジョブ ID に関連する全セッションをデータベースに照会して、すべてのセッションをデスティネーションメディアにコピーします。

このスイッチを他の照会スイッチと一緒に使用して、コピーするセッションをさらに限定することもできます。

-qMediaPool <Media Pool Name>

指定したメディア プールに属するテープを含めるよう CA ARCserve Backup データベースを照会します。* および ? のようなワイルドカード文字を使用して検索を実行できます。

-qPreview (View Query Details)

tapecopy が、照会条件を満たすセッションのリストのみを表示するよう、tapecopy をプレビュー モードに切り替えます。実際のテープ コピー操作は実行されません。

このオプションを使用すると、クエリ結果セットをより詳細に表示できます。コピー ルーチンを実行したくない場合に、このオプションとデータベースクエリオプションを組み合わせで使用します。これにより、照会の詳細な結果セットが表示されます。

-qIgnoreRep (Ignore Replication Flag)

レプリケーション フラグを無視して、tapecopy コマンドによってすでにコピーされているセッションを含めます。レプリケーション フラグを無視すると、tapecopy コマンドは、すでにコピーされているセッションを無視します。

-qExclude <Exclude List File Name>

ファイルに格納されたリストで指定されたファイル ホスト名を除外するよう CA ARCserve Backup データベースを照会します。このファイルは、CA ARCserve Backup ホーム ディレクトリの環境設定ディレクトリにあります。

-qPastTime <Number of Days>

指定した日数以内にバックアップされたセッションを含めるよう CA ARCserve Backup データベースを照会します。tapecopy 操作の実行時を基点として、24 時間間隔で日数がカウントされます。各月の日数の違いも考慮されません。

qOnOrBefore または -qOnOrAfter オプションと併用することはできません。

-qCA_RHAType <CA RHA セッションのタイプ>

注: -qType CA_RHA と組み合わせてのみ使用できます。

CA ARCserve Backup データベースを照会して、指定した CA_RHA タイプのセッションのみをコピーに含めます。利用できる CA_RHA セッションは、FileSystem、MSSQL、および Exchange です。

照会する CA_RHA セッションのタイプを指定しなかった場合は、デフォルトですべての CA_RHA セッションが含まれます。

デスティネーション引数

`tapecopy` コマンドのデスティネーション引数では、選択したメディアのコピー先を指定できます。コピーするメディアを選択してから、`tapecopy` ジョブのデスティネーションおよびデスティネーション オプションを選択できます。

注: ソースまたはターゲットがデデュプリケーション デバイスの場合、`tapecopy` は、ソース テープとまったく同じターゲット テープを作成できません。まったく同じであるとは、ソース テープとターゲット テープに対して、テープ名、シーケンス番号、およびランダム ID の 3 つの項目が同じであることを意味します。このような事態を避けるために、`-c` または `-idr` スイッチを使用して、デスティネーション デデュプリケーション デバイスをソース テープと異なるテープにする必要があります。

`tapecopy` コマンドライン ユーティリティは、以下のデスティネーション引数をサポートします。

`tapecopy`

```
[ -rd <remote server name>]
[ -zd <destination sequence no.>]
[ -d <destination group name>]
[ -c <destination tape name>]
[ -v <vault name>]
[ -k (未完了コピーの強制ボールド)]
[ -m <Assign Media Pool Name>]
[ -max <# of days>]
[ -idd <Destination Random ID>]
[ -idr (ランダム ID の自動生成)]
[ -o (上書き)]
[ -off (オフライン)]
[ -ex (エクスポート)]
[ -wd <Wait On Destination Tape in Minutes>]
[ -g]
[ -forceMerge (詳細マージ オン)]
[ -jid <Job ID>]
[ -wormDst]
[ -fDstMux]
[ -eject <Eject Media>]
[ -dIgnoreFSDGroup]
[ -dpp <weeks:days:hours:minutes>]
```

-rd <remote server name>

コピー先リモート デスティネーション サーバの名前を指定します。このオプションは、リモートホストヘータを送信するときに使用します。

-rd スイッチを使用する場合、以下の制限事項が適用されます。

- デスティネーションがリモートのデデュプリケーション デバイスまたは FSD の場合は、-rd スイッチは使用できません。
- -rd スイッチは CA ARCserve Backup サーバ間でのみ使用します。

-zd <destination sequence no.>

コピー先デスティネーション シーケンス番号を指定します。このオプションを使用すると、-c オプションを使用する際にシーケンス番号を区別することができます。

-d <destination group name>

コピー先のグループ名を指定します。このオプションを省略すると、任意の使用可能なグループが使用されます。-d スイッチを省略すると、テープコピー操作で利用できる最善のデスティネーショングループが、テープコピープログラムによって決定されます。

-c <destination tape name>

コピー先のターゲットテープ名を指定します。このオプションは、ブランクテープのフォーマット名を指定するときに使用します。ターゲットテープが、指定したテープキーの一部（一意の名前を持つターゲットテープ）である場合は、このオプションを使用して、検索して追加または上書きするテープの名前を指定します。

注: このスイッチは、デスティネーションテープがデデュプリケーション デバイスである場合に使用できます。

-v <vault name>

新たに作成されるテープの追加先ボールド名を指定します。コマンドラインから、ボールドするテープを指定できるようにメディア管理機能を設定しておく必要があります。

-k (未完了コピーの強制ボールド)

-v オプションと組み合わせてのみ使用します。このオプションを使用すると、デスティネーションテープは未完了の **tapecopy** でもボールド済みとしてマークされます。

-m <Assign Media Pool Name>

メディアプールへのテープ割り当てオプション。このオプションは、新たに連結したテープをメディアプールに割り当てるときに使用します。

このスイッチは、スケジューリングされたアンアテンド **tapecopy** ジョブの自動化に役立ちます。このオプションを使用すると、**tapecopy** ジョブにより、指定したメディアプールから、追加先ターゲット保存セットテープが検索されます。保存セットテープが存在しない場合は再利用テープが検索され、ターゲットテープとしてフォーマットして使用されます。保存または再利用テープが存在しない場合は、ブランクテープに接続し、ターゲットテープとしてフォーマットを試行します。

-max <# of days>

このオプションを **-m** オプションと一緒に使用して、指定したメディアプール内のターゲット保存セットテープに追加できる最大日数を指定します。

前回フォーマット時刻から現在までの日数が、指定した最大日数を超える場合、**tapecopy** は、このメディアをデスティネーションメディアとして使用しません。

エンドユーザがこのオプションを指定しなかった場合の最大日数のデフォルトは、2000 日です。

-idd <Destination Random ID>

デスティネーションテープのランダム ID を指定します。

-idr (ランダム ID の自動生成)

デスティネーションランダム ID オプション。このオプションは、自動生成されるランダム ID を使用してテープをコピーするときに使用します。

注: このスイッチは、デスティネーションテープがデデュプリケーションデバイスである場合に使用できます。

-o (上書き)

上書きオプション。このオプションは、ターゲットテープキー(テープ名、ランダム ID、およびシーケンス番号)を指定するときに使用します。このオプションを使用する場合は、**-c**、**-zd**、および **-idd** も使用する必要があります。

-off (オフライン)

オフラインオプション。コピー操作の終わりにターゲットテープをオフラインにします。このスイッチは、チェンジャの場合にのみ有効です。

-ex (エクスポート)

コピー操作の終わりにターゲット テープをエクスポートします。このスイッチは、チェンジャの場合にのみ有効です。

-wd <Wait On Destination Tape in Minutes>

デスティネーション テープに接続する場合のタイムアウト時間を、分単位で指定します。デフォルトは 60 分です。

-g

呼び出した場合に、**tapecopy** 操作の完了後、**tapecopy** コマンドがテープをデータベースに自動マージしないことが、通知されます。その代わりに、**tapecopy** コマンドは、**tapecopy** 操作の間に、コピーしたセッションをデータベース内のソースセッションにリンクします。それでも **tapecopy** の後でセッションをマージする必要がある場合は、**forceMerge** スイッチを使用します。-セッションをリンクするのみの場合は、このスイッチをコマンドラインに含める必要はありません。スイッチを指定しなくても、**tapecopy** によりセッションがリンクされます。

-forceMerge

tapecopy 操作の完了後に、**tapecopy** コマンドにマージ プロセスを実行させる場合に指定します。**tapecopy** コマンドでは、**tapecopy** 操作の間に、コピーしたセッションをデータベース内のソースセッションに自動リンクするため、通常は、このスイッチを使用する必要がありません。ただし、情報がパージされたことや、ソース テープが他の場所に移動されたことなど、何らかの原因でソースセッションがデータベースに存在しない場合は、このリンクが作成されません。これらの場合にこのスイッチを使用すると、コピーされたセッションとソースセッションを強制的にマージできます。

-jid <Job ID>

ジョブ ID を指定します。

Tapecopy は、このパラメータで指定したジョブに属するアクティビティログにアクティビティログ情報を書き込みます。

- このパラメータを使用していて、ジョブ ID が存在する場合、すべての **tapecopy** アクティビティログ情報は指定したジョブのアクティビティログに含まれます。
- このパラメータを使用していて、ジョブ ID が存在しない場合、すべての **tapecopy** アクティビティログ情報は無視されます。
- このパラメータを使用しない場合、すべての **tapecopy** アクティビティログ情報は一般的なログに含まれます。

-wormDst

WORM 対応メディアのみが選択されるデスティネーションメディアに含まれるように、デスティネーションメディアをフィルタします。このオプションを使うと、WORM メディアを確実にコピーできます。

-fDstMux

ソースセッションをマルチプレキシング (MUX) 形式でデスティネーションメディアにコピーする場合に使用します。デスティネーションメディアがブランクの場合は、マルチプレキシングメディアとしてフォーマットされます。

注:

- マルチプレキシングセッションを非マルチプレキシング形式のメディアに追加することはできません。
- `tapecopy` は、暗号化されたデータの MUX から MUX へのコピーはサポートしません。

-eject <Eject Media>

イジェクトオプションです。ターゲットメディアのイジェクトに使用します。

-dIgnoreFSDGroup

FSD グループをターゲットグループとして使用することを無視するか許可しない場合に指定します。

-dpp <weeks:days:hours:minutes>

デスティネーション セッションのパージ ポリシー時刻を指定します。

CA ARCserve Backup は、指定したパージ ポリシー時刻を経過した後にデスティネーション セッションをパージします。このオプションは、デスティネーション テープがデデュプリケーション デバイスである場合にのみ使用できます。

このオプションは、4 つの時刻フィールド、週、日、時間、および分に分割されており、不要なフィールドには 0 を設定する必要があります。デフォルトでは、パージ ポリシー時刻は 4 週間に設定されています。

- このオプションを設定して、デスティネーションがデデュプリケーション デバイスでない場合、**tapecopy** は、このオプションはデデュプリケーション ターゲットの場合のみ使用でき、指定したパージは無視されることを通知するプロンプトを表示します。
- このオプションを設定して、デスティネーションがデデュプリケーション テープの場合、**tapecopy** は、ターゲットセッションが、**XX 週、XX 日、XX 時間、XX 分**後にパージされることを通知するプロンプトを表示します。
- このオプションを設定せず、デスティネーションがデデュプリケーション デバイスである場合、**tapecopy** は、デフォルトの 4 週間のパージ ポリシーが使用されることを通知するプロンプトを表示します。

ソース引数

`tapecopy` コマンドのソース引数を使用して、コピーするデータを指定できます。これらの引数を使用して、テープコピー操作に使用するグループ、テープ、およびセッションを特定できます。

`tapecopy` コマンドには、以下のソース引数があります。

`tapecopy`

```
[-n <beginning session number to be copied>]
[-ntotal <number of sessions>]
[-rs <Remote Server Name>]
[-entire (copy all non-blank in group)]
[-t <source tape name>]
[-zs <source sequence no.>]
[-s <source group name>]
[-ids <source random ID>]
[-ws <wait on source in minutes>]
[-wormSrc]
[-srcPassList [< source password list file name>]]
```

-n <beginning session number to be copied>

ソーステープにあるコピー元の開始セッション番号を指定します。このオプションは、照会スイッチと併用することはできません。

-ntotal <number of sessions>

このオプションは `-n` オプションとともに使用します。"`-n` から始まる、コピー対象のセッションの総数を指定できます。"このオプションは、照会スイッチと併用することはできません。

-rs <Remote Server Name>

リモートソースサーバ名。このオプションは、リモートホストからデータを受信するときに使用します。

-entire (copy all non-blank in group)

グループコピーオプション。このオプションは、あるグループにあるすべてのテープを別のグループにコピーするときに使用します。このスイッチはチェンジャ内でのみ有効です。

-t <source tape name>

ソーステープの名前です。これを使用して、コピーするテープの名前を指定できます。照会スイッチと共に使用することはできません。

-zs <source sequence no.>

ソースシーケンス番号。このオプションは、**-t** オプションを使用する際にシーケンス番号を区別するために使用します。このオプションは、照会スイッチと併用することはできません。

-s <source group name>

ソースグループ名。このオプションは、テープの場所を表すソースグループ名を指定するときに使用します。このオプションは照会スイッチと併用することはできません。

-ids <source random ID>

ソースランダム ID オプション。このオプションは、特定のランダム ID を使用してテープをコピーするときに使用します。

-ws <wait on source in minutes>

セッション使用のタイムアウト制限を指定します。セッションは、通常は現在使用中のテープ上のセッションです。

デフォルトタイムアウト: 60 分

-srcPassList [<source password list file name>]

暗号化されたソースセッション(サーバ側の暗号化セッションのみ)を復号化するためのパスワードリストを取得するように指定します。

パスワードリストを初期化するには、自動モードと対話モードの 2 つのモードがあります。

自動モードでは、「-srcPassList < passwords.txt」などのコマンドを使用して、パスワードリストファイルを提供できます。

このモードでは、指定されたパスワードリストファイルで必要なすべてのセッションパスワードが検索され、それ以上のユーザ入力なしで、コピー プロセスが続行されます。パスワードリストファイルを指定しない場合は、対話モードでパスワードを提供するように求められます。

例:

```
ソース パスワードを入力してください[入力したら Enter を押します]: ****
ソース パスワードを入力してください[入力したら Enter を押します]: ****
ソース パスワードを入力してください[入力したら Enter を押します]: <enter>
ソースのパスワードを 2 個受け取りました。
```

それぞれのパスワードは、パスワードリストファイルで別々の行に記載する必要があります。

このオプションを指定すると、**tapecopy** は、入力されたソースパスワードに一致する、暗号化されたセッションパスワードを検索しようとします。一致するパスワードが見つからない場合は、**CA ARCserve Backup** データベースに格納されているセッションパスワードを照会します。それでもまだセッションパスワードが見つからない場合、この暗号化セッションはコピー プロセスをスキップされます。さらに、エージェント側の暗号化は、**tapecopy** の暗号化セッションとして処理されません。そのため、このタイプのセッションは通常セッションとして処理され、**tapecopy** はパスワード チェックを実行しません。

コピーされるセッションのすべてのパスワードが **CA ARCserve Backup** データベースに保存されている場合、このオプションを指定する必要はありません。その後、すべてのセッションパスワードはパスワード管理ユーティリティを使用して、**CA ARCserve Backup** データベースで照会されます。ただし、コピーされるセッションのパスワードで **CA ARCserve Backup** データベースに保存されていないものがある場合は、このオプションを指定してセッションパスワードを入力する必要があります。

注: **tapecopy** では一度に 8 個までのパスワードを受け取ることができます。各パスワードは最大 24 文字です。

例

tapecopy コマンドの構文例は以下のとおりです。

注: 各 tapecopy コマンドでは、スイッチとスイッチに続く構文の間に空白を 1 つ入れる必要があります。

- 以下のコマンドを使用して、AL2000 という名前のノードから、2006 年 9 月 25 日正午より前の全セッションをコピーします。

```
tapecopy -d GROUP1 -qNode AL2000 -qOnOrBefore(06/09/25,12:00)
```

- 以下のコマンドを使用して、2006 年 9 月 25 日正午以後の全増分セッションをコピーします。

```
tapecopy -d GROUP1 -qMethod INCR -qOnOrAfter (9/25/2006,12:00)
```

- 以下のコマンドを使用して、指定のマスタジョブ ID からすべてのマルチストリーミングセッションを、「Everything」というテープに追加します。

```
tapecopy -d GROUP1 -qMID 232 -c Everything -idd F56 -zd 1
```

- 以下のコマンドを使用して、除外リストに含まれていないすべてのホストからすべてのセッションをコピーします。そして、ソースメディアへの接続タイムアウトを 10 分間に設定し、ターゲットメディアへの接続タイムアウトを 2 時間に設定します。

```
tapecopy -d GROUP1 -qNode * -qExclude AcctExcludes.txt -ws 10 -wd 120
```

- 以下のコマンドを使用して、AL2000 という名前のノードから、過去 24 時間に行われた全セッションをコピーし、「MyPool」というメディアプールに追加します。

注: -m スイッチにより、tapecopy ジョブは、指定されたメディアプール内のターゲット保存、再利用、またはブランクテープを検索します。保存セットテープが存在しない場合、CA ARCserve Backup は、再利用/ブランクテープを検索し、ターゲットテープとしてフォーマットして使用します。

```
tapecopy -d GROUP1 -qNode AL2000 -qPastTime 1 -m "MyPool"
```

- 以下のコマンドを使用して、このジョブ番号の 2006 年 9 月 25 日の正午から 2006 年 9 月 26 日までの全セッションをコピーします。

```
tapecopy -d GROUP1 -qOnOrAfter (9/25/2006,12:00) -qOnOrBefore  
"(9/26/2006,12:00)" -qJobNo 21
```

- 以下のコマンドを使用して、ソーステープ名「TAPE 1」からターゲット名「TAPE 2」にすべてのセッションを追加します。

```
tapecopy -s GROUP0 -d GROUP1 -t "TAPE 1" -c "TAPE 2" -idd C86 -zd 1
```

- 以下のコマンドを使用して、ソーステープ名「TAPE 1」からすべてのセッションをコピーし、ブランクのターゲットテープを「TAPE 2」という名前でフォーマットします。

```
tapecopy -s GROUP0 -d GROUP1 -t "TAPE 1" -c "TAPE 2"
```

- 以下のコマンドを使用して、ローカルソーステープからリモートブランクテープにコピーします。

```
tapecopy -s GROUP0 -d GROUP1 -t TAPE1 -rd SERVERNAME
```

- 以下のコマンドを使用して、リモートソーステープからローカルブランクテープにコピーします。

```
tapecopy -s GROUP0 -d GROUP1 -t TAPE1 -rs SERVERNAME
```

- 以下のコマンドを使用して、ソーステープのセッションをすべてコピーし、ターゲットテープをエクスポートします。

```
tapecopy -s GROUP0 -d GROUP1 -t TAPE1 -ex
```

- 以下のコマンドを使用して、ソーステープのセッションをすべてコピーし、ターゲットテープをオフラインにします。

```
tapecopy -s GROUP0 -d GROUP1 -t TAPE1 -off
```

- 以下のコマンドを使用して、ソーステープのセッション 3 から始まるセッションをすべてコピーします。

```
tapecopy -s GROUP0 -d GROUP1 -t TAPE1 -n 3
```

- 以下のコマンドを使用して、ソースグループにあるブランクテープ以外のテープをすべてコピーして、ターゲットテープをエクスポートします。

```
tapecopy -s GROUP0 -d GROUP1 -entire -ex
```

- 以下のコマンドを使用して、ソーステープのセッション 6 から始まる、セッション 6 以降の 3 セッションをコピーします。

```
tapecopy -s GROUP0 -d GROUP1 -t TAPE1 -n 6 -ntotal 3
```

- 以下のコマンドを使用して、サーバ側でセッションが暗号化済みである場合に、ソーステープからデスティネーションテープにコピーします(対話モード)。

```
tapecopy -s GROUP0 -d GROUP1 -t TAPE1 -srcPassList
```

- 以下のコマンドを使用して、サーバ側でセッションが暗号化済みである場合に、ソーステープからデスティネーションテープにコピーします(自動モード)。

```
tapecopy -s GROUP0 -d GROUP1 -t TAPE1 -srcPassList < passwords.txt
```

- 以下のコマンドを使用して、過去 1 日の間に作成された全セッションを、グループ PGROUP0 内のブランク テープにコピーします。コピーの間に、ソースセッションとデスティネーションセッションがリンクされます。

```
tapecopy -q PastTime 1 -d pgroup0 -g
```

- 以下のコマンドを使用して、過去 1 日の間に作成された全セッションを、グループ PGROUP0 内のブランク テープにコピーします。このコマンドは、コピー操作の完了後に、コピーした全セッションをターゲット テープからデータベースにマージするマージ ジョブをサブミットします。

```
tapecopy -q PastTime 1 -d pgroup0 -forceMerge
```

- 以下のコマンドを使用して、ジョブ番号 100 (-qJobNo 100) によって作成された全セッションを、グループ PGROUP0 内 (-d pgroup0) のブランク テープにコピーします。

```
tapecopy -qJobNo 100 -d pgroup0
```

- 以下のコマンドを使用して、ジョブ番号 100 (-qJobNo 100) により過去 1 日 (-qPastTime 1) に作成された全セッションを、グループ PRGROUP0 内 (-d pgroup0) のブランク テープにコピーします。

```
tapecopy -qJobNo 100 -qPastTime 1 -d pgroup0
```

- 以下のコマンドを使用して、1 分のパーシステンスポリシーをデデュープリケーション デバイスのターゲットセッションに設定します (-c スイッチを使用してターゲット テープ名を指定する必要があります)。

```
tapecopy -s GROUP0 -d GROUP1 -t TAPE1 -c TAPE2 -dpp 0:0:0:1
```


第 24 章: そのほかのユーティリティコマンド

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[DumpDB ユーティリティ](#) (P. 355)

[IsSafe.bat ユーティリティ](#) (P. 359)

[Mergecat ユーティリティ](#) (P. 360)

[MergeOLF ユーティリティ](#) (P. 361)

DumpDB ユーティリティ

DumpDB ユーティリティは、セッション パスワードを CA ARCserve Backup データベースにインポートまたはデータベースからエクスポートするために使用します。DumpDB ユーティリティは、セッション パスワードのみをダンプし、セッションに関する他の情報はエクスポートしません。DumpDB ユーティリティを定期的に行うと、セッション パスワード情報をデータベースにインポートできます。

重要: データベースがパージまたは廃棄された後にこのユーティリティを実行した場合、セッション パスワードはエクスポートされません。そのため、このユーティリティはデータベースをパージまたは廃棄する前に実行してください。

構文

```
DumpDB.exe -ExportTo <filename> [-from startTime] [-to endTime] [-password <password>]
```

```
DumpDB.exe -ImportFrom <filename> [-password <password>]
```

```
DumpDB.exe -as [[-domain¥]primary -exportTo [filename] [-from startTime] [-to endTime] [-password <password>]]
```

```
DumpDB.exe -as [[-domain¥]primary -importFrom [filename] [-password <password>]]
```

-as

CA ARCserve Backup データベースにある、ローカル CA ARCserve Backup サーバによって使用されるドメインを一覧を表示して閉じます。

重要: DumpDB -as 引数を指定すると、ユーティリティを実行する CA ARCserve Backup サーバに関連付けられている CA ARCserve Backup データベースのみを分析できます。それ以外の CA ARCserve Backup データベースのデータは分析されません。

-as primary

プライマリ サーバ名を指定した場合、DumpDB は CA ARCserve Backup データベースを検索して以下のとおり応答します。

- DumpDB が CA ARCserve Backup データベース内でサーバ名を検出しなかった場合、DumpDB は閉じます。
- DumpDB が CA ARCserve Backup データベース内でサーバ名のレコードを 1 つ検出した場合、DumpDB は実行を完了します。
- DumpDB が CA ARCserve Backup データベース内でサーバ名のレコードを複数検出した場合、DumpDB は警告を表示して閉じます。

注: この引数は -exportTo および -importFrom と一緒に使用する必要があります。

-as domain¥primary

プライマリ サーバ名とドメイン名を指定した場合、DumpDB は CA ARCserve Backup データベースを検索し、以下のとおり応答します。

- DumpDB が CA ARCserve Backup データベース内でサーバ名およびドメイン名を検出しなかった場合、DumpDB は閉じます。
- DumpDB が CA ARCserve Backup データベース内でサーバ名およびドメイン名のレコードを 1 つ検出した場合、DumpDB は実行を完了します。
- DumpDB が CA ARCserve Backup データベース内でサーバ名およびドメイン名のレコードを複数検出した場合、DumpDB は警告を表示して閉じます。

注: この引数は -exportTo および -importFrom と一緒に使用する必要があります。

-ExportTo

データベースに格納されているセッションパスワードを指定されたターゲットファイルにエクスポートします。

-password

このスイッチを指定し、エクスポート中にパスワードを指定した場合、出力ファイルはこのパスワードによって暗号化されます。

-ImportFrom

指定されたファイルに保存されているセッションパスワードをデータベースにインポートします。

-password

エクスポート中にパスワードを指定した場合、インポート中にそのパスワードを入力する必要があります。そのようにしない場合、インポート処理は失敗します。

日時の形式

DumpDB ユーティリティの実行スケジュールを指定するための日時形式は、カレンダー期間または過去の日数として指定できます。

- カレンダーの日付を指定するには、以下の形式を使用します。

YYYYMMDD[hh[mm[ss]]]

注: 年、月、および日が必要です。時間、分、および秒はオプションです。

- 過去の日数を指定するには、以下の形式を使用します。

nnnn (0 <= nnnn <= 9999)

注: 日数のパラメータ範囲は、0 から 9999 です。

例: 構文

以下に、DumpDB ユーティリティの構文の例を示します。

- 以下の例では、過去 100 日間のセッションパスワードをエクスポートします。

```
DumpDB.exe -exportto "c:%sesspwd.dump.out" -from 100
```

- 以下の例では、2008 年 1 月 1 日からのすべての日のセッションパスワードをエクスポートします。

```
DumpDB.exe -exportto "c:%sesspwd.dump.out" -from 20080101
```

- 以下の例では、セッションパスワードをデータベースにインポートします。

```
DumpDB.exe -importfrom "c:%sesspwd.dump.out"
```

注: インポートされたセッションパスワードにアクセスできるのは、現在の ARCserve ドメインのみです。

- 以下の例では、CA ARCserve Backup データベースにある、ローカル CA ARCserve Backup サーバによって使用されるすべてのドメインを一覧を表示します。

```
DumpDB.exe -as
```

- 以下の例では、指定されたプライマリ用のセッションパスワードをエクスポートします。

```
DumpDB.exe -as primaryname -exportto "c:%sesspwd.dump.out"
```

- 以下の例では、指定されたプライマリのデータベースにセッションパスワードをインポートします。

```
DumpDB.exe -as primaryname -importfrom "c:%sesspwd.dump.out"
```

注: インポートされたセッションパスワードにアクセスできるのは、指定されたプライマリサーバに関係のある CA ARCserve Backup ドメインのみです。

- 以下の例では、セッションパスワードをドメイン「GREEN」のプライマリサーバ「APPLE」からエクスポートして、ドメイン「PURPLE」のプライマリサーバ「GRAPE」にインポートします。

```
DumpDB.exe -as green¥apple -exportto "c:%sesspwd.green.out"
```

```
DumpDB.exe -as purple¥grape -importfrom "c:%sesspwd.green.out"
```

- 以下の例では、セッションパスワードをドメイン「GREEN」のプライマリサーバ「APPLE」とドメイン「RED」のプライマリサーバ「GRAPE」からエクスポートし、ドメイン「PURPLE」のプライマリサーバ「PLUM」とドメイン「ORANGE」のプライマリサーバ「MANGO」にインポートします。ドメイン「GREEN」および「RED」は、[ARCserve ドメインメンバシップを残しておく]オプションを使用して、ドメイン「PURPLE」および「ORANGE」で使用されている ARCserve データベースの上にリストアされた ARCserve データベースのドメインです。

```
DumpDB.exe -as green$¥apple$ -exportto "c:%sesspwd.green.out"
```

```
DumpDB.exe -as red$¥grape$ -exportto "c:%sesspwd2.red.out"
```

```
DumpDB.exe -as purple¥plum -importfrom "c:%sesspwd.green.out"
```

```
DumpDB.exe -as orange¥mango -importfrom "c:%sesspwd2.red.out"
```

IsSafe.bat ユーティリティ

IsSafe.bat ユーティリティは、アクティブな CA ARCserve Backup プロセスがないか OS をチェックし、システムが安全にシャットダウンできるかを判断します。

- ユーティリティが、CA ARCserve Backup プロセスがアクティブで、バックアップの段階にあることを検出した場合、OS を安全にシャットダウンできないことが通知されます。

システムでは現在バックアップ ジョブが実行されています。安全にシャットダウンできる状態ではありません。

- ユーティリティが、CA ARCserve Backup プロセスがアクティブで、それがマージの段階にあることを検出した場合、OS を安全にシャットダウンできないことが通知されます。

システムでは現在マージ ジョブが実行されています。安全にシャットダウンできる状態ではありません。

- ユーティリティが、アクティブな CA ARCserve Backup プロセスがないことを検出した場合、OS を安全にシャットダウンできることが通知されます。

ご使用のシステムを安全にシャットダウンできる状態になりました。

- ユーティリティが、現在使用されている OS が Windows XP SP2 よりも古いことを検出した場合、以下のメッセージを通知します。

IsSafe.bat では、ご使用のオペレーティング システム バージョンはサポートされていません。

次のコードが IsSafe.bat ユーティリティから返されます。

リターンコード:

0: ご使用のシステムを安全にシャットダウンできる状態になりました。

1: システムでは現在バックアップ ジョブが実行されています。安全にシャットダウンできる状態ではありません。

2: システムでは現在マージ ジョブが実行されています。安全にシャットダウンできる状態ではありません。

3: IsSafe.bat では、ご使用のオペレーティング システム バージョンはサポートされていません。

Mergecat ユーティリティ

マージカタログ ユーティリティ(Mergecat.exe)を使用すると、ARCserve Backup¥temp ディレクトリに残っているすべての .cat ファイルで、手動でマージを行うことができます。

バックアップ時に、データベース情報が .tmp ファイルに書き込まれます。そのバックアップ セッションの最後に、.tmp ファイルが .cat ファイルに変わり、そのセッションの最後のファイルとしてテープに書き込まれます。また、バックアップの最後に Mergecat.exe ユーティリティが実行され、元のジョブに関係なく、すべての *.cat ファイルがデータベースにマージされます。

Mergecat ユーティリティを実行すると、CA ARCserve Backup は ARCserve Backup¥catalog.db ディレクトリからすべての .cat ファイルを取得し、データベースにマージします。

注: cat ファイルをテープから手動でマージする場合は、Mergecat.exe ユーティリティは使用しません。ARCserve Backup¥catalog.db ディレクトリに残った .cat ファイルをマージする場合に使用します。

mergecat ユーティリティは、以下のディレクトリにあります。

```
C:¥Program Files¥CA¥ARCserve Backup>mergecat.exe
```

使用法:

```
Mergecat.EXE /F:00000000.CAT /D:[0/1]
/F:CATALOG.CAT - デフォルトではすべてのカタログがマージされます
/D:1 - デフォルトでは、マージ後にカタログ ファイルが削除されます
```

.cat ファイルが最初に書き込まれるとき、そのファイルの読み取り属性が無効になります。デフォルトでは、Mergecat ユーティリティによって .cat ファイルが処理された後、読み取り専用属性が自動的に適用されます。読み取り専用属性が適用された SQL データベースに .cat ファイルをマージする必要がある場合、以下のコマンドを実行します。

```
mergecat /F:"<fullpath>.cat" /R
```

読み取り専用属性が適用されていても、これによりこのカタログ ファイルが SQL データベースにマージされます。

MergeOLF ユーティリティ

MergeOLF ユーティリティを使用すると、ライセンスを 1 つの ARCserve システムから別の ARCserve システムに移動できます。

このユーティリティでは、既存のライセンスを持つ ARCserve システムに新しいライセンスをインストールし、複数のライセンス ファイルを 1 つのファイルにマージすることができます。このユーティリティはステータスに関するメッセージをコンソールおよび指定したファイルに出力します。このコマンドはコマンドラインから実行します。

構文

```
MERGEOLF <new_olf> [-c <current_olf>] [-o <output_olf>] [-b <backup_olf>] [-d <debug_log>]
```

-n <new_olf>

マージする新しい OLF ファイルの名前を指定します。

-c <current_olf>

マージする現在の OLF ファイルのパスと名前を指定します。

デフォルト: ca.olf

-o <output_olf>

作成する新しい OLF ファイルのパスと名前を指定します。

デフォルト: ca.olf

-b <backup_olf>

現在の OLF ファイルのバックアップ ファイルのパスと名前を指定します。

デフォルト: ca.old

-d <debug_log>

デバッグを有効にし、情報を mergeolf.log ファイルに保存します。

例: 新しいライセンスを古いライセンス ファイルにマージ

以下の例では、ca.nol という名前に変更された新しい olf ファイルを既存の ca.olf ファイルにマージします。

```
MERGEOLF -n ca.nol -c c:\program files\ca\SharedComponents\ca_lic\ca.olf -o c:\program files\ca\SharedComponents\ca_lic\ca.olf -b c:\program files\ca\SharedComponents\ca_lic\ca.old
```


用語集

オプション

コマンドの動作を変更する性質を持つ引数のことです。コマンドの動作を、既定の方法で変更する、1文字または単語のことです。

角かっこ

角かっこ ([]) は、囲まれたエレメント(パラメータ、値、または情報)がオプションであることを示します。

斜体

斜体のテキストは、適切な値を入力する必要がある情報を示します。これは、値によって置き換えられるオプションまたはパラメータです。

省略記号

3つのピリオド(...)の省略記号は、「~など」という意味で、先行するエレメント(パラメータ、値、または情報)がコマンドライン内で数回繰り返されることを示します。

パイプ

パイプ記号(垂直の線)は、「または」を意味し、エレメント内の選択を示します。

引数

コマンドへの入力値としてコマンドに提供される、ファイル名または他のデータのことです。引数は、コマンドへの命令および結果の送信先を指示する情報の集まりです。

山型かっこ

山型かっこ (<>) は、それで囲まれたエレメント(パラメータ、値、または情報)が入力必須であることを示します。

索引

A

authsetup

- 概要 - 23
- 構文 - 23
- 使用方法 - 23
- 例 - 24

B

bab

- 概要 - 25
- 構文 - 26
- 使用方法 - 27
- 例 - 31

C

ca_auth

- 概要 - 33
- 構文 - 34
- 使用方法 - 34
- その他のオプション - 35
- 等価引数 - 40
- ユーザ引数 - 36
- 例 - 41

ca_backup

- Exchange DB レベル データベース オプション - 92
- Exchange DOC レベル データベース オプション - 89
- Informix エージェント データベース オプション - 98
- Lotus エージェント データベース オプション - 103
- Oracle RMAN データベース オプション - 82
- Oracle データベース オプション - 80
- SQL Server プッシュ エージェント データベース オプション - 94
- Sybase エージェント データベース オプション - 96

VSS エージェント データベース オプション - 99

VSS グローバル オプション - 66

ウイルス グローバル オプション - 62

概要 - 43, 48, 78, 119

拡張 グローバル オプション - 64

グローバル ジョブ オプション - 48

グローバル フィルタ - 68

検証 グローバル オプション - 52

構文 - 44

再試行 グローバル オプション - 53

使用方法 - 45

ジョブ 実行引数 - 117

ジョブ 実行前/後の グローバル オプション - 59

ジョブ ステータス リターン コード - 133

スケジュール 引数 - 106

ステージング オプション - 118

操作 グローバル オプション - 55

増分/差分 バックアップ ステージング オプション - 125

ソース 引数 - 72

その他の オプション - 46

その他の ステージング オプション - 120

データベースの 操作 オプション - 78

デスティネーション 引数 - 104

ノード オプション - 75

バックアップ メディア グローバル オプション - 48

フル バックアップ ステージング オプション - 123

ボリューム オプション - 76

メディアの エクスポート グローバル オプション - 63

例 - 134

ログ グローバル オプション - 61

ca_dbmgr

概要 - 139

-
- 構文 - 139
 - 使用方法 - 140
 - その他のオプション - 141
 - データベース管理オプション - 145
 - 表示オプション - 142
 - マイグレーション状態オプション - 148
 - メディア プール管理オプション - 144
 - メンテナンス オプション - 146
 - 例 - 149
 - ca_devmgr
 - FSD オプション - 167
 - 一般的なオプション - 156
 - 概要 - 153
 - 使用方法 - 154
 - その他のオプション - 155
 - テープドライブ オプション - 158
 - テープ ライブラリ オプション - 161
 - の構文 - 154
 - 例 - 186
 - ca_jobsecmgr
 - 新しいセキュリティ オプション - 189
 - 概要 - 187
 - 現在のセキュリティ - 188
 - 構文 - 187
 - サーバ引数 - 188
 - 使用方法 - 187
 - 例 - 189
 - ca_log
 - 概要 - 191
 - 構文 - 191
 - 使用方法 - 191
 - その他のオプション - 192
 - パージ オプション - 196
 - 表示オプション - 193
 - 例 - 197
 - ログ名操作オプション - 193
 - ca_merge
 - 概要 - 199
 - 構文 - 199
 - 使用方法 - 200
 - ジョブ実行引数 - 203
 - ジョブ ステータスリターンコード - 209
 - ソース引数 - 201
 - その他のオプション - 200
 - マージ オプション - 204
 - 例 - 209
 - ca_mmo
 - オプション - 213
 - 概要 - 211
 - 構文 - 212
 - 例 - 216
 - ca_qmgr
 - 概要 - 217
 - 構文 - 218
 - 使用方法 - 219
 - ジョブ キュー コマンド - 221
 - ジョブ固有のコマンド - 223
 - ジョブ スクリプトコマンド - 223
 - その他のオプション - 220
 - 例 - 228
 - ca_recoverdb - 229
 - オプション - 231
 - 構文 - 231
 - ca_restore
 - Exchange DB レベル データベース オプション - 266
 - Exchange DOC レベル データベース オプション - 265
 - Informix エージェント データベース オプション - 274
 - Lotus エージェント データベース オプション - 276
 - Oracle RMAN データベース オプション - 259
 - Oracle データベース オプション - 257
 - SQL Server プル エージェント データベース オプション - 268
 - Sybase エージェント データベース オプション - 273
 - VSS エージェント データベース オプション - 275
 - ウイルス グローバル オプション - 247
 - 概要 - 235, 239
 - グローバル ジョブ オプション - 239
 - グローバル フィルタ オプション - 248
-

構文 - 236
情報引数 - 278
使用方法 - 237
ジョブ実行引数 - 277
ジョブ実行前/後のグローバル オプション - 244
操作グローバル オプション - 243
ソース引数 - 251
その他のオプション - 237
データベースの操作オプション - 255
デスティネーショングローバル オプション - 241
デスティネーション引数 - 253
リストメディア グローバル オプション - 240
例 - 281
ログ グローバル オプション - 246
概要 - 255

ca_scan
概要 - 287
構文 - 283
実行前/後の処理オプション - 289
終了コード オプション - 290
使用方法 - 283
ジョブ実行引数 - 286
ジョブ ステータス オプション - 292
ソース引数 - 285
その他のオプション - 284
その他のスキャン オプション - 291
復号化パスワードリスト オプション - 288
メディア オプション - 291
例 - 292
ログ オプション - 288
概要 - 283

caadvreports
オプション - 322
概要 - 317
構文 - 317
例 - 325
レポート - 318

cabatch
概要 - 305
ジョブの削除 - 309

ジョブの修正 - 310
ジョブの送信 - 306
例 - 311

careports
オプション - 314
概要 - 313
構文 - 313
例 - 315

CLI - 15

D

Disk Staging Option
概要 - 119
増分/差分バックアップ ステージング オプション - 125
その他のステージング オプション - 120
フル バックアップ ステージング オプション - 123

DumpDB ユーティリティ - 355

E

Exchange データベース オプション
ca_backup Exchange DB オプション - 92
ca_backup Exchange DOC オプション - 89
ca_restore Exchange DB オプション - 266
ca_restore Exchange DOC オプション - 265

F

FSD オプション - ca_devmgr - 167

I

Informix データベース オプション
ca_backup Informix オプション - 98
ca_restore Informix オプション - 274

IsSafe.bat ユーティリティ - 359

L

Lotus データベース オプション
ca_backup Lotus オプション - 103
ca_restore Lotus オプション - 276

M

MergeCat ユーティリティ - 360

MergeOLF ユーティリティ - 361

O

Oracle RMAN データベース オプション

ca_backup の Oracle RMAN オプション - 82

ca_restore の Oracle RMAN オプション - 259

Oracle データベース オプション

ca_backup Oracle オプション - 80

ca_restore Oracle オプション - 257

P

pfc

概要 - 327

構文 - 328

使用方法 - 328

プレフライト チェック - 328

例 - 332

S

SQL Server データベース オプション

ca_backup の SQL Server PUSH オプション - 94

ca_restore の SQL Server PULL オプション - 268

Sybase データベース オプション

ca_backup の Sybase オプション - 96

ca_restore の Sybase オプション - 273

T

tapecomp - 333

オプション - tapecomp - 333

構文 - tapecomp - 333

例 - tapecomp - 335

tapecopy

概要 - 337

構文 - 337

使用方法 - 337

ソース引数 - 348

データベース照会オプション - 338

デスティネーション引数 - 342

例 - 351

V

VSS オプション - ca_backup - 66

VSS データベース オプション

ca_backup の VSS オプション - 99

ca_restore の VSS オプション - 275

あ

新しいセキュリティ オプション - ca_jobsecmgr - 189

一般的なオプション - ca_devmgr - 156

ウィザード、ジョブ スケジューラ - 18

ウイルス オプション

ca_backup のウイルス オプション - 62

ca_restore のウイルス オプション - 247

オプション - ca_mmo - 213

オプションと引数 - 16

か

概要 - 15

拡張オプション - ca_backup - 64

拡張レポート ジェネレータ コマンド -

caadvreports

オプション - 322

概要 - 317

レポート - 318

括弧 - 角および山型 - 16

キューマネージャ コマンド - ca_qmgr - 217

グローバル ジョブ オプション

ca_backup のグローバル ジョブ オプション - 48

ca_restore のグローバル ジョブ オプション - 239

グローバル フィルタ (global filters)

ca_backup のグローバル フィルタ オプション - 68

ca_restore のグローバル フィルタ オプション - 248

現在のセキュリティ オプション - 188

検証オプション - 52

構文

authsetup の構文 - 23

bab の構文 - 26

ca_auth の構文 - 34

ca_backup の構文 - 44

ca_dbmgr の構文 - 139

ca_devmgr の構文 - 154

ca_jobsecmgr 構文 - 187

ca_log の構文 - 191

ca_merge の構文 - 199

ca_mmo 構文 - 212

ca_qmgr の構文 - 218

ca_recoverdb 構文 - 231

ca_restore の構文 - 236

ca_scan の構文 - 283

caadvreports の構文 - 317

careports の構文 - 313

pfcc の構文 - 328

tapecomp 構文 - 333

tapcopy の構文 - 337

構文文字 - 16

さ

サーバ引数 - ca_jobsecmgr - 188

[再試行]タブのオプション - 53

実行前/後の処理オプション

ca_backup のジョブ実行前/後の処理オプション - 59

ca_restore のジョブ実行前/後の処理オプション - 244

ca_scan のジョブ実行前/後の処理オプション - 289

斜体 - 16

情報引数 - ca_restore - 278

使用方法

authsetup の使用方法 - 23

bab の使用方法 - 27

ca_auth の使用方法 - 34

ca_backup の使用法 - 45

ca_dbmgr の使用方法 - 140

ca_devmgr の使用方法 - 154

ca_jobsecmgr の使用方法 - 187

ca_log の使用方法 - 191

ca_merge の使用方法 - 200

ca_qmgr の使用方法 - 219

ca_restore の使用方法 - 237

ca_scan の使用方法 - 283

pfcc の使用方法 - 328

tapcopy の使用方法 - 337

省略記号 - 16

ジョブキューコマンド - ca_qmgr - 221

ジョブ固有のコマンド - ca_qmgr - 223

ジョブ実行引数

ca_backup のジョブ実行引数 - 117

ca_merge のジョブ実行引数 - 203

ca_restore のジョブ実行引数 - 277

ca_scan のジョブ実行引数 - 286

ジョブスクリプトコマンド - ca_qmgr - 226

ジョブスケジューラウィザード - 18

ジョブセキュリティマネージャコマンド -

ca_jobsecmgr - 187

ジョブの削除 - 309

ジョブの修正 - 310

ジョブの送信 - 306

スキャンオプション

実行前/後の処理オプション - 289

復号化パスワードリストオプション - 288

ログオプション - 288

スキャンマネージャコマンド - ca_scan - 283

スケジュール引数 - ca_backup - 106

ステージングオプション

増分/差分バックアップステージングオプション - 125

その他のステージングオプション - 120

フルバックアップステージングオプション - 123

セキュリティオプション

新しいセキュリティオプション -

ca_jobsecmgr - 189

現在のセキュリティオプション - 188

操作オプション

ca_backup 操作オプション - 55

ca_restore 操作オプション - 243

ソース引数

- ca_backup のソース引数 - 72
- ca_merge のソース引数 - 201
- ca_restore のソース オプション - 251
- ca_scan のソース引数 - 285
- tapecopy のソース引数 - 348

その他のオプション

- ca_auth のその他のオプション - 35
- ca_backup のその他のオプション - 46
- ca_dbmgr のその他のオプション - 141
- ca_devmgr のその他のオプション - 155
- ca_log のその他のオプション - 192
- ca_merge のその他のオプション - 200
- ca_qmgr のその他のオプション - 220
- ca_restore のその他のオプション - 237
- ca_scan のその他のオプション - 284

その他のスキャン オプション - 291

た

データベース回復コマンド - ca_recoverdb - 229

データベース管理オプション - ca_dbmgr - 145

データベース照会オプション - tapecopy - 338

データベースの操作オプション

- ca_backup のデータベース オプション - 78
- ca_restore のデータベース オプション - 255

データベース マネージャ コマンド - ca_dbmgr - 139

テープ コピー マネージャ コマンド - tapecopy - 337

テープドライブ オプション - ca_devmgr - 158

テープ比較コマンド - tapecomp - 333

テープライブラリ オプション - ca_devmgr - 161

デスティネーション引数

- ca_backup のデスティネーション引数 - 104
- ca_restore のグローバル デスティネーション オプション - 241
- ca_restore のデスティネーション オプション - 253
- tapecopy のデスティネーション引数 - 342

デバイス マネージャ コマンド - ca_devmgr - 153

な

認証コマンド - ca_auth - 33

認証セットアップコマンド - authsetup - 23

ノード オプション - ca_backup - 75

は

ページ オプション - ca_log - 196

パイプ - 16

バックアップ マネージャ コマンド - ca_backup - 43

バックアップ メディア オプション - 48

バッチ コマンド - ca_batch

- 概要 - 305
- ジョブの削除 - 309
- ジョブの修正 - 310
- ジョブの送信 - 306

引数とオプション - 16

表示オプション - ca_dbmgr - 142

表示オプション - ca_log - 193

ファイル システム デバイス オプション - ca_devmgr - 167

フィルタ

- ca_backup のグローバル フィルタ オプション - 68
- ca_restore のグローバル フィルタ オプション - 248

プレフライト チェック - 328

プレフライト チェックリスト ユーティリティ コマンド - pfc - 327

ボリューム オプション - ca_backup - 76

ま

マージ オプション - ca_merge - 204

マージ マネージャ コマンド - ca_merge - 199

マイグレーション状態オプション - ca_dbmgr - 148

メディア オプション - ca_scan - 291

メディア管理 マネージャ コマンド - ca_mmo - 211

メディアのエクスポート オプション - 63

メディア プール管理オプション - ca_dbmgr -
144

メンテナンス オプション - ca_dbmgr - 146

や

ユーザ引数 - ca_auth - 36

ら

リストア メディア オプション - 240

例

authsetup の例 - 24

bab の例 - 31

ca_auth の例 - 41

ca_backup の例 - 134

ca_dbmgr の例 - 149

ca_devmgr の例 - 186

ca_jobsecmgr の例 - 189

ca_log の例 - 197

ca_merge の例 - 209

ca_mmo 例 - 216

ca_qmgr の例 - 228

ca_restore の例 - 281

ca_scan の例 - 292

caadvreports の例 - 325

cabatch の例 - 311

careports の例 - 315

pfc の例 - 332

tapecomp の例 - 335

tapecopy の例 - 351

レポート - 318

レポート マネージャ コマンド - ca_log - 191

レポート ライタ コマンド - careports - 313

ログ オプション

ca_backup ログ オプション - 61

ca_restore ログ オプション - 246

ログ名操作オプション - ca_log - 193